

仙台市文化財調査報告書第468集

洞ノ口遺跡 ほか

発掘調査報告書

洞ノ口遺跡第23次、今市遺跡第2次、荒井館跡第3次、
荒井広瀬遺跡第2次、南小泉遺跡第82次、郡山遺跡第270次、
富沢遺跡第150次、下ノ内遺跡第9次、大野田古墳群第24次、

2018年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には現在約 780 箇所の史跡、名勝、天然記念物、有形文化財、埋蔵文化財包蔵地が指定・登録されており、このうち約 620 箇所が一般に遺跡と呼ばれている埋蔵文化財包蔵地です。これらの一つ一つが先人が遺した貴重な文化遺産です。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災より 7 年が経ち、復興・創生期間 2 年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届の件数や発掘調査の件数は、平成 23 年度以降、震災前を上回る状況が継続しております。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々努めているところです。

本報告書には、各種事業に伴って平成 28 年度から 29 年度にかけて発掘調査を実施した、洞ノ口遺跡第 23 次調査、今市遺跡第 2 次調査、荒井館跡第 3 次調査、荒井広瀬遺跡第 2 次調査、南小泉遺跡第 82 次調査、郡山遺跡第 270 次調査、富沢遺跡第 150 次調査、下ノ内遺跡第 9 次調査、大野田古墳群第 24 次調査の結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を伝えるために将来へ守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であると思います。それは地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。つきましては、本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などにおける文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々にご心より深く感謝申し上げます、お礼の言葉とさせていただきます。

平成 30 年 3 月

仙台市教育委員会
教育長 大越 裕光

例 言

1. 本書は、平成28年度から29年度にかけて実施された各種開発事業に伴う発掘調査報告書であり、洞ノ口遺跡第23次調査、今市遺跡第2次調査、荒井館跡第3次調査、荒井広瀬遺跡第2次調査、南小泉遺跡第82次調査、郡山遺跡第270次調査、富沢遺跡第150次調査、下ノ内遺跡第9次調査、大野田古墳群第24次調査の各発掘調査報告を合本にしたものである。

本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。

2. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は及川謙作が行った。

第1章・第4章第3節・第4節の一部・第5章—及川謙作 第2章・第3章第2節—庄子裕美

第3章第1節—小林 航 第3章第3節・第4章第1節・第2節—三浦一樹

第4章第4節の一部—及川 基

遺物の基礎整理～実測図作成—佐藤 洋、斎野裕彦、向田整理室作業員

遺物図・遺構図デジタルトレーサー—向田整理室作業員

遺物観察表作成—佐藤 洋、斎野裕彦

遺構註記表作成—各担当職員

遺物写真撮影・図版作成—及川謙作、向田整理室作業員

遺構写真図版作成—各担当職員、及川謙作

3. 出土遺物の鑑定は、佐藤洋と斎野裕彦が行った。

4. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本文中の「遺跡範囲と周辺の遺跡図」は国土地理院発行の2万5千分の1地形図を、また「調査区位置図」等は仙台市発行の2千5百分の1都市基本図を、それぞれ修正して使用した。

2. 図中の座標値は世界測地系を使用している。また、文中および図中の方位は真北を示している。

3. 遺構の略号は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。

SB: 掘立柱建物跡 SD: 溝跡 SE: 井戸跡 SI: 竅穴住居跡 SK: 土坑 SM: 小溝状遺構

SX: 性格不明遺構 P: ビット

4. 遺物の略号は以下のとおりである。

A: 縄文土器 B: 弥生土器 C: 土師器(非ロクロ調整) D: 土師器(ロクロ調整)・赤焼土器

E: 須恵器 F: 丸瓦 G: 平瓦 H: その他の瓦 I: 陶器 J: 磁器 K: 石器・石製品

L: 木製品 N: 金属製品 P: 土製品 T: 土師質土器

5. 土色については、「新版標準土色帳」(小山・竹原1999)を使用した。

6. 遺物実測図中の網点は黒色処理を示している。

7. 遺物観察表の()がついた数値は図上復元した推定値である。

8. 本文中の「灰白色火山灰」(庄子・山田1980)はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田a火山灰(To-a)」と考えられている。降下年代は西暦915年と推定されている。

庄子貞雄・山田一郎1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡-昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所

早田勉2000「第5章第1節 沼向遺跡・中野高柳遺跡におけるテフラ分析」『沼向遺跡 第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集

小口雅史2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山(長白頭)を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目 次

第1章 調査計画と実績	1
I. 調査体制	1
II. 調査計画	1
III. 調査実績	1
第2章 宮城野区の調査	3
第1節 洞ノ口遺跡	
I. 遺跡の概要	3
II. 第23次調査	3
1. 調査要項	3. 基本層序
2. 調査に至る経過と調査方法	4. 発見遺構と出土遺物
3. 基本層序	5. まとめ
第2節 今市遺跡	
I. 遺跡の概要	35
II. 第2次調査	35
1. 調査要項	4. 発見遺構と出土遺物
2. 調査に至る経過と調査方法	5. まとめ
3. 基本層序	6. 今市遺跡第2次発掘調査で出土した木製品の樹種同定
第3章 若林区の調査	73
第1節 荒井館跡	
I. 遺跡の概要	73
II. 第3次調査	73
1. 調査要項	3. 基本層序
2. 調査に至る経過と調査方法	4. 発見遺構と出土遺物
3. 基本層序	5. まとめ
第2節 荒井広瀬遺跡	
I. 遺跡の概要	85
II. 第2次調査	85
1. 調査要項	4. 発見遺構と出土遺物
2. 調査に至る経過と調査方法	5. まとめ
3. 基本層序	6. 荒井広瀬遺跡第2次調査で出土した木製品の樹種同定
第3節 南小泉遺跡	
I. 遺跡の概要	113
II. 第82次調査	113
1. 調査要項	3. 基本層序
2. 調査に至る経過と調査方法	4. 発見遺構と出土遺物
3. 基本層序	5. まとめ
4. 発見遺構と出土遺物	
第4章 太白区の調査	119

第1節 郡山遺跡			
I. 遺跡の概要		119
II. 第270次調査		119
1. 調査要項	3. 基本層序	5. まとめ	
2. 調査に至る経過と調査方法	4. 発見遺構と出土遺物		
第2節 富沢遺跡			
I. 遺跡の概要		125
II. 第150次調査		125
1. 調査要項	3. 基本層序	5. まとめ	
2. 調査に至る経過と調査方法	4. 発見遺構と出土遺物		
第3節 下ノ内遺跡			
I. 遺跡の概要		129
II. 第9次調査		131
1. 調査要項	3. 基本層序	5. まとめ	
2. 調査に至る経過と調査方法	4. 発見遺構と出土遺物		
第4節 大野田古墳群			
I. 遺跡の概要		165
II. 第24次調査		165
1. 調査要項	3. 基本層序	5. まとめ	
2. 調査に至る経過と調査方法	4. 発見遺構と出土遺物		
第5章 総括		189
1. 洞ノ口遺跡第23次調査	2. 今市遺跡第2次調査	3. 荒井館跡第3次調査	
4. 荒井広瀬遺跡第2次調査	5. 南小泉遺跡第82次調査	6. 郡山遺跡第270次調査	
7. 富沢遺跡第150次調査	8. 下ノ内遺跡第9次調査	9. 大野田古墳群第24次調査	

挿図目次

第1図 平成28・29年度調査地点位置図 2	第10図 SK2土坑断面図 8
第2図 洞ノ口遺跡の位置と周辺の遺跡 3	第11図 SK3土坑断面図 9
第3図 洞ノ口遺跡第23次調査区位置図 4	第12図 SK4土坑断面図 9
第4図 洞ノ口遺跡第23次調査区配置図 4	第13図 SK5土坑断面図 9
第5図 洞ノ口遺跡第23次調査区平面図 5	第14図 SK6土坑断面図 9
第6図 基本層、S11・2 竪穴住居跡、SK8・12・ 13土坑、SX1 性格不明遺構土層断面図	.. 6	第15図 SK7土坑断面図 10
第7図 S11 竪穴住居跡出土遺物 7	第16図 SK8土坑断面図 10
第8図 S12 竪穴住居跡出土遺物 7	第17図 SK10土坑断面図 10
第9図 SK1土坑断面図 8	第18図 SK11土坑断面図 11
		第19図 P49・53・54断面図 11

第20図	土坑出土遺物	12	第58図	SK1 土坑土層断面図	77
第21図	ピット出土遺物	13	第59図	SK2 土坑土層断面図	77
第22図	SX1 性格不明遺構出土遺物 (1)	14	第60図	荒井館跡第3次調査出土遺物	78
第23図	SX1 性格不明遺構出土遺物 (2)	15	第61図	SD1 溝跡・SX1 性格不明遺構土層断面図	79
第24図	SX1 性格不明遺構出土遺物 (3)	16	第62図	荒井館跡第3次調査区と周辺の遺構	80
第25図	SX1 性格不明遺構出土遺物 (4)	17	第63図	荒井広瀬遺跡の位置と周辺の遺跡	85
第26図	その他の出土遺物 (1)	18	第64図	荒井広瀬遺跡第2次調査区位置図	86
第27図	その他の出土遺物 (2)	19	第65図	荒井広瀬遺跡第2次調査区配置図	86
第28図	その他の出土遺物 (3)	20	第66図	第2次調査区平面図	87
第29図	その他の出土遺物 (4)	21	第67図	第2次調査区北西壁・杭断面図	88
第30図	その他の出土遺物 (5)	22	第68図	自然流路跡1～4層出土遺物	93
第31図	今市遺跡と周辺の遺跡	35	第69図	自然流路跡4～6層出土遺物	94
第32図	今市遺跡のこれまでの調査地点	36	第70図	自然流路跡5層出土遺物 (1)	95
第33図	今市遺跡第2次調査区配置図	36	第71図	自然流路跡5層出土遺物 (2)	96
第34図	今市遺跡第2次調査区平・断面図	37	第72図	自然流路跡5層出土遺物 (3)	97
第35図	今市遺跡第2次調査区遺構変遷図	39	第73図	自然流路跡6層・ その他の層出土遺物	98
第36図	SD1～12 溝跡土層断面図	40	第74図	南小泉遺跡の位置と周辺の遺跡	113
第37図	SD1 溝跡出土遺物	41	第75図	南小泉遺跡第82次調査区位置図	114
第38図	SD1～3 溝跡出土遺物	42	第76図	南小泉遺跡第82次調査区配置図	114
第39図	SD4・5 溝跡出土遺物	44	第77図	南小泉遺跡第82次調査区平・断面図	115
第40図	SD5 溝跡出土遺物 (2)	45	第78図	南小泉遺跡第82次調査区出土遺物	116
第41図	SD5 (3)・7 溝跡出土遺物	46	第79図	郡山遺跡と周辺の遺跡	119
第42図	SD7 (2) 溝跡出土遺物	47	第80図	郡山遺跡調査地点位置図 (1)	120
第43図	SD7 (3) 溝跡出土遺物	48	第81図	郡山遺跡調査地点位置図 (2)	121
第44図	SD7 (4)・11・12 溝跡出土遺物	49	第82図	郡山遺跡第270次調査区配置図	121
第45図	SE1 井戸跡平・断面図	50	第83図	郡山遺跡第270次調査区平・断面図	122
第46図	SE1 井戸跡・その他の出土遺物	51	第84図	郡山遺跡第270次調査区断面図 (2)	123
第47図	その他の出土遺物 (2)	52	第85図	富沢遺跡と周辺の遺跡	125
第48図	今市遺跡第2次調査検出遺構変遷図	53	第86図	富沢遺跡第150次調査区位置図	126
第49図	今市遺跡第1・2次調査区 検出遺構合成図	55	第87図	富沢遺跡第150次調査区配置図	126
第50図	荒井館跡の位置と周辺の遺跡	73	第88図	富沢遺跡第150次調査区平・断面図	127
第51図	荒井館跡の位置と周辺の遺跡	74	第89図	下ノ内遺跡の位置と周辺の遺跡	129
第52図	荒井館跡第3次調査区配置図	74	第90図	下ノ内遺跡第9次調査区位置図	130
第53図	荒井館跡第3次調査区平・断面図	75	第91図	下ノ内遺跡第9次調査区配置図	131
第54図	SK6 土坑土層断面図	76	第92図	下ノ内遺跡第9次調査区 基本層土層断面図	133・134
第55図	SK7 土坑土層断面図	76	第93図	下ノ内遺跡第9次調査区Ⅲ層上面 遺構配置図	135
第56図	SE1 土坑土層断面図	77			
第57図	2 トレンチピット土層断面図	77			

第94図	SD1 溝跡土層断面図	136	第122図	SX11 性格不明遺構平面図	145
第95図	SE2 井戸跡土層断面図	136	第123図	SX11 性格不明遺構断面図	146
第96図	SK7 土坑土層断面図	136	第124図	SR13・X層(遺物包含層)平面図	146
第97図	SD4・5、SK9・10 配置図	137	第125図	X層(遺物包含層)出土遺物(1)	147
第98図	SD5 溝跡出土遺物	137	第126図	X層(遺物包含層)出土遺物(2)	148
第99図	SK9 土坑土層断面図	137	第127図	X層(遺物包含層)出土遺物(3)	149
第100図	SB2 掘立柱建物跡配置図	138	第128図	V～IX層出土遺物(1)	149
第101図	SB2 掘立柱建物跡断面図	138	第129図	V～IX層出土遺物(2)	150
第102図	SA3 掘立柱列模式図	138	第130図	下ノ内遺跡第9次調査区 ・周辺調査区の遺構(III層)	150
第103図	下ノ内遺跡第9次調査区V層上面 遺構配置図	139	第131図	V層上面検出遺構変遷模式図	151
第104図	SA3 掘立柱列断面図	140	第132図	下ノ内遺跡第9次調査区 ・周辺調査区の遺構(V層)	152
第105図	SA4 掘立柱列配置図	140	第133図	下ノ内遺跡第9次調査区・ 周辺調査区の遺構(X・XII層)	152
第106図	SA4 掘立柱列断面図	140	第134図	大野田古墳群第24次調査区位置図	165
第107図	SB5 掘立柱建物跡・SA6 掘立柱列 配置図	146	第135図	大野田古墳群第24次調査区配置図	166
第108図	SB2 掘立柱建物跡出土遺物	141	第136図	大野田古墳群第24次調査区 平・断面図	167・168
第109図	SB7 掘立柱建物跡	142	第137図	SK2 土坑土層断面図	169
第110図	P59・116～118 土層断面図	142	第138図	41号墳出土遺物(1)	170
第111図	小溝状遺構I群	142	第139図	41号墳出土遺物(2)	171
第112図	小溝状遺構I群出土遺物	142	第140図	41号墳出土遺物(3)	172
第113図	小溝状遺構II群	143	第141図	41号墳出土遺物(4)	173
第114図	小溝状遺構III-1群	143	第142図	41号墳出土遺物(5)	174
第115図	小溝状遺構III-2群	143	第143図	41号墳出土遺物(6)	175
第116図	小溝状遺構III-3群	143	第144図	41号墳出土遺物(7)	176
第117図	小溝状遺構IV群	143	第145図	41号墳出土遺物(8) ・SK2 出土遺物	177
第118図	小溝状遺構V群	144	第146図	大野田古墳群41号墳全体図	178
第119図	小溝状遺構VI群	144			
第120図	小溝状遺構VII群	144			
第121図	基本層III～V層上面出土遺物	145			

挿表目次

表1	平成28・29年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧(1)	1
表2	平成28・29年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧(2)	2

写真図版目次

写真図版 1	洞ノ口遺跡第 23 次調査 (1) …… 24	写真図版 37	南小泉遺跡第 82 次調査 (1) …… 117
写真図版 2	洞ノ口遺跡第 23 次調査 (2) …… 25	写真図版 38	南小泉遺跡第 82 次調査 (2) ・出土遺物 …… 118
写真図版 3	洞ノ口遺跡第 23 次調査 (3) …… 26	写真図版 39	郡山遺跡第 270 次調査 …… 124
写真図版 4	洞ノ口遺跡第 23 次出土遺物 (1) …… 27	写真図版 40	富沢遺跡第 150 次調査 …… 128
写真図版 5	洞ノ口遺跡第 23 次出土遺物 (2) …… 28	写真図版 41	下ノ内遺跡第 9 次調査 (1) …… 154
写真図版 6	洞ノ口遺跡第 23 次出土遺物 (3) …… 29	写真図版 42	下ノ内遺跡第 9 次調査 (2) …… 155
写真図版 7	洞ノ口遺跡第 23 次出土遺物 (4) …… 30	写真図版 43	下ノ内遺跡第 9 次調査 (3) …… 156
写真図版 8	洞ノ口遺跡第 23 次出土遺物 (5) …… 31	写真図版 44	下ノ内遺跡第 9 次調査 (4) …… 157
写真図版 9	洞ノ口遺跡第 23 次出土遺物 (6) …… 32	写真図版 45	下ノ内遺跡第 9 次調査 (5) …… 158
写真図版 10	洞ノ口遺跡第 23 次出土遺物 (7) …… 33	写真図版 46	下ノ内遺跡第 9 次調査 (6) …… 159
写真図版 11	洞ノ口遺跡第 23 次出土遺物 (8) …… 34	写真図版 47	下ノ内遺跡第 9 次調査 (7) …… 160
写真図版 12	今市遺跡第 2 次調査 (1) …… 56	写真図版 48	下ノ内遺跡第 9 次出土遺物 (1) …… 161
写真図版 13	今市遺跡第 2 次調査 (2) …… 57	写真図版 49	下ノ内遺跡第 9 次出土遺物 (2) …… 162
写真図版 14	今市遺跡第 2 次調査 (3) …… 58	写真図版 50	下ノ内遺跡第 9 次出土遺物 (3) …… 163
写真図版 15	今市遺跡第 2 次調査 (4) ・ 出土遺物 (1) …… 59	写真図版 51	下ノ内遺跡第 9 次出土遺物 (4) …… 164
写真図版 16	今市遺跡第 2 次出土遺物 (2) …… 60	写真図版 52	大野田古墳群第 24 次調査 (1) …… 179
写真図版 17	今市遺跡第 2 次出土遺物 (3) …… 61	写真図版 53	大野田古墳群第 24 次調査 (2) …… 180
写真図版 18	今市遺跡第 2 次出土遺物 (4) …… 62	写真図版 54	大野田古墳群第 24 次調査 (3) …… 181
写真図版 19	今市遺跡第 2 次出土遺物 (6) …… 63	写真図版 55	大野田古墳群第 24 次調査 (4) …… 182
写真図版 20	今市遺跡第 2 次出土遺物 (6) …… 64	写真図版 56	大野田古墳群第 24 次出土遺物 (1) …… 183
写真図版 21	今市遺跡第 2 次出土遺物 (7) …… 65	写真図版 57	大野田古墳群第 24 次出土遺物 (2) …… 184
写真図版 22	今市遺跡第 2 次出土遺物 (8) …… 66	写真図版 58	大野田古墳群第 24 次出土遺物 (3) …… 185
写真図版 23	今市遺跡第 2 次出土遺物 (9) …… 67	写真図版 59	大野田古墳群第 24 次出土遺物 (4) …… 186
写真図版 24	今市遺跡第 2 次出土遺物 (10) …… 68	写真図版 60	大野田古墳群第 24 次出土遺物 (5) …… 187
写真図版 25	荒井館跡第 3 次調査 (1) …… 81	写真図版 61	大野田古墳群第 24 次出土遺物 (6) …… 188
写真図版 26	荒井館跡第 3 次調査 (2) …… 82		
写真図版 27	荒井館跡第 3 次調査 (3) …… 83		
写真図版 28	荒井館跡第 3 次出土遺物 …… 84		
写真図版 29	荒井広瀬遺跡第 2 次調査 (1) …… 99		
写真図版 30	荒井広瀬遺跡第 2 次調査 (2) …… 100		
写真図版 31	荒井広瀬遺跡第 2 次調査 (3) …… 101		
写真図版 32	荒井広瀬遺跡第 2 次出土遺物 (1) …… 102		
写真図版 33	荒井広瀬遺跡第 2 次出土遺物 (2) …… 103		
写真図版 34	荒井広瀬遺跡第 2 次出土遺物 (3) …… 104		
写真図版 35	荒井広瀬遺跡第 2 次出土遺物 (4) …… 105		
写真図版 36	荒井広瀬遺跡第 2 次出土遺物 (5) …… 106		

第1章 調査計画と実績

I. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

【文化財課】 課長 長島栄一

【調査調整係】 係長 平岡亮輔 主任 鈴木 隆

主事 及川謙作 庄子裕美 小林 航 三浦一樹 妹尾一樹 柳澤 楓

文化財教諭 笹原 惇 佐藤慶一 及川 基 大友 渉

専門員 佐藤 洋 渡部弘美

【整備活用係】 係長 佐藤 淳 主任 小野寺啓次 稲垣正志 主事 五十嵐 愛

文化財教諭 小山結明 高橋和也 三浦昂也

II. 調査計画

国、宮城県、仙台市が実施する各種の整備事業（公共事業）および、民間の開発に伴う発掘調査を想定し、計画した。

III. 調査実績

平成28年度第4四半期から平成29年度第4四半期（平成28年11月16日～平成30年1月22日）までに実施された調査は表1・2の通りで、公共事業が7件、民間開発が50件、合計57件である。このうち本書に収録したのは9件である。

平成28年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧（平成28年11月16日～平成29年3月31日） 調査面積 1291.20㎡

図 №	調査地 公共・ 民間	道跡名	所在地	調査原因	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構・遺物	届出等№	報告書	
1	H28-65	民間	大野田古墳群	太白区大野田5丁目	共同住宅	428.20	267.00	11月16日～ 1月17日	41号墳、円筒埴輪	H28 103-062	24次
2	H28-66	民間	板ヶ岡公園隣接	青葉区大平町	業務委託	2215.87	323.70	11月14日～ 12月13日	礎石建物跡等、陶磁器・瓦	H28 1181	—
3	H28-67	民間	湧ノ風道跡	宮城野区初切字湧泉	建売住宅	104.74	24.00	11月14日	遺構・遺物なし	H28 101-486	—
4	H28-68	民間	南日城跡	宮城野区南日館	道路舗装	5930.00	12.00	11月18日	遺構・遺物なし	H28 102-31	—
5	H28-69	民間	興福園道跡	宮城野区南小泉1丁目	建売住宅	62.93	12.50	12月5日～7日	土坑1	H28 101-517	—
6	H28-70	民間	杉上手	太白区砂押町	宅地造成・ 建売住宅	380.00	54.00	12月6日	遺構・遺物なし	H28 103-068	—
7	H28-71	民間	荒井広瀬道跡	若林区荒井字遠藤	事務所	478.20	132.00	12月12日～ 1月26日	河川跡1・土師器等	H28 103-064	2次
8	H28-72	民間	六反田遺跡・ 大野田古墳群	太白区大野田5丁目	共同住宅	192.13	48.00	12月14日	遺構・遺物なし	H28 103-065	—
9	H28-73	民間	南小泉道跡	若林区遠見塚2丁目	建売住宅	71.21	12.00	12月19日	遺構・遺物なし	H28 101-568	—
10	H28-74	民間	新熊野堂隣接	太白区茂庭新熊野堂	店舗	381.00	28.00	1月10日	遺構・遺物なし	H28 103-073	—
11	H28-75	民間	谷地館跡	若林区御町1丁目	店舗	12217.08	12.50	1月12日	遺構・遺物なし	H28 103-080	—
12	H28-78	公共	与兵衛沼部跡	宮城野区蟹沢	公園園路	650.00	42.50	1月18日	灰原1・瓦	H28 102-69	—
13	H28-80	民間	山田上ノ台道跡	太白区山田上ノ台町	長屋住宅	266.50	29.00	1月19日	遺構・遺物なし	H28 103-085	—
14	H28-83	民間	境入道跡	泉区八乙女4丁目	共同住宅	159.31	30.00	2月13日	遺構・遺物なし	H28 103-086	—
15	H28-85	公共	根形館跡他	太白区坪倉字館前東	道路整備	422.00	60.00	2月22日	遺構・遺物なし	H28 102-73	—
16	H28-88	民間	殿治屋敷前道跡	太白区富沢駅西	社屋	800.00	120.00	3月7日	井戸跡1	H28 103-101	—
17	H28-89	民間	南小泉道跡	若林区古城3丁目	建売住宅	77.42	12.00	3月13日	遺構・遺物なし	H28 103-097	—
18	H28-90	民間	洞ノ口道跡	宮城野区岩切字洞ノ口	店舗	209.69	72.00	3月15日～23日	—	H28 103-099	24次

平成29年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧（平成29年4月1日～平成29年2月14日） 調査面積 2626.22㎡

図 №	調査地 公共・ 民間	道跡名	所在地	調査原因	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	遺構・遺物	届出等№	報告書	
1	H29-2	民間	下ノ内道跡	太白区富沢四丁目	共同住宅	302.2	209.0	4月11日 ～8月2日	竪立柱建物など	H28 103-063	9次
2	H29-3	民間	洞ノ口道跡	宮城野区岩切字洞ノ口	店舗	209.7	72.0	4月10日 ～19日	竪穴住居跡、 井戸跡など	H28 103-099	24次
3	H29-7	民間	郡山道跡	太白区郡山三丁目	長屋住宅	108.2	84.7	4月20日 ～5月11日	遺構なし・遺物僅少	H28 103-108	270次
4	H29-10	民間	湧ノ風道跡	宮城野区初切字湧泉	建売住宅	102.1	24.0	5月19日	遺構・遺物なし	H28 102-027	—
5	H29-13	公共	国分尼寺跡隣接	若林区大森町	下水道	60.0	5.2	6月26日	土坑1・ビット7	H29 104-4	—
6	H29-17	民間	殿治屋敷前道跡	太白区富田字京ノ北	店舗	598.4	45.0	6月12日	河川跡1	H29 103-005	—
7	H29-19	民間	島井原道跡	泉区天神一丁目	防火水槽	22.4	22.4	6月28日	遺構・遺物なし	H29 102-026	—
8	H29-20	民間	荒井館跡	若林区荒井字矢取	事務所	502.3	78.0	7月19日～27日	遺跡・土坑・ビット	H29 103-014	3次

表1 平成28・29年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧(1)

図 No.	調査No.	公共・民間	道路名	所在地	調査理由	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	調査期間	道構・遺物	届出等№	報告書
9	H29-23	民間	東光寺遺跡	宮城野区岩切平入山	本堂など	895.4	4.5	7月14日	遺構・遺物なし	H28 103-117	—
10	H29-24	公共	大目小遺跡	太白区坪沼字大目中	道路	945.7	69.1	7月26・27日	遺構なし・縄文土器	H29 104-21	—
11	H29-26	公共	経ヶ崎伊達家墓所	青葉区堂屋下	防災工事	1085.0	4.0	7月31日	遺構・遺物なし	H29 104-17	—
12	H29-27	民間	殿治屋敷前遺跡	太白区富沢駅西51街区	共同住宅	849.0	143.0	8月1～4日	塼穴住居跡、溝跡など	H29 103-7	—
13	H29-29	民間	壇腰遺跡	太白区中田七丁目	建売住宅	113.0	21.0	8月7日	土坑2・ピット11	H29 102-204	—
14	H29-31	民間	殿治屋敷前遺跡	太白区富沢駅西67街区	建売住宅	125.4	22.7	8月7・21 ～23日	溝跡1、須恵器など	H29 102-222、223	—
15	H29-32	民間	南小泉遺跡	若林区南小泉四丁目	共同住宅	163.1	22.1	8月17日	溝跡1・ピット2	H28 103-118	—
16	H29-34	民間	今市遺跡	宮城野区岩切今市	共同住宅	284.9	114.0	9月4日 ～10月2日	溝跡等、	H28 103-111	2次
17	H29-38	民間	南小泉遺跡	若林区遠見塚一丁目	研修センター	151.0	56.0	9月7日 ～19日	小溝跡、土師器など	H29 102-228	82次
18	H29-39	民間	富沢遺跡	太白区長町七丁目	賃貸住宅	77.4	18.0	9月13日	遺構・遺物なし	H29 102-309	—
19	H29-41	公共	六本松遺跡	太白区富田字宇ノ北	防火水槽	176.7	16.0	10月10日	遺構・遺物なし	H29 104-39	—
20	H29-42	民間	地蔵通遺跡	若林区六丁の目東町	保育所	207.3	30.0	9月29日	遺構・遺物なし	H29 103-024	—
21	H29-43	民間	山崎園遺跡	宮城野区岩切一丁目	建売住宅	104.4	11.4	9月27日	遺構・遺物なし	H29 103-038	—
22	H29-44	民間	洞ノ口遺跡	宮城野区岩切字洞ノ口	共同住宅	104.4	283.8	10月2～30日	土坑、溝跡など	H29 103-022	次年度
23	H29-46	民間	殿治屋敷前遺跡	太白区富沢駅西51街区	共同住宅	241.1	24.0	10月5日	遺構・遺物なし	H29 102-346	—
24	H29-47	民間	富沢遺跡	太白区長町南三丁目	診療所併用住宅	227.5	51.0	10月24日 ～19日	水田耕作土、弥生土器	H29 103-042	150次
25	H29-48	民間	六本松遺跡	太白区富田字宇ノ北	介護老人保健施設	2007.3	150.0	10月24日 ～27日	土坑1ほか	H29 103-041	—
26	H29-49	民間	殿治屋敷前遺跡	太白区富沢駅西52街区	店舗	1186.5	210.0	10月24日 ～27日	塼穴住居跡	H29 104-39	—
27	H29-50	民間	高沢遺跡	宮城野区鶴ヶ谷東二丁目	事務所付賃貸	2007.3	24.0	11月1日	遺構・遺物なし	H29 103-047	—
28	H29-51	民間	青葉山D遺跡	青葉区荒巻字青葉	共同住宅	282.2	48.0	11月7日	遺構・遺物なし	H29 103-036	—
29	H29-58	民間	郡山遺跡	太白区郡山三丁目	宅地造成	143.8	80.48	11月27日 ～12月12日	溝跡・ピット	H29 103-056	次年度
30	H29-59	民間	郡山遺跡	太白区郡山四丁目	宅地造成・共同住宅	238.9	11.9	12月1日	遺構・遺物なし	H29 103-051	次年度
31	H29-65	民間	川前浦遺跡隣接	太白区富沢駅西38街区	貸事務所	362.7	19.5	12月6日	遺構・遺物なし	H29 103-057	—
32	H29-67	民間	郡山遺跡	太白区郡山三丁目	保育園	705.9	295.64	12月14日 ～2月5日	河川跡	H29 103-053	次年度
33	H29-68	民間	館除遺跡	泉区根白石字館除	建売住宅	142.3	16.0	12月21日	遺構・遺物なし	H29 102-456、457	—
34	H29-69	民間	神明社遺跡	宮城野区特江	共同住宅	150.9	16.0	12月21日	遺構・遺物なし	H29 102-470	—
35	H29-70	公共	杉土手・北前遺跡	太白区山田北前町	市民C改修	4.6	2.3	1月12日	遺構・遺物なし	H29 104-18	—
36	H29-71	民間	殿治屋敷前遺跡	太白区富沢駅西21街区	GS	413.7	29.0	1月15日	遺構・遺物なし	H29 103-061	—
37	H29-72	民間	袋前遺跡	太白区大野田5丁目	住宅	66.2	10.5	1月16日	遺構・遺物なし	H29 102-465	—
38	H29-73	民間	富沢遺跡	太白区富沢字熊野前	共同住宅	356.2	150.0	1月22日～	調査中	H29 103-027	次年度
39	H29-74	民間	殿治屋敷A遺跡	太白区富沢駅西19街区	ビジネス用	680.0	161.0	1月22日～	調査中	H29 103-013	—

表2 平成28・29年度 公共・民間各種事業に伴う発掘調査一覧(2)



第1図 平成28・29年度調査地点位置図(国土地理院地図を一部改変)

第2章 宮城野区の調査

第1節 洞ノ口遺跡

I. 遺跡の概要

洞ノ口遺跡は仙台市宮城野区岩切字洞ノ口に所在する。JR 仙台駅から北東方向に約8km位置し、七北田川左岸の自然堤防上から後背湿地にかけて立地する。現況の標高は約7.0～8.0mである。本遺跡は古墳時代から近世の遺跡で、土地区画整理事業や個人住宅建設などに伴いこれまでに22次の調査が行われている。これまでの調査で、北東側の後背湿地部では平安時代から江戸時代の水田跡が、自然堤防上では、中世の城館の堀跡や土塁、掘立柱建物跡等が確認されている。また中世陶磁器や金属製品、木製品が出土しており、木製品の中には塔婆やこけら経など信仰に関わる資料も出土している。

洞ノ口遺跡の周辺には多くの遺跡が分布している。七北田川の左岸側には磨崖仏や板碑群がある東光寺や国指定史跡の岩切城跡<17>、若宮前遺跡<10>がある。洞ノ口遺跡のある岩切周辺は中世の遺構や遺物が多く確認されることから、中世における仙台地区の重要な地域であったと考えられる。



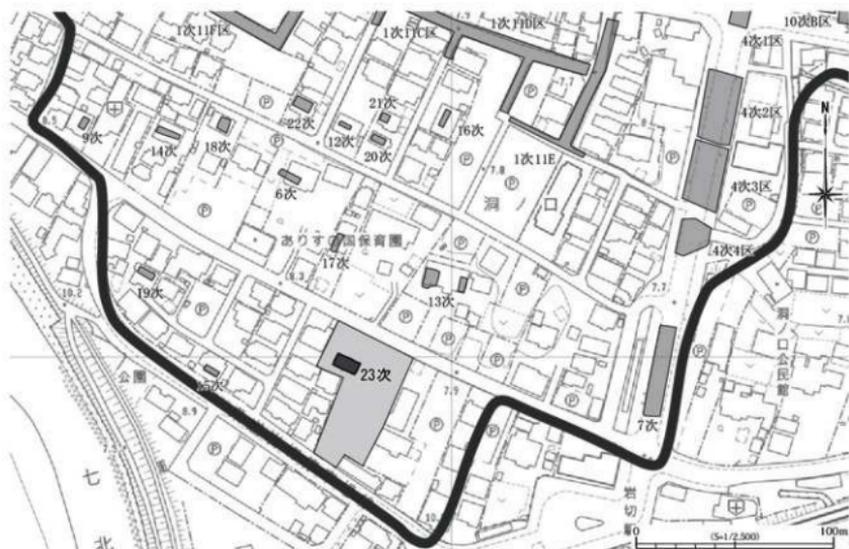
第2図 洞ノ口遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	洞ノ口遺跡	集落跡、城館跡、屋敷跡、水田跡	自然堤防	古墳～近世
2	今市遺跡	集落跡、包含地	自然堤防	古代、中世
3	涌ノ巣遺跡	集落跡、屋敷跡、水田跡	自然堤防	弥生～中世
4	洞ノ口板碑群	板碑	自然堤防	中世
5	岩切三所北A板碑	板碑	自然堤防	中世
6	岩切三所北B板碑	板碑	自然堤防	中世
7	化野坂城跡	城館跡	丘陵	中世
8	羽黒前遺跡	城館跡、宗教遺跡	丘陵	中世、近世
9	羽黒前板碑群	板碑	丘陵	中世
10	若宮前遺跡	城館跡、信仰遺跡	丘陵	縄文、古代～近世
11	東光寺遺跡	城館跡、石倉仏、寺院跡、集落跡、板碑群	丘陵斜面	中世
12	東光寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
13	地蔵堂板碑群	板碑	丘陵斜面	中世
14	東光寺板碑群	板碑	丘陵斜面	中世
15	東光寺磨崖仏群	石倉仏	丘陵斜面	中世
16	新宿園遺跡	散布地	自然堤防	古代
17	岩切城跡	城館跡	丘陵	中世

II. 第23次調査

1. 調査要項

遺跡名	洞ノ口遺跡（宮城県遺跡登録番号01372）
調査地点	仙台市宮城野区岩切字洞ノ口82-25, 91-5の一部
調査期間	平成29年3月15日（水）～3月23日（木）、4月10日（月）～4月19日（水）
調査対象面積	209.69㎡
調査面積	72㎡
調査原因	店舗建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事 庄子 裕美 文化財教諭 及川 基 吉田 真太郎 専門員 渡部 弘美



第3図 洞ノ口遺跡第23次調査区位置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成29年2月3日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成29年2月16日付H28教生文第103-099号で回答）に基づき、平成29年3月15日（水）～3月23日（木）、4月10日（月）～4月19日（水）に実施した。

対象地内に南北6m×東西12m、面積72㎡の調査区を設定し、重機で盛土および基本層Ⅰ～Ⅱ層を除去し、基本層Ⅲ層上面で遺構確認作業を行った。その結果、堅穴住居跡2軒、土坑12基、ピット56基、性格不明遺構1基を検出した。

平面図および断面図はS=1/20で作製した。記録写真はデジタルカメラにより撮影した。4月19日に現地での調査器材の撤収作業を行い、同日、代理人に現場の引き渡しを行い、調査を終了した。

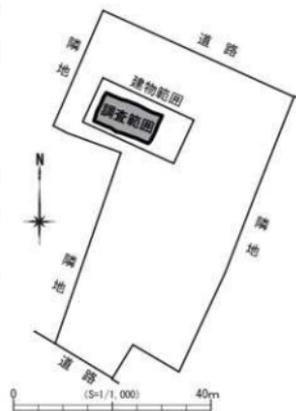
3. 基本層序

調査区内の盛土の厚さは55～80cmである。盛土より下位で基本層を3層確認した。

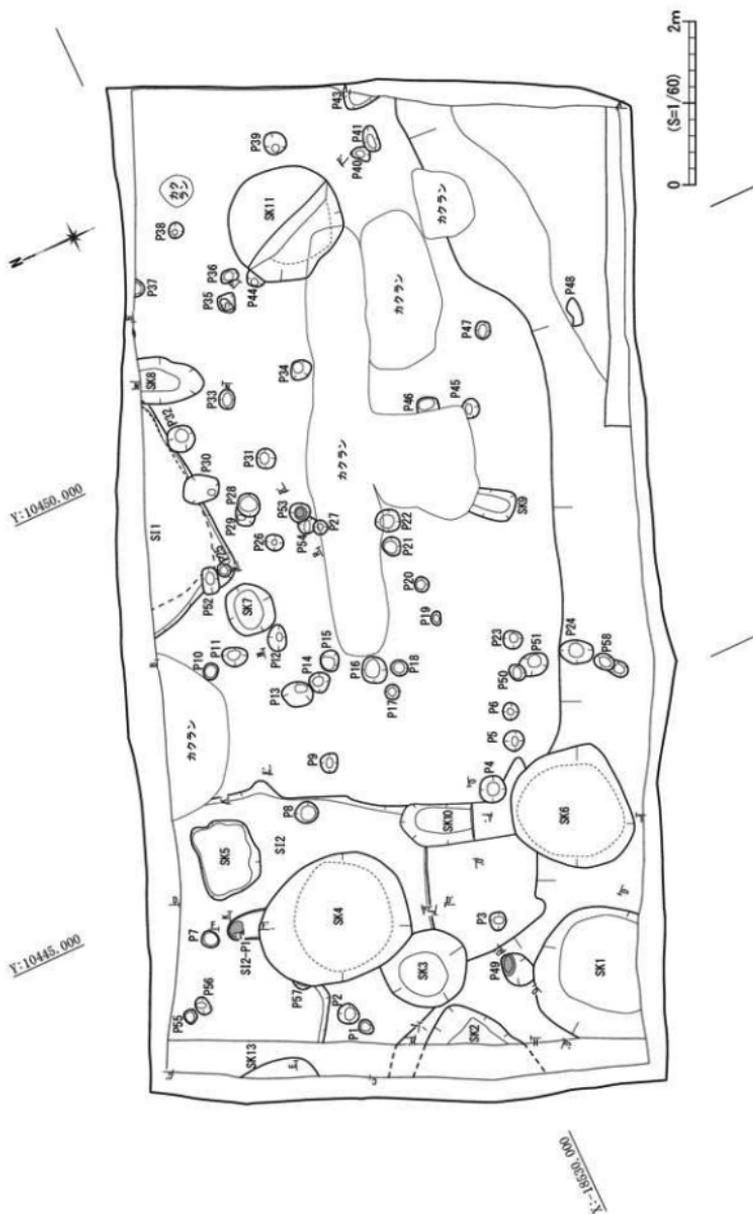
Ⅰ層：10YR2/1 黒色シルト。層厚は10～30cm。層下部に酸化鉄を含む。盛土以前の畑地耕作土と考えられる。

Ⅱ層：10YR2/2 黒褐色粘土。層厚は11～40cm。10YR4/3 に近い黄褐色粘土粒と炭化物粒を少量含む。SK12の掘り込み面である。

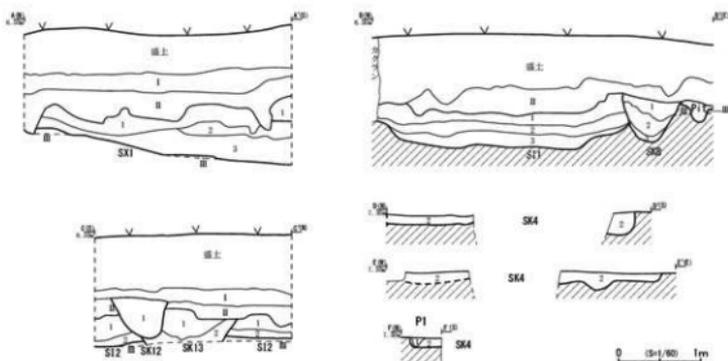
Ⅲ層：10YR4/4 褐色粘土。砂を少量含む。今回の調査の遺構検出面である。



第4図 洞ノ口遺跡第23次調査区配置図



第5図 洞ノ口遺跡第23次調査区平面図



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
基本層	I	101X2/1 黒色	シルト	下部に酸化鉄あり
	II	101X2/2 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土粒、炭化物粒を少量含む
	III	101X4/4 褐色	粘土	砂を少量含む
S11	1	101X3/3 黒褐色	粘土	褐色粘土粒、炭化物粒を微量含む(住居堆積土)
	2	101X3/3 暗褐色	粘土	炭化物粒を微量に、にぶい黄褐色粘土小ブロックを少量含む(住居堆積土)
	3	101X4/3 にぶい黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロックを多量に含む(住居崩方土)
S12	1	101X3/3 黒褐色	粘土	灰白色火山灰ブロック(φ 5mm~20mm)少量、焼土粒を微量含む(住居堆積土)
	2	101X4/3 にぶい黄褐色	粘土	焼土粒、炭化物粒を微量に、灰白色火山灰ブロックを少量含む(住居崩方土)
P1	1	101X2/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化物粒を微量に含む(柱基礎)
	2	101X4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックをやや多量に、炭化物、焼土ブロックを少量含む
SK8	1	101X2/2 黒褐色	粘土	黒色粘土ブロック、褐色粘土質シルトブロックを多量に含む
	2	101X2/1 黒色	粘土質シルト	褐色粘土ブロックを多量に含む
	3	101X3/1 黒褐色	粘土	褐色粘土ブロックを多量に含む
SK12	1	101X3/3 黒褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土粒、炭化物粒、砂を少量含む
	1	101X3/1 黒色	粘土	炭化物粒、焼土を少量、にぶい黄褐色粘土を層状に含む
SK13	1	101X3/2 黒褐色	粘土	炭化物粒を微量に含む
	2	101X3/2 黒褐色	粘土	褐色粘土、1層褐色粘土を層状に、炭化物粒を微量に含む
SX1	1	101X2/2 黒褐色	粘土	炭化物粒を微量、酸化鉄粒を少量含む
	2	101X2/2 黒褐色	粘土	炭化物粒を微量、酸化鉄粒を少量含む
	3	101X4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒を微量、炭化物粒を微量に含む

第6図 基本層、S11・2堅穴住居跡、SK8・12・13土坑、SX1 性格不明遺構土層断面

4. 発見遺構と出土遺物

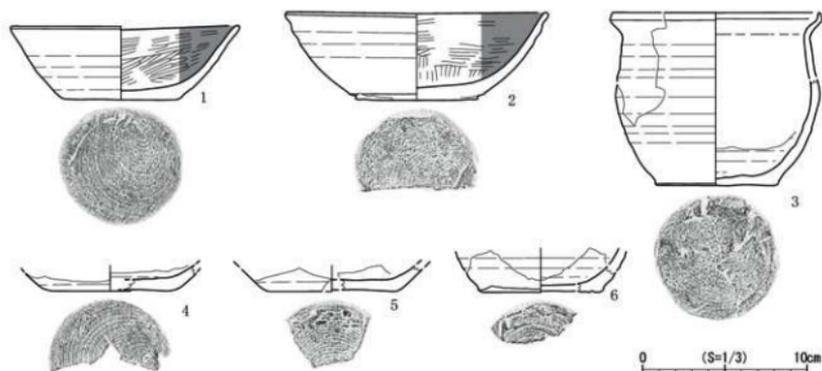
今回の調査では、III層上面で堅穴住居跡2軒、土坑12基、ピット56基、性格不明遺構1基を検出した。遺物は、堅穴住居跡からロクロ土師器と須恵器が、性格不明遺構などから中世陶器や須恵器、金属製品などが出土している。

(1) 堅穴住居跡

S11 堅穴住居跡

調査区北部で検出された。SK8 土坑と P25・30・32・52 と重複し、これらよりも古い。北側が調査区外に広がっており、平面形は方形であると推定される。規模は西壁で 136 cm 以上、南壁で 227 cm 以上である。堆積土は 3 層に分層された。1、2 層は住居内堆積土で暗褐色粘土を主体とし、にぶい黄褐色粘土ブロックが少量含まれている。3 層は掘方埋土で、にぶい黄褐色粘土を主体とし、黄褐色粘土ブロックが多く含まれている。床面までの深さは約 18 cm で床面はほぼ平坦である。掘方埋土の上面を床面にしている。壁高は 10 cm である。カマドや支柱穴など住居跡に伴う遺構は検出されなかった。

遺物は、床面からロクロ土師器と須恵器が、住居内堆積土中からロクロ土師器と須恵器が出土している。第7図1、2(D-1、2)は内面黒色処理が施されたロクロ土師器の坏で、D-1は底部から口縁部にかけて緩やかに外傾して立ち上がる。D-2はD-1よりも器高が若干高く、底部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がる。第7図3(D-3)はロクロ土師器の甕で、床面から出土している。小型の甕で口縁部は垂直気味に立ち上がる。口唇部はやや内傾している。須恵器の坏、第7図4(E-1)は床面から、第7図5、6(E-2、3)は堆積土中から出土している。出土遺物の様相から、遺構の年代は9世紀第3四半期頃であると考えられる。

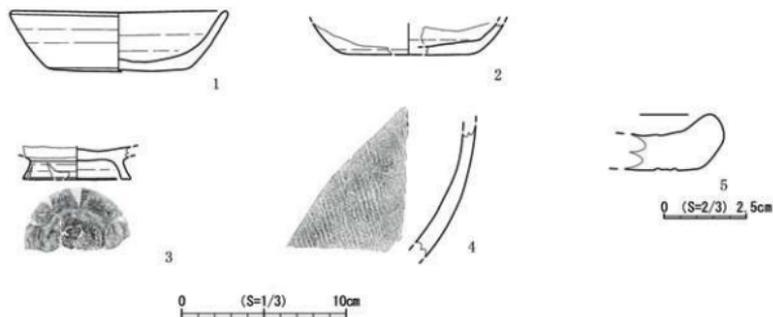


図録 番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 図録	
				口径	底径	器高					
1	D-1	埴輪土 土師器	杯	13.8cm	7.2cm	4.6cm	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラミガキ黒色処理	完形 骨針 底面 回転糸切り	4-1	
2	D-2	埴輪土 土師器	杯	(15.8cm)	(7.4cm)	5.4cm	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラミガキ黒色処理	底面 骨針 回転糸切り (一度切り直している)	4-2	
3	D-3	床面 ロクロナ 土師器	小空甕	(12.6cm)	7.4cm	10.6cm	体部:ロクロナデ	ロクロナデ	底面 回転糸切り	4-3	
4	E-1	床面	須恵器	杯	-	(7.4cm)	(11.6cm)	ロクロナデ	ロクロナデ	底面 回転糸切り	4-4
5	E-2	埴輪土	須恵器	杯	-	(7.8cm)	(11.6cm)	ロクロナデ	ロクロナデ	底面 回転糸切り	4-5
6	E-3	埴輪土	須恵器	杯	-	(7.3cm)	(12.6cm)	ロクロナデ	ロクロナデ	底面 回転糸切り	4-6

第7図 S11 竪穴住居跡出土遺物

S12 竪穴住居跡

調査区北西部で検出された。SK3・4・5・10・12・13土坑、P7・8・55・56・57などと重複し、これらよりも古い。北側と西側が調査区外に広がっている。平面形状は方形を呈すると推定される。規模は南壁で3.6m以上、東壁で3.1m以上である。堆積土は2層に分層された。1層は住居内堆積土で、調査区の西壁のみ確認された。黒褐色



図録 番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 図録	
				口径	底径	器高					
1	E-4	竪方埴土	須恵器	杯	(13.0)	(8.6)	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	底面 回転ヘラ切り 厚手 口縁部→底面残存	4-7
2	E-6	竪方埴土	須恵器	杯	-	(7.8)	(1.9)	ロクロナデ	剥落著しい 底面 ヘラ削り、ヘラ ミガキ	底面切り離し不明	4-8
3	E-5	竪方埴土	須恵器	高台付杯	-	(6.4)	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	底面	4-9
4	E-7	竪方埴土	須恵器	甕	-	(8.1)	-	平行タタキ	あて真底 ヘラナデ	体部破片	4-10
5	F-1	竪方埴土	土製品	トリバ	-	-	1.7	-	-	-	4-11

第8図 S12 竪穴住居跡出土遺物

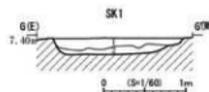
粘土を主体とし、灰白色火山灰がブロック状に少量含まれている。2層は掘方埋土でにぶい黄褐色粘土である。灰白色火山灰ブロックが少量含まれている。調査区の西壁で床面を確認した。掘方埋土の上面を床面にしており、壁高は19 cmである。床面上では柱穴1基が検出された。カマドと周溝は確認されなかった。柱穴の平面形は楕円形で、規模は径が30～42 cm以上、深さは28 cmである。柱痕跡を有しており、径は20 cmである。

遺物は掘方埋土からロクロ土師器や須恵器、土製品が、柱穴からロクロ土師器片が出土している。第8図1、2(E-4, 6)は掘方埋土から出土した須恵器坏で、第8図5(P-1)は掘方埋土から出土したトリベトと考えられる土製品である。

(2) 土坑

SK1 土坑

調査区の南西部で検出された。SX1 性格不明遺構とP49と重複しこれよりも新しい。南側と西側が調査区外に広がっており、平面形状は円形を呈する考えられる。遺構の規模は南北1.3m、東西1.6m以上で、深さは約20 cmである。断面形は浅い逆台形を呈する。堆積土は2層に分層された。黒褐色粘土を主体として基本層III層を起源とする粘土を粒状に含んでいる。堆積土中から中世陶器片が出土している。第20図1(I-2)は常滑産の甕の体部破片で13世紀代のものと考えられる。

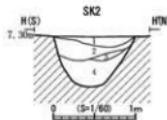


遺構名	層位	色調	土質	備考・遺人物
SK1	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	基本層III層を粒状(φ0.5～1.5cm)に少量含む。炭化粒を微量含む。
	2	10YR2/3 黒褐色	粘土	基本層III層を面状に含む。炭化粒を微量含む。

第9図 SK1 土坑断面図

SK2 土坑

調査区の西壁で検出された。SX1 性格不明遺構と重複しこれよりも新しい。西側が調査区外に広がっており、平面形状は不明である。遺構の規模は南北190 cm以上、東西116 cm以上、深さは61 cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は4層に分層された。いずれの層も黒褐色シルト質粘土を主体としており、砂と基本層III層を起源とした粘土粒を含んでいる。堆積土中から土師器と須恵器、中世陶器の破片が出土している。第20図2(I-3)は在地産の壺の口縁部破片で13世紀代のものと考えられる。

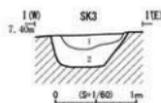


層位	色調	土質	備考・遺人物
1	10YR2/2 黒褐色	粘土	炭化粒を微量に含む
2	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色粘土粒を多量に、砂を少量含む
3	10YR2/3 暗褐色	シルト質粘土	砂をやや多量に含む
4	10YR2/1 黒色	粘土	にぶい黄褐色粘土粒を少量含む

第10図 SK2 土坑断面図

SK3 土坑

調査区の西部で検出された。SI2 堅穴住居跡、SK4 土坑、SX1 性格不明遺構と重複し、SK4 土坑より古く、SI2 堅穴住居跡と SX1 性格不明遺構よりも新しい。平面形状は楕円形を呈する。遺構の規模は南北109 cm、東西106 cm、深さは40 cmで、断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に細分された。黒褐色粘土を主体としており、基本層III層を起源とする粘土ブロック・粒を含んでいる。堆積土中からロクロ土師器と須恵器、中世陶器片が出土している。第20図3(I-5)は常滑産の甕の体部破片である。

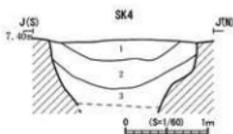


層位	色調	土質	備考・遺人物
1	10YR2/3 黒褐色	粘土	基本層III層を軟状にやや多く含む。炭化物を微量含む。
2	10YR2/3 黒褐色	粘土	基本層III層ブロックを少量含む。

第 11 図 SK3 土坑断面図

SK4 土坑

調査区の西部で検出された。SI2 堅穴住居跡と SK3 土坑と重複し、これよりも新しい。平面形は楕円形を呈し、遺構の規模は南北 184 cm、東西 158 cm である。深さは 81 cm まで掘り下げたが、安全面を考慮しそれ以上の掘削は行わなかったため、底面までの深さ不明である。断面形は漏斗形を呈すると考えられる。堆積土は 3 層に分層された。黒褐色粘土を主体とし、基本層III層を起源とした褐色粘土を含んでいる。断面形状と堆積状況から井戸跡であると考えられる。堆積土中からクロコ土師器と須恵器、土師質土器、中世陶器の破片、金属製品、粘板岩の破片が出土している。第 20 図 5 (I-8) は陶器の甕の体部破片で、外面に格子状の押印がある。第 20 図 6 (I-10) は在地産の甕の体部破片で 13 世紀後半～14 世紀前半のものと考えられる。金属製品は釘と槍先と古銭が出土している。出土した古銭には「聖宋元宝」がある(第 20 図 11、N-3)。

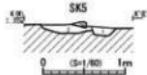


層位	色調	土質	備考・遺人物
1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層III層を軟状に少量含む。炭化物を微量含む。
2	10YR2/3 黒褐色	粘土	基本層III層をブロック状にやや多く含む。炭化物を微量含む。
3	10YR2/3 黒褐色	粘土	基本層III層をブロック状に少量含む。炭化物を微量含む。

第 12 図 SK4 土坑断面図

SK5 土坑

調査区の西部で検出された。SI2 堅穴住居跡と重複し、これよりも新しい。平面形はやや歪な隅丸方形を呈し、遺構の規模は東西 95 cm、南北 70 cm で深さは約 20 cm である。遺物は堆積土中から赤焼土器(第 20 図 8・D-4)と中世陶器(I-11)が出土している。赤焼土器は坏で、底部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がる。口唇部はやや厚みがある。

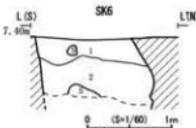


遺構名	層位	色調	土質	備考・遺人物
SK5	1	10YR3/2 褐色	粘土	褐色粘土ブロックを多量に、粘土粒を微量含む。
	2	7.5YR2/2 褐色	粘土	粘土粒を少量、炭化物を微量含む。

第 13 図 SK5 土坑断面図

SK6 土坑

調査区の南西部で検出された。SK10 土坑と SX1 性格不明遺構と重複し、これよりも新しい。平面形は不整形を呈し、遺構の規模は南北が 116 cm、東西が 153 cm である。深さ 82 cm まで掘り下げたが、安全面を考慮しそれ以上の掘削は行わなかったため、底面までの深さは不明である。断面形状は南壁はまばら垂直に立ち上がるが、北側はオーバーハングしている。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体としている。断面形状から井戸跡の可能性はある。



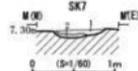
層位	色調	土質	備考・遺人物
1	10YR2/1 黒色	砂	炭化物を微量含む。
2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	基本層III層を軟状に多く含む。

第 14 図 SK6 土坑断面図

堆積土中から土師器と須恵器、土師質土器、中世陶器、鉄滓が出土している。写真図版5-10 (T-1) は土師質土器の皿で、内面には赤色顔料が付着している。第20図7 (I-13) は在地産の鉢の口縁部破片で13世紀後半～14世紀前半のものと考えられる。

SK7 土坑

調査区の北部中央で検出した。平面形は円形で、南北は59 cm、東西は64 cm、深さは10 cm、断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は2層に分層された。堆積土中から土師器と須恵器の破片が出土している。

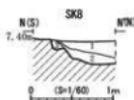


層位	色調	土質	備考・遺入物
1	10YR3/2 黒褐色	黒褐色	10YR4/3 に近い黄褐色粘土を少量含む。炭化物粒を少量含む。
2	10YR4/3 に近い黄褐色	にに近い黄褐色	黄褐色粘土を多量に含む。

第15図 SK7 土坑断面図

SK8 土坑

調査区の北東部で検出された。SI1 堅穴住居跡と重複しこれより新しい。遺構の北側が調査区外に広がっているが、平面形は長楕円形を呈すると考えられる。遺構の規模は南北68 cm以上、東西58 cm、深さは29 cm、断面形は底面から緩やかに立ち上がるが、南壁で段が付き、ほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は3層に分層された。黒褐色粘土を主体とし、基本層III層を起源とした褐色粘土を含んでいる。堆積土中から土師器の破片と鉄滓が出土している。



層位	色調	土質	備考・遺入物
1	10YR2/2 黒褐色	粘土	黒色粘土ブロック、褐色粘土質シルトブロックを多量含む
2	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	褐色粘土ブロックを多量に含む
3	10YR3/1 黒褐色	粘土	褐色粘土ブロックを多量に含む

第16図 SK8 土坑断面図

SK9 土坑

調査区の中央で検出された。北側が掘乱で削平されているが平面形は楕円形を呈すると考えられる。遺構の規模は南北56 cm以上、東西36 cm以上、深さは19 cmである。堆積土は単層であり、黒褐色シルト質粘土で焼土を少量含んでいる。堆積土中から土師器と須恵器の破片が出土している。

SK10 土坑

調査区の西部で検出された。SK6 土坑と P4、SI2 堅穴住居跡と重複し、SK6 土坑と P4 よりも古く、SI2 堅穴住居跡よりも新しい。南側がSK6 土坑に削平されており、平面形は不整形である。遺構の規模は南北136 cm以上、東西52 cm、深さは33 cm、断面形状はU字形を呈する。堆積土は単層で暗褐色粘土を主体とし、にに近い黄褐色粘土を多量に含んでいる。堆積土中からロクロ土師器と須恵器の破片が出土している。



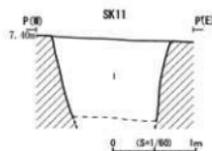
層位	色調	土質	備考・遺入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土	10YR4/3 粘土ブロックを多量に含む。炭化物を微量に含む。砂を少量含む。

第17図 SK10 土坑断面図

SK11 土坑

調査区の東部で検出された。P44 と重複し、これよりも新しい。南西側が掘乱に削平されているものの、平面形

状は円形を呈する。遺構の規模は南北138 cm、東西140 cmである。深さは約100 cmまで掘り下げたが、安全面を考慮しそれ以上の掘削を行わなかったため、底面までの深さは不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。平面と断面の形状から井戸跡である可能性がある。堆積土は単層で黒褐色粘土を主体とし、褐色粘土ブロックを大量に含み、炭化物を微量に含んでいる。堆積土中からロクロ土師器と中世陶器の破片と土製品、金属製品が出土している。写真図版5-12 (I-17) は常滑産の甕の破片である。



層位	色調	土質	備考・遺人物
1	10YR2/2 黒褐色	粘土	褐色粘土ブロックを多量含む。炭化物粒を微量に含む。

第18図 SK11 土坑断面図

SK12 土坑

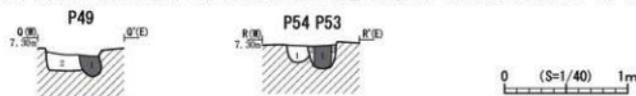
調査区の西壁で検出された。西壁の断面観察から、II層上面から掘り込まれていることが確認された。SI2 堅穴住居跡とSK13 土坑と重複し、これらより新しい。西壁の断面でのみの確認であるため、平面形と規模は不明である。深さは49 cmで、断面形状はU字形を呈する。堆積土は単層でにぶい黄褐色粘土粒と砂を少量含んでいる。遺物は出土していない。

SK13 土坑

調査区の西壁で検出された。西壁の断面観察から、SK12 より古く、SI2 堅穴住居跡より新しいことが確認された。西側が調査区外に広がっており、平面形状は不明である。遺構の規模は南北94 cm以上、東西24 cm以上、深さは45 cm以上である。堆積土は2層確認されており、黒褐色粘土を主体とし、炭化物粒を微量に含んでいる。遺物は出土していない。

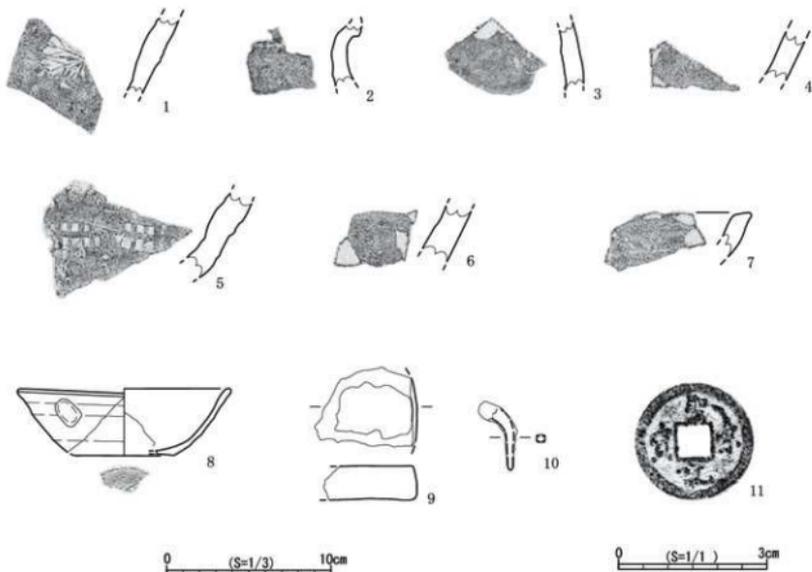
(3) ピット

ピットは56基検出された。ピットの規模は径が12～46 cm、深さが6～30 cmで、平面形は円形が多い。建物跡や柱列を構成するような配列は確認できなかった。柱痕跡を有するピットは2基 (P49、P53) 確認されており、柱痕跡の径は14～25 cmである。また、調査区北東部で検出されたP35の底面では扁平な礫が、その直下では中世陶器の破片がまとまって出土している。礫と陶器の破片は柱の礎板として使用されていたと考えられる。このP35は建物跡を構成する柱穴である可能性が考えられる。遺物はP2とP9、P52から中世陶器が、P29から釘が、P35から中世陶器が出土している。P52から出土した第21図4 (I-27) は常滑産の甕の体部の破片で外面に押印がある。第21図6(K-3) はP35の底面で出土した礎板で表面には赤色顔料が、裏面には炭化物が付着している。P35からまとまって出土した中世陶器の破片は常滑の甕で、SX1 性格不明遺構と攪乱から出土した陶器 (I-46) と



遺構名	層位	色調	土質	備考・遺人物
P49	1	10YR2/2 黒褐色	粘土	灰黄褐色シルトブロック。炭化物粒を微量含む (柱痕跡)
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化物を少量、褐色粘土ブロックを多量に含む (南方土)
P53	1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	(柱痕跡)
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロックを多量に、褐色粘土ブロックを少量含む (南方土)
P54	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	

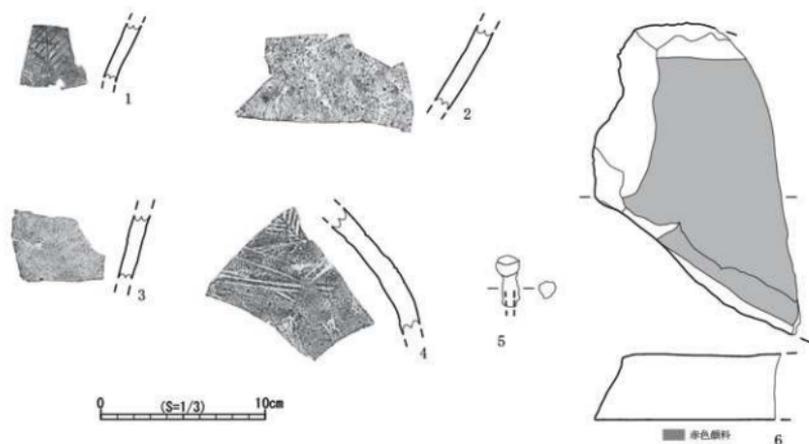
第19図 P49・53・54 断面図



図録番号	登録番号	遺構名	種類	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	F-2	SK1	陶器	甕	-	-	(4.6)	ヘラナデ	ヘラナデ	常滑 13C? 体部片 押印あり(施文?)	4-12
2	F-3	SK2	陶器	甕? (小型)	-	-	(3.7)	自然釉 (発色悪い)	ヘラナデ	白土盛か? 変口収口跡か 13C ~ 14C 口縁部分	4-13
3	F-5	SK3	陶器	甕?	-	-	(4.2)	ヘラナデ	ヘラナデ	常滑 体部片	4-14
4	F-7	SK4	陶器	鉢	-	-	(2.9)	ロクロナデ	磨粒	在地 13C 後半 ~ 14C 前半 内面すれている 体部片	4-15
5	F-8	SK4	陶器	甕	-	-	(5.1)	緑なヘラナデ	ロクロ飯	産地不明 押印あり(格子状) 体部片(下半部) 跡	4-16
6	F-10	SK4	陶器	甕	-	-	(3.4)	ヘラナデ	ヘラナデ	白土盛? 13C 後半 ~ 14C 前半(在地) 体部片	4-17
7	F-13	SK6	陶器	鉢	-	-	(2.7)	ロクロナデか	ロクロナデか	在地 13C ~ 14C 前半 口縁部片	5-1
8	B-4	SK5	赤土土器	杯	(12.8)	6.0	4.1	ロクロナデ 指頭飯	ロクロナデ	全体の約 1/2 残	5-2
-	F-1	SK1	陶器	甕	-	-	-	ロクロナデ 緑釉	ロクロナデ 緑釉	緑釉陶器 口縁部片 粘土灰白色 平安時代 産地不明 写真掲載のみ	5-3
-	F-6	SK3	陶器	甕?	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ 指オサエ	常滑 中世 写真掲載のみ	5-4
-	F-4	SK4	陶器	甕? 小甕	-	-	-	自然釉	自然釉 剥落	産部付近 常滑 中世 写真掲載のみ	5-5
-	F-9	SK4	陶器	飯椀	-	-	-	自然釉	ヘラナデ 自然釉	常滑 体部片 中世 産地? 写真掲載のみ	5-6
-	F-11	SK5	陶器	甕?	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	12C 中 産美 写真掲載のみ	5-7
-	F-14	SK6	陶器	甕	-	-	-	ヘラナデ	産地不明 中世 写真掲載のみ	5-8	
-	F-15	SK6	陶器	甕	-	-	-	自然釉	自然釉	常滑 中世 小型品 写真掲載のみ	5-9
-	F-1	SK6	土師質土器	甕	-	-	-	ロクロナデ 赤色顔料	ロクロナデ	中世 写真掲載のみ	5-10
-	F-16	SK11	陶器	甕	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	産地不明 中世 写真掲載のみ	5-11
-	F-17	SK11	陶器	甕	-	-	-	剥落	ヘラナデ	常滑 中世 写真掲載のみ	5-12
図録番号	登録番号	遺構名	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版	
					全長	幅	厚さ				
9	F-2	SK11	土製品	不明	-	-	2.1	61.7	円板状土製品(厚手)円形または楕円形か、軽ガク多含む、時期不明 全体の1/8 残?	5-13	
10	N-1	SK4	鉄製品	釘	(4.2)	(1.0)	(1.1)	4.7	サビ取れず 変形? (変形)	5-14	
11	N-3	SK4	銅製品	古銭	2.5	2.5	0.15	3.3	聖徳太子(北史, 1101年)	5-18	
-	N-2	SK4	鉄製品	槍先?	(13.7)	2.0	1.3	28.8	中世か 写真掲載のみ	5-15	
-	N-4	SK4	銅製品	古銭	(2.1)	(1.3)	0.12	1.0	中国 写真掲載のみ	5-17	
-	N-5	SK11	鉄片	-	(6.2)	(5.5)	1.4	57.2	2点あり 写真掲載のみ	5-16	

第20図 土坑出土遺物

同一個体の破片である。



図版番号	発掘番号	遺構名	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	外周調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	高さ	器高					
1	I-24	P2	陶器	甕	-	-	(3.3)		押印	ヘラナダ	体部片 胎土・砂をほとんど含まず陸良	E-19
2	I-25	P2	陶器	甕	-	-	(5.1)		ヘラナダ	ヘラナダ	産地不明 体部片 I-24と同一個体?	E-20
3	I-26	P9	陶器	甕 or 壺	-	-	(3.8)		ヘラナダ	ヘラナダ	産地不明 体部片	E-21
4	I-27	P52	陶器	甕	-	-	(7.7)		先羽状押印 刻線文様か?	ヘラナダ ナダ(ヘラ・節)	常滑 中世 体部片	E-22

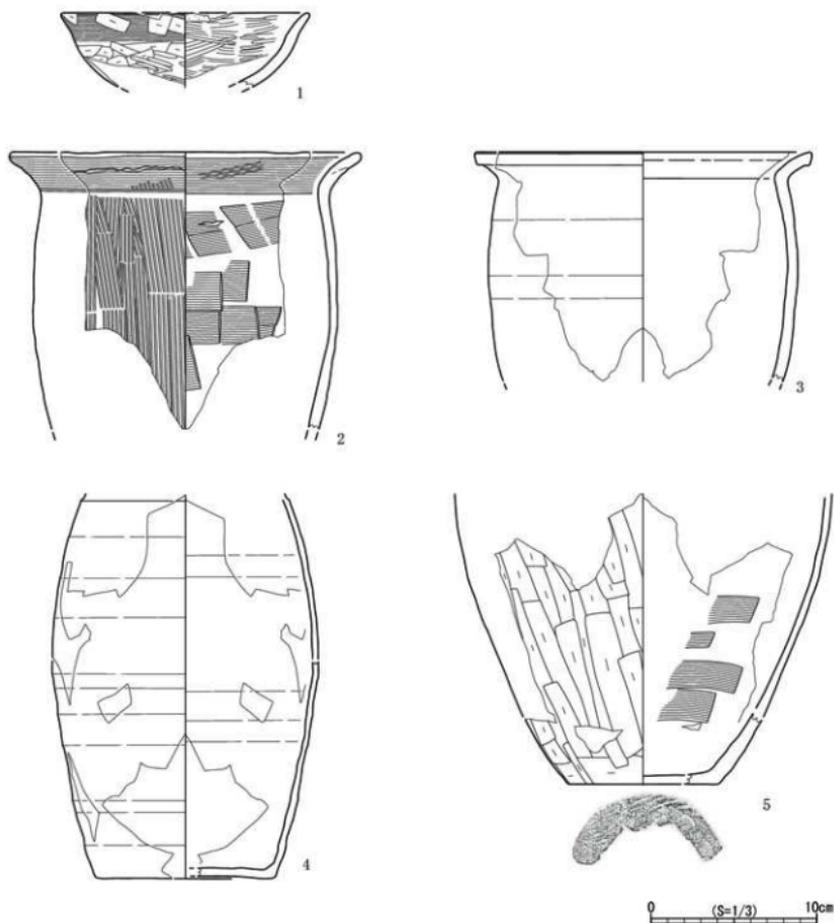
図版番号	発掘番号	遺構名	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
					全長	幅	厚さ			
5	N-16	P29	鉄製品	釘	(3.2)	(1.0)	(0.7)	3.3	先端部欠損	E-23
6	E-3	P35	石製品	礎板石	19.1	12.7	4.0	1290.0	一部破断 上面:赤色顔料塗布 下面:スス付着	E-24

第21図 ビット出土遺物

(4) 性格不明遺構

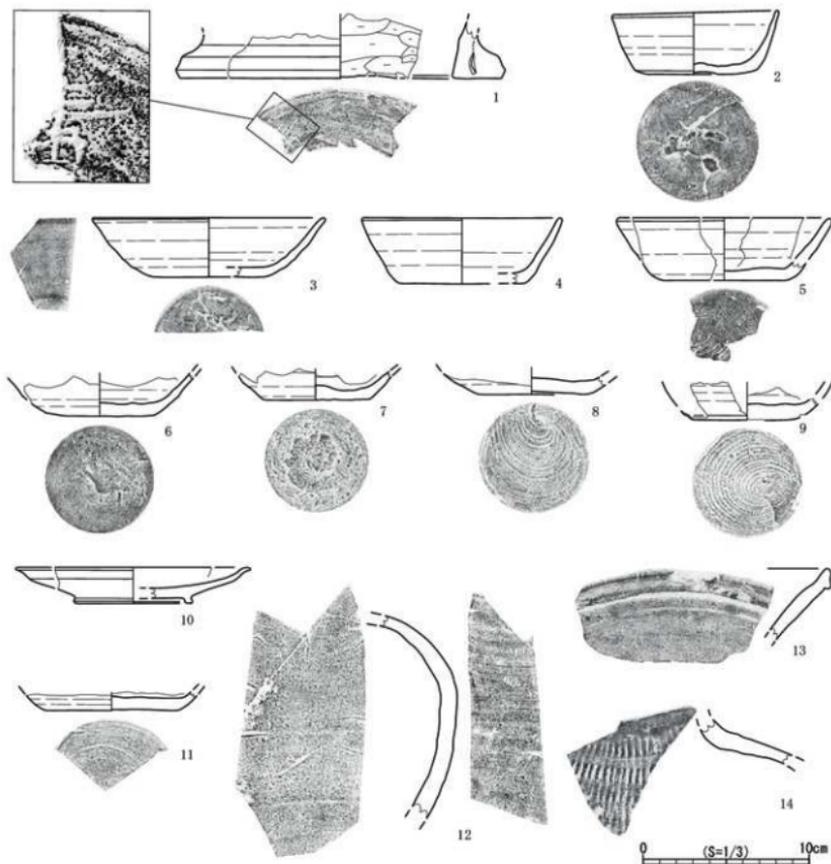
SX1 性格不明遺構

調査区の南部で検出された。平面形状は不整形である。重複する土坑やビットよりも古い。遺構の北部のみを検出しており、南部と東部、西部は調査区外に広がっている。北辺の東端部と西端部は北側にやや弯曲して広がっている。規模は南北が3.3m以上、東西が12m以上、深さは30cm以上である。断面形状は調査区東壁で南に向かってなだらかに傾斜している。堆積土は3層に細分された。黒褐色粘土を主体としており、炭化物粒と酸化鉄粒を微量に含む。堆積土から土師器、ロクロ土師器、須恵器、瓦、中世陶器、金属製品、石製品、骨などが出土している。第22図1(C-3)は底部が欠損している土師器環である。体部はやや内弯気味に立ち上がり、口縁部は外傾している。第22図2～5(C-4・D-6・7・9)は土師器甕である。D-7の底面にはスノコ状の圧痕が確認された。第23図1(D-10)はロクロ土師器甕の底部である。単孔式の甕で、底部に文字が刻まれており、焼成前に刻まれたものと考えられる。須恵器は環(第23図2～9・11、E-8～16)と甕(第23図13・14・第24図3・4、E-18・19・22・23)、瓶(第23図12・第24図1・2、E-17・20・21)が出土している。このうち環にはほぼ完形のもの(E-8)がある。底部から口縁部にかけて外傾して立ち上がり、体部から口唇部にかけて器厚が薄くなる。E-17は瓶の体部の破片である。破片のみの出土で壺の可能性もある。体部上半部外面に降灰がみられ、大戸窯産の可能性もある。瓦は古代の平瓦の破片が1点出土している(第25図1、G-1)。凹面は布目痕、凸面は縄目痕で、多賀城Ⅱ、Ⅲ期以降のものと考えられる。陶器は皿と壺、甕が出土している。皿は灰軸陶器(第23図10、I-52)と緑釉陶器(写真図版7-14)である。壺は第24図6(I-21)が出土している。常滑産で13世紀前半の可能性もある。甕は第24図4・5・7・8(I-19・20・22・23)が出土している。このうち、I-19は渥美窯で12世紀後半、I-22は常滑産で13～14世紀、



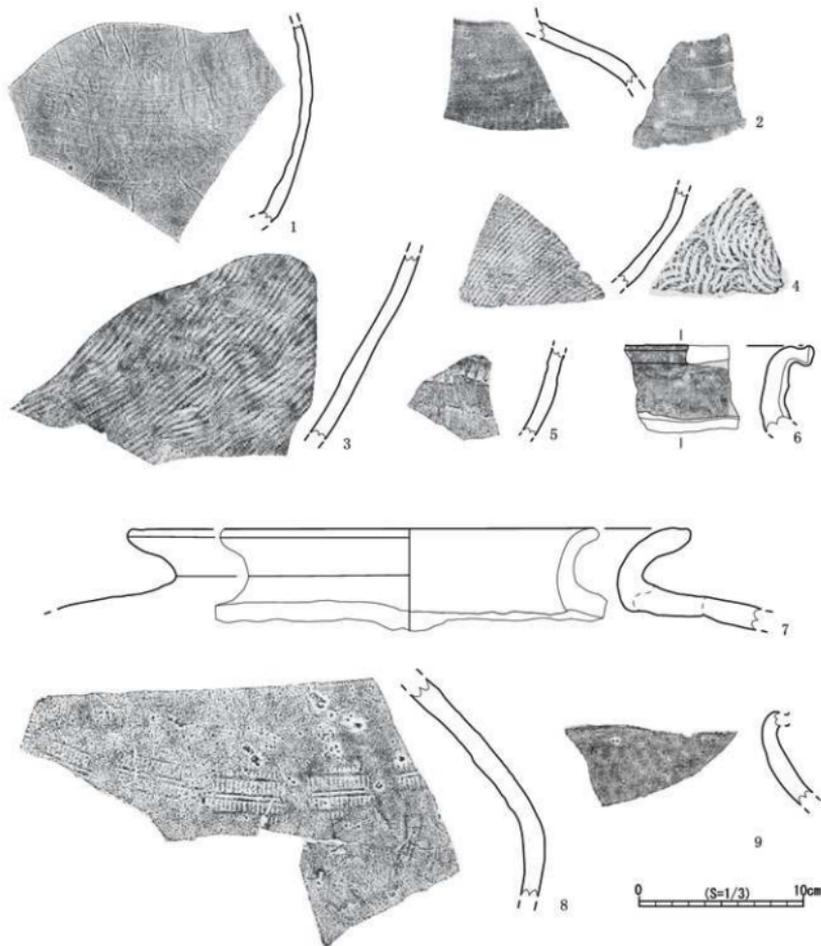
図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
				口径	底径	高さ				
1	C-3	非ロクロ土師器	坏	(14.8)	-	(4.5)	口縁:ヨコナデ ケズリ 体部:ケズリ ミガキ	体部:ミガキ	内面着色処理 骨針	6-1
2	C-4	非ロクロ土師器	甕	(20.8)	-	(16.8)	口縁:ヨコナデ 体部: ハケム	体部	口縁:ロクロナデ一部ハ ケム 体部:ヘラナデ	6-2
3	B-9	ロクロ土師器	長胴甕	(20.2)	-	(13.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	外面焼熱変変	6-4
4	B-6	ロクロ土師器	長胴甕	-	(11.0)	(23.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	非常に薄い 焼熱変変 口縁部は接合せし 体部	6-3
5	B-7	ロクロ土師器	長胴甕	-	(8.8)	(17.6)	ヘラケズリ ロクロナデ 上部破片にロクロ目あり	ロクロナデ	底面:スノコ状圧痕 砂多量	6-5

第22図 SX1 性格不明遺構出土遺物 (1)



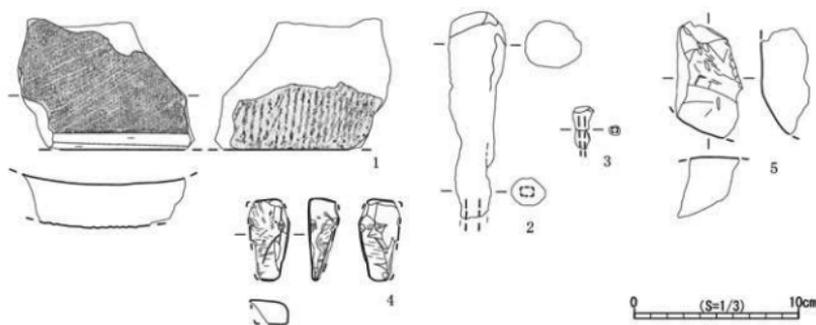
図版番号	登録番号	種類	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
				口径	底径	器高				
1	B-10	ロクロ土師器	瓶	-	(19.4)	(3.9)	ロクロナデ	ヘラケズリ	単孔 平安寺 文字?	6-7
2	E-8	須恵器	杯	8.8	7.3	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	同転ヘラ切り (粘土地付着) ほぼ完形	6-8
3	E-9	須恵器	杯	(13.4)	(6.4)	3.4	ロクロナデ	同転ヘラケズリ		6-9
4	E-10	須恵器	杯	(12.0)	(7.6)	4.0	ロクロナデ	底面欠損		6-10
5	E-11	須恵器	杯	(12.6)	(7.4)	3.8	ロクロナデ	底面: 同転糸切り→ヘラ削り		6-11
6	E-12	須恵器	杯	-	6.5	(2.6)	ロクロナデ	底面: 同転ヘラ切り 底面付着残存		6-12
7	E-13	須恵器	杯	-	6.2	(1.9)	ロクロナデ	底面: 同転ヘラ切り 底面付着残存		6-13
8	E-14	須恵器	杯	-	6.6	(1.5)	ロクロナデ	底面: 同転糸切り 變成不良 底面片		7-1
9	E-15	須恵器	杯	-	6.6	(2.3)	ロクロナデ	外面: 火打すき 底面: 同転糸切り (切り直しあり)		7-2
10	1-52	陶器	皿	(14.1)	(7.0)	器高2.2 高台高0.3	ロクロナデ	灰釉陶器 縁段? 9C 南平 k-14号窯式段脚 胎土に黒色粒子含む 全体の約1/4残存		7-3
11	E-16	須恵器	杯	-	(8.0)	(1.1)	ロクロナデ	底面: 同転ヘラケズリ 内外面火打すき 骨針 (少)		7-4
12	E-17	須恵器	瓶 or 壺	-	-	(12.1)	ロクロナデ	合津大戸型? 体部片		7-7
13	E-18	須恵器	壺	-	-	(4.3)	ロクロナデ	口縁破片		7-5
14	E-19	須恵器	壺	-	-	(2.6)	ロクロナデ カキメ 平打身タキ	ロクロナデ 体部片		7-6

第23図 SX1 性格不明遺構出土遺物 (2)



図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			外面調整		内面調整		備考	写真図版
				口径	底径	器高						
1	F-20	須恵部	瓶	-	-	(12.1)	ロクロナダ 回転ヘラ削り	ロクロナダ	体部片		7-8	
2	F-21	須恵部	壺類	-	-	(4.0)	凸本メ		胴部片		7-9	
3	F-22	須恵部	壺	-	-	(11.2)	平行タタキ		体部片		7-11	
4	F-23	須恵部	壺	-	-	(4.2)	平行タタキ	背南面底	体部片	骨針	7-10	
5	I-30	陶部	壺小壺	-	-	(5.3)	ヘラナダ 押印	ヘラナダ	スダレ状押印	12C 体部片	7-12	
6	I-21	陶部	壺	-	-	(5.3)	自然軸 (厚い)	ヘラナダ?	常滑 13C (扁平?)	口縁部片	7-13	
7	I-19	陶部	壺 (34.2)	-	-	(6.2)	自然軸 ナダ	自然軸 輪襷痕	ヘラナダ 指オサエ	常滑 2期 12C 後半?	1-38と同一製体?	7-15
8	I-22	陶部	壺	-	-	(13.2)	スダレ状押印 自然軸	ヘラナダ	ヘラナダ 指ナダ 輪襷み痕			7-16
9	I-23	陶部	壺	0.0	-	(5.6)	ヨコナダ 自然軸	ヨコナダ	ヘラナダ	常滑 13C 受口状口縁?	胴部へ口縁部	7-17
-	B-11	ロクロナダ土師部	瓶	-	-	-				肥手のみ	写真のみ掲載	6-6

第24図 SX1 性格不明遺構出土遺物 (3)



図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	図面調整	平面調整	備考	写真図版
				幅	長さ	厚さ					
1	G-1	瓦	平瓦	(8.0)	(10.7)	(2.6)		表面直 コビキ板 ヘラクゼリ	裏タタキ		8-1
2	N-6	鉄製品	不明	(12.7)	(3.4)	(2.7)	110.8	先端部欠損 全面サビ付着			8-2
3	N-7	鉄製品	釘	(2.6)	(0.7)	(0.6)	2.4	先端部欠損 サビ付着			8-3
4	K-1	石製品	砥石 (小型)	5.0	(2.4)	1.8	17.3	欠損 (1面) 断面3面			8-4
5	K-2	石製品	砥石	7.1	4.0	(3.7)	112.2	不定形 断面2面? 欠損			8-5
-	N-8	鉄滓	-	11.0	(8.1)	3.3	263.5	網形滓 写真のみ掲載			8-6
-	N-9	鉄滓	-	9.1	6.5	4.5	106.5	写真のみ掲載			8-7
-	O-1	骨	-					断面? 写真のみ掲載			8-8
-	I-18	陶器	甕					古代 緑釉陶器			7-14

第25図 SX1性格不明遺構出土遺物(3)

I-23は常滑産で13世紀の時期である。この他に石製品は砥石(第25図4・5、K-1・2)が出土している。鉄製品(第25図2・3、N-6・7)、鉄滓(写真図版8-6・7、N-8・9)、骨等が出土している。

(5) その他の出土遺物

今回の調査では捜乱や遺構確認作業中に多くの遺物が出土している。図化したのは土師器1点、ロクロ土師器4点、須恵器10点、陶器20点である。第27図11(E-29)は須恵器の瓶の破片である。内面に自然釉があり、大戸窯産の可能性が高い。第28図1(I-28)は緑釉陶器の皿の破片で、底部が残存している。内外面とも施釉されているが、緑釉の発色は弱い。中世陶器は渥美窯と常滑産、白土窯の陶器である。渥美窯の陶器は第28図2～9(I-30・32～38)の壺と甕である。線刻が施されているもの(I-33・34)や押印が施されているもの(I-32・34・35)がある。出土した陶器の年代は12世紀代である。常滑産は第28図10～15・第29図1・第30図1～3(I-31・39～42・46～50)の甕である。押印があるものはI-41・42・50で、このうちI-41には文字入りの押印が、I-42には木葉状の押印がある。出土した陶器の年代は12世紀末から14世紀代である。白土窯の陶器は第28図16(I-44)と写真図版10-12(I-45)の甕である。I-44は肩部の破片で、胎土に長石粒が含まれている。陶器の年代は13後半～14世紀前半である。

5. まとめ

今回の調査地点は、洞ノ口遺跡の南部に位置する。本調査区の周辺では平成23年度と平成26年度に個人住宅建設に伴う調査が行われており、溝跡や井戸跡、土坑、ピットなどが確認されている。遺物は常滑産や在産産を中心に13～14世紀代の陶器が多く出土している。また13～14世紀代の龍泉窯系青磁碗が出土している。

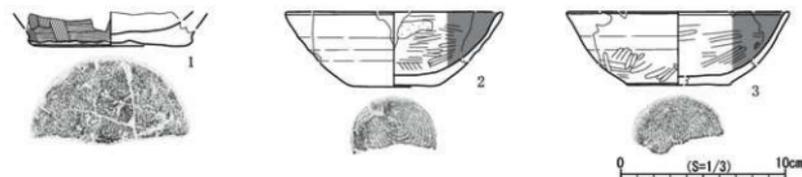
今回の調査では竪穴住居跡2軒、土坑13基、ピット56基、性格不明遺構1基が検出された。

確認された竪穴住居跡は2軒とも部分的な検出であるため、その全容については不明である。SI1 竪穴住居跡からはロクロ土師器と須恵器が、SI2 竪穴住居跡からはロクロ土師器と須恵器、土製品が出土している。SI1 竪穴住居跡から出土したロクロ土師器は、回転糸切り後、無調整のもので、器形の特徴などから9世紀後半から10世紀前半の土器群と考えられる。SI2 竪穴住居跡は、住居内堆積土中および掘方埋土には灰白火山灰が含まれていることから、10世紀前半の時期と考えられる。なお、本発掘調査区の東側約200mの位置にある第7次調査では、古代の竪穴住居跡（SI1 竪穴住居跡）が確認されている（仙台市教育委員会 2005）。

土坑は13基検出された。検出された土坑のうち、SK4土坑とSK6土坑、SK11土坑は断面形状と堆積土の特徴から井戸跡の可能性が考えられる。新旧関係からSX1性格不明遺構やピット群よりも新しい遺構である。出土遺物は13世紀後半から14世紀前半の在産産の陶器や13世紀の常滑産の陶器が出土しており、14世紀以降の時期と考えられる。

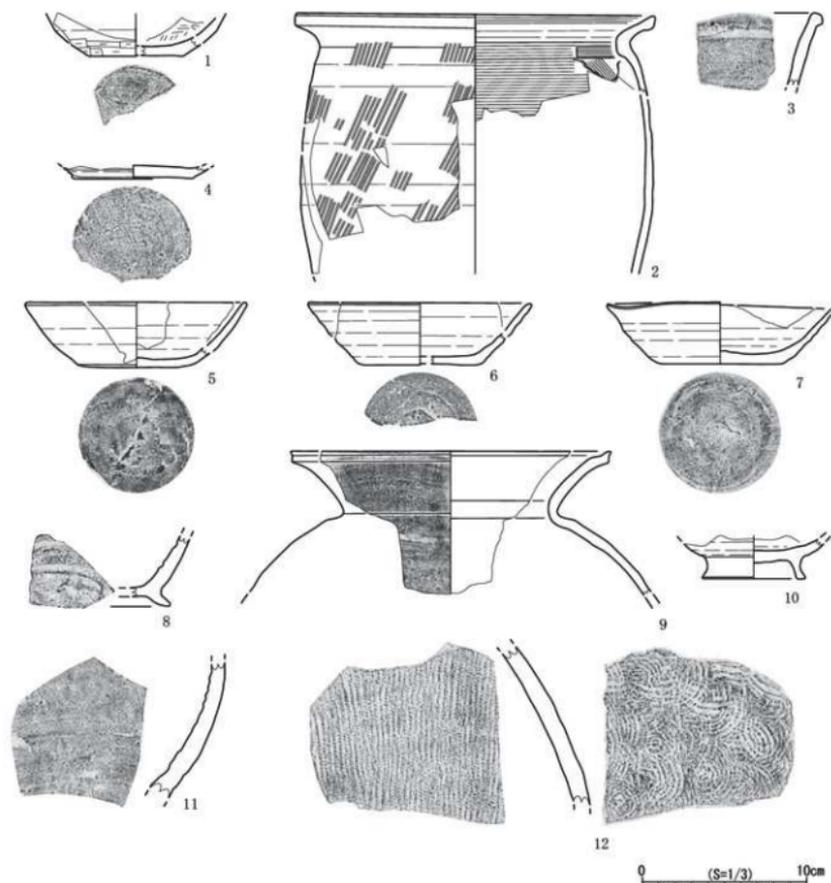
SX1性格不明遺構の堆積土からは須恵器や中世陶器片が多く出土している。一部のみの検出であったため遺構の全体形状は不明である。出土した中世陶器の中には12世紀後半の瀧美窯の甕や13～14世紀の常滑産の甕が含まれているため、13～14世紀代の時期の遺構と考えられる。また、SX1性格不明遺構から出土した中世陶器とP35で礎板として使用された礎の下からまとまって出土した中世陶器が同一個体（I-46）であったことが確認されており、同時期の遺構であると考えられる。

以上のことから、今回の調査では、I期：竪穴住居跡（9世紀後半から10世紀前半）→II期：性格不明遺構・ピット群（13～14世紀代）→III期：SK4・6・11（14世紀以降）と概ね3時期の遺構の変遷があったことが確認された。



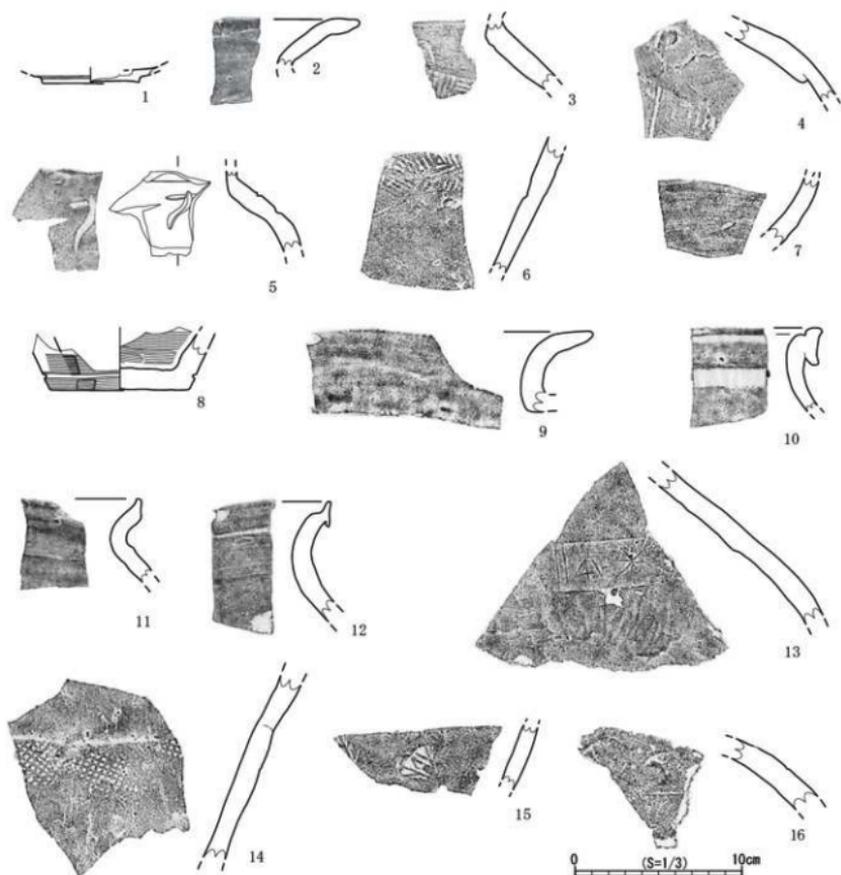
図録番号	発掘番号	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図録
				口径	底径	器高				
1	C-2	赤ロクロ土師器	甕	-	9.4	(2.1)	ヘラナデ	-	底面片 骨針 底面: 本業瓶	8-10
2	D-12	ロクロ土師器	杯	(13.0)	(5.2)	4.6	ロクロナデ	ロクロナデヘラミガキ 黒色処理	底面: 回転糸切り	8-11
3	D-13	ロクロ土師器	杯	(13.4)	(6.2)	4.5	体部: ミガキ (下半面) 外面下半部にくぎ調整	体部: ミガキ 黒色処理	底面: 回転糸切り 骨針	8-12
-	C-1	赤ロクロ土師器	高坪	-	-	-	-	-	脚部 写真のみ	8-9

第26図 その他の出土遺物(1)



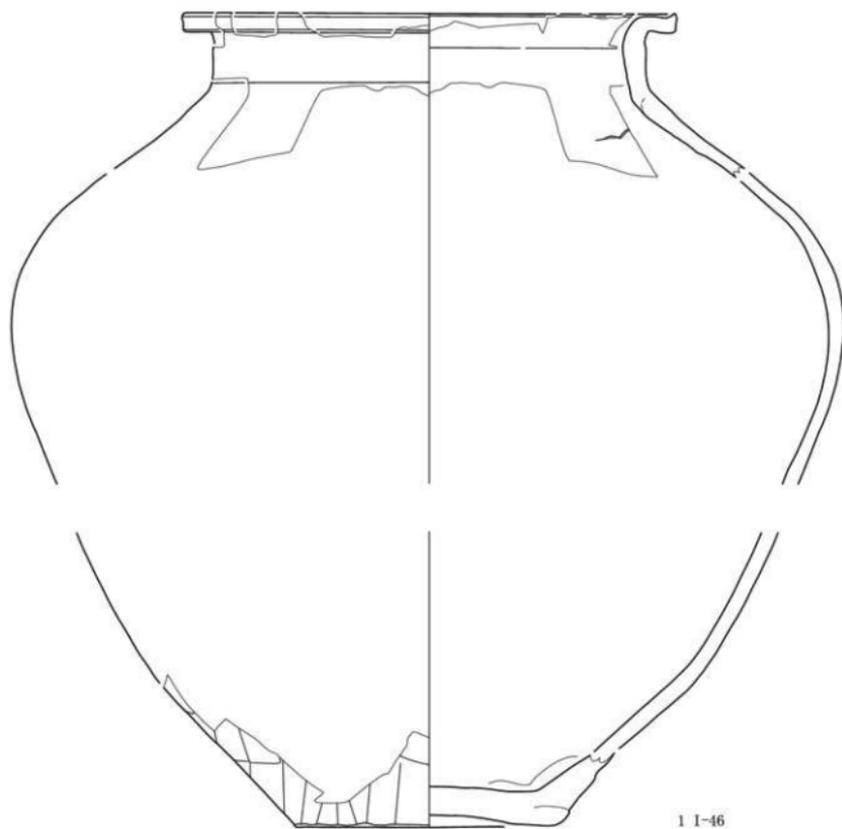
図録 番号	登録 番号	種類	器種	度量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 図版
				口径	底径	器高				
1	D-14	ロクロ土師器	杯	-	(15.8)	(2.6)	ロクロナデ→手持ちヘラズリ ケズリ	ロクロナデ→ヘラミガキ藍色処理	底部 手持ちヘラズリ 切り し不明 底部付近約1/4残	8-13
2	D-15	ロクロ土師器	長脚碗	21.7	-	(16.0)	タタキ目→ロクロナデ	カキメ→ロクロナデ (口縁) →ヘラ ナデ	上半部約1/2残	8-14
3	E-32	須恵器	盃	-	-	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	五線 口縁 口縁部片	8-15
4	E-26	須恵器	杯	-	7.2	(0.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	底部片 底部 回転ヘラ切り→ヘ ラケズリ	8-16
5	E-24	須恵器	杯	(13.2)	7.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	全体の約1/2残存 回転ヘラズリ	9-1
6	E-25	須恵器	杯	(13.4)	(7.0)	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	底部回転ヘラ切り 全体の約1/4 残存	9-2
7	E-33	須恵器	杯	13.6	7.4	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り 口縁部にゆがみあ り 全体の3/4残存	9-3
8	E-29	須恵器	瓶	-	-	(4.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	底部付近	9-6
9	E-30	須恵器	甕	(19.4)	-	-	口縁部:ロクロナデ 体部:焼戻	口縁部:ロクロナデ 体部:ヘラナデ	上半部約1/3残存	9-4
10	E-27	須恵器	高台付 杯	-	高台径 (6.2)	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ		9-5
11	E-29	須恵器	瓶類	-	-	(8.7)	ロクロナデ→回転ヘラ削 り	ロクロナデ (自然釉)	会津大戸産か 体部片 (下半部)	9-7
12	E-31	須恵器	甕	-	-	(9.3)	平行タタキ	あて瓦版 (青海産)	体部片	9-8

第27図 その他の出土遺物 (2)



図録番号	種類	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図録
			口径	底径	器高				
1	1-28	陶器 (緑釉)	底	(5.8)	(1.0)	ロクロナダ 旋輪 (緑釉)	旋輪 (緑釉)	平安時代 胎土 灰白色砂礫質含む 近江産? 外底 凹形へう折り 緑釉の発色は淡い 底面片	9-9
2	1-30	陶器	底	-	(2.7)	ロクロナダ	ロクロナダ	磨光 口縁片	9-10
3	1-32	陶器	底	-	(3.5)	旋輪か (白色の釉) 押印	ヨコナダ ヘラナダ? 輪積み底	磨光 12C 胴部分	9-11
4	1-34	陶器 (文?) (刻文面)	-	-	(4.8)	刻文線 押印有り ヘラナダ	ヘラナダ 凹オサエ? 輪積み底	磨光 12C代? 胴部分	9-12
5	1-33	陶器 (刻文面)	-	-	(4.9)	自然釉 ロクロナダ 刻線	ヘラナダ	磨光 12C代 胴部分	9-13
6	1-35	陶器	底 or 壺	-	(8.2)	ヘラナダ 押印 (2種)	ヘラナダ 輪積み底	磨光 12C 体部片 押印あり	9-14
7	1-36	陶器 (小型)	-	-	(4.0)	ロクロナダ	ロクロナダ	磨光 12C	9-15
8	1-37	陶器 (小型)	-	(8.3)	(3.8)	ヘラナダ (折れに凹いへう折り)	指ナダ	磨光 12C 底面片	10-1
9	1-38	陶器	壺	-	(4.9)	自然釉 ヨコナダ	自然釉 ヨコナダ	磨光 2or26 期? 12C後半? 1-19と同一個体か?	10-2
10	1-39	陶器	壺	-	(5.1)	ヨコナダ	ヨコナダ ヘラナダ?	N字口縁 常滑 14C 口縁部片	10-3
11	1-31	陶器	壺	-	5.0	ロクロナダ	ロクロナダ	受口状口縁 常滑 13C中頃 口縁部片	10-4
12	1-40	陶器	壺	-	(7.2)	ヨコナダ (自然釉)	ヨコナダ ヘラナダ	常滑 13C中頃 N字口縁未施 口縁部片	10-5
13	1-41	陶器	壺	-	(9.3)	ヘラナダ 押印	ヘラナダ	文字入りの押印あり (「本巻?」) 常滑 中世	10-6
14	1-50	陶器	壺	-	(10.9)	ヘラナダ 押印	ヘラナダ	常滑 格子状押印 (細か4) 体部片 13Cか	10-7
15	1-42	陶器	壺	-	(3.9)	ヘラナダ 押印 (2ヶ所)	ヘラナダ	常滑 中世 押印あり (本巻文?) 体部片	10-8
16	1-44	陶器	壺	-	(4.3)	ヘラナダ	ヘラナダ	白石薬 (在座) 胴部分 13C後半~14C前半 鉄分の吹き出し 長石胎含む	10-9

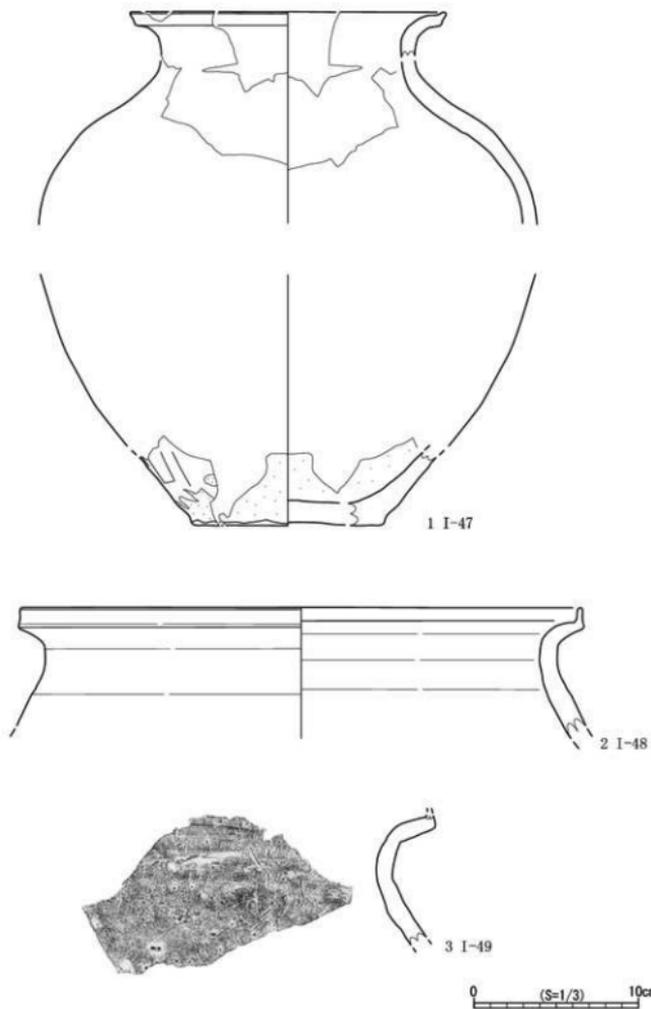
第28図 その他の出土遺物 (3)



0 (S=1/3) 10cm

図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			外面調整		内面調整		備考	写真図版
				口径	底径	器高	口縁	体部	口縁部	体部		
I	I-46	陶器	甕 or 甕 (29.8)	16.0	-	口縁 ヨコナゲ 自然釉 体部 ヘラナゲ 自然釉	口縁部 ヨコナゲ 自然釉 体部 ヘラナゲ 自然釉	常滑 13C 前半	全体約 1/3 残存か	11-1		
-	I-29	陶器	鉢	-	-	ロタロナゲ	ロタロナゲ	常滑? 12C 後半か	山形陶器系 片口鉢 写真のみ掲載	10-10		
-	I-43	陶器	甕	-	-	自然釉	ヘラナゲ			10-11		
-	I-45	陶器	甕	-	-	ヘラナゲ	不明			10-12		
-	I-51	陶器	瓶?	-	-	ロタロナゲ?	ロタロナゲ? 自然釉	常滑 13C?	瓶頸部 写真のみ掲載	10-13		
図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)		備考	写真図版		
-	N-11	銅製品	占銭?	全長 (2.2)	幅 (1.0)	厚さ (0.2)	1.1g	銭名不明 約 1/3 残存			写真のみ掲載	10-14

第29図 その他の出土遺物 (4)



図版 番号	登録 番号	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 図版
				口径	底径	器高				
1	1-47	陶器	甕	18.2	-	-	口縁 ヨコナデ 体部 ヘラナデ 自然釉	口縁 自然釉 (ヨコナデ) 体部 ヘラナデ 粗オサエ 輪襷み皿	常滑 12C 末~13C 初 外面 釉が全面ハクリ 全体の約 1/3 残存	11-2
2	1-48	陶器	甕	(34.0)	-	(8.0)	ヨコナデ	ヘラナデ ヨコナデ	常滑 13C 中頃 受口状口縁 口縁部片	10-15
3	1-49	陶器	甕	-	-	(7.9)	ヨコナデ (口縁部)	ヨコナデ ヘラナデ	常滑 13C 中頃 受口状口縁 口縁部片	10-16

第30図 その他の出土遺物 (5)

引用・参考文献

- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 加藤道男 1983 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』
- 仙台市教育委員会 2005 『洞ノ口遺跡 —第1次・2次・4次・5次・7次・10次発掘調査報告書—』
仙台市文化財調査報告書第281集
- 仙台市教育委員会 2012 『仙台平野の遺跡群22 —平成23年度発掘調査報告書—』
仙台市文化財調査報告書第404集
- 仙台市教育委員会 2013a 『仙台平野の遺跡群23 —平成24年度発掘調査報告書—』
仙台市文化財調査報告書第415集
- 仙台市教育委員会 2013b 『仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告Ⅰ—平成23年度・平成24年度震災復興民間
文化財発掘調査助成事業に伴う発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第416集
- 仙台市教育委員会 2016 『仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告Ⅱ—平成24～26年度震災復興民間文化財発掘
調査助成事業に伴う発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第448集
- 田原市博物館 2013 『渥美窯 —国宝を生んだその美と技—』



1. 遺構確認状況（西から）



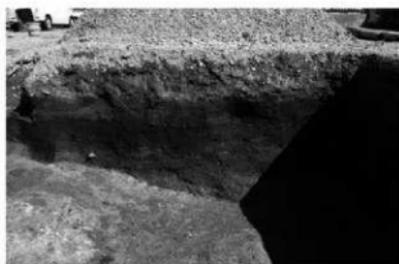
2. 遺構完掘状況（西から）



1. 遺構確認状況 (東から)



2. 遺構完掘状況 (東から)



3. 調査区東壁断面



4. 調査区西壁断面



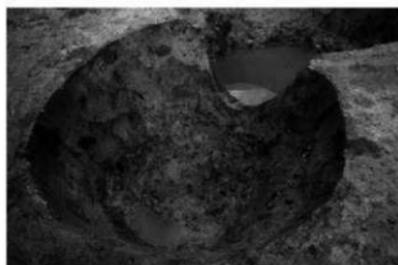
5. SI 1 竪穴住居跡床面検出状況 (北から)



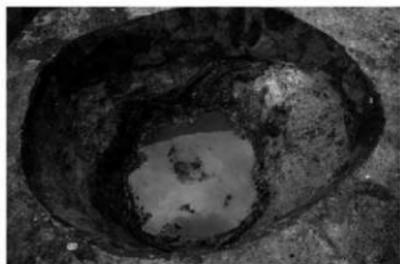
6. SI 2 竪穴住居跡検出状況 (西から)



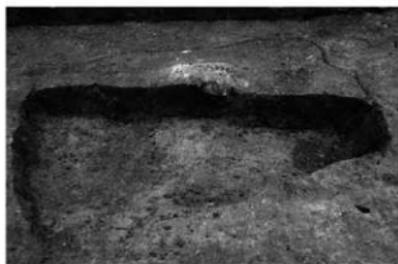
7. SK 2 土坑断面 (西から)



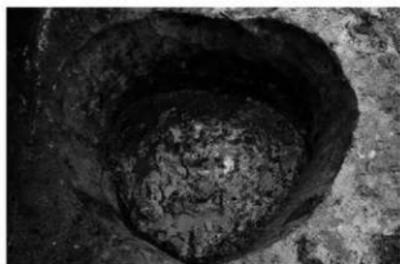
8. SK 3 土坑完掘状況 (南西から)



1. SK 4 土坑完掘状況 (東から)



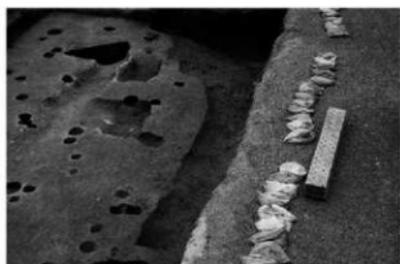
2. SK5 断面 (南から)



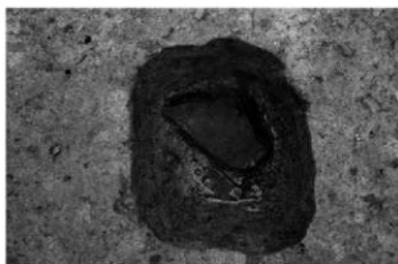
3. SK 6 土坑完掘状況 (東から)



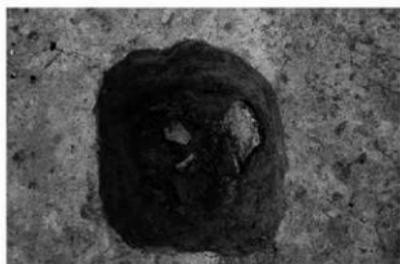
4. SK 8 土坑完掘状況 (北から)



5. SX 1 性格不明遺構完掘状況 (南西から)



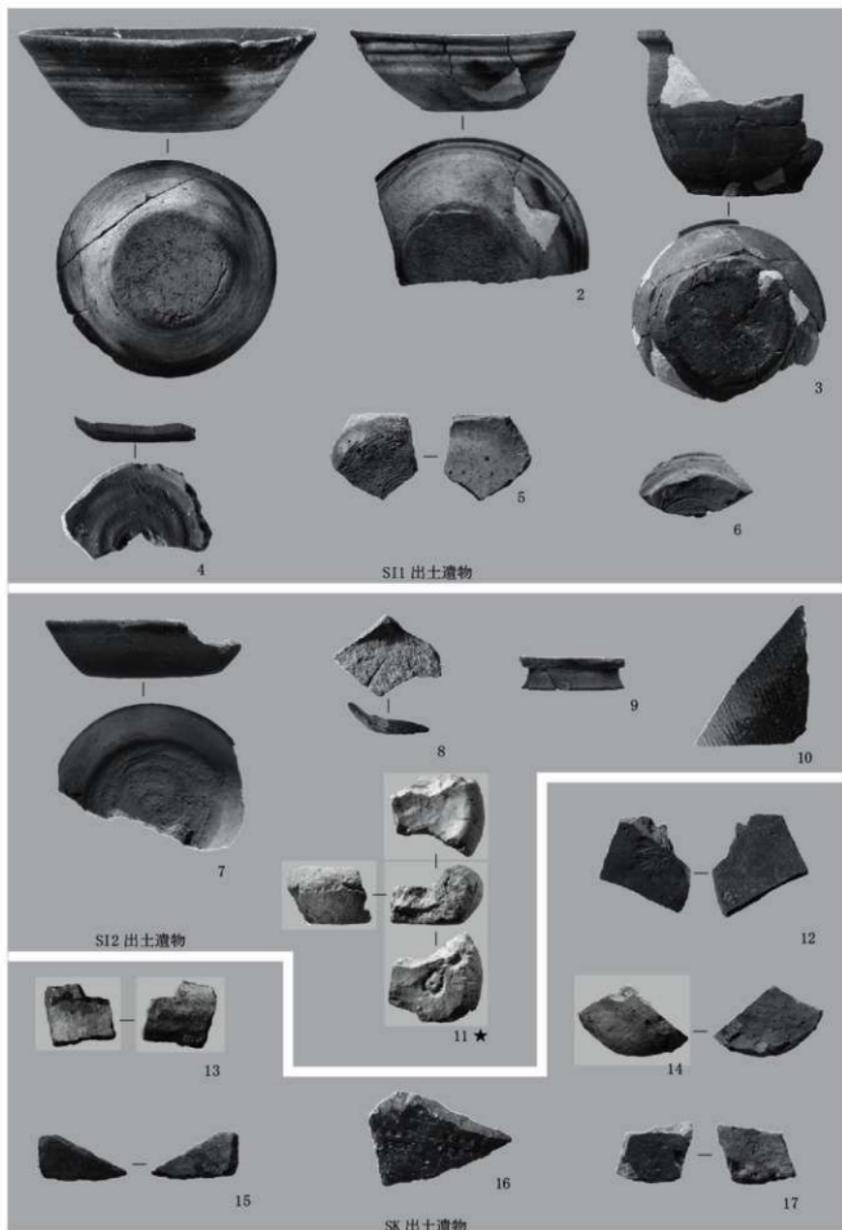
6. P35 礎板 (礎) 検出状況 (東から)



7. P35 礎板 (陶器片) 検出状況 (東から)

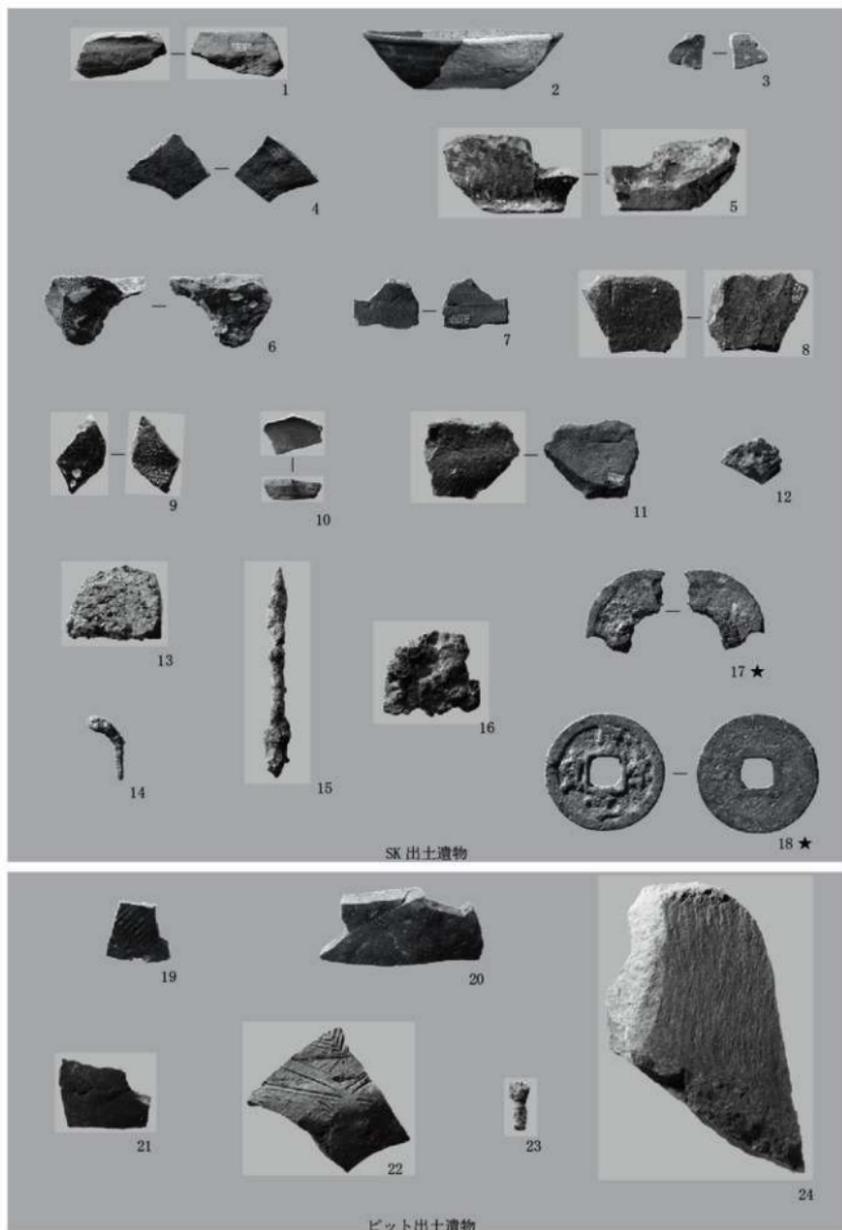


8. 作業風景



写真図版4 洞ノ口遺跡第23次調査区出土遺物(1)

★ S = 2/3

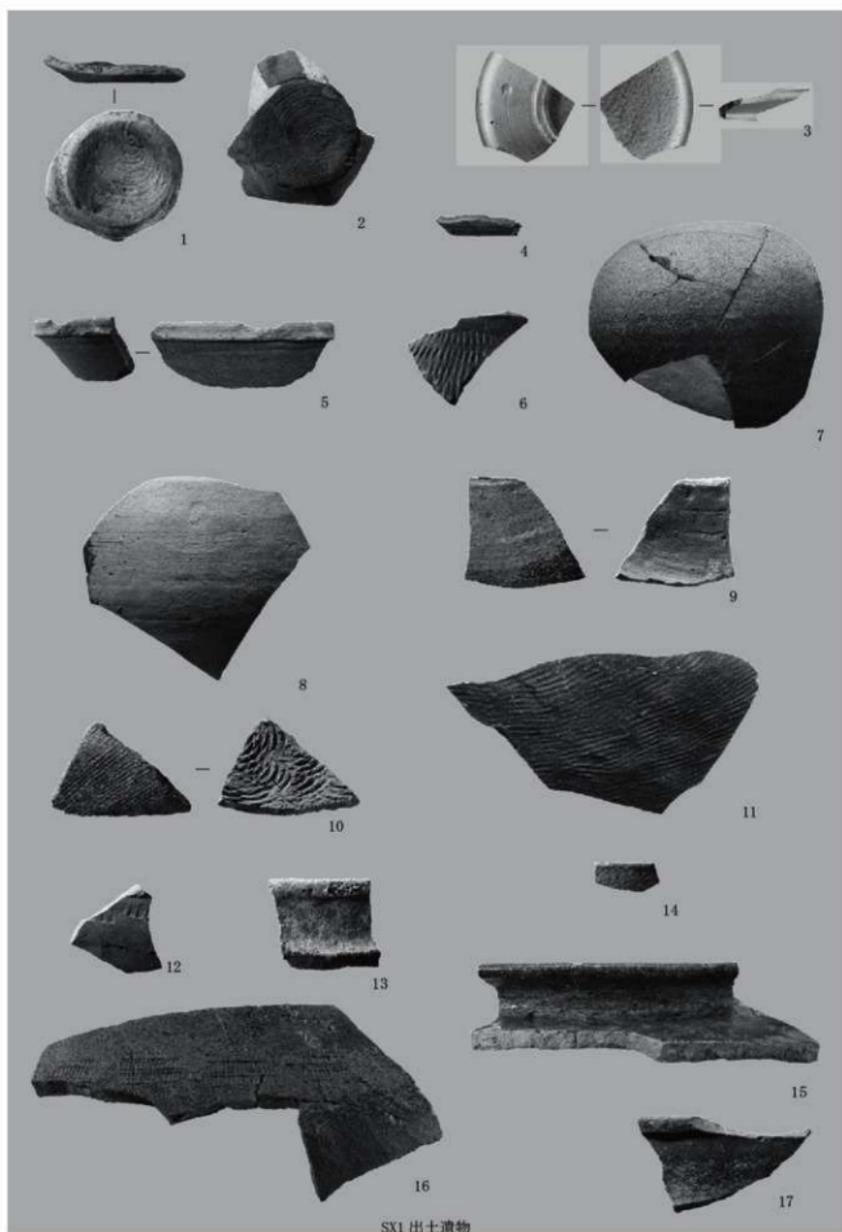


写真図版 5 洞ノ口遺跡第 23 次調査区出土遺物 (2)

★ S = 1/1

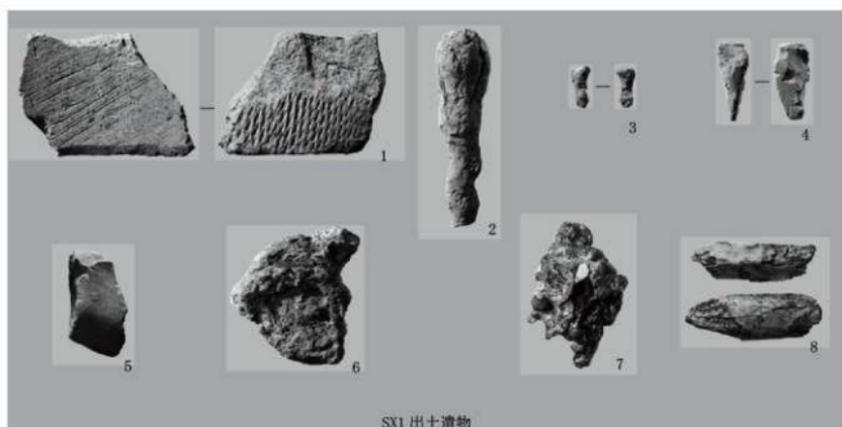


写真図版 6 洞ノ口遺跡第 23 次調査区出土遺物 (3)

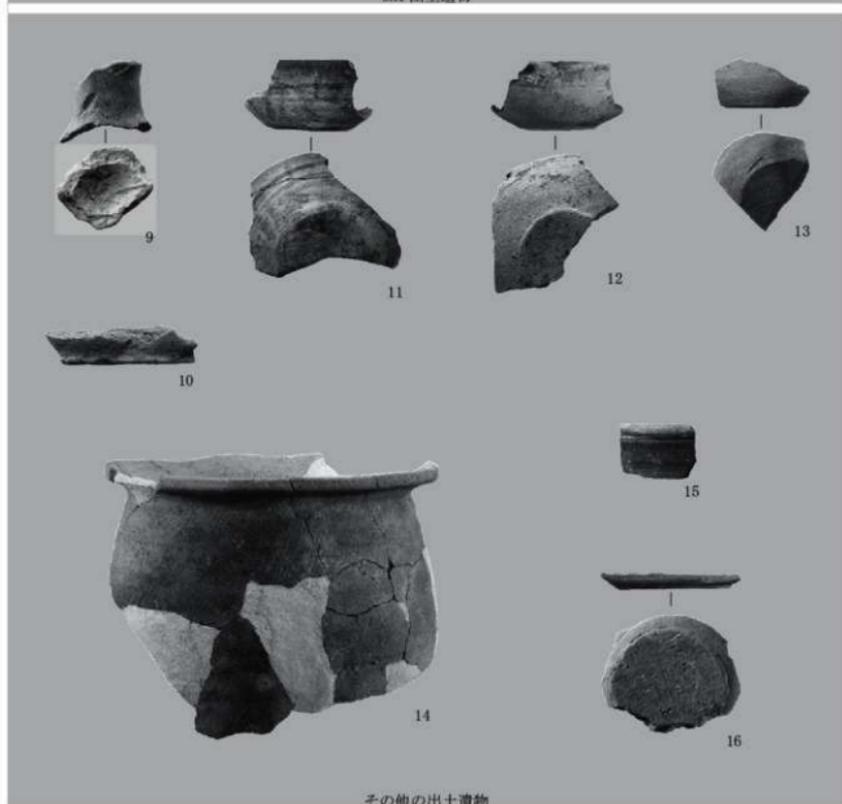


SX1 出土遺物

写真図版 7 洞ノ口遺跡第 23 次調査区出土遺物 (4)

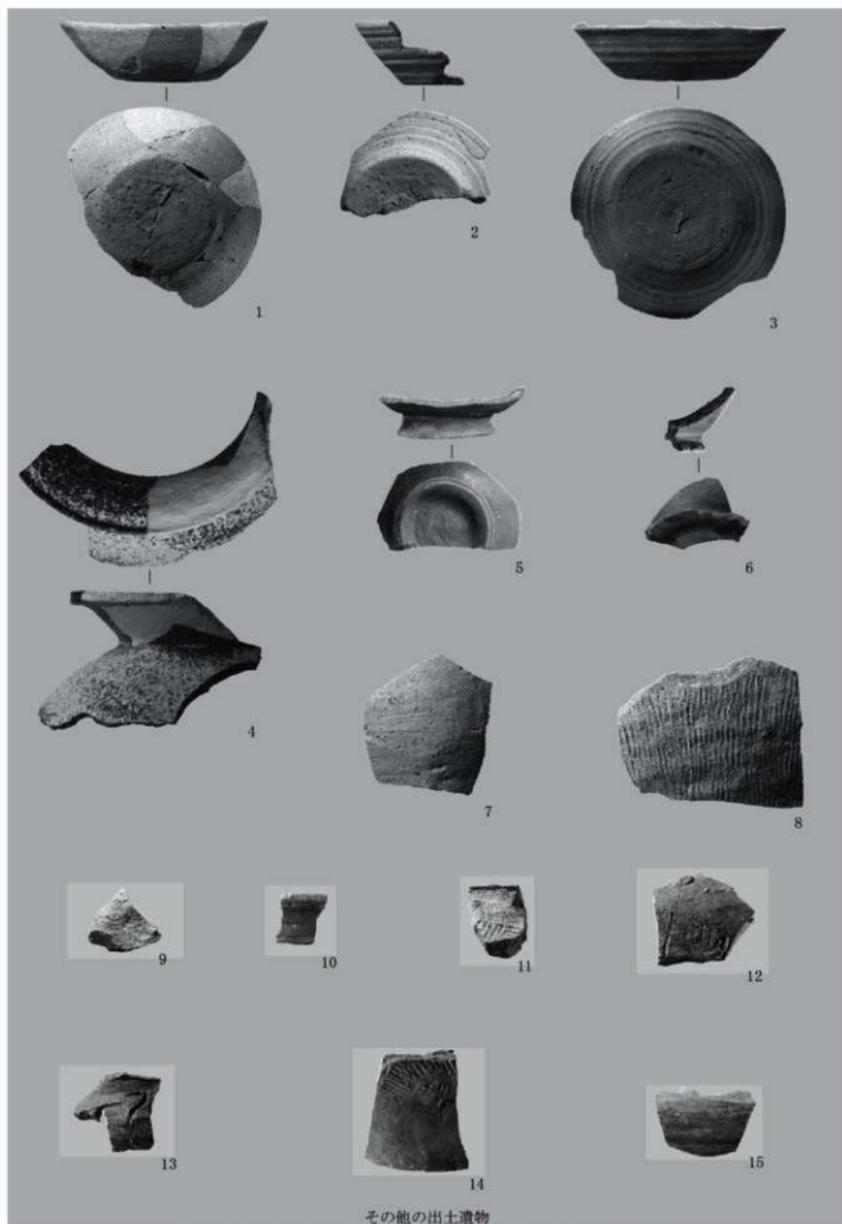


SX1 出土遺物



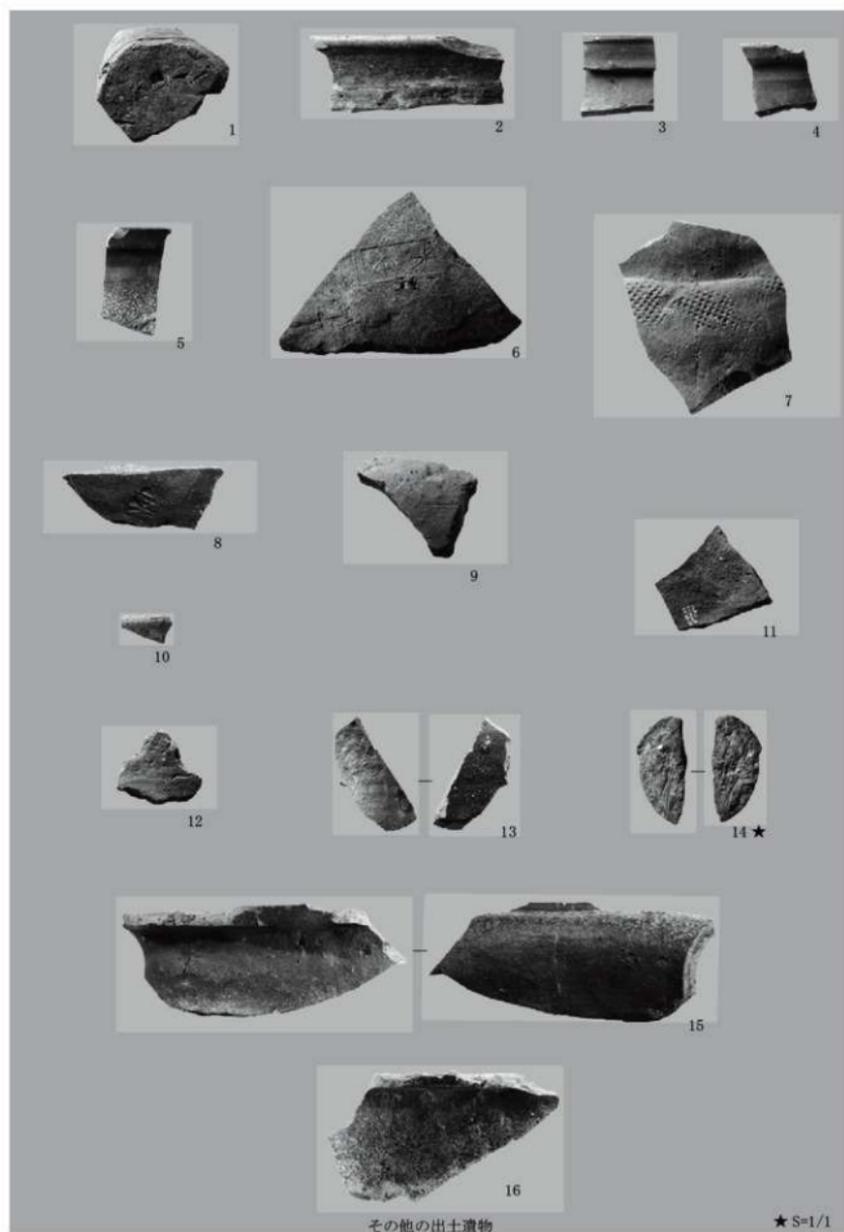
その他の出土遺物

写真図版 8 洞ノ口遺跡第 23 次調査区出土遺物 (5)



その他の出土遺物

写真図版9 洞ノ口遺跡第23次調査区出土遺物(6)



写真図版 10 洞ノ口遺跡第 23 次調査区出土遺物 (7)



写真図版 11 洞ノ口遺跡第 23 次調査区出土遺物 (8)

第2節 今市遺跡

I. 遺跡の概要

今市遺跡は仙台市宮城野区岩切字三所北に所在する。JR仙台駅から北東方向に約7.0kmに位置し、七北田川右岸の自然堤防上に立地する。現況の標高は約9.0mである。本遺跡は平成13年度に共同住宅の建設に伴い第1次調査が行われ、掘立柱建物跡や溝跡、井戸跡、土坑、柱穴が検出された。検出された遺構には屋敷地の区画に関わる溝跡もあり、出土した陶器の時期などから13～14世紀頃のものと考えられる。また、古墳時代や古代、近世の遺構・遺物が確認されている。

今市遺跡の周辺には多くの遺跡が分布している。七北田川の対岸側には磨崖仏や板碑群がある東光寺や国指定史跡の岩切城跡、洞ノ口遺跡などが存在する。今市遺跡のある岩切周辺は中世の遺構や遺物が多く確認されることから、中世における仙台平野の重要な地域であったと考えられる。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	今市遺跡	集落跡、包含地	自然堤防	古代、中世
2	洞ノ口遺跡	集落跡、城跡跡、屋敷跡、水田跡	自然堤防	古墳～近世
3	鴻ノ巣遺跡	集落跡、屋敷跡、水田跡	自然堤防	弥生～中世
4	洞ノ口板碑群	板碑	自然堤防	中世
5	岩切三所北A板碑	板碑	自然堤防	中世
6	岩切三所北B板碑	板碑	自然堤防	中世
7	化野坂城跡	城跡跡	丘陵	中世
8	羽黒前遺跡	城跡跡、宗教遺跡	丘陵	中世、近世
9	羽黒前板碑群	板碑	丘陵	中世
10	若宮前遺跡	城跡跡、信仰遺跡	丘陵	縄文、古代～近世
11	東光寺遺跡	城跡跡、石室仏、寺院跡、集落跡、板碑群	丘陵斜面	中世
12	東光寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
13	地藏堂板碑群	板碑	丘陵斜面	中世
14	東光寺板碑群	板碑	丘陵斜面	中世
15	東光寺磨崖仏群	石室仏	丘陵斜面	中世
16	新宿園遺跡	散布地	自然堤防	古代
17	岩切城跡	城跡跡	丘陵	中世

第31図 今市遺跡と周辺の遺跡

II. 第2次調査

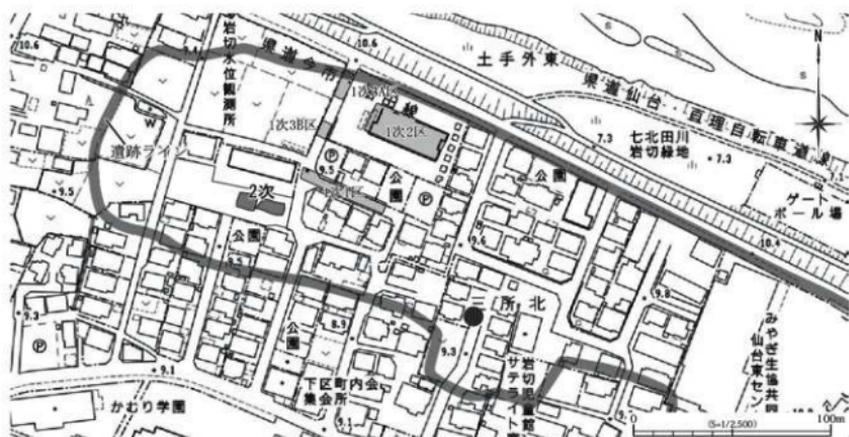
1. 調査要項

遺跡名	今市遺跡（宮城県遺跡登録番号01222）
調査地点	仙台市宮城野区岩切字三所北28-21、32-6、32-1の一部
調査期間	平成29年9月4日（月）～10月3日（火）
調査対象面積	284.89㎡
調査面積	114㎡
調査原因	集合住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事 庄子裕美 文化財教諭 大友 渉

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成29年3月8日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成29年3月21日付H28教生文第103-111号で回答）に基づき、平成29年9月4日（月）～10月3日（火）に実施した。対象地内東部に南北6m×東西11m、面積66㎡の調査区（Ⅰ区）を、対象地内西部に南北6m×東西8m、面積48㎡の調査区（Ⅱ区）を設定した。調査時の排土置き場確保のため、Ⅰ区から調査を行い、Ⅰ区の埋め戻し後にⅡ区の調査を行った。重機で盛土および基本層Ⅰ～Ⅲ層を除去し、基本層Ⅳ層上面で遺構確認作業を行った。

検出遺構の平面図・断面図はS=1/20で作製した。Ⅰ区の東壁と南壁、Ⅱ区の北壁と西壁の一部で断面図を



第32図 今市遺跡調査区位置図

S=1/20で作製した。記録写真はデジタルカメラにより撮影した。10月3日に現地での調査器材の撤収作業を行い、調査を終了した。

3. 基本層序

調査区内の盛土の厚さはI区では80～105 cm、II区では80～110 cmである。盛土より下位で基本層を5層確認した。

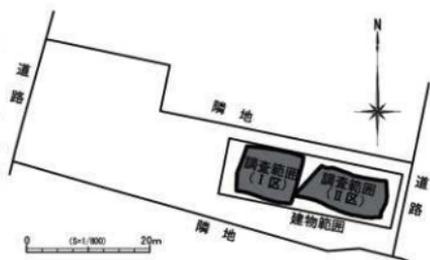
I層：2.5Y3/1 黒褐色粘土質シルト。I区でのみ確認された。層厚は6～40 cm。2.5Y5/2 暗灰黄色粘土小ブロックと砂、酸化鉄粒を少量、炭化物粒を微量に含む。盛土以前の畑地耕作土と考えられる。

II層：10YR3/2 黒褐色粘土。層厚はI区では2～25 cm、II区では11～40 cmである。2.5Y5/2 暗灰黄色粘土ブロックを少量含む。

III層：2.5Y3/2 黒褐色粘土。I区でのみ確認された。層厚は7～9 cm。炭化物粒を微量に含む。

IV層：2.5Y5/3 黄褐色粘土。砂をやや多く、酸化鉄を斑状に含む。今回の調査の遺構検出面である。

V層：2.5Y4/4 オリーブ褐色粘土。酸化鉄を少量含む。SD8 底面で検出した杭の調査時に確認された。



第33図 今市遺跡第2次調査区配置図

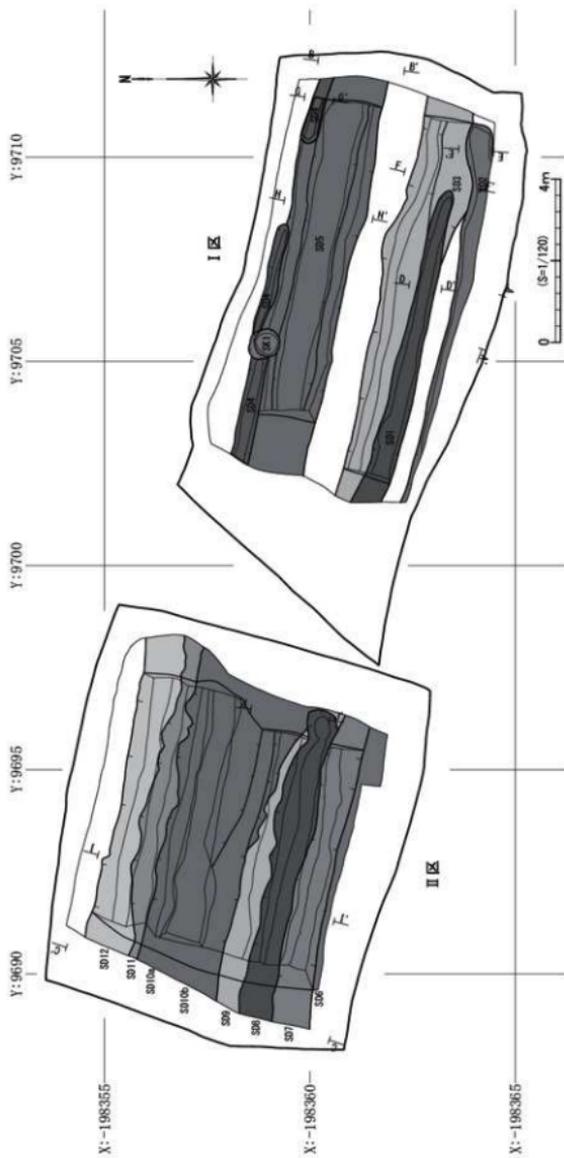
4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査ではI区では溝跡5条と井戸跡1基を、II区では溝跡7条を検出した。下端の位置と方向、堆積土の特徴などから、I区とII区で検出した溝跡が同一である可能性が考えられる。遺物は溝跡を中心に中世陶磁器や木製品、金属製品、布製品などが出土している。

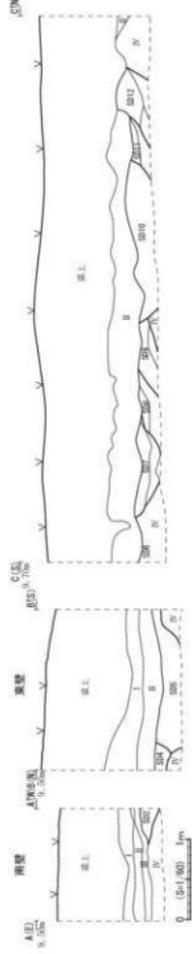
(1) 溝跡

SD1 溝跡 (SD8 溝跡)

I区、II区の調査区南部で検出された北西から南東方向の溝跡である。II区ではSD8 溝跡としたが、溝の断面



階級	色調	土質	備考・遺人類
I	2.0331.1 黒褐色	粘土質砂、腐植質粘土、ロケット、シルト	腐植質粘土、腐植質粘土少量、炭化植物生体層に含む
II	10.0332.2 黒褐色	粘土	腐植質粘土、ロケットを少量含む
III	2.0332.2 黒褐色	粘土	腐植質粘土を少量含む
IV	2.0333.3 黄褐色	粘土	砂土を多く含む、腐植質粘土を少量含む
V	2.0334.4 赤土	粘土	腐植質粘土を少量含む



第34図 今市遺跡第2次調査区平・断面図

形状と下端の方向、堆積土の特徴からSD1溝跡と同一の溝跡であると考えられる。溝跡の西側は調査区外へ延びている。SD3 (SD9) 溝跡よりも新しく、SD7溝跡より古い遺構である。検出長はI区では8.0m、II区では7.6mで、上端幅はI区では34～64cm、II区では104cm以上、下端幅は18～42cm、深さは14～34cmである。断面形状はU字形を呈する。また、SD8溝跡の底面で打ち込み杭が検出された。杭は自然木を利用し、先端部には尖状に加工がされている。堆積土は黒褐色の粘土を主体としているが、粗砂を含む層もある。堆積土中から土師器とクロロ土師器、須恵器、土師質土器、中世陶器、石製品、鉄滓、布が出土している。出土した中世陶器には古瀬戸のおろし皿(第37図1、I-33)、白石窯の鉢(第37図2、I-3)、と甕(第37図3・4・6、I-2・4・13)、常滑産の甕(第37図5、I-1)がある。第38図1(F-1)は古代の丸瓦である。第38図2(K-4)は砥石で、刃つぶし痕があり仕上げの可能性がある。写真図版16-8(R-1)は溝の堆積土の上層中から出土した布である。目の粗い布で、漆が付着している。

SD2 溝跡 (SD6 溝跡)

I区、II区の調査区の南部で検出された北西から南東方向の溝跡で、調査区外へ延びている。II区ではSD6溝跡としたが、下端の位置と方向、堆積土の特徴からSD2溝跡と同一の溝跡であると考えられる。SD3 (SD9) 溝跡よりも新しく、SD7溝跡よりも古い遺構である。遺構の大部分が調査区外にあるため、上端幅と下端幅の規模は不明である。検出長はI区では9.46m、II区では7.55mで、深さは18cm以上である。断面形状は上端がやや広がるU字形を呈する。堆積土は黒褐色と暗黄褐色粘土である。堆積土中から土師器と中世陶器、磁器、鉄滓が出土している。出土した中世陶器には常滑産の甕の体部(第38図4、I-5)がある。

SD3 溝跡 (SD9 溝跡)

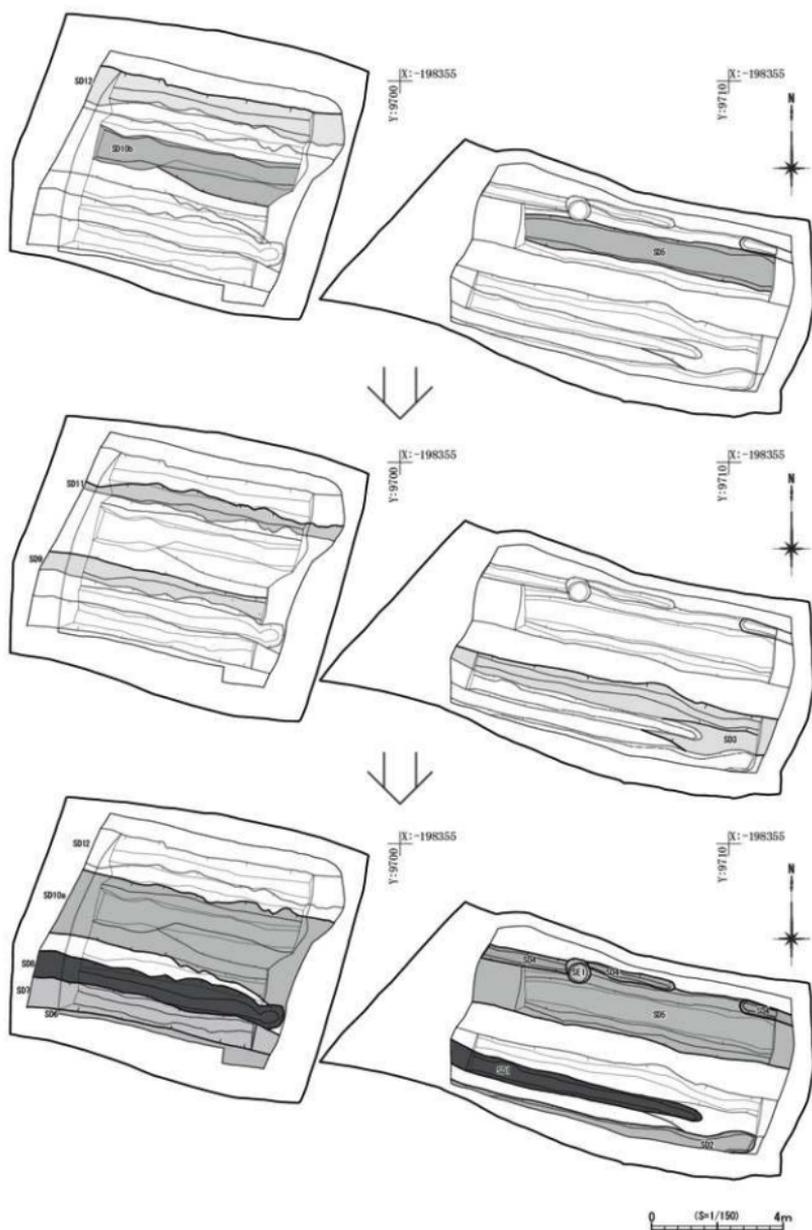
I区では調査区の南部で、II区では調査区の中央部で確認した北西から南東方向の溝跡で、調査区外へ延びている。II区ではSD9溝跡としたが、下端の方向と堆積土の特徴、断面の形状からSD3溝跡と同一の溝跡であると考えられる。SD1 (SD8) 溝跡とSD2 (SD6) 溝跡、SD10溝跡よりも古い遺構である。検出長はI区では10.4m、II区では7.1mで、上端幅は1.5m、下端幅は22～52cm、深さは43cmである。断面形状は南部では底面が平坦で、北部では南部より深くなっておりU字形を呈する。堆積土は主に灰黄褐色粘土を主体としており、粗砂が多く含まれている。堆積土中から土師器と須恵器、土師質土器、中世陶器、弥生土器、石製品、金属製品、鉄滓が出土している。中世陶器には白石窯の鉢(第38図6、I-6)がある。石製品には砥石(第38図7、K-6)と基石(第38図8、K-5)がある。

SD4 溝跡

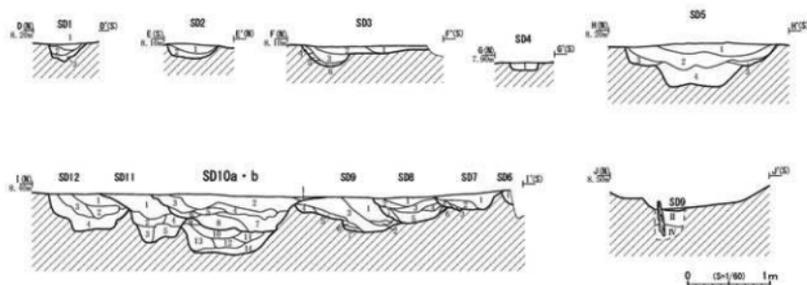
I区の北部で確認した北西から南東方向の溝跡で、調査区外へ延びている。SD5溝跡より新しく、SE1井戸跡よりも古い遺構である。一部途切れており、東側の検出長は1.8m、西側の検出長は6.0mである。上端幅は26～46cm、下端幅は11～29cm、深さは9cmである。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は単層にふい黄褐色粘土小ブロックを多く含む黒褐色粘土である。堆積土中からクロロ土師器と須恵器、中世陶器が出土している。第39図1(I-7)は渥美窯の甕の口縁部である。割れ口に漆が付着しており、補修した痕と考えられる。

SD5 溝跡 (SD10 溝跡)

I区では調査区の北部で、II区では調査区の中央部で確認した北西から南東方向の溝跡で、調査区外へ延びている。II区ではSD10溝跡としたが、溝跡の断面形状と下端の方向、堆積土の特徴からSD5溝跡と同一の溝跡である。

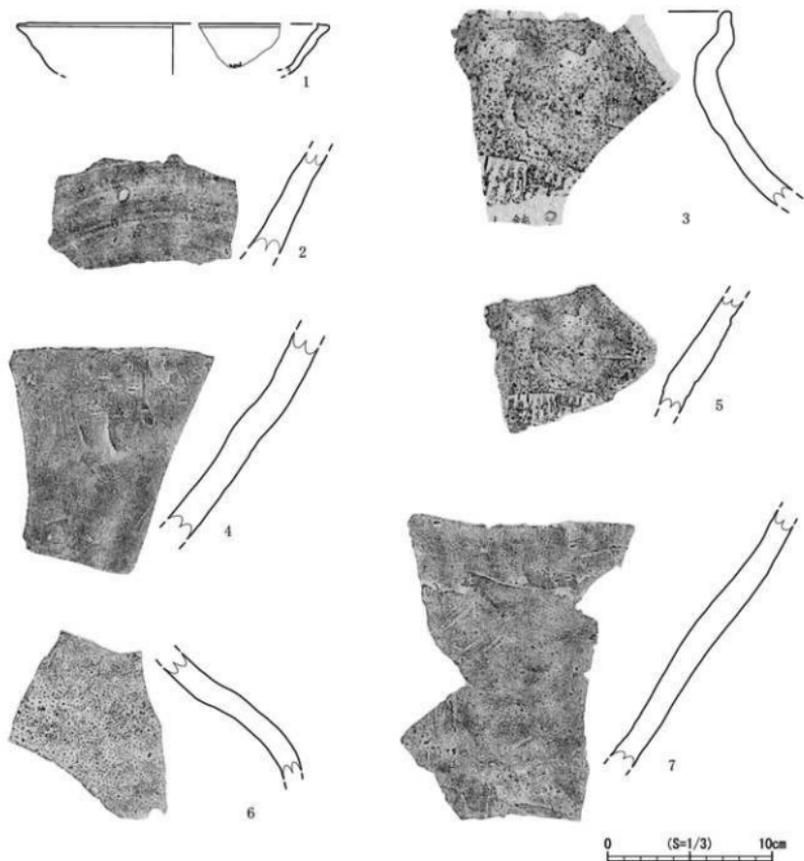


第35図 今市遺跡第2次調査区遺構変遷図



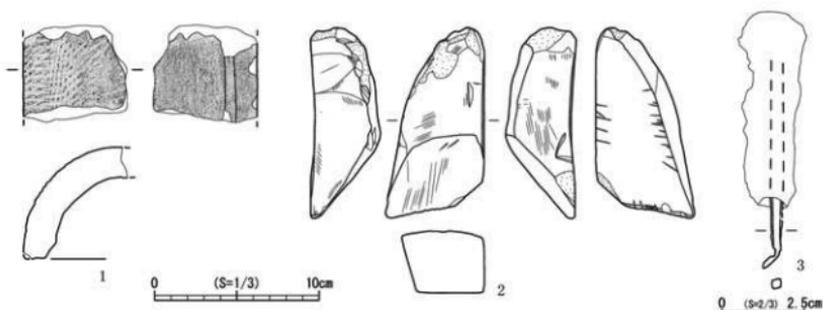
道標名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD1	1	10YR2/2 黒褐色	粘土	炭化粒を微量に含む
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土粒と砂を少量、炭化物粒を微量に含む
	3	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土粒と砂を多量に含む
SD2	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	
	2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土粒と砂をやや多量に含む
SD3	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	に広い黄褐色粘土小ブロックを多量に、砂をやや多量に含む
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土	炭化粒を微量に含む
	3	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	砂と酸化鉄粒を少量含む
	4	2.5Y4/3 オリーブ褐色	粘土	砂を多量に含む
	5	7.5Y3/1 黒褐色	粘土	
SD4	1	10YR5/2 暗灰黄色	砂	黄灰色粘土小ブロックを少量含む
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土	に広い黄褐色粘土小ブロックをやや多量に含む
SD5	1	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	酸化鉄粒をやや多量に、砂を少量、炭化物粒を微量に含む【SD5a】
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土	炭化物粒を微量に含む【SD5a】
	3	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	砂小ブロックを多量に含む【SD5a】
SD6	1	5Y2/2 オリーブ黒色	粘土	砂をやや多量に、炭化粒と植物遺体を少量含む【SD6a】
	4	10YR3/4 暗褐色	粘土	砂と酸化鉄粒をやや多量に含む
SD7	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂を多量に、炭化粒と酸化鉄粒を微量に含む
	2	10YR2/2 黒褐色	粘土	炭化粒を少量に含む
	3	10YR3/2 黒褐色	粘土	黄褐色粘土粒を多量に、炭化粒を少量含む
	4	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化粒を少量、黄褐色粘土粒を微量に含む
SD8	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂を多量に、黄褐色粘土粒を少量、炭化物粒を微量に含む
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	炭化粒をやや多量に含む
	3	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	粗砂をブロック状に、炭化粒を微量に含む
	4	2.5Y4/2 暗灰黄色	粗砂	粒子が広い砂で構成
	5	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	黄褐色粘土ブロックを少量、炭化粒を微量に含む
	6	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	黄褐色粘土粒をやや多量に含む
	7	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	炭化粒を微量に含む
SD9	1	10YR5/3 に広い黄褐色	粘土	粗砂、黄褐色粘土をブロック状と炭化物粒をやや多量に含む
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	炭化粒を微量に含む
	3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	粗砂を多量に、黄褐色粘土小ブロックと炭化粒、酸化鉄粒をやや少量含む
	4	10YR3/3 暗褐色	粘土	粗砂をやや多量に、黄褐色粘土を小ブロック状を少量、炭化粒を微量に含む
	5	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	粗砂を少量、黄褐色粘土ブロックを微量に含む
	6	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	
SD10	1	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	黄褐色砂をやや多量に、酸化鉄粒を少量含む
	2	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	砂をやや多量に、酸化鉄粒を少量、炭化粒を微量に含む【SD10a】
	3	5Y2/1 黒色	粘土	砂をやや多量に、炭化粒と炭化鉄を少量含む【SD10a】
	4	5Y3/2 オリーブ黒色	粘土	酸化鉄粒を多量に、砂をやや多量に、炭化粒を微量に含む【SD10a】
	5	5Y3/2 オリーブ黒色	粘土	酸化鉄粒を少量、炭化粒を微量に含む【SD10a】
	6	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	黄褐色粘土ブロックと砂をやや多量に、炭化粒と酸化鉄粒を少量含む【SD10a】
	7	5Y2/2 オリーブ黒色	粘土	黄褐色粘土粒と砂、酸化鉄粒を少量、炭化物粒を微量に含む【SD10a】
	8	5Y2/2 オリーブ黒色	粘土	炭化物粒を微量に、層中に米片を含む【SD10a】
	9	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	砂と炭化粒を少量含む【SD10b】
	10	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	砂をやや多量に、炭化粒と酸化鉄粒を微量に含む【SD10b】
	11	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	砂をやや多量に、灰色砂ブロックとオリーブ黒色粘土小ブロックを少量、炭化粒を微量に含む【SD10b】
	12	2.5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	灰色砂をブロック状にやや多量に、腐食物と炭化物粒を少量含む【SD10b】
	13	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	炭化鉄粒と砂、腐食物、炭化物粒を少量含む【SD10b】
	14	10Y4/1 灰色	粘土	砂を多量に、オリーブ黒色粘土ブロックをやや多量に含む【SD10b】
SD11	1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	砂と酸化鉄粒をやや多量に、炭化粒を少量含む
	2	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	黄褐色粘土小ブロックと炭化物粒を少量含む 砂がラミナ状に堆積
	3	2.5Y2/1 黒色	粘土	黄褐色粘土ブロック、腐食物を少量含む
	4	5Y4/1 灰色	粘土	砂を多量に、酸化鉄粒を少量、炭化物粒を微量に含む
	5	2.5Y5/2 暗灰黄色	砂	黄褐色粘土小ブロックと酸化鉄粒をやや多量に、炭化粒を微量に含む
SD12	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	砂を多量に、酸化鉄粒と小礫(φ 5mm)を少量含む
	2	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	酸化鉄粒を少量、炭化粒を微量に含む
	3	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	黄褐色粘土粒と砂、炭化物を少量含む
	4	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	黄褐色粘土小ブロックと砂をやや多量に、炭化物粒を少量、酸化鉄粒を微量に含む

第 36 図 SD1 ～ 12 溝跡土層断面図



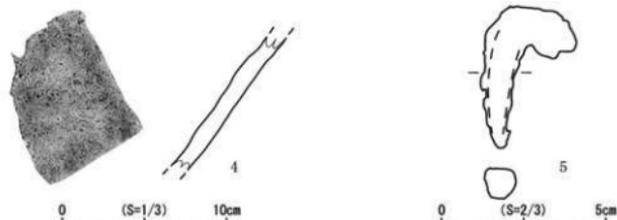
図版 番号	巻数 番号	用	種別	群種	寸法 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 図版
					口径	底径	高さ				
1	1-33	-	陶器	おろし皿	19.0	-	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	古瀬戸 14c 口唇部削落 灰釉	16-1
2	1-3	-	陶器	鉢	-	-	6.2	ロクロナデ?	ヘラナデ?	白石窯 13c 後半~14c 前半 長石含む	16-2
3	1-2	-	陶器	壺	-	-	11.9	ヨコナデ (ヘラナデ?)	ヨコナデ, ヘラナデ	白石窯 受口状口縁 13c 後半~14c 前半 長石含む	16-3
4	1-4	-	陶器	壺	-	-	12.8	ヘラナデ	ヘラナデ, 陶灰	在焼 (白石窯)	16-4
5	1-1	-	陶器	壺	-	-	7.1	すだれ状押印	ヘラナデ	常滑 中世	16-5
6	1-13	-	陶器	壺	-	-	7.7	自然釉	ヘラナデ, 粗オサユ	自然釉白石窯 長石含む	16-6
7	1-14	-	陶器	壺	-	-	15.6	ヘラナデ	ヘラナデ	白石窯 13c 後半~14c 前半 長石含む (目立つ)	16-7
-	N-1	-	布	-	-	-	-	-	-	-	16-8
-	N-5	-	鉄製品	釘か	-	-	-	-	-	写真掲載のみ	17-3
-	N-6	-	鉄製品	-	-	-	-	-	-	写真掲載のみ	17-4
-	N-23	-	鉄器	鏡形押	-	-	-	-	-	写真掲載のみ	17-5

第37図 SD1 溝跡出土遺物 (1)



図録番号	登録番号	期	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
					全長	幅	厚さ			
1	F-1	-	瓦	丸瓦	6.8	6.3	2.0		古代瓦	16-9
2	K-4	-	石製品	砥石	11.7	6.0	4.2	310.0	使用面は5面?	16-10
3	N-4	-	金属製品	鉄釘	7.9	2.1	2.0	21.0	先端屈曲 定形?	17-1
-	N-1	-	金属製品						写真掲載のみ	17-2

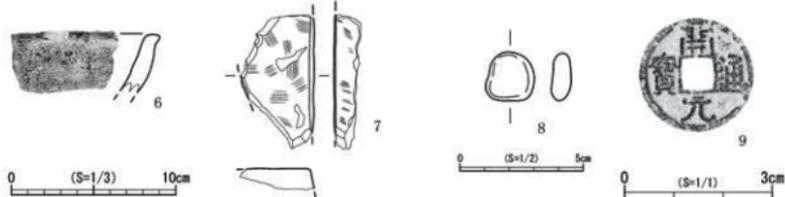
SD1 溝跡出土遺物



図録番号	登録番号	期	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
4	1-5	-	陶器	甕	-	-	8.1	ヘラナデ	ヘラナデ、指ナデ、指オサエ	常滑 中世	17-6

図録番号	登録番号	期	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
					全長	幅	厚さ			
5	N-2	-	金属製品	鉄釘か	4.3	3.0	1.2	8.0	折れ曲がる サビ付着	17-7

SD2 (SD6) 溝跡出土遺物



図録番号	登録番号	期	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
6	I-6	-	陶器	鉢	-	-	3.6	ヨコナデ	ヨコナデ、降反	白石皿 13c後半~14c前半 長石含む	17-8

図録番号	登録番号	期	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
					全長	幅	厚さ			
7	K-6	-	石製品	砥石	8.2	4.5	1.7	70.0	2面使用 欠損品	17-9
8	K-5	-	石製品	磨石?	2.0	2.0	0.9		自然石か 白石	17-10
-	N-7	-	鉄製品	釘か	-	-	-	-	写真掲載のみ	17-13

図録番号	登録番号	期	種別	器名	法量 (cm・g)		時代	初録年	書体	備考	写真図版
					縦径	重量					
9	N-10	-	古銭	開元通宝	2.3	1.8	唐	621年	隷書	背面のみ	17-11
-	N-20	-	動洋							写真掲載のみ	17-12

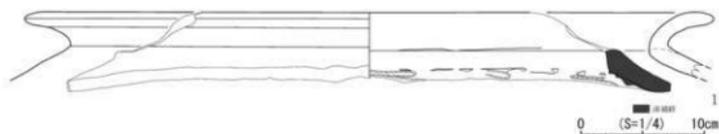
SD3 溝跡出土遺物

第38図 SD1・2・3 溝跡出土遺物

と考えられる。また、I区の調査時にI期の溝跡と考えていたが、II区でII期の溝跡であることが堆積状況から判明した。そのため、SD5溝跡について再検討を行ったところ、1層から3層までと4層とに分かれることが確認された。ただし、I区での調査時では、SD5溝跡出土遺物は一括して取り上げている。SD4溝跡とSE1井戸跡よりも古い遺構である。また、II区ではSD9溝跡とSD11溝跡とそれぞれ重複関係があり、SD10b→SD11→SD10a、SD9→SD10aという変遷が確認された。SD5aの検出長はI区では9.90m、II区では7.84mで、上端幅は176～296cm、下端幅は112～154cm、深さは44cmである。断面形は上端が緩やかに広がるU字形を呈する。堆積土は黒褐色土を主体としており、II区のSD10a溝跡の下層部では木製品や木片が出土している。SD5b（SD10b）溝跡の検出長はI区では9.90m、II区では7.84mで、上端幅はSD5a（SD10a）溝跡に削平されて不明である。下端幅は30～86cm、深さは72cmである。断面形は逆台形状で、堆積土はオリブ黒色土を主体としており、植物遺体が含まれている腐植層もある。堆積土中から土師器と須恵器、土師質土器、中世陶器、磁器、羽羽、金属製品、鉄滓、炉壁片、木製品が出土している。中世陶器には常滑産の壺（第39図5・6、I-8・16）と渥美や常滑産の甕（第39図8～10、I-15・10・17）、渥美窯の小型壺（第39図7、I-11）、白石窯の鉢（第39図4、I-9）がある。磁器は碗（写真図版19-14、J-11）と盤もしくは鉢（写真図版19-13、J-6）が出土している。ともに龍泉窯の青磁で、年代は13～14世紀であると考えられる。第39図11（T-1）は土師質土器の皿である。ロクロ成形後、内面に指ナゲが施されている。木製品は漆器の小皿や下駄の歯、板草履などが出土している。第40図4（L-1）は黒漆が全面に塗られた小皿の破片である。内面には赤漆で松枝、鶴羽、首、脚の文様がある。第40図5（L-2）は板目材のヘラ状木製品である。洞ノ口遺跡第1次調査で類似する木製品が2点出土しており（L-71、L-124）、しゃもじとして報告されている。L-2もしゃもじの可能性が考えられる。柄の先端部は磨滅している。第41図1（L-3）は木錘である。芯持ち材で、中央部分が加工され細くなっている。第41図2・3・7（L-6～8）は下駄の歯である。樹種は全てケヤキである。第41図6（L-11）は角材状の不明木製品である。上端部と下端部に鋸で切断した痕を確認した。角材の縁辺は面取りされており、成品として使用されていたものを鋸で切断し、溝跡に廃棄したものと考えられる。第41図5（L-12）は曲げ物の底板で板目材である。第41図4（L-14）は薄い板状の木製品で三角状の挟りがあり、板草履の破片である。樹種はモミ属である。写真図版19-8（L-5）もL-14と同じ樹種、形状であることから、板草履の可能性が考えられる。

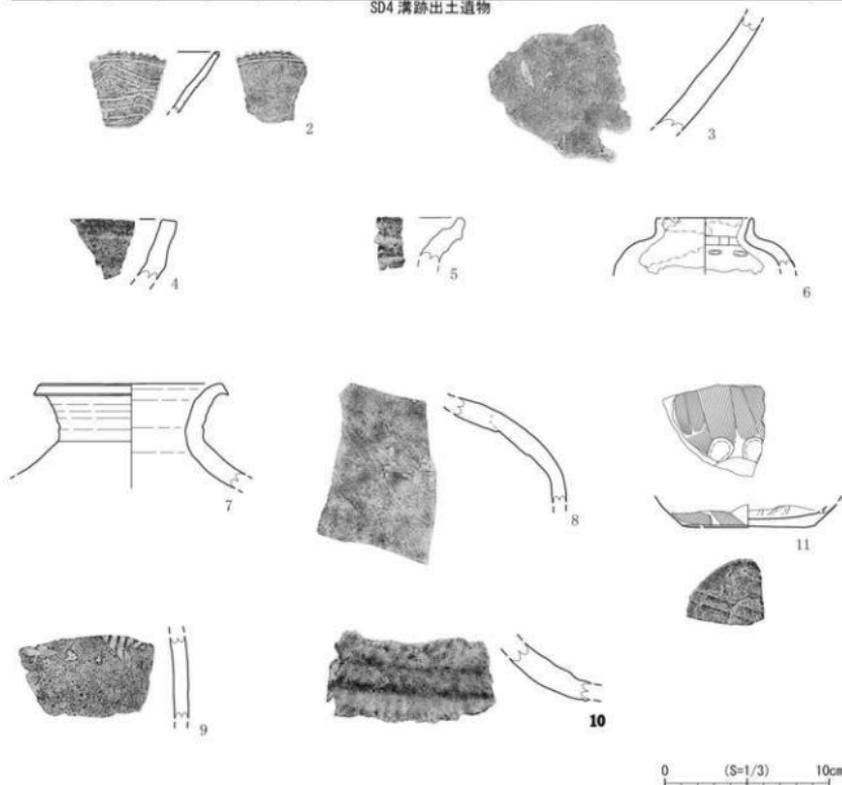
SD7 溝跡

II区の南部で確認した北西から南東方向の溝跡で、調査区外へ延びている。SD6（SD2）溝跡とSD8溝跡よりも新しい遺構である。検出長は7.6mで、上端幅は65～93cm、下端幅は26～42cmである。深さは21cmである。断面形はU字形を呈する。堆積土は4層に分層された。黒褐色粘土を主体としている。堆積土中から土師器と中世陶器、磁器、鉄製品が出土している。中世陶器は常滑産の甕の口縁部の破片（第41図8、I-12）と茶入れの体部破片（第41図9、I-36）が出土している。I-36は非常に薄く、鉄釉で施釉されており、瀬戸・美濃の製品と考えられる。茶入れの時期は16世紀代と考えられる。常滑産の甕の口唇部は上方につまみ出され、受け口状になっており、13世紀前半の時期のものと考えられる。溝跡の上層では銭通しに通された銭貨が束になった状態で出土している（第42図～第46図16、N-12～19）。銭貨は全て中国銭で、3～20枚が密着して束になった緋銭の状態です。出土した銭貨の総数は59枚である。出土した最も古い銭貨は開元通宝（初鑄年：621年）、最も新しい銭貨は嘉定通宝（初鑄年：1208年）である。孔には銭を通した紐が残存しており、囊と思われる植物を利用している。



図版番号	登録番号	層	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	1-7	SD4	陶器	甕	(56.0)	-	(6.3)	ナデ、指オサエ	ナデ、指オサエ	調査 12c 後半～末 (1～2期) 軸 (自然軸?) 内面と割れ口に漆黒輝灰あり (灰色の漆)	17-14

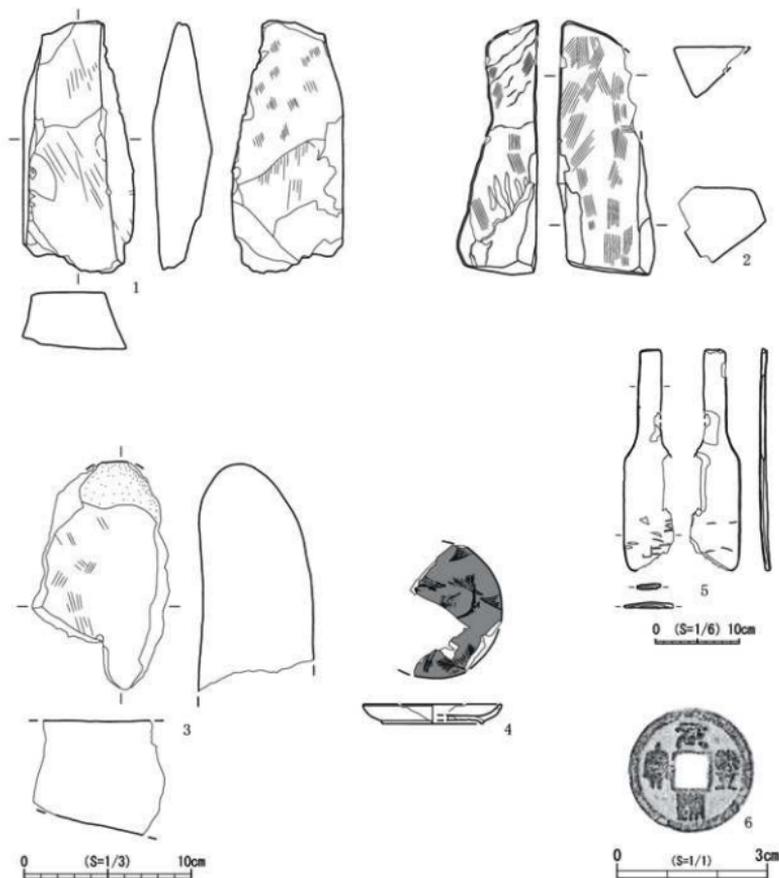
SD4 溝跡出土遺物



図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
				口径	底径	器高				
2	B-1	弥生土器	鉢	-	-	3.7	沈線文、磨治縄文 (黒か)	沈線文、ミガキ	口唇部に刻目文	17-15
3	E-1	瀬古土器	甕	-	-	7.0	ヘラナデ?	ヘラナデ?	割れ口部分を守っている 転用磁石?	17-16
4	1-9	陶器	鉢	-	-	3.7	ロクロナデか	ロクロナデか	白石塗 13c 後半～14c 前半	17-17
5	1-8	陶器	甕か	-	-	2.8	ヨコナデ	ヨコナデ	常滑 12c 末～13c 初?	17-18
6	1-16	陶器	底口甕 (15.8)	-	-	3.4	ナデ (横位)、自然軸	ヘラナデ (横位)、指オサエ	常滑 13c	18-1
7	1-11	陶器	甕 (10.8)	-	-	(6.4)	ロクロナデ、尻輪ハケ塗りか	ロクロナデ	調査 12c 後半 小型甕 (尻輪部) 軸 (ハケ塗り?)	18-2
8	1-15	陶器	甕?	-	-	6.5	ヘラナデ、捺印	ヘラナデ? 指ナデ、指オサエ	調査 12c 代	18-3
9	1-10	陶器	甕	-	-	5.0	ヘラナデ、押印	ヘラナデ、指オサエ	中世	18-4
10	1-17	陶器	甕	-	-	4.2	自然軸	常滑	中世 外面に自然軸	18-5
11	T-1	土師質土器	甕	-	-	7.1	ロクロナデ、ヘラナデ?	指ナデ、取っ柄 底面に凹輪 漆塗り、板状圧痕 (字のこぼ)	骨針 (少) 中世 (13c～14c か)	18-6

SD5 溝跡出土遺物

第39図 SD4・5 溝跡出土遺物

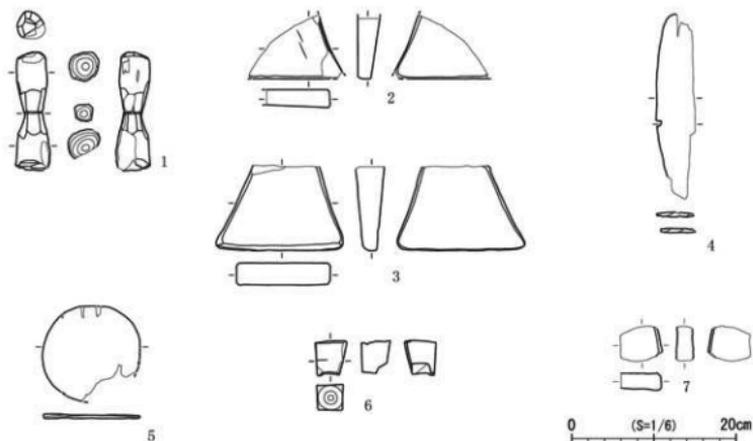


図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
				全長	幅	厚さ			
1	K-1	石製品	砥石	15.2	6.7	3.9	450.0		18-7
2	K-2	石製品	砥石	15.3	5.3	4.8	385.0	磨り面2面	18-8
3	K-8	石製品	磨石	13.8	8.2	6.9	950.0	大きく欠損 不定形 自然の縞を使用	18-9
5	L-2	木製品	ヘラ状木製品	26.6	5.9	0.65		板目材 シャもじマ	18-13
-	K-3	石製品	磨石?	-	-	-			18-10
-	L-9	木製品	用途不明品	300	10	18			19-5
-	L-10	木製品	板	(62.7)	400	300			19-6
-	N-21	鉄片							19-11

図版番号	登録番号	層	種別	器種	法量 (cm)		外面調整	内面調整	備考	写真図版	
					口徑	底徑					
4	L-1	-	木製品	漆器 (小皿)	8.3	-	(1.2)	-	-	『漆絵と埴輪文庫』黒色漆 木取り・半炭材 (芯は底面側) スタンプ文か	18-12
-	J-6	-	漆器	盤小鉢	-	-	-	-	-	青磁 13~14c 龍泉原系 折縁 写真のみ	19-13

図版番号	登録番号	層	種別	銭名	法量 (cm・g)		時代	初録年	書体	備考	写真図版
					直径	重量					
6	N-11	-	古銭	元龜通宝	2.5	2.8	北宋	1078年	篆書		19-10

第40図 SD5溝跡出土遺物(2)

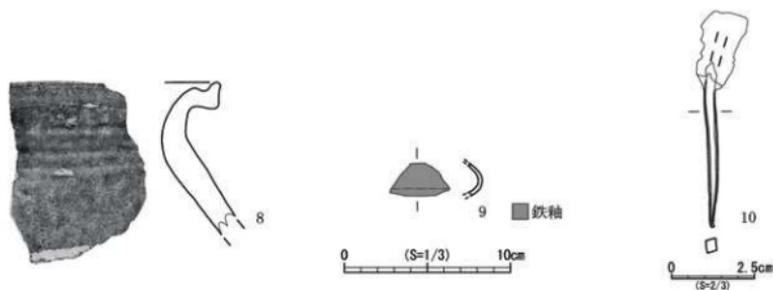


図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
				全長	幅	厚さ		
1	1-3	木製品	木刺	15	2.2 × 4.0	3.5	芯持ち材	18-14
2	1-7	木製品	下駄	高さ 7.8	11.3	2.7	下駄の歯	18-15
3	1-6	木製品	下駄	高さ 9.9	15.5	3.6	下駄の歯 (削) 歯の底面の片方がならだかに丸く削られている	18-16
4	1-14	木製品	板草履	22.6	4.7	0.52		19-1
5	1-12	木製品	歯物 (底板)	11.7	11.7	0.55	板素材	19-2
6	1-11	木製品	不明	高さ 4.3	3.8	3.5	小口面で2回切断 (のこぎり?) 木取り 芯持ち材	19-3
7	1-8	木製品	下駄	4.3	5.1	2.1	下駄の歯	19-4
--	1-4	木製品	--	--	--	--	写真掲載のみ	19-7
--	1-5	木製品	--	--	--	--	写真掲載のみ	19-8
--	1-13	木製品	--	--	--	--	写真掲載のみ	19-9

図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
				全長	幅	厚さ			
--	K-7	石製品	--	--	--	--	--	写真掲載のみ	18-11
--	N-22	鉄片	--	--	--	--	--	写真掲載のみ	19-12

図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
				口径	底径	高さ				
--	J-11	磁器	碗	--	--	--	--	--	龍泉窯系 中国青磁 無文 13~14c	19-14

SD5 溝跡出土遺物

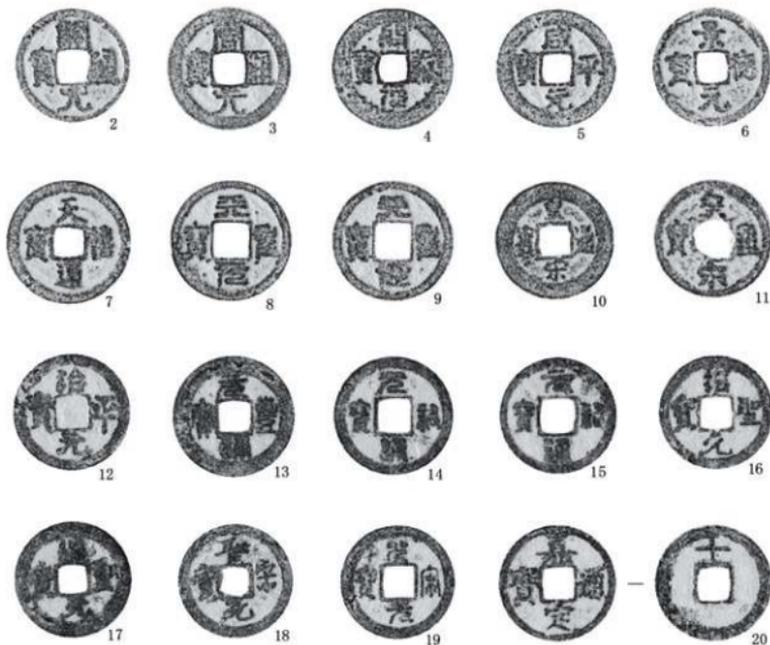
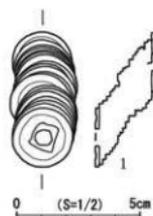


図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
				口径	底径	高さ				
8	1-12	陶器	碗	--	--	(9.1)	自然釉?	ロコナデ、胆ナデ?	常滑 口縁部片 13c 前半?	19-15
9	1-36	陶器	茶入れ	--	--	(2.0)	輪軸 (鉄軸)	一部鉄軸たれる。ロコロナデ	瀬戸・美濃? 体部片 16c?	19-16

図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
				全長	幅	厚さ			
10	N-3	鉄製品	釘	6.5	1.6	1.2	6.8	定形?	19-17

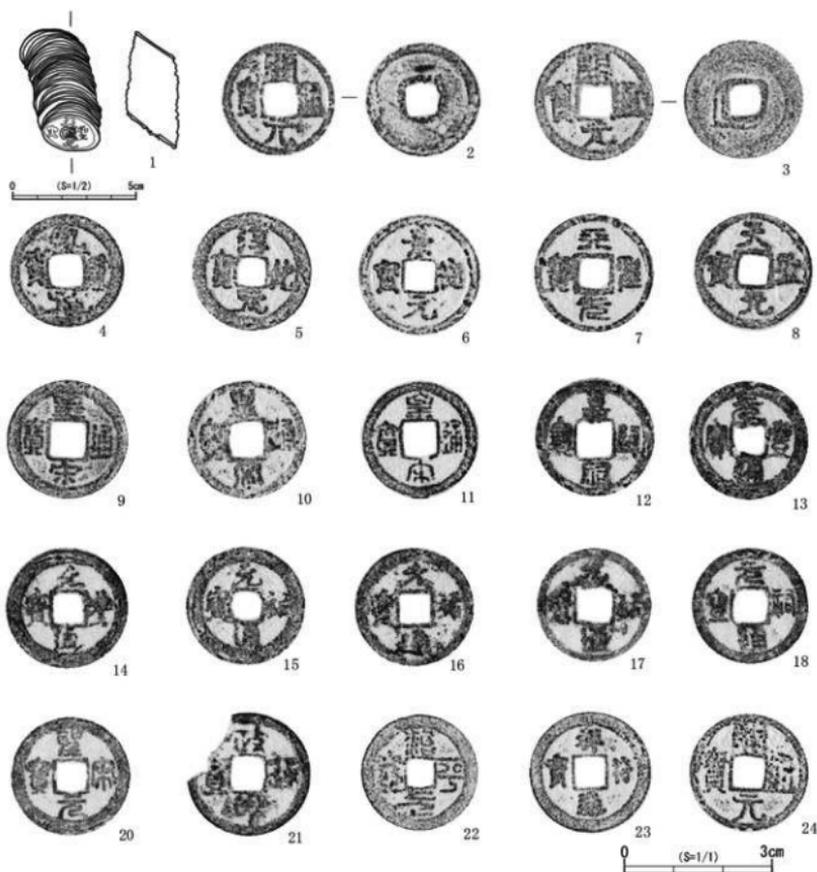
SD7 溝跡出土遺物

第41図 SD5 (3)・7 溝跡出土遺物



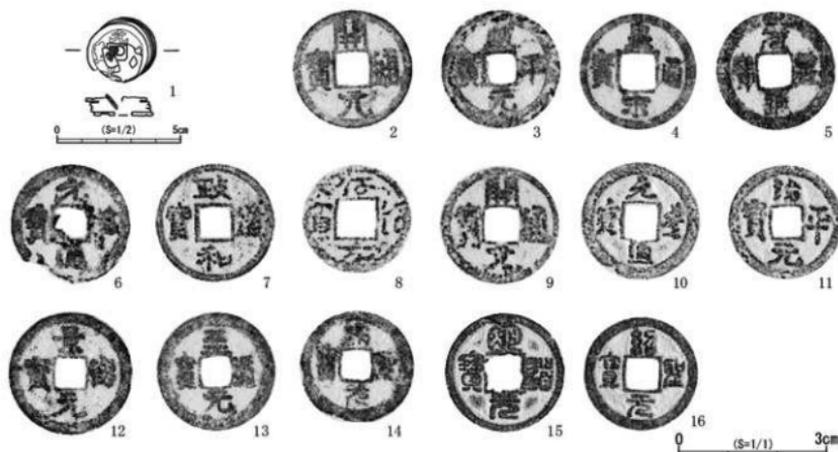
図版番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm・g)			備考	写真図版	図版番号	登録番号	種別	銘名	法量 (cm・g)	時代	初録年	書体	備考	写真図版					
				変長	幅	厚さ													重量 (g)				
1	N-12	金属製品	古銭	5.5	2.7	2.4	65.7	19枚	孔に紐(銅銭の一部)	中世								16-5-1					
2	N-12-1	古銭	開元通宝	2.3	2.4			唐	621年	隸書	背郭不明瞭	20-1	12	N-12-11	古銭	治平元宝	2.3	3.6	北宋	1064年	行書		20-11
3	N-12-2	古銭	興通元宝	2.5	3.2			後周	955年	隸書?	背左「月」?	20-2	13	N-12-12	古銭	元豊通宝	2.4	3.9	北宋	1078年	篆書		20-12
4	N-12-3	古銭	開元通宝	2.4	3.2			南唐	960年	篆書	後の開元通宝とは異なる	20-3	14	N-12-13	古銭	元祐通宝	2.4	4.0	北宋	1086年	篆書		20-13
5	N-12-4	古銭	咸平元宝	2.4	2.9			北宋	996年	行書	背郭不明瞭	20-4	15	N-12-14	古銭	元祐通宝	2.3	3.5	北宋	1086年	篆書		20-14
6	N-12-5	古銭	景祐元宝	2.4	2.6			北宋	1004年	行書	背郭不明瞭	20-5	16	N-12-15	古銭	紹聖元宝	2.3	4.0	北宋	1094年	行書	星形孔	20-15
7	N-12-6	古銭	天禧通宝	2.5	3.5			北宋	1017年	行書	背郭不明瞭	20-6	17	N-12-16	古銭	紹聖元宝	2.3	3.5	北宋	1094年	行書		20-16
8	N-12-7	古銭	天聖元宝	2.4	3.4			北宋	1023年	篆書		20-7	18	N-12-17	古銭	聖宋元宝	2.3	3.8	北宋	1101年	行書	背郭不明瞭 孔にズレあり	20-17
9	N-12-8	古銭	天聖元宝	2.4	3.6			北宋	1023年	篆書	背郭不明瞭	20-8	19	N-12-18	古銭	聖宋元宝	2.3	3.1	北宋	1101年	行書		20-18
10	N-12-9	古銭	皇宋通宝	2.4	2.8			北宋	1038年	行書	背郭不明瞭 星形孔	20-9	20	N-12-19	古銭	嘉定通宝	2.3	3.4	南宋	1208年	行書	背左「十」	20-19
11	N-12-10	古銭	皇宋通宝	2.4	2.9			北宋	1038年	行書	背郭不明瞭 五角形孔	20-10	-	N-12-20	紐	銅紐	-	-	-	-	-	銅銭の紐 (ワック材)	20-20

第42図 SD7 (2) 溝跡出土遺物



図版番号	登録番号	種別	時期	法量 (cm・g)			備考	写真図版											
				全長	幅	重量 (g)													
1	N-12	金属製品	古銭	5.0	2.7	69.1	20枚、孔に紐(ワラ材)残存 銅銭の一部 最初の一枚目天聖元宝(寶) 北宋銭か	16-5-2											
図版番号	登録番号	種別	銭名	法量 (cm・g) 直径 重量	時代	初周年	書体	備考	写真図版番号	種別	銭名	法量 (cm・g) 直径 重量	時代	初周年	書体	備考	写真図版		
2	N-13-1	古銭	開元通宝	2.3 2.3	唐	621年	隷書	背上月・星形孔	21-1	14	N-13-13	古銭	元豊通宝	2.4 3.7	北宋	1078年	行書	背郭あり	21-13
3	N-13-2	古銭	開元通宝	2.4 3.1	唐	621年	隷書	背郭部「風」に重覆	21-2	15	N-13-14	古銭	元祐通宝	2.3 3.3	北宋	1086年	行書	背郭不明瞭	21-14
4	N-13-3	古銭	乾元元宝	2.3 2.9	唐	756年	隷書?	縁縁(輪の幅が広い)	21-3	16	N-13-15	古銭	元祐通宝	2.4 4.0	北宋	1086年	行書	背郭不明瞭	21-15
5	N-13-4	古銭	淳化元宝	2.4 3.2	北宋	960年	行書		21-4	17	N-13-16	古銭	元祐通宝	2.3 3.3	北宋	1086年	行書	背郭の孔にズレ	21-16
6	N-13-5	古銭	景德元宝	2.5 3.6	北宋	1004年	行書		21-5	18	N-13-17	古銭	元祐通宝	2.3 2.7	北宋	1086年	行書	背郭重覆か	21-17
7	N-13-6	古銭	天聖元宝	2.4 3.8	北宋	1023年	篆書		21-6	19	N-13-18	古銭	聖宋元宝	2.4 2.6	北宋	1101年	篆書	銅紐(ワラ)残存	21-18
8	N-13-7	古銭	天聖元宝	2.4 3.6	北宋	1023年	行書		21-7	20	N-13-19	古銭	聖宋元宝	2.4 2.9	北宋	1101年	篆書	星形孔	21-19
9	N-13-8	古銭	皇宋通宝	2.4 2.6	北宋	1036年	行書	背郭不明瞭	21-8	21	N-13-20	古銭	政和通宝	2.4 2.0	北宋	1111年	篆書	背郭不明瞭 一部欠損	21-20
10	N-13-9	古銭	皇宋通宝	2.4 3.9	北宋	1036年	篆書		21-9	-	N-13-21	銅紐	-	-	-	-	-	銅紐の紐ワラ材	21-21
11	N-13-10	古銭	皇宋通宝	2.4 2.0	北宋	1036年	篆書	背郭不明瞭	21-10	22	N-14-1	古銭	治平元宝	2.4 3.4	北宋	1064年	篆書		22-1
12	N-13-11	古銭	嘉祐通宝	2.4 3.2	北宋	1056年	篆書	ヒビ入る	21-11	23	N-14-2	古銭	祥符通宝	2.4 3.9	北宋	1008年	行書		22-2
13	N-13-12	古銭	元豊通宝	2.4 3.4	北宋	1078年	篆書	背郭あり	21-12	24	N-14-3	古銭	開元通宝	2.4 3.1	唐	621年	隷書	背郭あり	22-3

第43図 SD7 (3) 溝跡出土遺物



図録番号	種類	器種(銀名)	法量 (cm)			重量 (g)	備考		写真図録
			全長	幅	厚さ				
1	N-15	古銭	銅銭	2.6	2.8	0.7	17.5	上: 元祐通宝? 下: 皇宋通宝 5枚因着している。孔に紐一部欠損(1枚目)	-

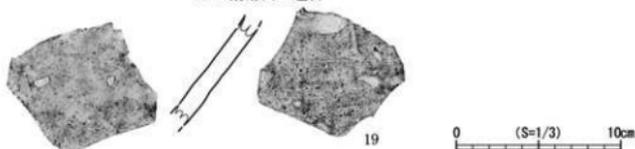
図録番号	器種番号	種類	銀名	法量 (cm・g)	時代	初録年	書体	備考	写真図録番号	種類	銀名	法量 (cm・g)	時代	初録年	書体	備考	写真図録		
2	N-15-1	古銭	開元通宝	2.4 3.3	唐	621年	隷書		22-4	10	N-16-4	古銭	元豊通宝	2.4 3.3	北宋	1078年	行書	一部欠損 背郭あり	22-12
3	N-15-2	古銭	咸平元宝	2.4 2.9	北宋	989年	行書		22-5	11	N-16-5	古銭	治平元宝	2.4 3.5	北宋	1064年	行書		22-13
4	N-15-3	古銭	皇宋通宝	2.4 3.3	北宋	1038年	行書	背郭不明瞭	22-6	12	N-17-1	古銭	景祐元宝	2.5 3.6	北宋	1004年	行書		22-14
5	N-15-4	古銭	元豊通宝	2.4 3.9	北宋	1078年	篆書	背郭不明瞭	22-7	13	N-17-2	古銭	至道元宝	2.4 2.9	北宋	995年	行書		22-15
6	N-15-5	古銭	元祐通宝	2.4 3.3	北宋	1086年	行書	一部欠損	22-8	14	N-17-3	古銭	紹聖元宝?	2.3 3.3	北宋	1094年	篆書	縁辺に加工あり	22-16
7	N-16-1	古銭	政和通宝	2.4 2.9	北宋	1111年	隷書		22-9	15	N-18	古銭	明道元宝	2.4 3.2	北宋	1032年	篆書	星形孔あり	22-17
8	N-16-2	古銭	□□元宝?	2.2 1.5	?	?	草書?	淳化元宝(990年?) 広郭	22-10	16	N-19	古銭	順聖元宝	2.3 2.6	北宋	1094年	篆書		22-18
9	N-16-3	古銭	開元通宝	2.4 2.4	唐	621年	隷書	背郭不明瞭 ヒビあり	22-11										

SD7 溝跡出土遺物



図録番号	器種番号	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考		写真図録		
				口径	底径	高さ						
17	1-19	陶器	壺	-	-	(6.7)		ヘラナダ	ヘラナダ、胎ナシ	常滑 中壺 (13c?) 縁輪あり	22-19	
18	T-2	土師質土器?	壺	-	-	(1.8) (2.2)		体部: ロクロナダ	底面: 回転痕あり	骨針(少) 中壺 大型品か?	23-1	
-	1-18	陶器	壺?	-	-	-		-	-	常滑焼 中壺 修復痕あり(布+黒漆)	写真掲載のみ	22-20

SD11 溝跡出土遺物



図録番号	器種番号	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考		写真図録	
				口径	底径	高さ					
19	1-20	陶器	壺	-	-	(6.5)		ヘラナダ	ヘラナダ	常滑 中壺	23-3

SD12 溝跡出土遺物

第44図 SD7(4)・11・12 溝跡出土遺物

SD11 溝跡

II区の北部で確認した北西から南東方向の溝跡で、調査区外へ延びている。SD10b (SD5b) 溝跡とSD12 溝跡よりも新しく、SD10a (SD5a) 溝跡よりも古い遺構である。検出長は8.0mで、上端幅は68cm以上、下端幅は26～38cm、深さは58cmである。断面形は不整形なU字形を呈する。堆積土は5層に分層された。堆積土中から土師器と須恵器、中世陶器、土師質土器、鉄滓、炉壁が出土している。中世陶器には常滑産の甕の肩部破片(第44図17、I-19)がある。内面と割れ口に漆が付着しており、補修の痕跡と考えられる。写真図版22-20(I-18)は常滑産の甕で、漆と布が付着しており、補修の痕跡と考えられる。

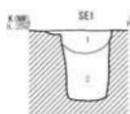
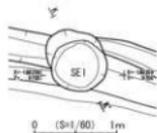
SD12 溝跡

II区の北部で確認した北西から南東方向の溝跡で、調査区外へ延びている。SD11 溝跡よりも古い遺構である。検出長は7.72mで、上端幅は124cm以上、下端幅は30～46cm、深さは46cmである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に分層された。堆積土中から土師器と須恵器、土師質土器、中世陶器、鉄滓が出土している。第44図19(I-20)は常滑産の甕の体部の破片である。

(2) 井戸跡

SE1 井戸跡

I区の北西部で検出した。SD4 溝跡とSD5 溝跡よりも新しい遺構である。平面形は楕円形で、長軸が82cm、短軸が73cmである。深さは86cmで、底面からほぼ垂直に壁が立ち上がっている。また北西壁には段が付いている。底面は平坦である。堆積土は2層に分層された。黒褐色粘土を主体としている。断面形状と堆積状況から井戸跡と判断された。堆積土中から土師器片と木製品が出土している。第46図(I-15)1は曲物の側板である。

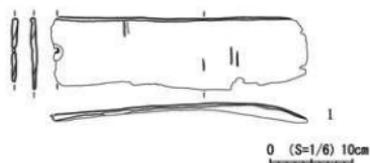


層位	色調	土質	備考・遺人物
1	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土小ブロックと砂をやや多量に、炭化物粒を少量含む
2	7.5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	黄褐色粘土小ブロック・砂を多量に、炭化粒と酸化鉄粒、砂を少量含む

第45図 SE1 井戸跡平・断面図

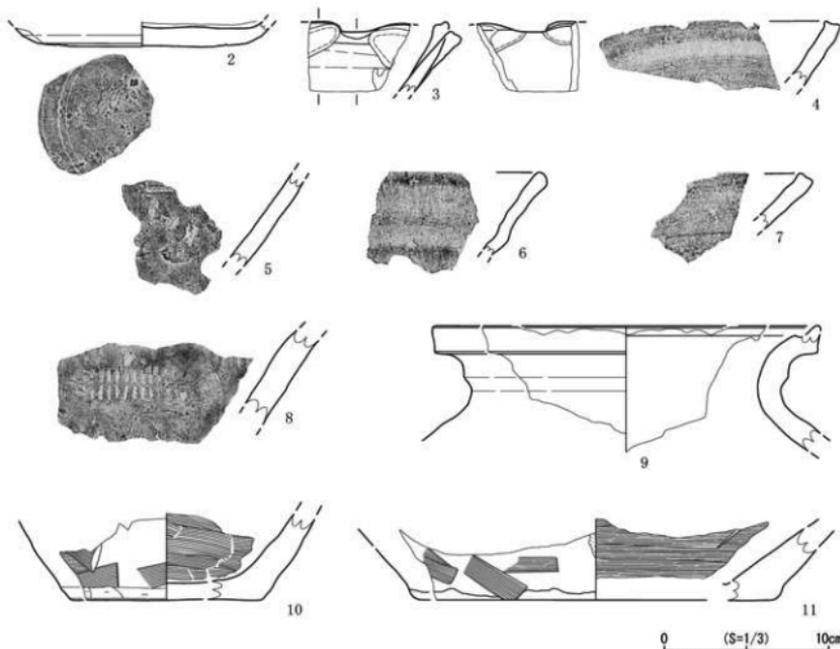
(3) その他の出土遺物

今回の調査では遺構確認作業中に多くの遺物が出土している。図化したのは陶器12点、土師質土器3点、石製品1点、丸瓦1点、平瓦1点である。第46図2(I-37)は灰軸の深皿の破片で、瀬戸美濃産の可能性があり、時期は16世紀のものと考えられる。第46図3・6(I-22・31)は片口鉢の破片である。I-22は在地産で13～14世紀のもの、I-31は常滑産で12世紀後半のものと考えられる。第46図4・7(I-28・29)は鉢の口縁部の破片である。共に在地産で13～14世紀のものと考えられる。第46図5・9～11、第47図1・2(I-21・23～27・30)は甕の破片である。I-21は口縁部の破片で、口縁部の一部と頸部の外面に自然釉がみられる。八郎窯の可能性があり、13世紀前半のものと考えられる。I-23とI-25は甕の破片で、白土窯のものである。I-25の外面には麁状の押印がある。ともに13世紀後半から14世紀前半のものと考えられる。第47図3～5(T-3・4・6)は土師質土器の皿の破片である。このうち、T-4とT-6の見込部分には指ナゲの痕跡が確認できる。第47図7(F-2)は丸瓦の破片である。凸面には平行叩き、凹面には布目痕がある。第47図6(G-1)は平瓦の破片である。凸面には縄叩き目、凹面には布目痕がある。F-2とG-1はともに古代の瓦で、F-2は多賀城II、III期以降のものと考えられる。II区の遺構確認の際に、壁土(X-3・4)が出土しており、写真図版24-18・19に掲載した。スサは確認されなかったが、



図録番号	発掘番号	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真図版
				全長	幅	厚さ		
1	1-15	木製品	舟物(板)	8.8	31.3	0.7	板目材	23-4

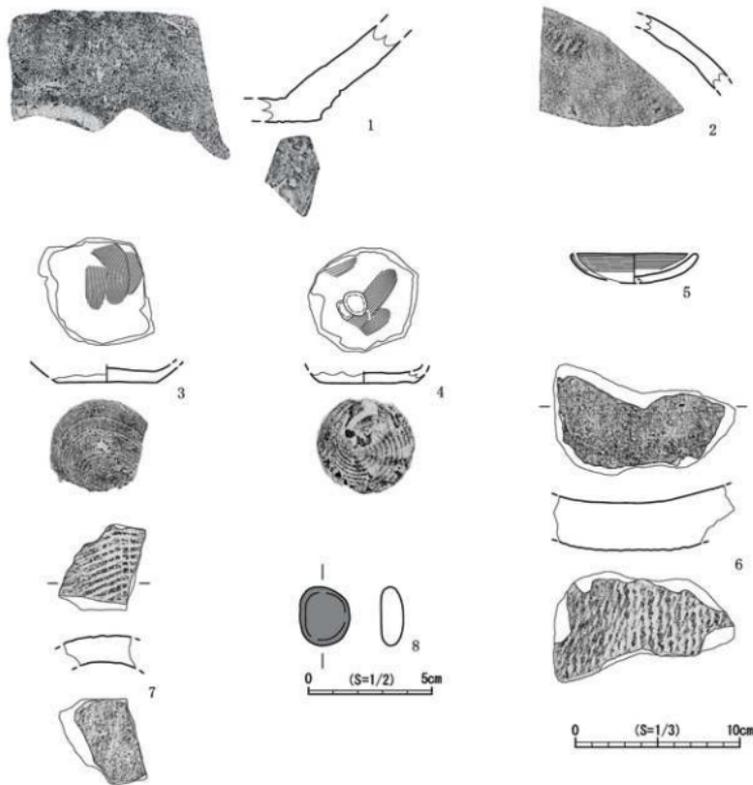
SE1 井戸跡出土遺物



図録番号	発掘番号	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
				口径	底径	器高				
2	1-37	陶器	深皿?	-	12.6	1.5	ロクロナダ、灰輪	ロクロナダ、灰輪 底面: 凹輪 ヘラ切り	瀬戸・美濃? 15c? 灰輪深底?	23-5
3	1-22	陶器	鉢	-	-	(4.2)	ロクロナダのち指おさえ?	ロクロナダ、指おさえ?	在塘 13~14c 片口(注ぎ口)	23-6
4	1-28	陶器	鉢	-	-	4.0	ロクロナダ	ロクロナダ	在塘 13c~14c 雲母含む 焼成不良 1-29と類似	23-7
5	1-24	陶器	壺	-	-	5.7	ヘラナダ	ヘラナダ	産地不明 中世 押印 須恵器系? 還元状皿	23-8
6	1-31	陶器	片口鉢	-	-	5.0	ロクロナダ	ロクロナダ	常滑? 12c 後半? 丸頭状 山形陶器系	23-9
7	1-29	陶器	鉢	-	-	3.8	ロクロナダ、磨耗	ロクロナダ、磨耗、割傷	在塘 13c~14c 雲母含む 焼成不良 1-28と類似	23-10
8	1-25	陶器	壺	-	-	5.8	ヘラナダ、すだれ状押印	ヘラナダ	白石黒 13c 後半~14c 前半 長石含む	23-11
9	1-21	陶器	壺?	(23.4)	-	(7.7)	ヨコナダ	ヨコナダ、ヘラナダ	在塘 (八郎窯?) 13c 鉄分ふき出しあり	23-12
10	1-26	陶器	壺?	-	11.5	5.3	ヘラナダ、ヘラケズリ	指ナダ 底面: ヘラナダ	産地不明 12c? 須恵器系陶器? 還元	23-13
11	1-27	陶器	壺	-	21.3	5.0	ヘラナダ	ヘラナダ	在塘 13c~14c	24-1

遺構確認面出土遺物

第46図 SE1 井戸跡、その他の出土遺物



図録番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)		外面調整	内面調整	備考	写真図版
				口径	底径				
1	1-23	陶器	甕	-	6.1	ヘラナデ	ヘラナデ、指ナデ	白石窯 長石含む 13c後半～14c前半	24-2
2	1-30	陶器	甕か壺	-	4.5	軸、押印(平行線状)	ヘラナデ、指オサエ		24-3
3	T-4	土師質土器	甕	-	6.1 (1.1)	体部:ロクロナデ 底部:回転糸切り	(見込)指ナデ	中世 明色胎含む	24-6
4	T-6	土師質土器	小皿?	-	(0.7)	ロクロナデ	ロクロナデ、指頭痕 底面:指ナデ	骨針(多) 回転糸切り	24-7
5	T-3	土師質土器	小瓶 (7.6)	-	1.8	口縁部ヨコナデ	口縁部:ヨコナデ 見込:指ナデ	13c? 手づくねか・丸底 骨針(少)	24-8
-	T-32	陶器	甕	-	-	-	-	写真掲載のみ	24-4
-	1-34	陶器	おろし盆	-	2.0	無軸(鉄軸)	一部鉄軸たれている、ロクロナデ	古瀬戸? 14c? 写真掲載のみ	24-5
-	J-7	磁器	碗	-	-	-	-	青磁 14c? 無文 写真掲載のみ	24-14
-	J-8	磁器	碗	-	-	-	-	青磁 13～14c 文様あり(不明) 写真掲載のみ	24-15
-	T-5	土師質土器	-	-	-	-	-	手づくね 丸底の可能性あり 写真掲載のみ	24-9

図録番号	登録番号	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
				全長	幅	厚さ			
6	G-1	瓦	平瓦	6.8	11.0	3.1	-	古代	21-10
7	F-2	瓦	丸瓦	5.3	5.3	1.7	-	古代	24-11
8	K-9	石製品	砥石?	2.4	2.0	0.9	-	自然石? 黒石	24-12
-	K-10	石製品	不明	-	-	-	-	写真掲載のみ	24-13
-	N-8	金属製品	不明	-	-	-	-	写真掲載のみ	24-16
-	X-2	磁器	-	-	-	-	-	磁器の一部か、窯の礎土? 写真掲載のみ	24-17
-	X-3	礎土	-	-	-	-	-	写真掲載のみ	24-18
-	X-4	礎土	-	-	-	-	-	スズは確認できず 窯の礎か中の礎 写真掲載のみ	24-19

第47図 その他の出土遺物(2)

家が戸の壁土の破片と考えられる。

5. まとめ

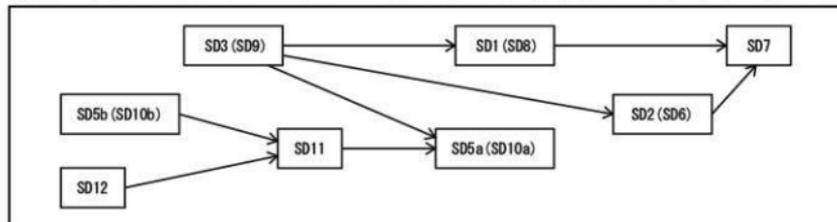
今回の調査地点は、今市遺跡の西部に位置する。本調査区の北東側では平成13年度にマンション建設に伴う調査（第1次調査）が行われており、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝跡、土坑、井戸跡が検出された。出土した遺物から古墳時代と古代、中世、近世の時期に該当することが確認された。溝跡のなかには幅6m以上、深さが140cmの規模のものが検出されており、屋敷地の区画溝と考えられる。この溝跡から出土した遺物は13～14世紀頃である。

今回の調査ではI区で溝跡5条と井戸跡1基が、II区で溝跡7条が検出された。II区はI区の西側5mの位置にあり、遺構検出面の標高はI区では約8.0m、II区では約8.3mであり、I区の方が0.3m程低く、I区はII区よりも遺構面の上面が削平されており、検出状況が良くない。今回検出された溝跡の変遷は第48図の通りである。

今回検出したSD5（SD10）溝跡はSD11溝跡との新旧関係と堆積土の状況からSD5a（SD10a）溝跡とSD5b（SD10b）溝跡の2時期あったことが確認された。またSD5b溝跡の規模はSD5a溝跡で削平されているため幅については不明であるが、深さは72cmある。その規模は第1次調査で確認された中規模の溝跡（SD12溝跡とSD25溝跡）とほぼ同じである。また、第1次調査で検出されたSD12溝跡の方向は北西から南西方向で、今回検出したSD5a溝跡とSD5b溝跡とはほぼ同一方向である。今後の周辺の調査成果を待ったうえで検討は必要であるが、SD5aとSD5b溝跡については屋敷地の区画に関わる溝跡であることが推測される。SD5a溝跡からは12～13世紀の時期の中世陶器の破片が出土していることから、中世の時期の溝跡で13世紀以降の時期に相当すると考えられる。この溝跡からは中世陶器のほか、漆器の皿やしゃもじと考えられる木製品、服飾具（板草履や下駄）、編み具（木錘）、羽口や鉄滓、砥石など鍛冶に関わる道具等、様々な遺物が出土している。このうち、漆器小皿（L-1）は松の枝と鶴が赤漆で描かれた黒漆の小皿である。内面の文様は印判施文であり、文様も「松喰鶴文」で、中世の鎌倉で出土する漆器の特徴を有している。印判施文と思われる中世の漆器は、市内では中在家南遺跡第1次調査河川跡出土漆器皿（L-493）が（仙台市教育委員会 1996）、県内では松島町瑞巖寺境内遺跡の22～25層出土漆器碗や皿（瑞巖寺 2009）、高清水町（現：栗原市）観音沢遺跡竪穴遺構出土漆器碗（第80図-1）がある（宮城県教育委員会 1980）。

今回の調査で検出した溝跡の時期については、SD1溝跡と、SD2溝跡から14世紀、SD5a溝跡から13世紀後半から14世紀前半、SD7溝跡から16世紀の時期の遺物が出土しており、近世の遺物が出土していないことから、これらの溝跡はおおむね13世紀後半から16世紀の遺構と推定される。

弘安八年（1285年）の『留守家広談状』から宮城郡に冠屋市場と河原宿五日市場が存在していたことが知られている。このうち河原宿五日市場については、「岩切の若宮前周辺および七北田川南岸の三所北・三所南と今市の間を含む地」（仙台市史編さん室 2000）であったと推定されている。第1次調査では、調査結果から遺構の時期

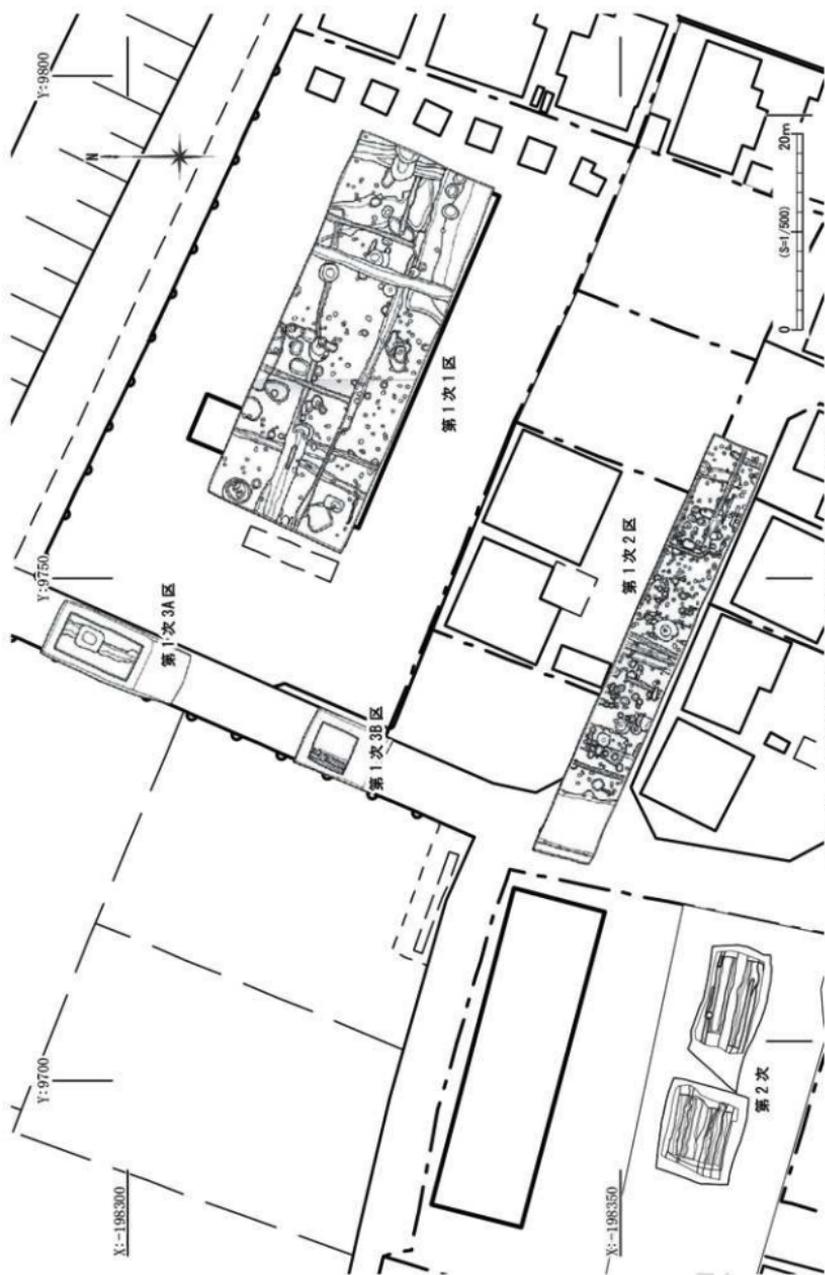


第48図 今市遺跡第2次調査検出遺構変遷模式図

は留守氏の書状に記載されている時期の遺構と遺物は確認されているものの、遺構の密度や構成と遺物の種類と量の点から市場としては貧弱な点が指摘されている。今回の調査では、検出された遺構が溝跡と井戸跡のみであるため、遺構の構成の点からは市場の所在地については不明である。しかし、出土した遺物をみても、在地や東海産の中世陶器や中国産の磁器のほか、鍛冶に関わる遺物や服飾具などの木製品など中世の生活の様相がうかがえる、多くの種類が見られる。また SD7 溝跡では紐を通した緞銭の状態で中国銭が出土しており、貨幣流通を行っていた場所であったことがうかがえる。中世の遺物の種類や貨幣の出土状況などから、本調査区周辺に市場が存在していた可能性は高いと考えられる。中世の市場の所在地については、今後周辺地域の調査の結果に期待したい。

引用・参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学』海青社
- 入間田 宣夫・大石 直正編 1992 『みちのくの都 多賀城・松島 よみがえる中世7』
(宗教法人)瑞巖寺 2009 『瑞巖寺境内遺跡』
- 仙台市教育委員会 1994 『仙台市中田南遺跡 ―古代・中世の集落跡の調査―』
仙台市文化財調査報告書第 182 集
- 仙台市教育委員会 1996 『中在家南遺跡他 ―仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第 213 集
- 仙台市教育委員会 2002 『今市遺跡 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 260 集
- 仙台市教育委員会 2005 『洞ノ口遺跡 ―第1次・2次・4次・5次・7次・10次発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第 281 集
- 仙台市史編さん室 2000 『仙台市史通史編2 古代中世』
- 田原市博物館 2013 『渥美窯 ―国宝を生んだその美と技―』
- 宮城県教育委員会 1980 「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 72 集



第49図 今市遺跡第1・2次調査区検出遺構合成図



1. I区遺構完掘状況（東から）



2. II区調査区全景（西から）



1. I区遺構検出状況（東から）



2. II区遺構検出状況（西から）



3. I区調査区南壁断面（北から）



4. I区調査区東壁断面（西から）



5. II区調査区西壁断面（東から）



6. I区SD 1溝跡断面（西から）



7. I区SD 2溝跡断面（東から）



8. I区SD 3溝跡断面（西から）



1. I区 SD5a・b 溝跡断面 (西から)



2. II区溝跡断面 (北西から)



3. II区 SD5a・b(SD10a・b)・11 溝跡断面 (西から)



4. II区 SD1(SD8) 溝跡布製品出土状況 (北から)



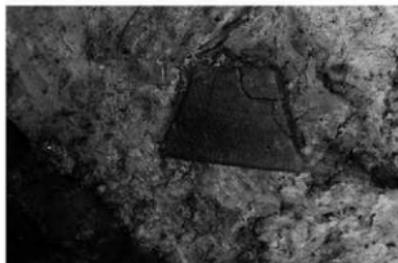
5. II区 SD7 溝跡銭貨出土状況 (西から)



6. I区 SD5 溝跡木製品出土状況 (東から)



7. II区 SD5b(SD10b) 溝跡陶器出土状況 (南から)



8. II区 SD5b(SD10b) 溝跡木製品出土状況 (西から)



1. II区 SD5a (SD10a) 溝跡木製品出土状況(西から)



2. II区 SD2 (SD8) 溝跡杭検出状況(東から)



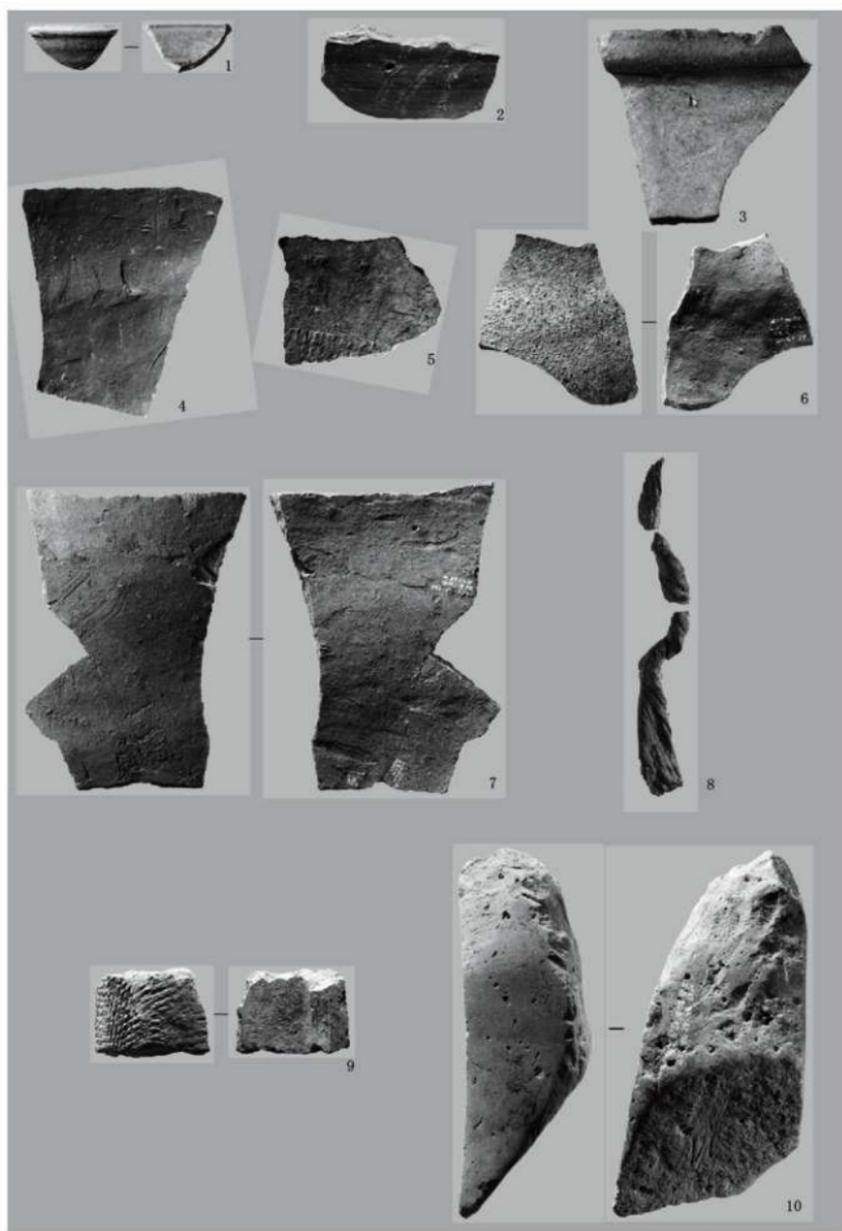
3. I区 SE1 井戸跡検出状況(北から)



4. I区 SE1 井戸跡完掘状況(南から)



5. SD7 溝跡出土緋銭



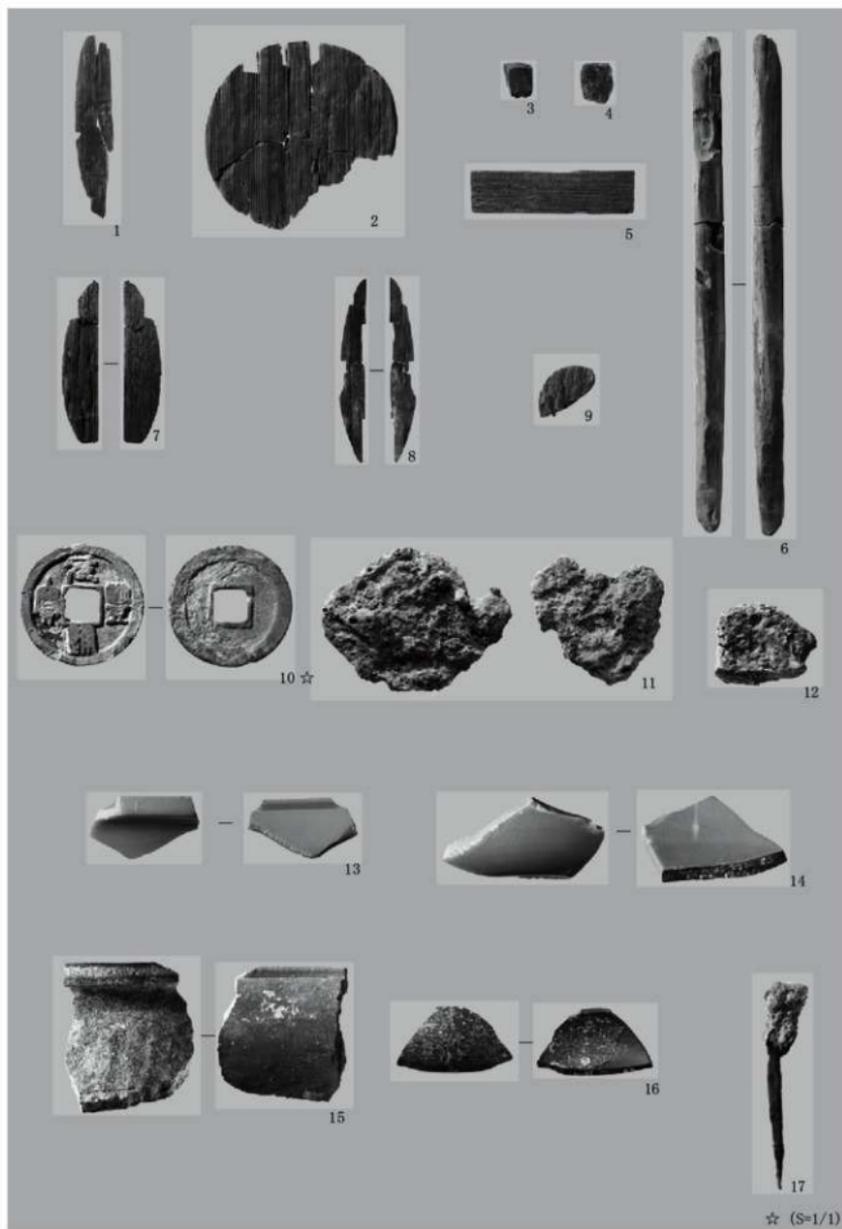
写真図版 16 今市遺跡第2次調査出土遺物(2)



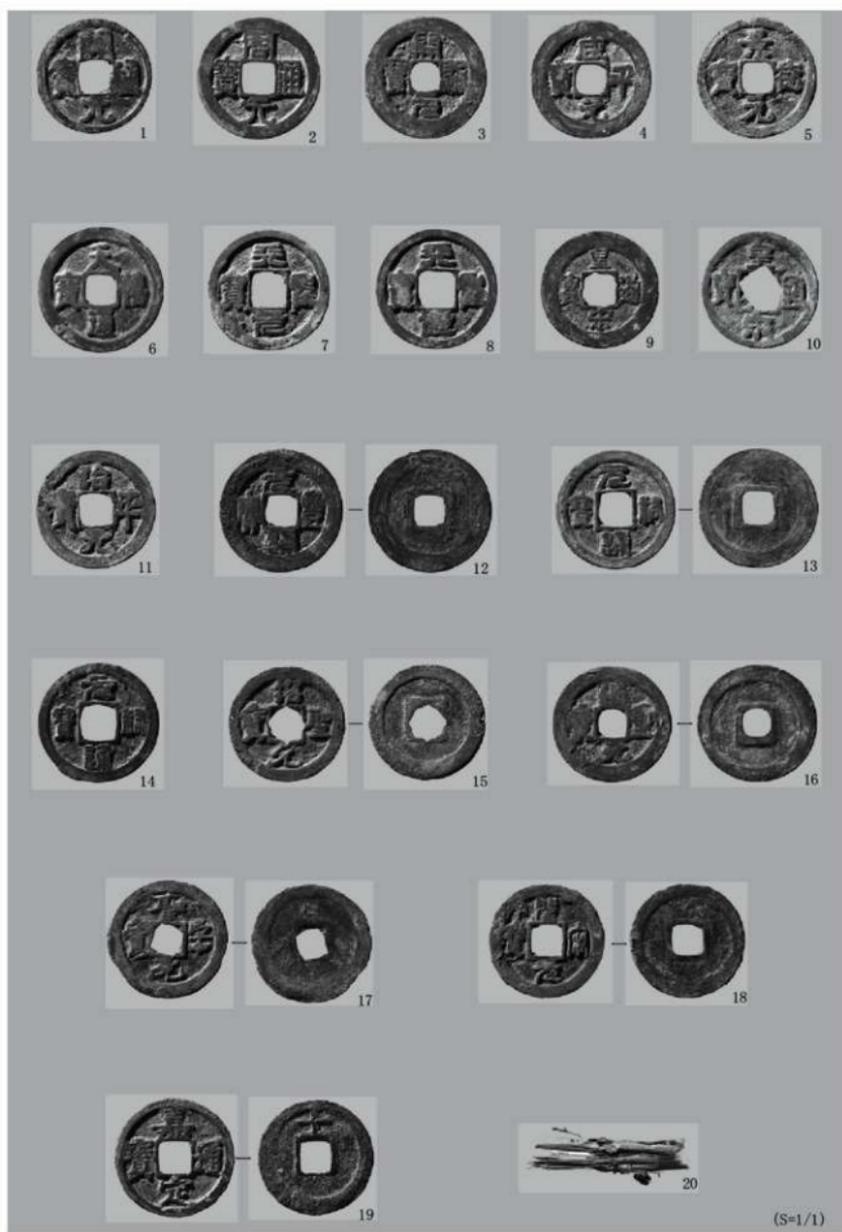
写真図版 17 今市遺跡第2次調査出土遺物 (3)



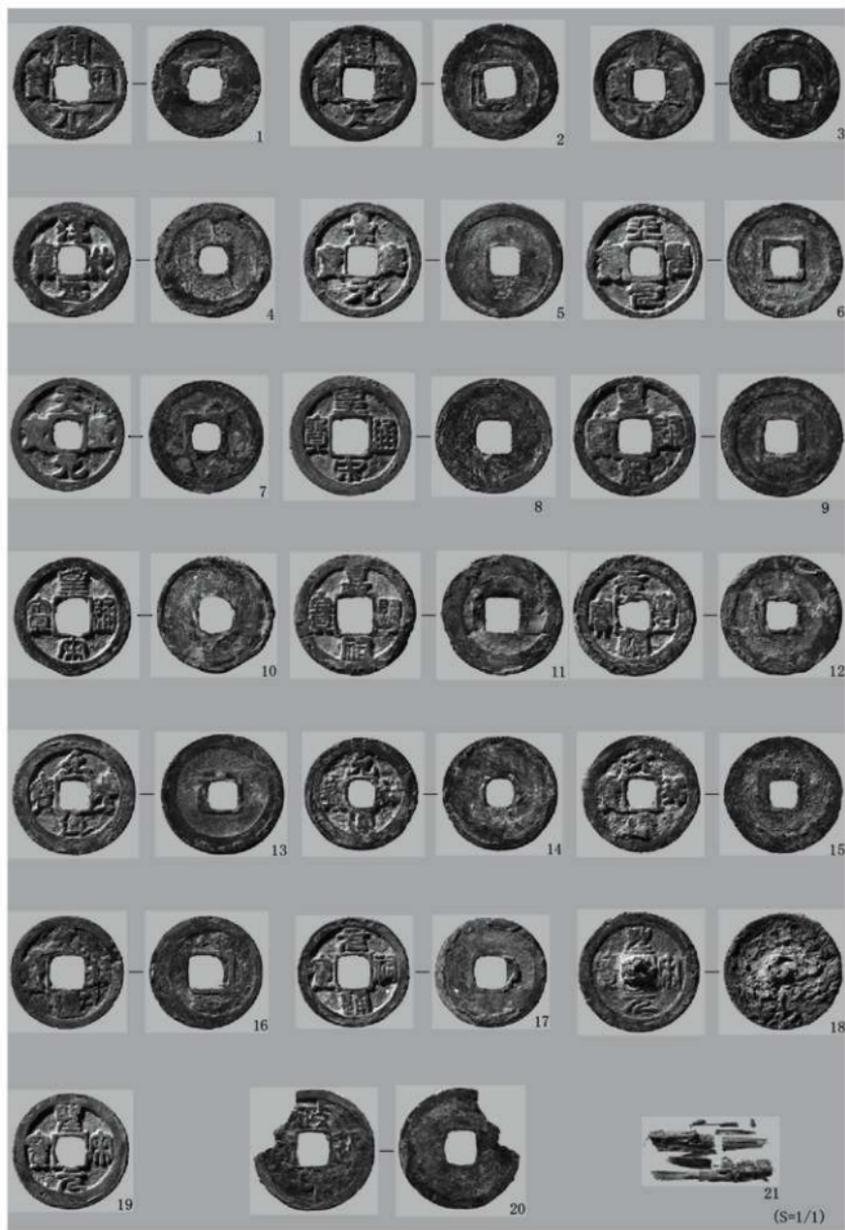
写真図版 18 今市遺跡第2次調査出土遺物(4)



写真図版 19 今市遺跡第2次調査出土遺物 (5)

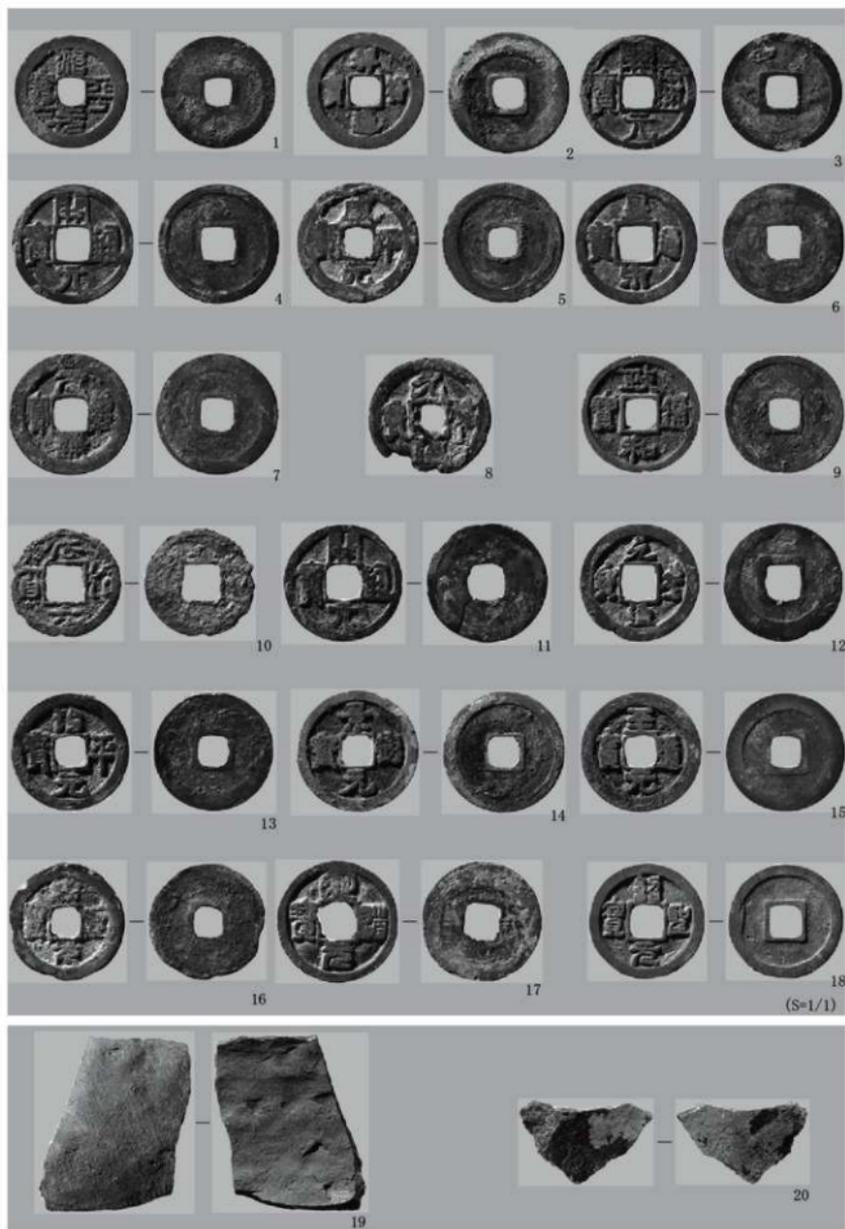


写真図版 20 今市遺跡第2次調査出土遺物 (6)



写真図版 21 今市遺跡第2次調査出土遺物 (7)

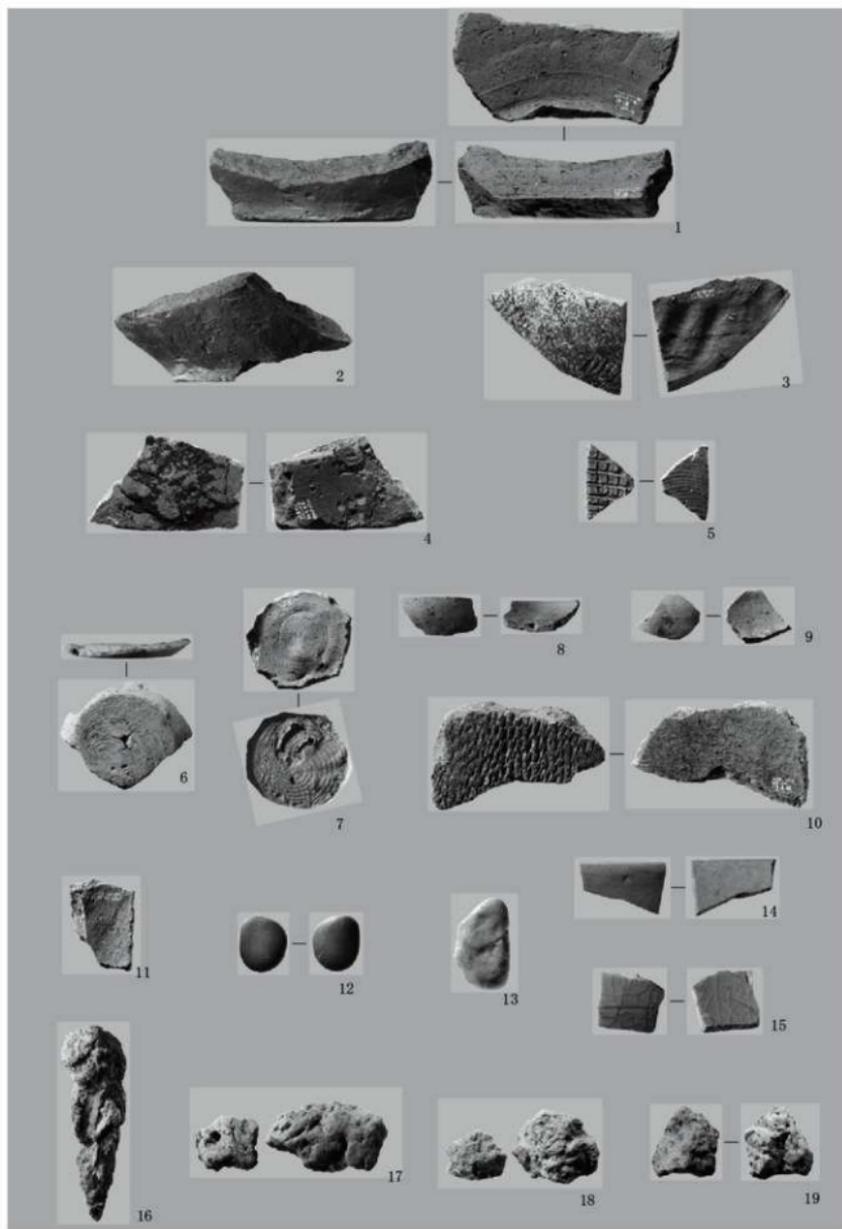
(S=1/1)



写真図版 22 今市遺跡第2次調査出土遺物 (8)



写真図版 23 今市遺跡第2次調査出土遺物 (9)



写真図版 24 今市遺跡第2次調査出土遺物 (10)

6. 今市遺跡第2次発掘調査で出土した木製品の樹種同定

吉川純子(古代の森研究会)

今市遺跡は仙台市北部の七北田川右岸の自然堤防上に所在する。第2次発掘調査で古溝跡から木製品が出土した。SD5からは中世の陶器と中国青磁が検出され12世紀後半から14世紀前半と考えられる。SE1は調査区の中で一番新しい遺構と考えられるが時期を特定できる遺物が検出されなかった。出土した木製品について合計16点の樹種同定を実施した。試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取しプレパラートに封入して生物顕微鏡で観察・同定した。

表1 今市遺跡出土木製品の樹種

試料番号	遺構	出土層	器種	樹種
L1	SD5	堆積土	漆塗小皿	ケヤキ
L2	SD5	堆積土	杓文字状薄板	モミ属
L3	SD5a(SD10a)	堆積土	木錘	コナラ属クスギ節
L4	SD5a(SD10a)	堆積土	曲物底板	スギ
L5	SD5a(SD10a)	堆積土	薄板	モミ属
L6	SD5b(SD10b)	堆積土	下駄歯	ケヤキ
L7	SD5a(SD10a)	堆積土	下駄歯	ケヤキ
L8	SD5	堆積土	下駄歯	ケヤキ
L9	SD5	堆積土	薄板	スギ
L10	SD5	堆積土	杭	コナラ属コナラ節
L11	SD5b(SD10b)	堆積土	角材状木製品	針葉樹
L12	SD5	堆積土	曲物底板	スギ
L13	SD5b(SD10b)	堆積土	薄板	針葉樹
L14	SD5b(SD10b)	堆積土	板草履	モミ属
L15	SE1	下層	曲物側板	スギ
L16	SD1(SD8)	底面	杭	コナラ属コナラ節

木製品の樹種同定結果を表1に示す。16点のうち最も多かったのはケヤキとスギが各4点で、ついでモミ属3点、コナラ属コナラ節と針葉樹が各2点、コナラ属クスギ節が1点であった。ケヤキが多いのは下駄の歯3点がすべてケヤキであったためで漆皿もケヤキである。曲物3点はスギでスギの薄板も容器であった可能性がある。ほかの板状の製品にもモミ属や針葉樹が使われており、製品における樹種選択があったと考えられる。

仙台平野の中世の出土例では、漆器にブナ属の出土例が多いがケヤキも多く、曲物にはスギとモミ属が多く利用されている(仙台市教育委員会2010)傾向があり、本遺跡でもこの傾向と調和的であった。

以下に同定された樹種の記載をおこなう。

モミ属(*Abies*): 晩材部の幅はやや広く早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。放射細胞は垂直・水平壁ともに厚い放射細胞からなり垂直壁は串団子状となり上下縁辺部に不規則に突出した形の細胞が見られじゅず状末端壁である。分野壁孔は小型のスギ型で1分野に2~4個存在する。

スギ(*Cryptomeria japonica* (Linn.f.) D.Don): 晩材部の幅は広く早材部から晩材部への移行は緩やかで晩材部炭線方向に黒い樹脂細胞が点在する。放射細胞は放射細胞のみからなり分野壁孔は大きいスギ型で開口部長軸が斜めからほぼ水平になり1分野に2個存在する。

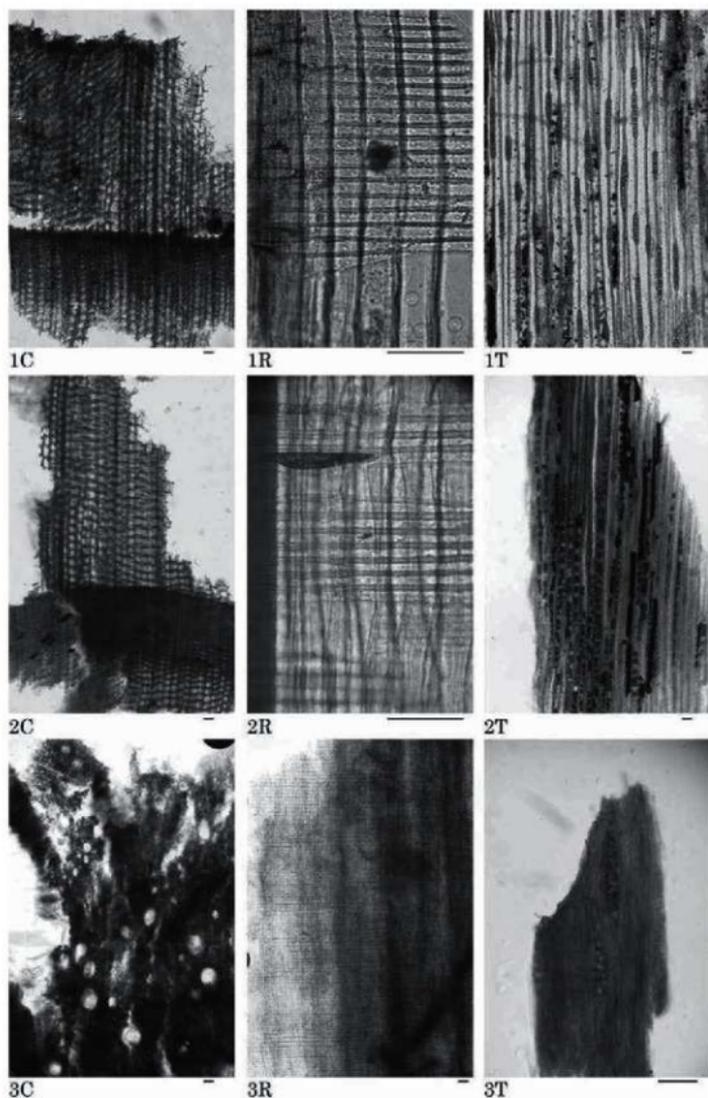
コナラ属クヌギ節 (*Quercus sect. Aegilops*) : 大道管が数列配列したのち厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材で道管の穿孔板は単一で道管内にしばしば着色物質が留まっている。放射細胞は同性で単列と複合状で幅広く高い放射組織がある。

コナラ属コナラ節 (*Quercus sect. Prinus*) : 大道管が数列配列したのち薄壁の角ばった小管孔が火炎状や波状に配列する環孔材で道管の穿孔板は単一で、放射細胞は同性で単列と複合状で幅広く高い放射組織がある。

ケヤキ (*Zelkova serrata Makino*) : 年輪はじめに大きい道管が1列並び小さい道管が放射線状、花つな状に多数集合して連なる環孔材で道管は単穿孔があり、小道管の内壁にらせん肥厚がある。放射組織は同性時々異性で1~7細胞幅程度で上下縁辺に結晶がみられる。

引用文献

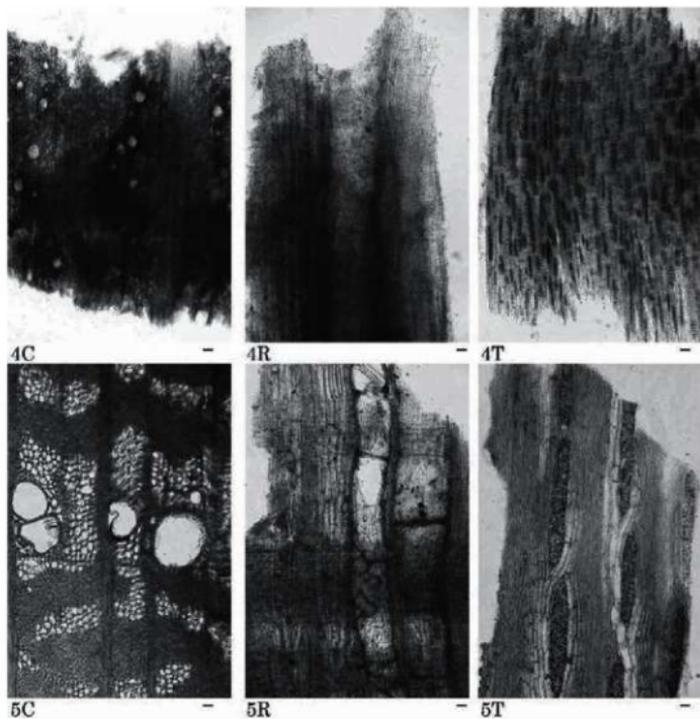
仙台市教育委員会. 2010. 第36章第13節仙台平野中北部の遺跡出土木製品の樹種. 沼向遺跡第4~34次調査第9分冊. 仙台市教育委員会. 519-580.



図版1 今市遺跡出土木製品の顕微鏡写真

1.モミ属(L-2) 2.スギ(L-4) 3.コナラ属コナラ節(L-16)

C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm



図版2 今市遺跡出土木製品の顕微鏡写真

4.コナラ属クスギ節(L・3) 5.ケヤキ(L・6)

C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm

第3章 若林区の調査

第1節 荒井館跡

I. 遺跡の概要

荒井館跡は仙台市若林区荒井字矢取に所在する。JR仙台駅から東南東に5～6kmの沖積平野に立置し、北約3.5kmを梅田川・七北田川が、南約4.5kmを広瀬・名取川が流れており、荒井館跡は広瀬川から派生した自然堤防の東端付近にあたる。荒井館は延宝年間(1673～80)に領内の城館についてまとめられた『仙台領古城書上』には記載されていない。柴桃正隆氏が1974にまとめた『史料 仙台領内古城・館』においては、区画整理以前に見られた遺跡範囲西側の堀や、東側に存在したという堀跡、室町末期因分氏家臣の堀江氏が居住したと口碑に伝わるなどの記述がある。現在までに2度の本発掘調査および数度の確認調査が実施されたが、中世城館に関連すると断定できる遺構は確認されていない。出土遺物も古墳時代～古代の土師器が大部分を占めており、遺跡の性格の究明が課題となっている。



第50図 荒井館跡の位置と周辺の遺跡

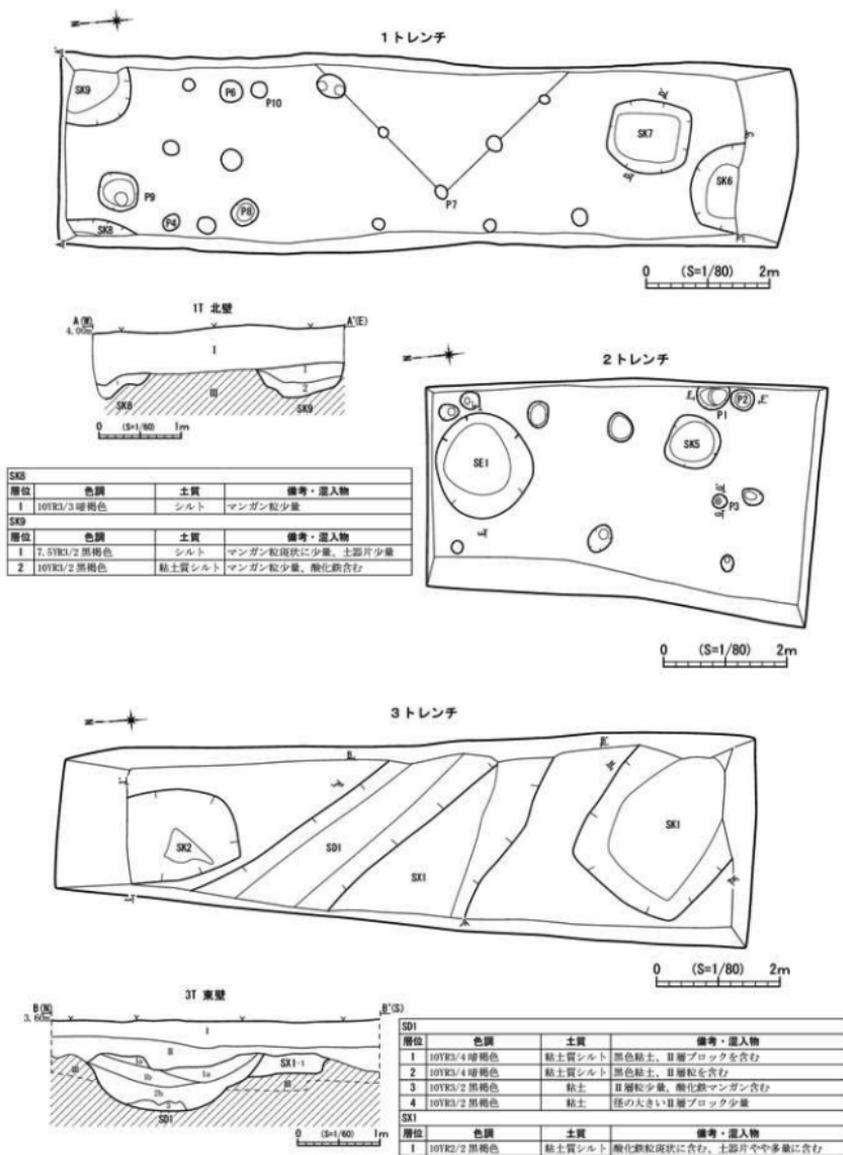
II. 第3次調査

1. 調査要項

遺跡名	荒井館跡(宮城県遺跡登録番号01232)
調査地点	仙台市若林区荒井字矢取59-1・59-2・59-3・水路の各一部(19-2B 1-1L・19-2B 1-3L)
調査期間	平成29年7月19日(水)～27日(木)
調査対象面積	502.32㎡
調査面積	84㎡
調査原因	事務所建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事 小林 航 文化財教諭 及川 基 大友 渉 専門員 渡部 弘美

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成29年6月5日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて(協議)」(平成29年6月12日付H29教生文第103-014号で回答)に基づき実施した。調査は平成29年7月19日(水)に着手した。調査区は建築予定範囲内に3箇所設定し、北から順に1～3トレンチの調査区番号を付与した。規模は現況に合わせ、



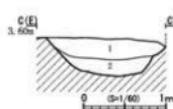
第53図 荒井館跡平・断面図

物は土師器、須恵器、中世陶器、瓦、石製品などが出土している。

(1) 1トレンチ

SK6 土坑

調査区南端で確認した。大きさは東西 1.5m、南北 0.8m 以上で、深さは 0.5m である。おおよそ南半が調査区外



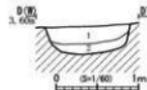
層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	土器片少量
2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	マンダン粘濁状に含む 互層状堆積

第54図 SK6 土坑土層断面図

にある。堆積土は2層に分層された。遺物は土師器片が出土した

SK7 土坑

調査区南部で確認した。大きさは東西 1.2m、南北 1.3m で平面形はやや方形に近く、深さは約 0.4m である。堆積土は2層に分層された。遺物は出土しなかった。



層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	
2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	互層状含む 層下部に炭が層状に堆積

第55図 SK7 土坑土層断面図

SK8 土坑

調査区北西角で確認した。大きさは東西 0.3m 以上、南北 1.0m 以上で、北・西側は調査区外にある。深さは 0.3m である。堆積土は単層である。遺物は土師器片が出土した。

SK9 土坑

調査区北東角で確認した。大きさは東西・南北ともに 1.0m 以上で、北・東側は調査区外にある。深さは 0.4m である。堆積土は2層に分層された。遺物は、陶器が出土している。器種は片口鉢で、渥美焼の山茶碗窯系で、時期は 12～13 世紀に比定される（第60図2）。

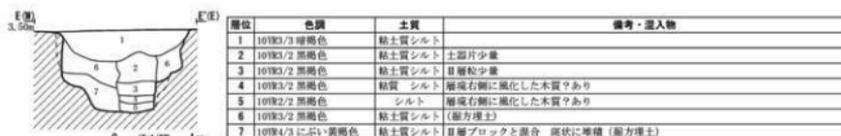
ピット

調査区全体で 17 基確認した。柱痕跡の認められるものはなかったが、調査区中央部の一帯は P7 を西側角とした建物跡を構成する可能性がある。この場合、方位は現在の区画に対し約 45° 傾いており、これは宅地造成以前の区画よりもさらに傾きが大きく、3 トレンチ SD1 溝跡の方位に近い。ピット 17 基中 8 基から遺物が少量ながら出土しており、大半は土師器片であるが、P4 から須恵器 1 点（第60図3）、P6 から須恵器および石製品各 1 点（第60図4、第60図7）が出土している。

(2) 2トレンチ

SE1 井戸跡

調査区北端で確認した。大きさは東西・南北ともに 1.6m のほぼ円形を呈する。深さは約 1.0m である。堆積土は7層に分層された。下層には腐食した木質があり、全体が円筒形を呈することから、曲げ物等を利用した井戸枠であると考えられる。遺物は土師器片のほか、底部付近から石製品が 1 点出土した（第60図5）。



第56図 SE1 土坑土層断面図

SK5 土坑

調査区中央南東側で確認した。大きさは東西・南北ともに0.9mで、平面形はやや方形に近い楕円形を呈する。深さは15cmと非常に浅い。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

ピット

調査区全体で11基確認した。うち調査区南側のP3では空洞状の柱痕跡が確認された。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。



第57図 2 トレンチピット土層断面図

(3) 3 トレンチ

SK1 土坑

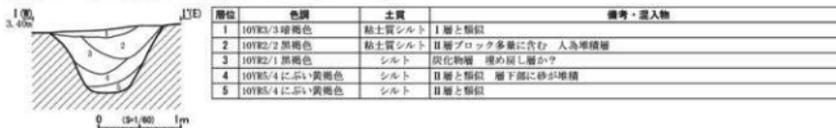
調査区南端で確認した。大きさは東西2.9m以上、南北1.9mで、南東側は調査区外になる。平面形は長方形を呈すると推定される。深さは0.6mである。堆積土は5層に分層された。2層および3層の下面には砂が多く含まれる。遺物は土師器片が出土した。



第58図 SK1 土坑土層断面図

SK2 土坑

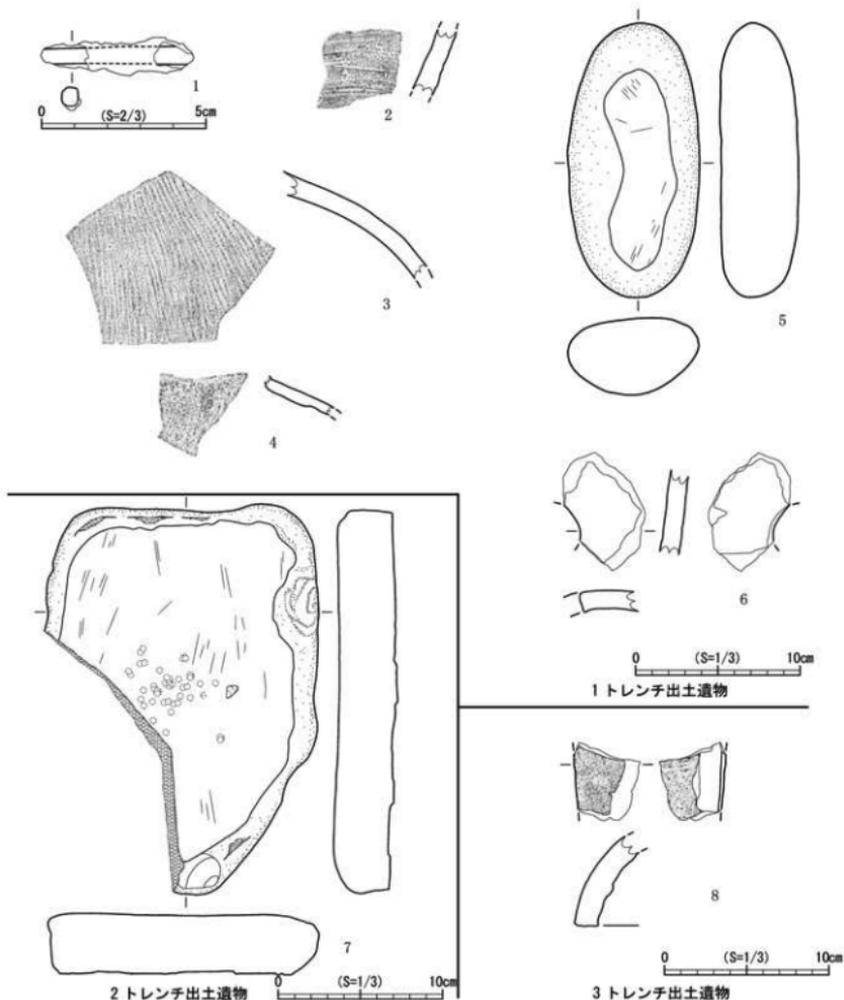
調査区北端で確認した。遺構の規模は東西1.4m、南北1.9m以上で、北側は調査区外にある。深さは0.8mである。堆積土は5層に分層された。遺物は出土しなかった。



第59図 SK2 土坑土層断面図

SD1 溝跡

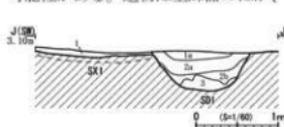
調査区中央で確認した、南東-北西方向の溝跡である。幅1.1m、長さ3.2m以上で、調査区外に延びる。深さは



図版番号	登録番号	遺構	種別	器種	法量 (cm)		外装調整	内装調整	備考	写真図版
					口径	底径				
2	I-2	SK9	陶器	鉢	-	(4.0)	同船ヘラケズリ	ロケロナデ	中央陶器 山形輪索系(常滑) 片口鉢 体部片 12~13C	28-7
3	E-1	F4	須恵器	甕	-	(6.6)	平行タタキ	-	-	28-3
4	E-2	F6	須恵器	甕	-	(2.3)	-	ロケロナデ	-	28-4
6	I-1	IT	陶器	コンロ or 火鉢	-	(7.3)	-	-	岩室か? 窓あり 胎土に金雲母を含む	28-6
写真のみ	C-1	SK1	土師器	高杯	-	-	-	-	-	28-1
	C-2	3T	土師器	高杯	-	-	-	-	-	28-2
図版番号	登録番号	遺構	種別	器種	法量 (cm)		重量 (g)	備考	写真図版	
					全長	幅				厚さ
1	N-1	IT	金属製品	釘?	(4.6)	(9.7)	(9.6)	-	跡付着	28-10
5	K-1	SE1	石器	磨石? 石皿?	23.9	16.4	3.7	2220.0	2方向に磨理面 磨面中央に磨打痕	28-8
7	K-2	F6	石器	磨石	16.8	8.0	4.7	1001.0	磨面1面	28-9
8	F-1	SBI	瓦	瓦瓦	-	(5.0)	-	-	凸面: 縄目キ ナデ 凹面: 布目肌 側面: ヘラケズリ 胎土に砂を含む 古代	28-5

第60図 荒井館跡第3次調査出土遺物

約60cmである。北西側には第1次調査No.95 試掘区で確認されたSD-2 溝跡があり、同一ないし関連する遺構の可能性はある。遺物は土師器のほか、古代の丸瓦が1点出土した(第60図8)。



第61図 SD1 溝跡・SX1 性格不明遺構土層断面図

SD1		備考・遺人物	
層位	色調	土質	
1a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒含む
2a	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	砂質土状に帰属 マンガン粒、酸化鉄粒含む
2b	10YR2/2 黒褐色	粘土	棕色粘土状底状に含む 酸化鉄粒含む
3	10YR6/3 に近い黄褐色	粘土	日層との薄層層 日層層上げか? 酸化鉄粒含む
SX1		備考・遺人物	
層位	色調	土質	
1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒底状に含む (土器の量や多)

SX1 性格不明遺構

調査区中央で確認した。大きさは東西2.2m以上、南北2.2mである。東・西側は調査区外に広がり、北側はSD1 溝跡に切られている。深さは0.2mとごく浅く、耕作の影響によって遺構上部が失われたとみられるが、調査区東壁断面にて垂直に近い立ち上がりが確認できる。遺物は、中央付近から土師器片が集中して出土したほか、調査区西壁から土師器がまとまりをもって出土している。

(4) 遺構外出土遺物

各調査区のII層上面からは主に土師器片が出土しているが、大半が遺存状態の良いくない小片資料である。比較的状态の良いものとして、3トレンチでは土師器の高坏の脚が出土しており(写真図版28-1)、出土箇所が近いことからSX1出土遺物と関連するものと考えられる。その他、1トレンチでは陶器、金属製品が出土している。陶器(第60図6)は近世のコンロまたは火鉢と推定される素焼陶器であり、破片資料であるが一辺に窓が残存している。金属製品(第60図1)は釘と推定される。

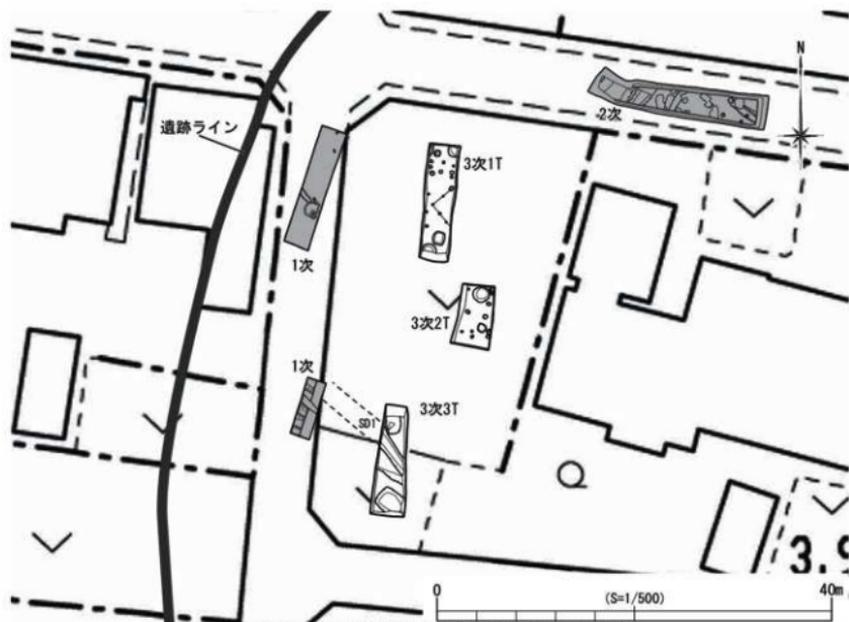
5 まとめ

今回の調査地点は、荒井館跡の西部に位置する。現況は畑の耕作土(層厚約20~50cm)のほぼ真下に遺構検出面が存在する状態で、遺構検出面も周辺の道路より高いことから、造成以前から微高地であったと考えられる。第1次調査では今回調査地点の西側で2ヶ所の調査が行われており、No.95試掘区では溝跡2条が、本調査区では土坑1基、溝跡1条、ピットなどが確認されている。今回の調査地点より北東側の第2次調査では、溝跡3条とピット4基が確認されている。

今回の調査では、土坑8基、溝跡1条、井戸跡1基、性格不明遺構1基、ピット28基を検出した。中世城館に関わると断定できる遺構や遺物はなく、土坑から中世陶器の破片が1点出土したに留まる。このため遺構の時期については不明な点が多い。

引用・参考文献

- 仙台市教育委員会 1996 『在中家南遺跡他 一 仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書一』
仙台市文化財調査報告第213集
- 仙台市教育委員会 1998 『神明社窯跡ほか 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告第232集



第 62 図 荒井館跡第 3 次調査区と周辺の遺構



1.1 トレンチ全景遺構完掘状況（北から）



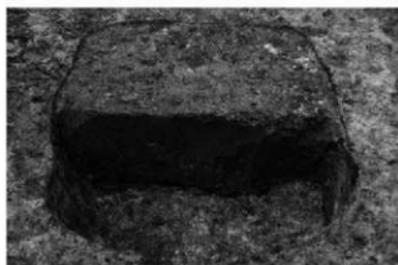
2.1 トレンチ全景遺構完掘状況（南から）



3.1 トレンチ北壁土層断面（南から）



4.1 トレンチ SK7 土坑土層断面（南から）



5.1 トレンチ SK6 土坑土層断面（北から）



1.2 トレンチ全景遺構完掘状況（北から）



2.2 トレンチ SK5 土坑土層断面（北から）



3.2 トレンチ P3 土層断面（南から）



4.2 トレンチ SE1 井戸跡土層断面（南から）



5.2 トレンチ SE1 井戸跡完掘状況（南から）



1.3 トレンチ全景遺構完掘状況（北から）



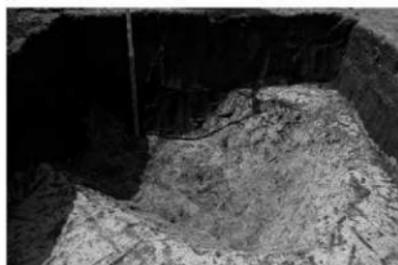
2.3 トレンチSK2土坑土層断面（南から）



3.3 トレンチ調査区東壁土層断面（西から）



4.3 トレンチSD1溝跡土層断面（南東から）



5.3 トレンチSK1土坑完掘状況（南から）



写真図版 28 荒井館跡第3次出土遺物

第2節 荒井広瀬遺跡

I. 遺跡の概要

荒井広瀬遺跡は仙台市若林区荒井字広瀬・荒井遠藤他に所在する。JR 仙台駅から南東方向に約 6.0km に位置し、名取川とその支流である広瀬川によって形成された自然堤防や後背湿地上に立地する。現況の標高は約 3.0～4.0 m である。本遺跡は土地区画整理事業等に併い、平成 25 年に第 1 次調査が行われ、自然流路跡と溝跡が検出された。検出された遺構から弥生時代中期や古墳時代中期、平安時代の遺物が出土している。また溝跡の底面上では地割れ状痕跡が確認されており、その検出状況から弥生時代中期に発生した地震によってできた地割れと考えられている。荒井広瀬遺跡の周辺には東側の後背湿地上に立地する畚形遺跡と西側の後背湿地上に立地する荒井南遺跡がある。これらの遺跡では約 2000 年前の津波堆積物に覆われた弥生時代中期中葉の水田跡が確認されている。

II. 第 2 次調査

1. 調査要項

遺 跡 名	荒井広瀬遺跡 (宮城県遺跡登録番号 01570)
調 査 地 点	仙台市若林区荒井字遠藤 121-2 ・122-1・122-2 の各一部
調 査 期 間	平成 28 年 12 月 12 日 (月)～ 平成 29 年 1 月 26 日 (木)
調査対象面積	470.20 m ²
調 査 面 積	93 m ²
調 査 原 因	事務所の新築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担 当 職 員	主事 庄子裕美 文化財教諭 佐藤慶一

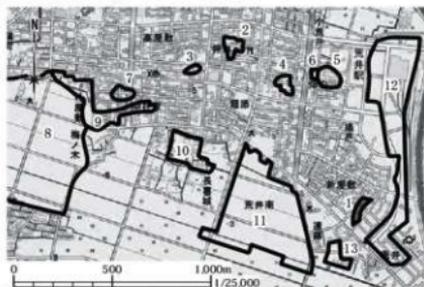
2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成 28 年 10 月 12 日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて(協議)」(平成 28 年 10 月 26 日付 H28 教生文第 103-064 号で回答)に基づき、平成 28 年 12 月 12 日に着手した。

建物建築範囲に長さ 22 m × 幅 6 m、面積 132 m² の調査区を設定した。重機で盛土を除去し、調査区の北部で自然流路跡を検出した。調査区の東部で平成 22 年度の試掘調査区(試掘 No. 43 調査区)を確認し、重機並びに人力で試掘調査区の埋土を除去した。基本層 II 層上面では自然流路跡以外の遺構は検出されなかったため、表土削削時の排土置き場を確保するため、調査区の長さを 15.5 m に縮小(面積 93 m²)した。なお遺物は、調査区自然流路跡に 1 m × 1 m のグリッドを設定し、グリッド別に取上げを行った。

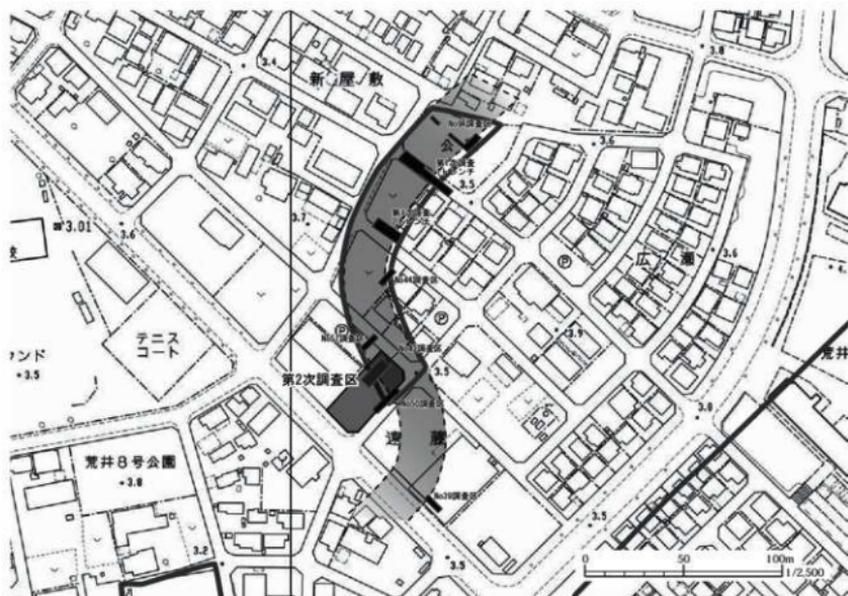
平面図と調査区壁面の断面図は 1/20 で作成した。記録写真はデジタルカメラにより撮影した。

1 月 26 日に現地での調査器材の撤収作業を行い、1 月 30 日、代理人に現場の引き渡しを行い、調査を終了した。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	荒井広瀬遺跡	河川跡	後背湿地	弥生・古墳
2	押口遺跡	河川跡・水田跡・ 包含地	自然堤防・後背 湿地	古代・中世・ 近世
3	高屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
4	荒井畑中遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代・ 中世
5	荒井館跡	城館跡	自然堤防	中世
6	荒井畑中東遺跡	城館跡	自然堤防	古墳
7	中在家遺跡	包含地	自然堤防	平安
8	仙台東郊桑里跡	桑里跡	自然堤防	平安
9	中在家南遺跡	土器棺墓・土壘墓・ 方形周溝墓・河川 跡・水田跡	自然堤防・後背 湿地	古墳・平安・ 中世・近世
10	長喜城館跡	城館跡	自然堤防	中世
11	荒井南遺跡	水田跡	後背湿地	弥生
12	畚形遺跡	生産遺跡	自然堤防	弥生・古墳・ 古代・中世
13	下荒井遺跡	散布地	自然堤防	平安

第 63 図 荒井広瀬遺跡の位置と周辺の遺跡



第64図 荒井広瀬遺跡第2次調査区位置図

3. 基本層序

調査区内の盛土の厚さは約1.1～1.4mである。盛土より下位で水田耕作土（I a・I b層）と自然流路跡堆積土層（I～13層）、基盤層（II層）を確認した。

I a層 10YR4/2 灰黄褐色粘土質シルト。層厚は0～18cmである。層下部で酸化鉄が集積している。宅地造成以前の水田耕作土である。

I b層 10YR4/3 に近い黄褐色粘土質シルト。層厚は0～18cmである。層下面に凹凸があり、酸化鉄粒を多量に、マンガング粒を少量含む。水田耕作土である。

II層 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土。基盤層。



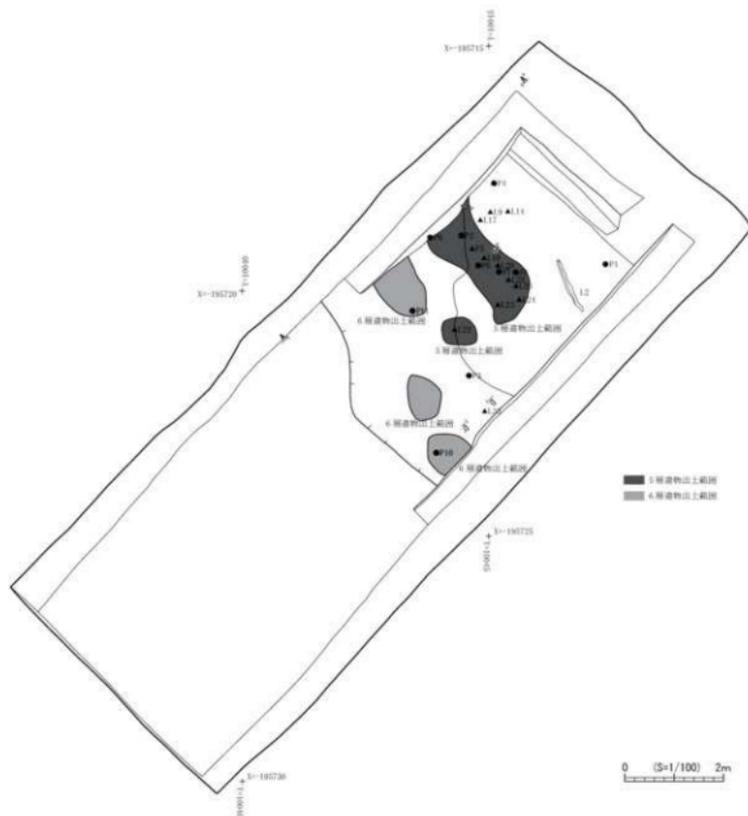
第65図 2次調査区配置図

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では自然流路跡1条を検出した。

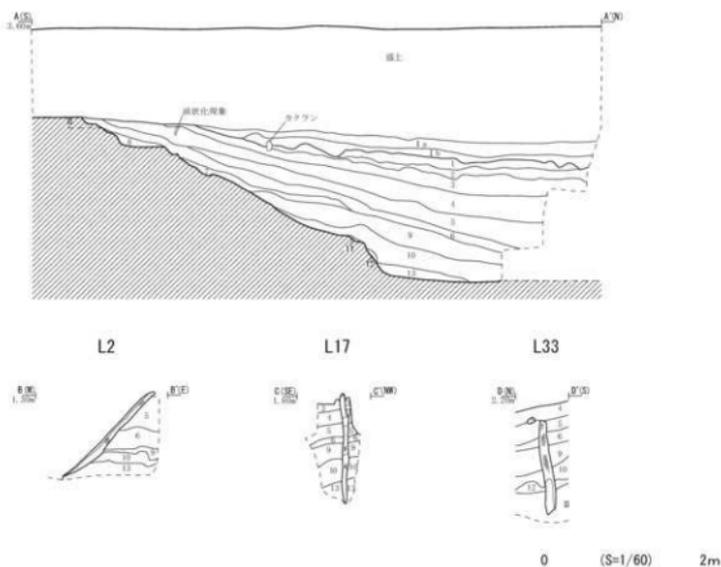
(i) 自然流路跡の状況

調査区北部で西岸部を検出した。堆積土の類似性と検出された位置などから、試掘調査と第1次調査で検出されている自然流路跡と同一であると判断される。検出長は4.5m以上、幅は7.1m以上で調査区外に延びる。深さは遺構検出面から1.71mである。堆積土は13層に分層され、植物遺体を含む粘土が主体になっており、全体が



第 66 図 荒井広瀬遺跡第 2 次調査区平面図

北東方向に向かって低くなっている。このうち、7層は均質で粒子が細かい砂の層で、自然流路跡の立ち上がり部で確認されており、肩部のほうでは9層起源の粘土が多く含まれている。荒井広瀬遺跡第1次調査2トレンチで検出された自然流路跡10層の砂層は約2000年前の津波堆積物と指摘されており、本調査で検出された7層も津波堆積物である可能性がある。断面形は逆台形であり、底面からの立ち上がりは南側でやや急な傾斜となっている。北東側は調査区外のため不明である。



遺構名	層位	色相	土質	備考・混入物
基本層	1 a	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	層下部に酸化鉄が集積。
	1 b	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	酸化鉄を多く含む。マンガン鉄を少量含む。
遺構名	層位	色相	土質	備考・混入物
溝1	1	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄をやや多く含む。マンガン鉄を少量含む。
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	φ5～80mmの灰白色火山灰ブロック(10YR6/4に近い黄褐色シルト)をやや多く含む。植物遺体を極少量含む。
	3	10YR3/1 黒褐色	粘土	植物遺体を多く含む。
	4	10YR3/2 暗褐色	粘土	植物遺体を非常に多く含む。火山灰? (10YR6/2 灰色シルト) を微量に含む。層下部が10YR2/3 黒褐色粘土である。
	5	10YR2/2 黒褐色	粘土	植物遺体をやや多く含む。砂を微量に含む。
	6	10YR2/1 黒色	粘土	植物遺体をやや多く含む。
	7	10YR4/2 灰黄褐色	細砂	粒子がそろった細かい砂。自然流路跡部付近では9層の粘土をやや多く含む。
	8	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄をやや多く含む。10YR5/3 に近い黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
	9	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	植物遺体を少量含む。砂を極少量含む。
	10	10YR2/3 黒褐色	粘土	10YR4/3 に近い黄褐色粘土を帯状に含む。植物遺体を多く含む。砂を少量含む。
	11	10YR4/3 に近い黄褐色	砂	粒子が大きく粗い砂。
	12	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	2.5Y5/2 暗灰黄色粘土ブロックをやや多く含む。
	13	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土を多く含む。植物遺体を少量含む。

第67図 荒井広瀬遺跡第2次調査区北西壁・杭断面図

(ii) 各層の出土遺物

5層と6層から土師器と木製品が多く出土した。また7層より下位の層では弥生土器の小片がわずかに出土している。3層と5層中では杭が3点確認された。全て自然流路跡の底面から立ち上がり部分の位置で検出されている。打ち込み層位は不明である。

i) 1～4層

1～4層では土師器とロクロ土師器、石製品、木製品が出土した。

第68図3(C-1)は土師器の坏である。底部は欠損しており、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外傾している。第68図4(C-2)は高坏で、坏部のみの出土である。坏部の底部と体部境目に明確な稜が確認される。第68図5(C-3)は器台の脚部と考えられる。坏部底面に径5.4cmの孔が穿たれている。第68図6(C-4)は壺である。頭部からは欠損している。丸底で体部は球状で、体部最大径は体部下部分にある。第68図7(K-1)は砥石である。砥面は5面あり、一部凹みがある。刃つづし痕もあり、仕上げ砥の可能性もある。第69図2(L-17)は長さ168

cmの杭である。分割材を素材とし、先端部は加工され鋭角的に尖っている。調査区の北部の3層で検出されたが、打ち込み面は不明である。垂直方向に打ち込まれており、杭が途中で折れている箇所があり、打ち込んだ際に折れた可能性がある。第69図1(L-2)は分割材を素材とした杭である。上部部はやや潰れており、先端部に加工は施されていない。調査区の北東部の4層の下部で検出された。斜め方向に打ち込まれており、先端部は自然流路跡の底面付近まで達している。第69図3(L-33)は芯持ち材を素材とした杭である。先端部は二段に加工され、鋭角的に尖っている。調査区の南東壁沿いで検出された。直立方向に打ち込まれている。この杭の側から砥石(K-1)が出土している。

ii) 5層

5層では土師器と石器、木製品が出土した。このうち木製品は26点である。遺物は自然流路跡の中央部分から立ち上がり部分で多く出土している。土師器の多くは破片であるが、第70図7(C-13)小型壺のようにほぼ完形のものもある。土師器は坏と高坏、壺、甕が、木製品は曲柄又鎌の破片、農具の柄、横槌など、石器は磨石などがある。

第70図1、2(C-6、7)は坏である。C-6は平底の坏で、底部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、口唇部では内傾している。C-7は口縁部が欠損している丸底の坏である。底部から体部にかけてやや内湾気味に立ち上がる器形と考えられる。第70図3～6(C-8～11)は高坏である。C-11は坏部の破片で、坏部底部に段がある。C-8は高坏の坏部で、坏部底部から外傾して立ち上がり、体部から口縁部にかけてやや外反して立ち上がる。C-9は高坏の脚部と裾部である。脚部は中空の円錐台状で、脚部と裾部の接合部には明瞭な屈曲が見られる。C-10は高坏の脚部と裾部である。脚部は中空の円錐台状で、脚部と裾部の接合部にはゆるやかな屈曲が見られる。第70図7～12(C-13～18)は壺である。C-13は完形の小型壺で、体部最大径と口縁部最大径、体部高と口縁部高はそれぞれほぼ等しい。平底で体部は扁球形である。口縁部から頸部にかけてやや内湾気味に立ち上がる。C-14は小型壺の体部で一部頸部が残存している。平底で体部は扁球形である。C-15は小型壺の体部下半部である。底部は平底で、底部から体部にかけてやや内湾気味に立ち上がる。内外面に赤彩されている。C-18は丸底の小型壺の体部下半部である。C-16は小型壺の口縁部と頸部の破片である。体部から底部が欠損している。C-17は壺の口縁部から体部で、底部は欠損している。体部が球状で、頸部から口縁部にかけて外傾して立ち上がる。第71図1、2(C-19、21)は甕である。C-19はほぼ完形の平底の小型甕で、底部から頸部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、頸部から口唇部にかけて外傾している。体部上半部の外面には炭化物が付着している。C-21は甕の口縁部から体部で、底部は欠損している。体部は球状で頸部が外傾して立ち上がり、口縁部でやや外反して立ち上がる。

第71図3(L-9)は曲柄又鎌の破片である。軸部と身部の片側が欠損している。クヌギ節の柾目材を素材としている。肩には小さな抉りが加工されており、形状からナスビ形鎌と考えられる。身部の左側縁は肩から身部中央まではほぼ直線的で、やや内湾気味に先端部に至る。右側縁は直線的である。身部の形態から二又鎌の可能性もある。第71図4(L-10)は農具の直柄である。ハンノキの分割材を素材として製作されている。断面形状は楕円形に加工されており、先端には丁寧な加工が施されている。第71図5(L-14)は横槌である。クヌギ節の分割材を素材としている。細い握部を削り出して作られており、グリップ・エンド部分は欠損している。槌部の断面形状は半円状で、平坦な面がある。第71図6(L-24)は木錘である。ナナカマド属の芯持ち材を素材としており、両端に加工が施された円柱状である。第72図1(L-15)は板状の薄い木製品で、器具部材とした。分割材で、上部部には丸みを帯びた加工が施されている。第72図2(L-13)は不明木製品である。モミ属の板目材を素材としており、全長47.7cm、幅5.4cmの細長い板状の木製品である。5層から出土した木製品で針葉樹を素材としたものはL-13のみである。両端部には加工が施されており、左右に抉りがあり、形状にはやや違いがみられる。田下駄の部材の可能性もある。

第72図3(L-27)は不明木製品である。クリの柾目材を素材としており、薄い板状の木製品である。右上端部と下端部が欠損している。左下端部は丸みを帯びた形状に加工されている。両側縁は直線的な形状である。側縁の厚さは薄くなっており、両側縁に刃部が作りだされていた可能性がある。

石器は磨石(第72図4、K-2)と小型の線刻礫(第72図5、K-3)である。K-2は磨石で棒状の礫を素材としている。磨り面は2面ある。K-3は線刻された小型の礫である。平面形は楕円形状で、全面が磨られている。縦方向と横方向の線が刻まれており、縦方向の線の間には弧状の線が連続して刻まれている。用途については不明である。

iii) 6層

6層では土師器と木製品が出土した。木製品は分割材が1点と樹皮であり、5層と比較すると少ない。遺物は自然流路跡の肩部から岸部にかけて多く出土している。土師器は高坏や壺、甕、瓶などがある。

第73図2(C-23)は高坏の坏部と考えられる。坏部底部から据部までを欠損しており、全体形状は不明である。体部から口縁部までやや外傾気味に立ち上がる。第73図1(C-26)は平底の小型鉢である。口縁部が欠損している。底部から体部にかけて内湾して立ち上がり、頸部と体部に稜が付く。第73図3(C-29)は小型の無頸壺である。平底で底部から口縁部まで内湾して立ち上がる。第73図4(C-24)は壺の体部で、口縁部から頸部は欠損している。丸底で、体部は扁球上でやや下膨れである。第73図5(C-25)は壺の頸部である。頸部には断面が三角形の突帯が付いている。頸部から口縁部にかけて外反して立ち上がる。突帯部分はヨコナデがされたのち、連続的に斜位の刻みが施されている。甕は第73図6・7・9・10(C-31・32・27・30)が出土している。C-31・32は甕の口縁部から頸部片で、C-27・30は底部片である。底部には榎殻痕が見られる。第73図11(C-33)は鉢状の甕である。口縁部は複合口縁で、底部は単孔である。体部が内湾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。調整は体部に縦方向のハケメが、底部は横方向のヘラケズリがされている。口縁部はハケメののち指頭痕が見られる。内面は体部がヘラナデ、口縁部は横方向のハケメである。

写真図版36-5(L-34)は樹皮で、帯状になっている。

iv) 10層

10層では弥生土器が出土した。5層と6層と比較すると遺物の出土量は極めて少ない。第73図12(B-1)は甕か鉢の可能性のある体部の破片で、外面にはLR縄文が施文されている。

(2) 液状化現象

河川跡の4層上面の肩部で暗灰黄色粘土を含む幅2～8mm程度の細長い線状の痕跡を確認した。この痕跡は自然流路跡の岸に平行方向に延びており、途中で枝分かちしている。液状化現象の痕跡と考えられる。上層の3層に灰白色火山灰が含まれていることから、この液状化現象は灰白色火山灰降下以前に発生したと考えられる。

5. まとめ

今回の調査地点は、荒井広瀬遺跡の南部に位置する。荒井広瀬遺跡では平成22年度に実施された試掘調査で自然流路跡の範囲が確認されており、本調査区の北側では平成25年度に第1次調査が行われている。これまでの調査で、自然流路跡から奈良・平安時代の田下駄などの木製品と古墳時代中期の土師器、弥生時代中期の弥生土器と石器が出土している。また調査の結果から蛇行している自然流路跡であることが確認されている。

今回の調査では自然流路跡1条が検出されており、検出された位置などから、これまでの調査で確認された自然流路跡と同一であると判断される。底から岸までの立ち上がりやや急な傾斜である攻撃斜面で、本調査区の箇所

は蛇行する自然流路跡の外側の斜面と考えられる。

5層で土師器と木製品が多く出土した。5層では小型壺、高坏などがほぼ完形に近い状態で出土している。5層から出土した土師器には、①小型壺の体部径と頸部径がほぼ同じであること、②高坏の脚部が中空で、脚部と裾部の境目に稜が確認されること、③土器の調整土ヘラナデやヘラミガキである、などの特徴が見られることから、古墳時代中期の南小泉式に位置付けられると考えられる。これらの土師器と同じ層からは曲柄又鍬(L-9)や農具柄(L-10)、横鍬(L-14)などの農具や工具が出土している。出土した木製品の樹種はクスミ節やハンノキ節などの広葉樹が使用されている。L-9曲柄又鍬の樹種はクスミ節で、中在家南遺跡や押口遺跡、高田B遺跡で出土している同時期の曲柄鍬と同様、樹種の見られる。荒井広瀬遺跡第1次調査では自然流路跡の東岸側が調査されており、1トレンチ自然流路跡6層では南小泉式の高坏や小型壺などの土師器が出土しているが、木製品は出土していない。今回の調査は自然流路跡の西岸側の調査であり、多量の南小泉式の土師器とともに木製品が出土している。1次調査と2次調査の遺物の出土の状況の違いは、当該期の集落の位置との関連があると考えられる。

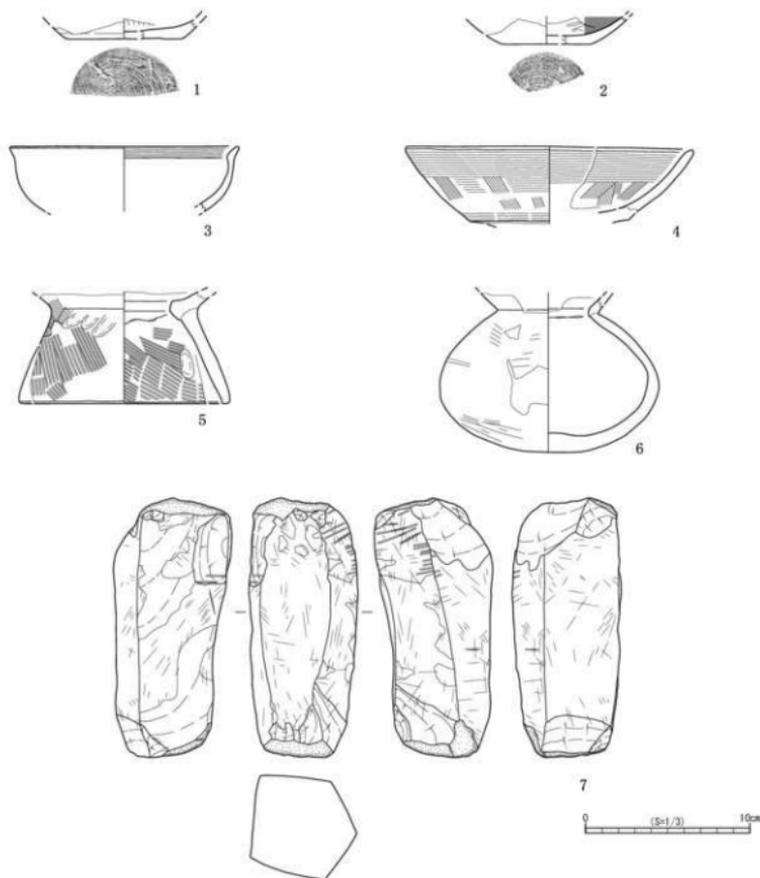
6層でも土師器が出土したが、出土量は5層と比較すると少ない。出土した土師器は高坏や壺、甕、甔などがある。6層から出土した土師器には①調整にハケメがみられる、②頸部に突帯が付く壺(C-25)、③口縁部が複合口縁の鉢状単孔甔(C-33)、などの特徴が見られる。ハケメ調整の複合口縁の鉢状単孔式甔は押口遺跡第1次発掘調査I区SX-1遺構出土の甔(C-20)でも出土しており、他に出土した土師器の特徴などから古墳時代前期塩釜式に位置付けられている。C-26のような器形の小型鉢の出土や調整の特徴なども合わせて、6層出土の土師器は古墳時代前期塩釜式の時期に位置付けられると考えられる。

7層では約2,000年前の津波堆積物の可能性がある砂層が確認されている。10層では弥生土器の小破片が数点出土しており、7層より下位で出土していることから弥生時代中期中葉以前のもので推測される。平成22年度の試掘調査や第1次調査、第2次調査で出土した弥生時代中期中葉の遺物は、古墳時代前期と中期の遺物の出土数と比べると少ない。荒井広瀬遺跡の南西には荒井南遺跡が、東には杓形遺跡があり、荒井南遺跡では弥生時代中期中葉の水田跡が、杓形遺跡では弥生時代中期中葉、古墳時代前期、古代から中世の水田跡が確認されている。今後、荒井広瀬遺跡やその周辺の遺跡の調査結果などをもとに、荒井地区の弥生時代中期と古墳時代の水田域と集落域の位置関係や土地利用などの検討が必要であると考えられる。

引用・参考文献

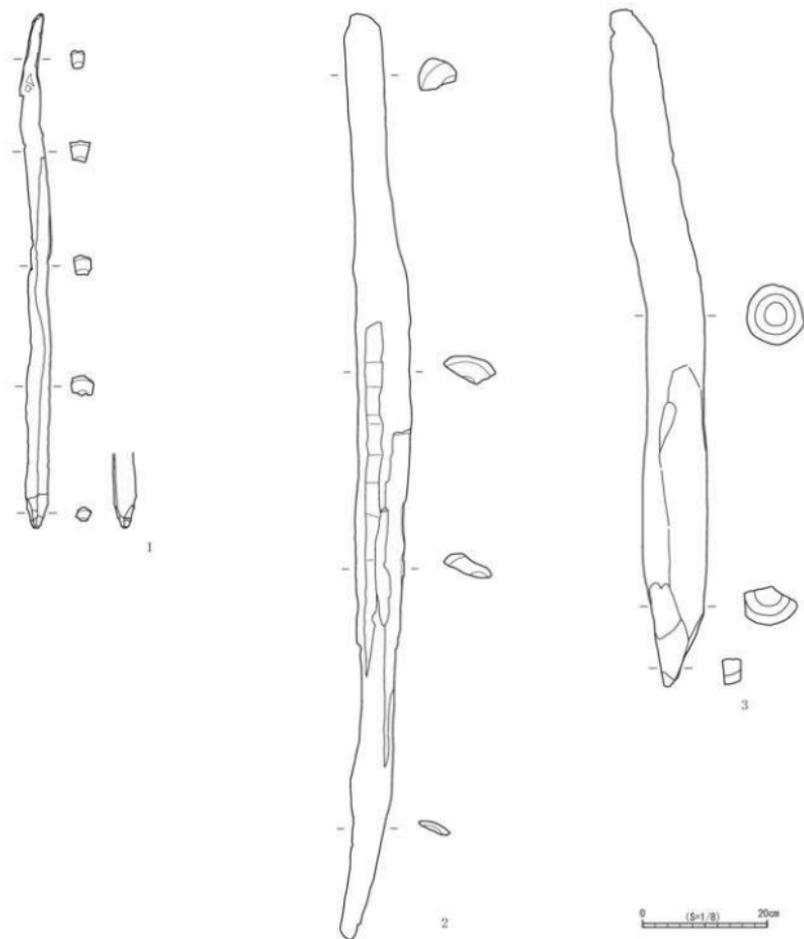
- 青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年」『北杜 一辻秀人先生還暦記念論集一』
- 伊東隆夫・山田昌久 2012 『木の考古学』海青社
- 氏家典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 加藤道男 1983 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』
- 仙台市教育委員会 1996 『中在家南遺跡他—仙台市荒井南土地地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第213集
- 仙台市教育委員会 2000 『高田B遺跡』仙台市文化財調査報告書第242集
- 仙台市教育委員会 2002 『中在家南遺跡(第3・4次)押口遺跡(第3次)発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第255集
- 仙台市教育委員会 2012 『杓形遺跡第2・3次調査—仙台市荒井南土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—』
仙台市文化財調査報告書第397集
- 仙台市教育委員会 2014 『荒井南遺跡第1次調査—仙台市荒井南土地地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—』
仙台市文化財調査報告書第425集

- 仙台市教育委員会 2014 「荒井広瀬遺跡第1次」『川内C遺跡ほか発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第427集
- 仙台市教育委員会 2015 『中在家南遺跡第6次調査ほか—仙台市荒井西土地区画整理事業に伴う
発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告書第434集
- 辻秀人 1994 「東北部における古墳出現期の土器編年—その1 会津盆地—」『東北学院大学論集』
歴史学・地理学第26号
- 辻秀人 1995 「東北部における古墳出現期の土器編年—その2—」『東北学院大学論集』歴史学・地理学第27号
- 松本秀明・吉田正幸 2010 「第1章第3節 仙台市東部杓形遺跡にみられる津波堆積物の分布と年代」
『杓形遺跡—仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ—』
仙台市文化財調査報告書第363集
- 松本秀明 2015 「第4章第2節 荒井西地区の津波堆積物と河川跡埋積堆積物」
『中在家南遺跡第6次調査ほか—仙台市荒井西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—』
仙台市文化財調査報告書第434集



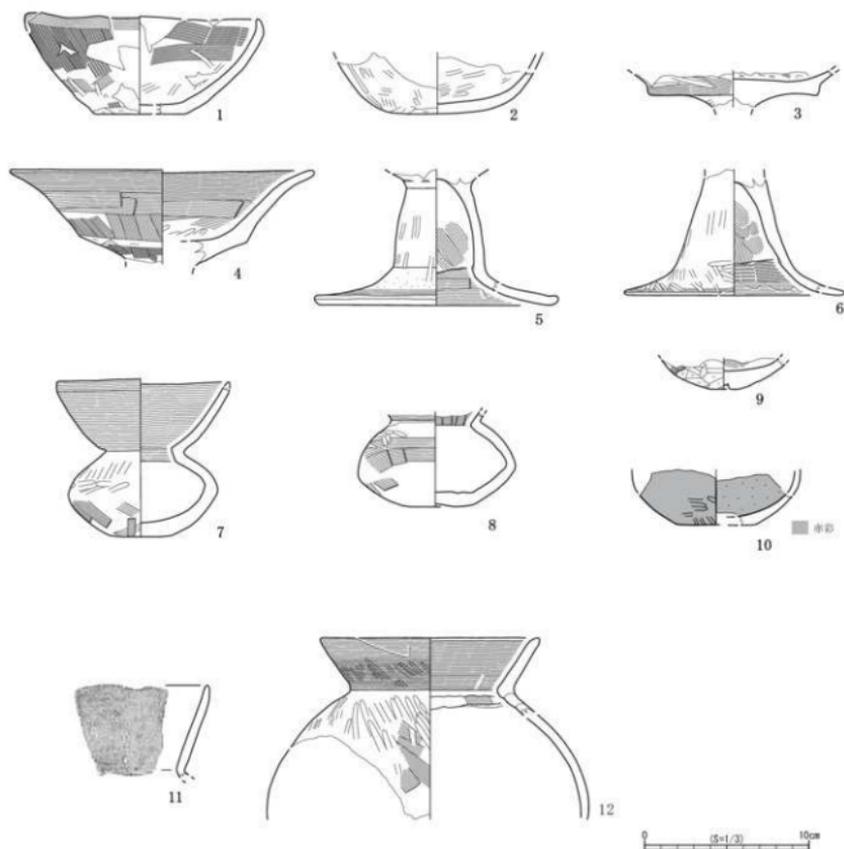
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	D-1	1層	ロクロ土師器	杯	—	(6.8)	(1.2)	ロクロナゲ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ		33-13
2	H-2	2層	ロクロ土師器	杯	—	(5.2)	(1.7)	ロクロナゲ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理		33-14
3	C-1	4層	土師器	杯	(13.8)	—	(4.0)	摩滅	白線部：ヨコナゲ 摩滅		32-2
4	C-2	4層	土師器	高杯	17.4	—	(4.7)	ヨコナゲヘラナゲヨコナゲ	ヨコナゲヘラナゲ	骨針 (少)	—
5	C-3	4層	土師器	器台	—	(12.8)	(6.8)	ハケメヘラナゲリ (一部) → 飯道具 (指ナゲ)	ハケメ 飯道具	骨針 (少)	32-3
6	C-4	4層	土師器	小型壺	—	—	(9.8)	胴部：ヘラミガキ	下部：ヘラナゲリヘラミガキ よく見えない(ナゲナ)	骨針	32-4
	C-5	4層	土師器	—	—	—	—	—	—	写真掲載のみ	32-5
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考	写真図版
					全長	幅	厚さ				
7	K-1	4層	石製品	砥石	15.9	6.5	7.0	920		断面5面有り 上下に自然面有り 剥落面は磨面より古い 書つぶしのキズ有り	33-16

第68図 自然流路跡1～4層出土遺物



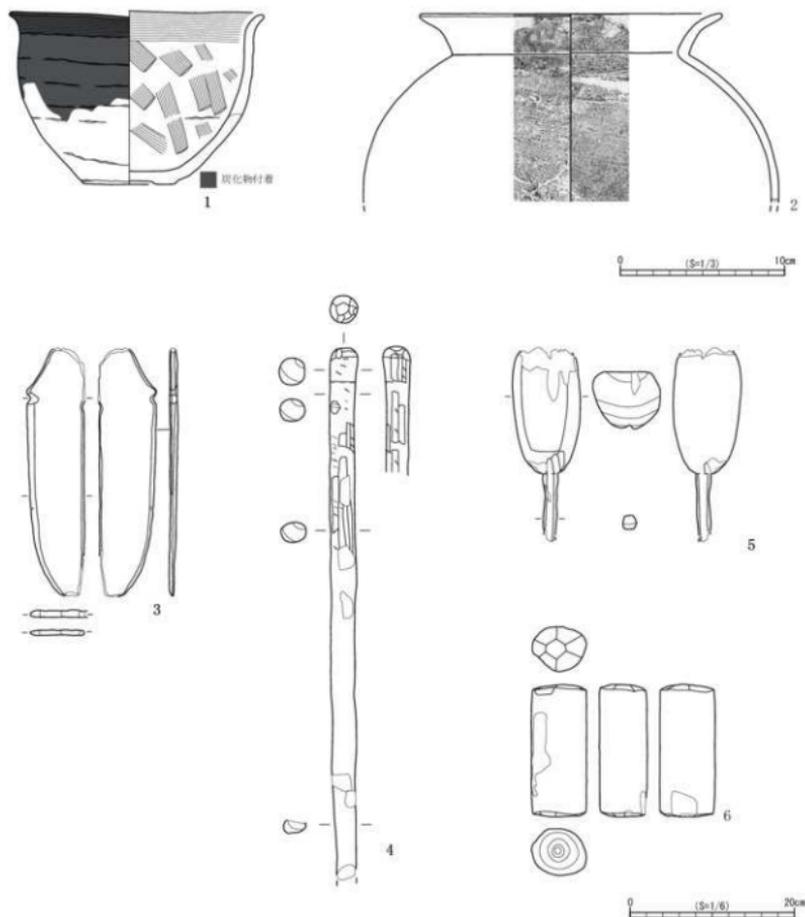
図録 番号	登録 番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真 図版
					全長	幅	厚さ		
1	L-2	6層	木製品	柁	150.0	4.5	4.2	分割材 (半蔵材)	34-4
2	L-17	4層	木製品	柁	166.8	9.6	6.9	半蔵材	35-7
3	L-33	6層	木製品	柁	109.5	10.4	9.6	芯持ち材 先端を加工している	36-4
-	L-32	4層	木製品	加工材				写真掲載のみ	36-2

第 69 図 自然流路跡 4 ~ 6 層出土遺物



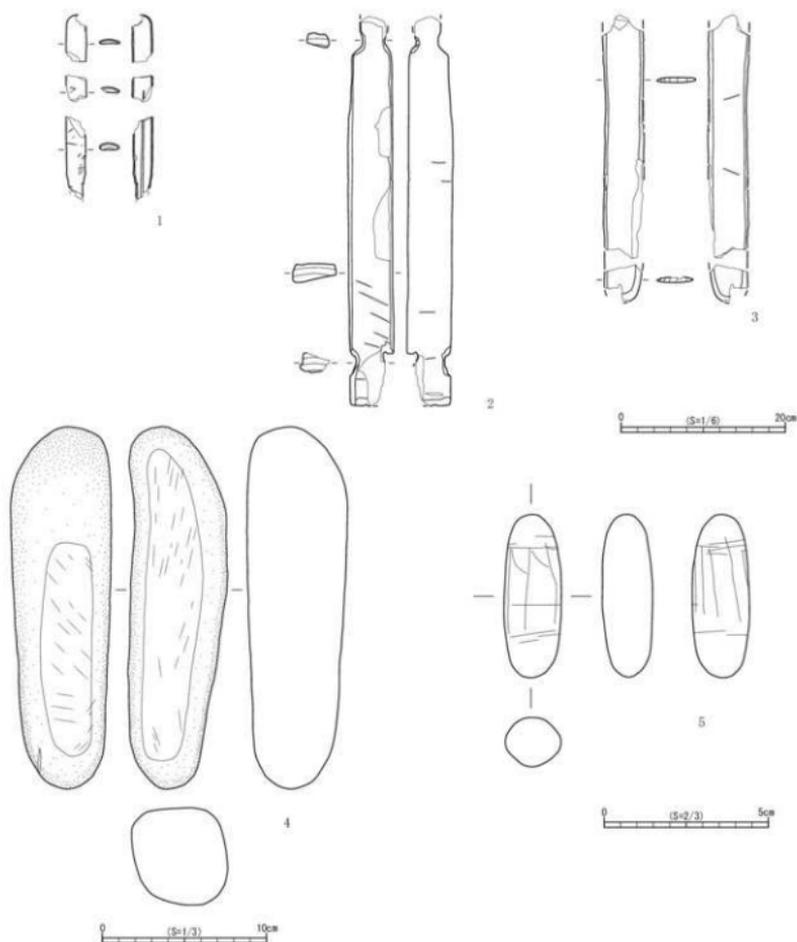
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)		外面調査	内面調査	備考	写真図版		
					口径	高さ						
1	C-6	5層	土師器	杯	(14.0)	5.4	6.2	口縁部：ヨコナダ 体部：ハケメ ヘラナダ→ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ (部分的)	口縁へ体部：ハケメ→ヘラミガキ	骨針 (少)	32-10	
2	C-7	5層	土師器	杯	—	—	(3.8)	ヘラケズリ→ヘラミガキ (底部ヘラケズリ)	ヘラミガキ	骨針 (少)	—	
3	C-11	5層	土師器	高杯	—	—	(2.2)	ヘラナダ	ヘラミガキ	—	32-11	
4	C-8	5層	土師器	高杯	18.3	—	(5.8)	口縁：ヨコナダ 体部：ヘラナダ ヘラケズリ ハケメ	口縁：ヨコナダ 体部：ヘラナダ ミガキ	骨針 (少)	32-6	
5	C-9	5層	土師器	高杯	—	(14.0)	8.3	ヘラミガキ ヨコナダ 腹面：摩滅	ヘラナダ→ヨコナダ 胴上部 指ナダ	骨針 (少)	32-7	
6	C-10	5層	土師器	高杯	—	(13.3)	(7.7)	ヘラミガキ→(ヨコナダ)	指ナダ→ハケメ→ヨコナダ	—	32-8	
7	C-13	5層	土師器	小型壺 (10.4)	3.8	9.7	—	口縁部：ヨコナダ ヘラナダ→ヘラミガキ (下部に工具痕有り) 底部：ヘラケズリ	口縁部：ヨコナダ 体部：よく見え不明	—	32-13	
8	C-14	5層	土師器	小型壺	—	4.2	(5.8)	口縁部：ヨコナダ ヘラナダ→ヘラミガキ	口縁部：ヘラナダ 体部：不明	—	32-14	
9	C-18	5層	土師器	小型壺	—	2.0	(1.9)	ヘラケズリ→ヘラナダ→ヘラミガキ	指ナダ	骨針 (少)	32-18	
10	C-15	5層	土師器	小型壺	—	4.8	(3.3)	摩滅・剥落	ヘラミガキ 赤彩	マメツ 赤彩	赤彩土器 (内外面) 骨針 (少)	32-15
11	C-16	5層	土師器	小型壺	—	—	(5.7)	ヨコナダ	ヘラミガキ	ヨコナダ	ヘラミガキ	32-12
12	C-17	5層	土師器	壺?	13.2	—	11.1	口縁部：ヘラミガキ→ヨコナダ 腹面：ヘラナダ→ヘラミガキ	口縁部：ヨコナダ 体部：ヘラナダ	黒い付着物 (正体不明)	32-16	

第70図 自然流路跡5層出土遺物 (1)



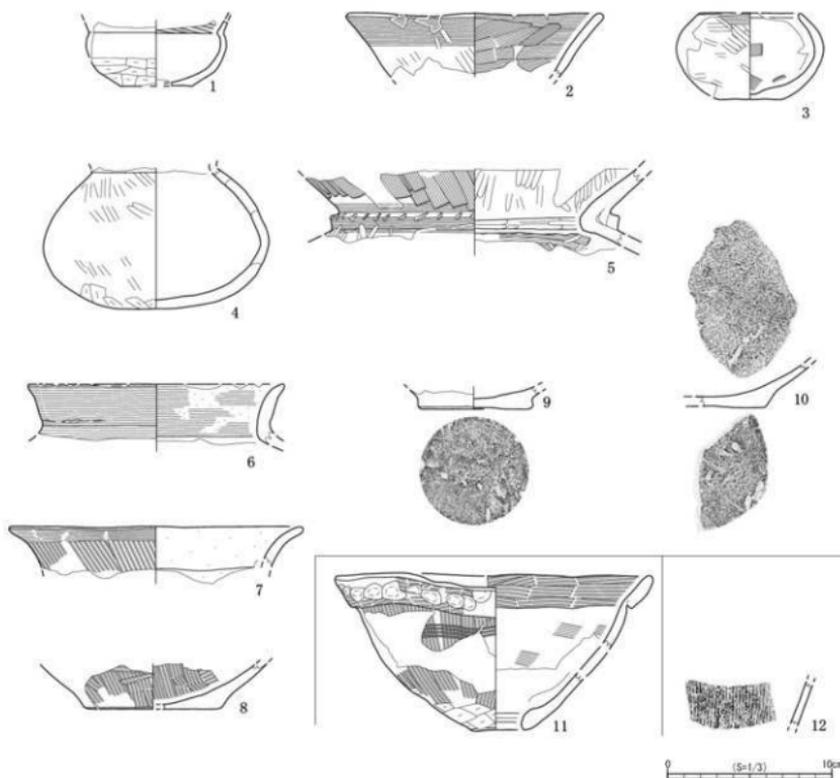
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版	
					口径	底径	器高					
1	C-19	5層	土師器	小型甕	13.2	5.6	10.6	ヨコナヅ 炭化物付着(裏こぼれ)	ヘラナゲ・ヨコナヅ	炭化物付着 粘土跡のつなぎ目明確	32-17	
2	C-21	5層	土師器	甕	18.2	—	131.6	口縁部:ヨコナヅ ハケメ 体部:ハケメ	口縁部:ハケメ 体部:ヘラナゲ ヘラミガキ		32-19	
	C-12	5層	土師器	—	—	—	(4.6)			写真掲載のみ	32-9	
	C-20	5層	土師器	—	—	—	(16.2)			写真掲載のみ	32-21	
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考			写真図版	
					全長	幅	厚さ					
3	I-9	5層	木製品	叉鉏	130.5	7.0	0.9	ナズビ原 広葉樹 粘着材				34-5
4	I-10	5層	木製品	農具柄	165.2	3.2	3.4	脊があった部分は色が濃くなっている	先端と上半分に加工痕			34-6
5	I-14	5層	木製品	櫛	(23.8)	8.3	8.7 1.6	分刺材(半炭材)				35-2
6	I-24	5層	木製品	木鏝	16.2	6.7	5.8	木取目 芯持ち材 継ぎ目が少しあり				35-4
	I-1	5層	木製品	分刺材	—	—	—		写真掲載のみ			34-2

第71図 自然流路跡5層出土遺物(2)



図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考	写真図版
					全長	幅	厚さ				
1	L-15	5層	木製品	器具部材	139.9 (14.1)	2.5	0.8			下部は幅が狭くなる。裏面には中央に樋が切っである	35-3
2	L-13	5層	木製品	不明	147.7	5.4	2.4			板目材	35-1
3	L-27	5層	木製品	不明	135.0	5.0	0.6			板目材	35-6
-	L-3	5層	木製品	不明	-	-	-			写真掲載のみ	34-3
-	L-5	5層	木製品	不明	-	-	-			分別材 写真掲載のみ	34-7
-	L-31	5層	木製品	不明	-	-	-			写真掲載のみ	36-3
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考	写真図版
					全長	幅	厚さ				
4	K-2	5層	礎石器	磨石	22.2	5.9	6.1	1320		磨面→2面 (正面・1面 側面1面) 磨底有り (スス付着あり)	34-1
5	K-3	5層	礎石器	磨石	5.0	1.7	1.5	250		表面は全面すりしている。線刻有り (全面) 文様構成は不明 古墳時代か	33-15

第72図 自然流路跡5層出土遺物(3)



図版番号	登録番号	層位	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	C-26	6層	土師器	コナテ土師器(鉢)	—	(4.4)	(4.0)	口縁部：ヘラミガキ？ 下部：ヘラケズリ	口縁部：ハケメ 体下部：摩滅		33-4
2	C-23	6層	土師器	皿？	(15.2)	—	(3.9)	口縁部：ヨコナデ 体部：ヘラミガキ	口縁部：ヨコナデ ヘラナデ (ケズリに近い)		33-1
3	C-29	6層	土師器	小型無取皿	(6.0)	(3.7)	5.3	口縁部：ヨコナデ (部分的) 体部：ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ (密)	体部：ヘラナデ	骨針 (少)	33-7
4	C-24	6層	土師器	皿	—	—	(8.6)	体部：ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	体部：ヘラナデ (計道できず)		33-2
5	C-25	6層	土師器	皿	—	—	(5.3)	口縁部：ヨコナデヘラナデ 脚部：ヨコナデヘラミガキ	口縁部：ヘラミガキ	頸部に刻み目のある凸部	33-3
6	C-31	6層	土師器	壺	(15.4)	—	(4.19)	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコナデ 摩滅 剥落		33-9
7	C-32	6層	土師器	壺	17.6	—	3.5	口縁部：ヨコナデ 摩滅 ハケメ	口縁部：摩滅		33-10
8	C-22	6層	土師器	壺	—	(7.0)	(2.8)	体部：ハケメ	体部：ハケメ		32-20
9	C-27	6層	土師器	壺小破	—	6.6	1.4	底部：紐痕か3点あるいは4点	ヘラナデ		33-5
10	C-30	6層	土師器	壺？	—	—	(2.6)	ヘラミガキ？	ハケメ	底面 粗ガラ面？	33-8
11	C-33	4～9層	土師器	瓶	19.1	3.4	9.7	口縁部：ハケメ 肩ササメ 体部：ハケメヘラケズリ	口縁部：ハケメ 体部：ヘラナデ	口縁部接合口縁	33-12
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	部位	法量 (cm)			備考		写真図版
—	L-34	6層	木製品	組立	—	全長	幅	厚さ	写真掲載のみ		36-5
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	部位	外面調整			内面調整	備考	写真図版
12	B-1	10層	弥生土師器	壺小	—	編文			ヘラナデ		32-1
図版番号	登録番号	層位	種別	器種	部位	法量 (cm)			備考		写真図版
—	C-34	試掘I区埋戻土	土師器	—	—	把手の幅	—	—	写真掲載のみ		33-11

第73図 自然流路跡6層・その他の層の出土遺物



1. 自然流路跡完掘状況（北東から）



2. 自然流路跡確認状況（北東から）



3. 調査区北壁断面（南から）



4. 自然流路跡5層遺物出土状況（東から）



5. 自然流路跡6層遺物出土状況（北東から）

写真図版 29 荒井広瀬遺跡第2次調査（1）



1. 5層 曲柄二又楸出土状況（東から）



2. 5層 農具柄出土状況（北から）



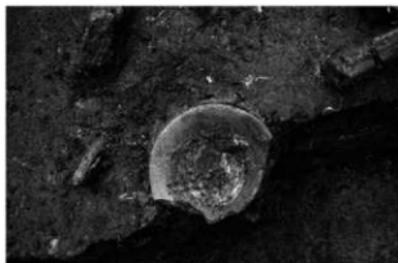
3. 5層 木鐘出土状況（東から）



4. 5層 横槓出土状況（東から）



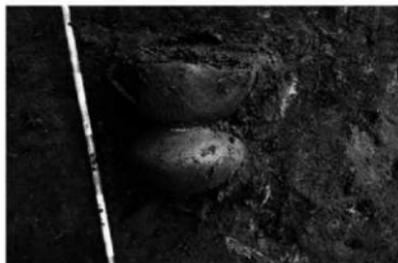
5. 5層 土師器甕出土状況（南から）



6. 5層 土師器高坏出土状況（東から）

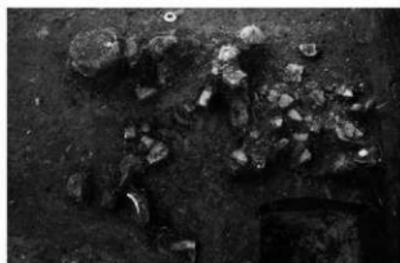


7. 5層 土師器甕出土状況（東から）



8. 5層 土師器壺出土状況（北から）

写真図版 30 荒井広瀬遺跡第2次調査（2）



1. 6層 土師器出土状況（北東から）



2. 6層 土師器出土状況（北東から）



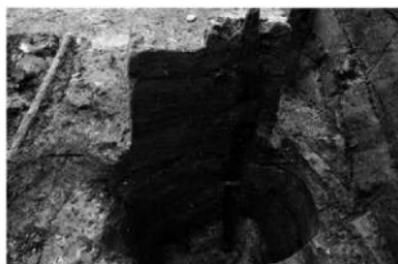
3. 調査作業風景



4. L 2 杭断面（北から）



5. L 17 杭断面（北から）



6. L 33 杭断面（東から）



7. 液状化現象確認状況（南東から）



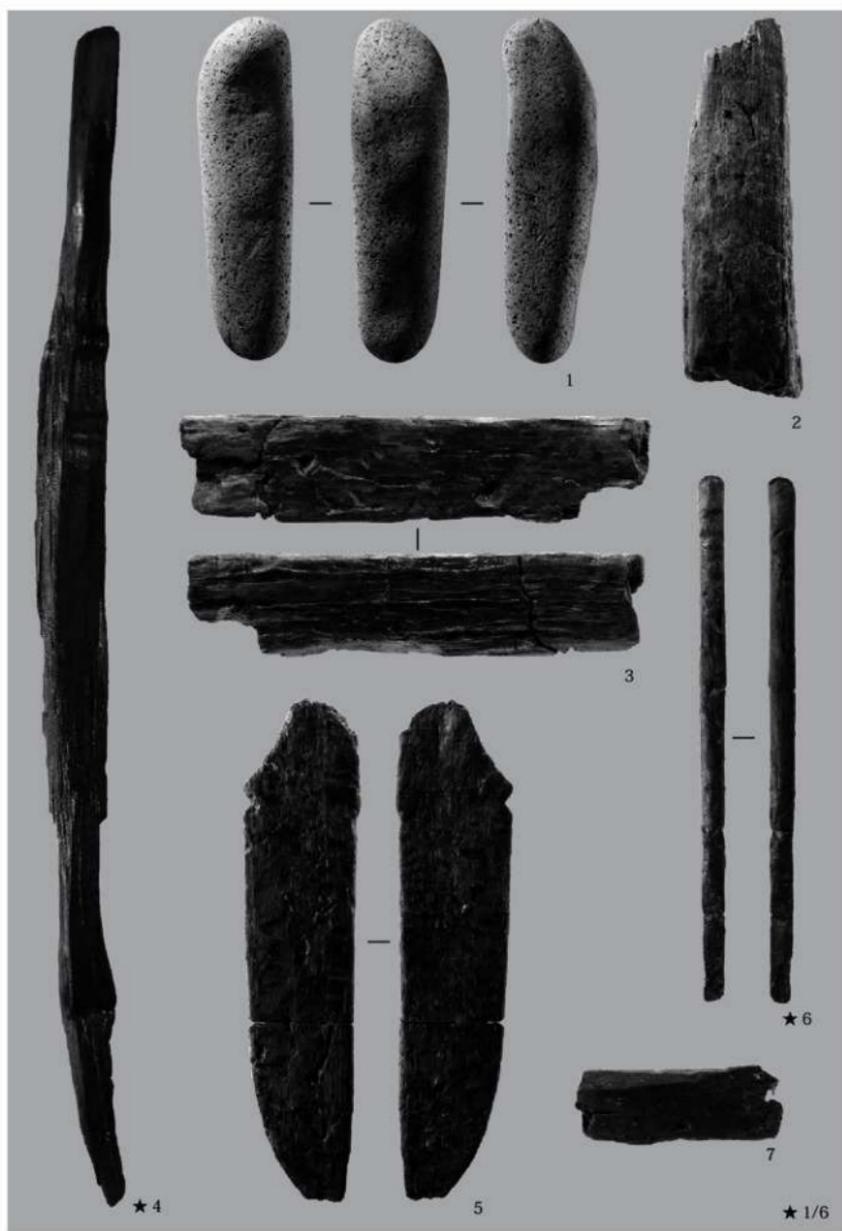
8. 液状化現象確認状況断面（南から）



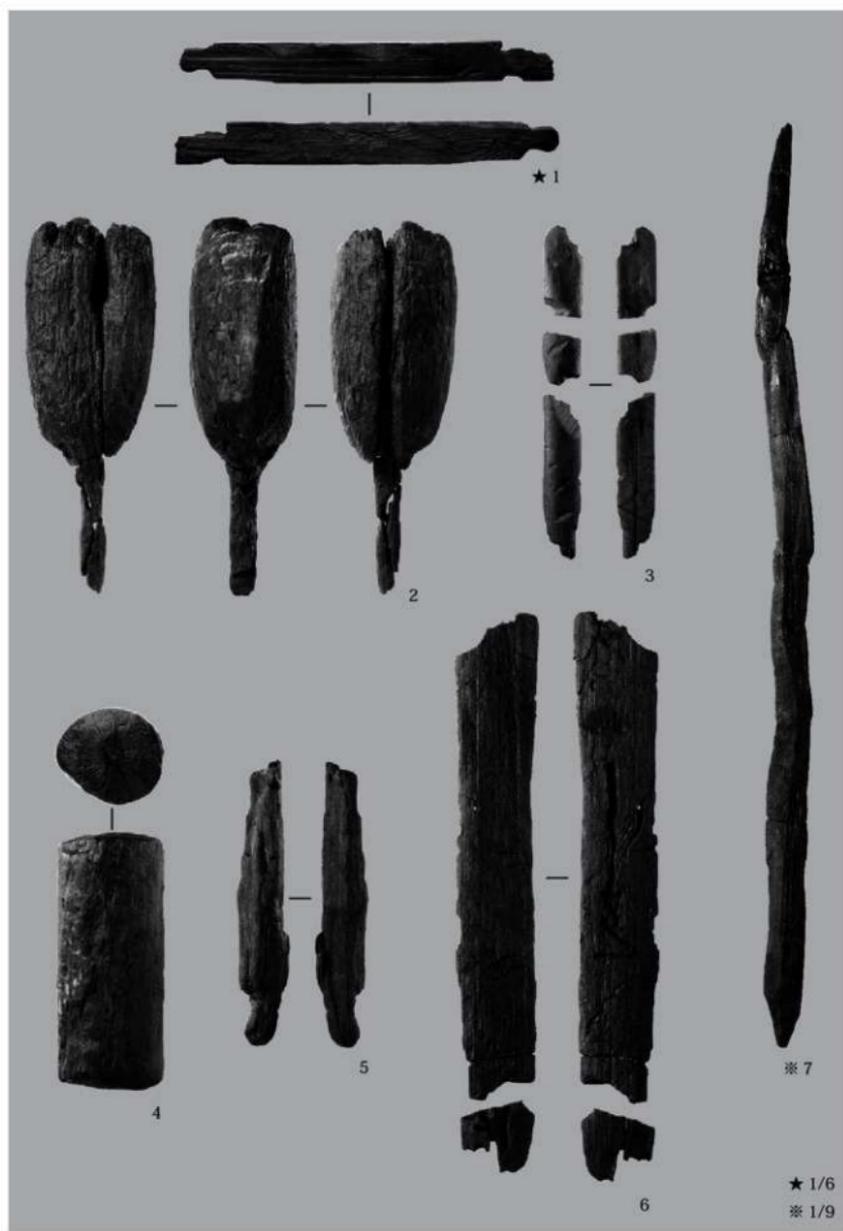
写真図版 32 荒井広瀬遺跡第2次出土遺物(1)



写真図版33 荒井広瀬遺跡第2次出土遺物(2)



写真図版 34 荒井広瀬遺跡第2次出土遺物 (3)



写真図版 35 荒井広瀬遺跡第2次出土遺物 (4)



写真図版 36 荒井広瀬遺跡第2次出土遺物 (5)

6. 荒井広瀬遺跡第2次発掘調査で出土した木製品の樹種同定

吉川純子(古代の森研究会)

荒井広瀬遺跡は仙台市東部の名取川と広瀬川左岸に形成された自然堤防と後背湿地に所在する。第2次発掘調査では自然流路から木製品が出土した。自然流路跡の5層からは南小泉式の土御器が検出されていることから古墳時代中期と考えられる。3層と4層からは時期を特定できる遺物が検出されなかったがその上位の2層は灰白色火山灰が堆積しており2層が平安時代とみられることから3層と4層は古墳時代中期より新しく平安時代より古いと考えられる。自然流路から出土した木製品について、5層から10点、4層から3点、3層から1点、合計14点の樹種同定を実施した。試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取しプレパラートに封入して生物顕微鏡で観察・同定した。

木製品の樹種同定結果を表1に示す。14点のうち最も多かったのはハンノキ属ハンノキ節3点で、コナラ属クヌギ節、ニレ属が各2点、モミ属、ヤナギ属、クリ、クワ属、ケヤキ、ナナカマド属、ミズキが各1点であった。鎌や横槌にはクヌギ節が利用され農具などに樹種選択の傾向がみられるが、その他器種で優先的に利用されている樹種はなかった。樹種に偏りが見られなかった理由は様々な器種を樹種同定に供したことから考えられる。また、板や杭など緻密な樹種選択を必要とせず遺跡周辺で簡易的に調達する傾向がある器種が多いことも要因と考えられる。

仙台平野の古墳時代中期の出土例では、農具に比較的クヌギ節が多く利用されており名取川下流域でクヌギ節の鋳出土例が多い(仙台市教育委員会 2010)が、これに対し農具柄にはニレ属やクマシデ属などさまざまな樹種が利用されていて本遺跡でも付近で調達するようなハンノキ節が用いられていた。杭、板材などは仙台平野全体としてはモミ属、クリ、コナラ節などが多いものの様々な樹種が利用される傾向にあり、本遺跡でもニレ属、ハンノキ節、クワ属、ヤナギ属など河川沿いに生育している種類が多いことから遺跡周辺での調達が多かったことが考えられる。

表1 荒井広瀬遺跡出土木製品の樹種

試料番号	出土層		器種	樹種
L2	4	平安時代より古い	杭	ニレ属
L3	5	古墳時代中期	板状木製品	ハンノキ属ハンノキ節
L5	5	古墳時代中期	材片(器具部材?)	ハンノキ属ハンノキ節
L9	5	古墳時代中期	曲柄二又鎌	コナラ属クヌギ節
L10	5	古墳時代中期	農具柄	ハンノキ属ハンノキ節
L13	5	古墳時代中期	板	モミ属
L14	5	古墳時代中期	横槌	コナラ属クヌギ節
L15	5	古墳時代中期	器具部材	ミズキ
L17	3	平安時代より古い	杭	クワ属
L24	5	古墳時代中期	木錘	ナナカマド属
L27	5	古墳時代中期	板状木製品	クリ
L31	5	古墳時代中期	板	ニレ属
L32	4	平安時代より古い	加工材	ケヤキ
L33	4	平安時代より古い	杭	ヤナギ属

以下に同定された樹種の記載をおこなう。

モミ属 (*Abies*) : 晩材部の幅やや広く早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。放射細胞は垂直・水平壁ともに厚い放射細胞からなり垂直壁は串団子状となり上下縁辺部に不規則に突出した形の細胞が見られじゅす状末壁である。分野壁孔は小型のスピ型で1分野に2~4個存在する。

ヤナギ属 (*Salix*) : 中型の管孔が単独ないし2,3個放射方向に複合して年輪内にほぼ平等に分布する散孔材で、晩材部で多少道管径が小さくなり年輪界は比較的明瞭である。道管は単穿孔で放射細胞は単列で異性、道管放射細胞間壁孔が比較的大きくハチの巣状である。

ハンノキ属ハンノキ節 (*Alnus sect. Gymnothursus*) : 年輪界はやや不明瞭な散孔材で中型の管孔が単独ないし数個放射方向に連なって年輪内にほぼ均等に分布する。集合放射細胞の部分で年輪界が樹芯方向に大きくへこむ。道管の穿孔板は階段状で10段以上あり頻繁に出現する。放射細胞は平伏細胞からなる同性で、単列と幅の広い集合放射細胞があるが集合放射細胞がかなり不明瞭な試料もある。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) : 年輪最初に大道管が数列配列しその後徐々に径を減じて小管孔が火炎状に配列する環孔材。道管は単穿孔でチロースが多く放射細胞は単列同性である。本遺跡で出土した試料はかなり黒く着色していた。

コナラ属クスギ節 (*Quercus sect. Aegilops*) : 大道管が数列配列したのち厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材で道管の穿孔板は単一で道管内にしばしば着色物質が溜まっている。放射細胞は同性で単列と複合状で幅広く高い放射細胞がある。

クヤキ (*Zelkova serrata* Makino) : 年輪はじめに大きい道管が1列並び小さい道管が放射状、花びら状に多数集合して連なる環孔材で道管は単穿孔があり、小道管の内壁にらせん肥厚がある。放射細胞は同性時々異性で1~7細胞幅程度で上下縁辺に結晶がみられる。

ニレ属 (*Ulmus*) : 年輪はじめに大きい道管が1列並び小さい道管が放射状に集合して連なる環孔材で道管は単穿孔があり、小道管の内壁にらせん肥厚がある。放射細胞は同性で1~7細胞幅程度で比較的滑らかな紡錘形で放射細胞に時々結晶がみられる。

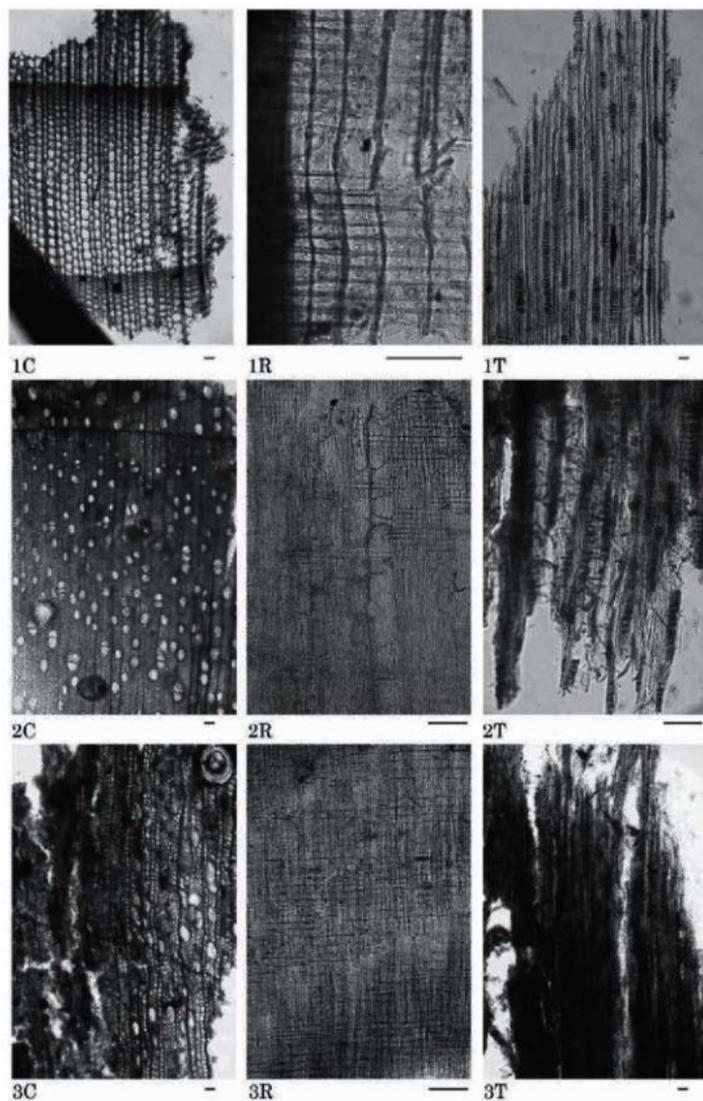
クワ属 (*Morus*) : 年輪初めに大きい道管が並び晩材部に向かって径を減じ小道管が数個つらなる環孔材で道管は単穿孔、小道管内壁にらせん肥厚がある。放射細胞は異性で1-6細胞幅。クワ属の幹材は小道管が斜め放射線方向につらなるが、本試料は放射方向に2個程度しか連っていないことから根材の可能性もある。

ナナカマド属 (*Sorbus*) : やや小さい道管がほぼ単独で年輪内に平等に分布する散孔材で道管は単穿孔。道管内壁にらせん肥厚があり、放射細胞は同性で1-2細胞幅である。

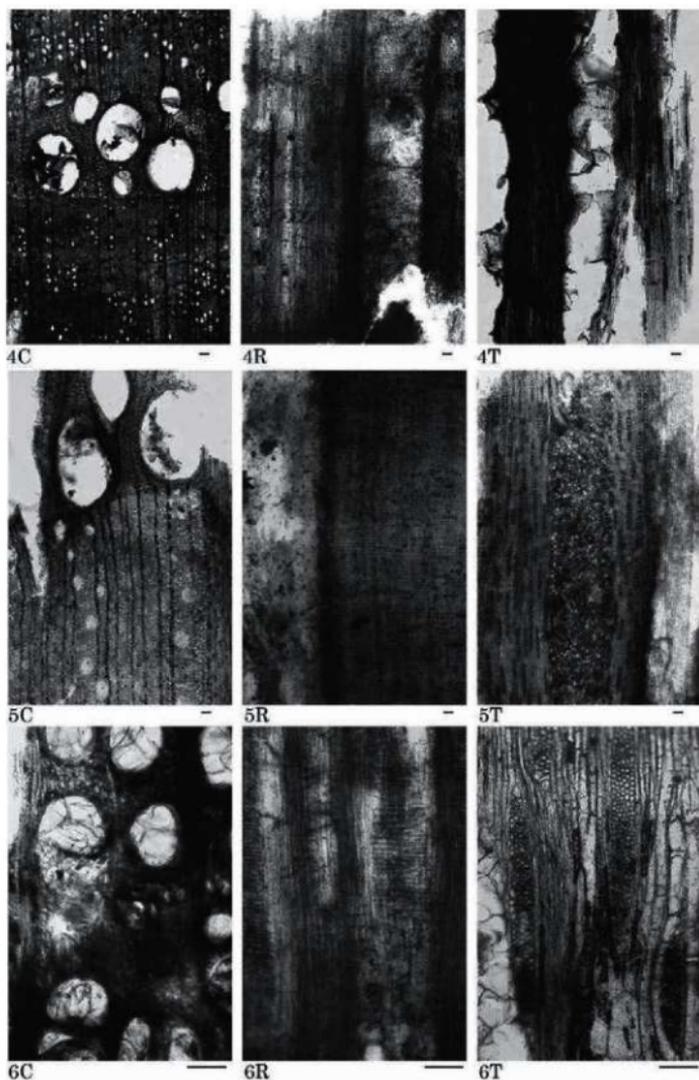
ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley) : やや角張ったやや小さい道管が単独ないし数個放射方向に複合して年輪初めはやや密に晩材部ではやや径が小さくなり数が少なくなるため年輪界は比較的明瞭な散孔材。道管に段数が多い階段穿孔がある。放射細胞は異性で単列と1-数列の細胞幅があり、長い単列部を介して放射細胞同士がつながる場合がある。

引用文献

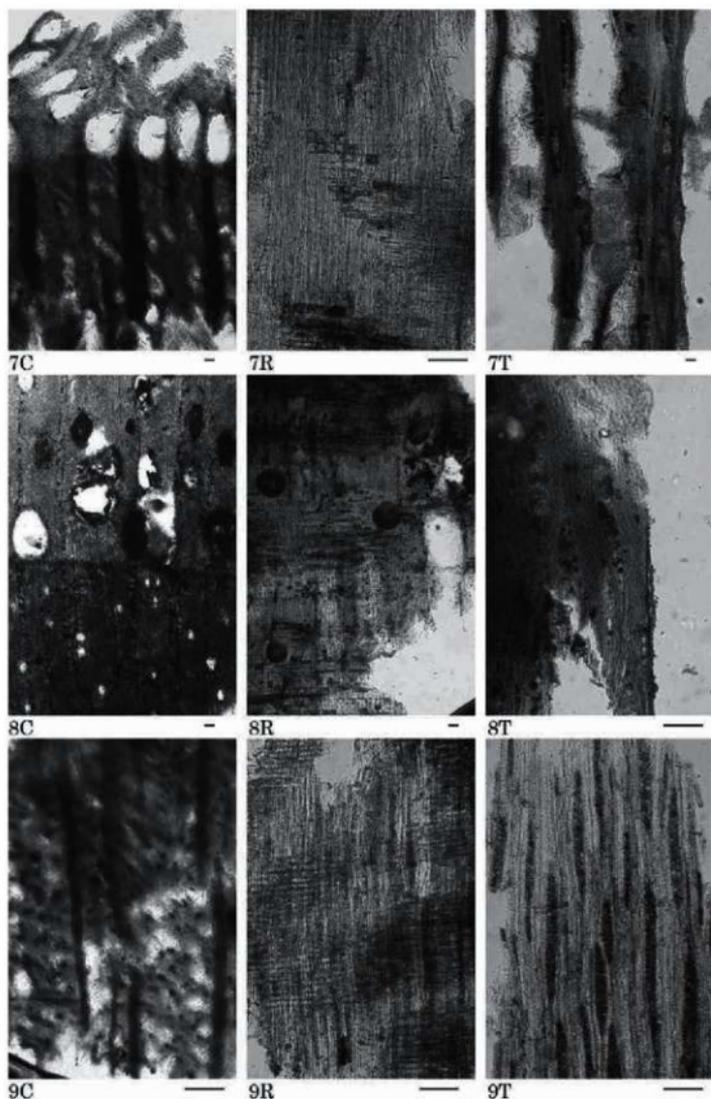
仙台市教育委員会, 2010. 第36章第13節仙台北野中北部の遺跡出土木製品の樹種. 沼向遺跡第4~34次調査第9分冊. 仙台市教育委員会, 519-580.



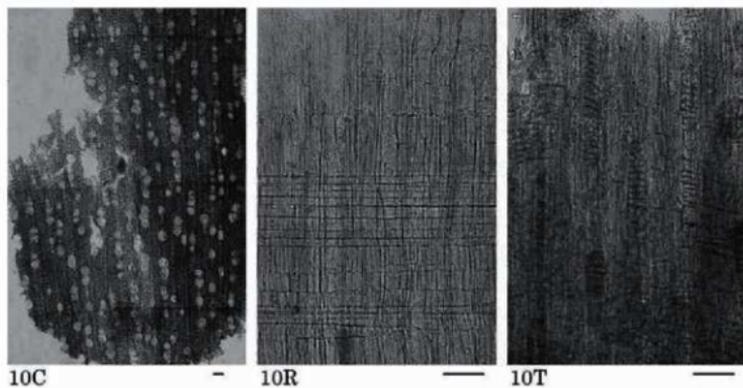
図版1 荒井広瀬遺跡自然流露出土木製品の顕微鏡写真
 1.モミ属(L-13) 2.ヤナギ属(L-33) 3.ハンノキ属ハンノキ節(L-3)
 C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm



図版2 荒井広瀬遺跡自然流路出土木製品の顕微鏡写真
4.クリ(L-27) 5.コナラ属クスギ節(L-9) 6.ニレ属(L-2)
C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm



図版3 荒井広瀬遺跡自然流路出土木製品の顕微鏡写真
 7.ケヤキ(L:32) 8.クワ属(L:17) 9.ナナカマド属(L:24)
 C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm



図版4 荒井広瀬遺跡自然流路出土木製品の顕微鏡写真

10.ミズキ(L・15)

C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0.1mm

第3節 南小泉遺跡

I. 遺跡の概要

南小泉遺跡は、仙台市の東部、JR 仙台駅から東南約 3.5 km の地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より北へ約 3 km の場所にあり、「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野の自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は東西約 2 km、南北約 1 km に及んでおり、仙台市内でも最大級の規模を持つ遺跡である。

遺跡内には遠見塚古墳を含み、また、西部では若林城跡、北西部で養種園遺跡と接している。周辺には法領塚古墳、蛇塚古墳、猫塚古墳などが分布している。本遺跡は、これまでに 81 回の調査が実施されており、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。昭和 14 年の霞目飛行場拡張工事の際に弥生時代と古墳時代の遺構と遺物が発見され、両時代の集落跡として知られており、東北地方南部の古墳時代中期の土師器の標式になっている遺跡である。

II. 第 82 次調査

1. 調査要項

遺跡名 南小泉遺跡

(宮城県遺跡登録番号 01021)

調査地点 仙台市若林区遠見塚 1 丁目 241-1

調査期間 平成 29 年 9 月 7 日(木)～9 月 14 日(木)

調査対象面積 150.99 m²

調査面積 56 m²

調査原因 研修センター建築工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市文化財課調査調整係

担当職員 調査調整係 主事 三浦一樹

文化財教諭 及川 基

専門員 渡部弘美



第 74 図 南小泉遺跡の位置と周辺の遺跡

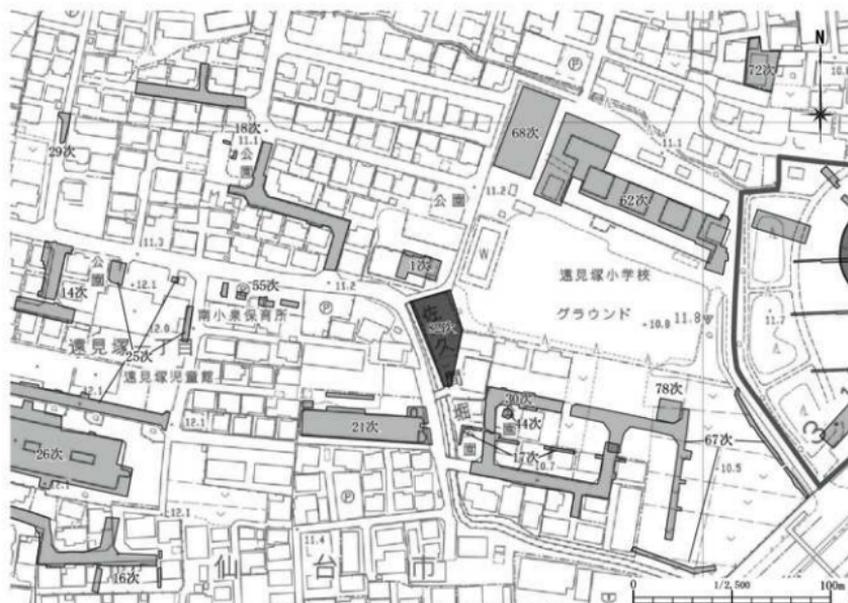
2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成 29 年 7 月 24 日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」（平成 29 年 7 月 25 日付 H29 教生文第 102 - 228 号で回答）に基づき、平成 29 年 9 月 7 日(木)～9 月 14 日(木)に実施した。対象地内に南北約 7.0 m × 東西約 8.0 m、面積約 56 m² の調査区を設定した。重機を用いて現表土と盛土、I～V 層の除去を行い、基本層 VI 層上面 (GL-0.8～1.1 m) で遺構検出作業を実施した。その結果、調査区西側で小溝状遺構を 10 条検出した。なお、調査区東側は現代の攪乱が著しく、遺構は確認できなかった。

調査区平面図は S = 1/40、断面図は S = 1/20 で作製し、記録写真はデジタルカメラにより撮影した。記録終了後、重機で締め固めを行いながら埋戻しをおこない、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査で確認した基本層は大別 6 層である。I・IV 層は 2 層に細分される。遺構検出面は VI 層上面である。現表土の厚さは 0.2～0.3 m 程度であり、その下に盛土が 0.2～0.4 m ほど確認された。VI 層は、調査区東側に



第75図 南小泉遺跡第82次調査区位置図

向かうにつれて西側よりも検出面が約0.1～0.3mほど落ち込む。

基本層Ⅰ層は、調査区南側中央の攪乱を境に西側全体に広く分布するが、東側では確認されなかった。東側の同一レベルでは、南壁断面をみるとⅡ～Ⅴ層が堆積する様子が確認された。東側の大部分は後世の攪乱などにより当該層は確認できなかったが、盛土以前は当該層が調査区全体に堆積していたものと考えられる。しかし、その後の耕作により西側半分がⅠ層におきかえられたものと推測される。

I a 層：10YR5/1 褐灰色シルトを主体とし、酸化鉄を少量含む。水田耕作土と考えられる。層厚約10～20cmである。

I b 層：10YR4/3 にぶい黄褐色シルトを主体とし、2.5YR7/2 灰黄色シルトを斑状に、酸化鉄を粒状にごくわずかに含む。耕作土と考えられる。層厚約10～20cmである。

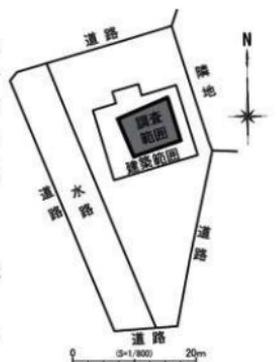
II 層：2.5Y3/1 黒褐色シルトを主体とし、酸化鉄と2.5Y5/2 暗灰黄色シルトを斑状に少量含む。層厚約10～15cmである。

III 層：2.5Y7/4 浅黄色シルトを主体とし、酸化鉄をII層よりも多く含む。層厚は約3～15cmである。

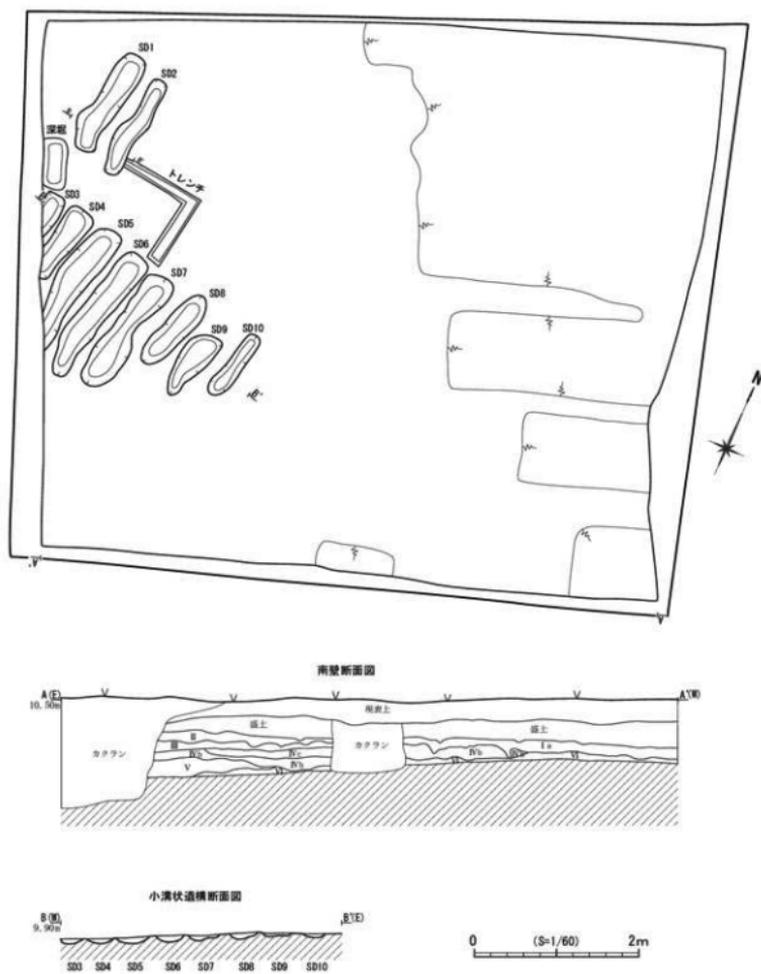
IV a 層：2.5Y6/3 にぶい黄色シルトを主体とし、酸化鉄はII層よりも少ない。層厚約5～10cmである。

IV b 層：2.5Y6/2 灰黄色シルトを主体とし、酸化鉄はIV a 層よりも少ない。層厚約3～15cmである。

V 層：2.5Y5/1 黄灰色シルトを主体とし、2.5Y7/2 灰黄色シルトをブロック状に多量に含む。層厚は約10～20cmである。



第76図 南小泉遺跡第82次調査区配置図



第77図 南小泉遺跡第82次調査区平・断面図

VI 層：2.5V7/6 明黄褐色シルトを主体とする。遺構検出面である。層厚は不明である。

4. 発見遺構と出土遺物

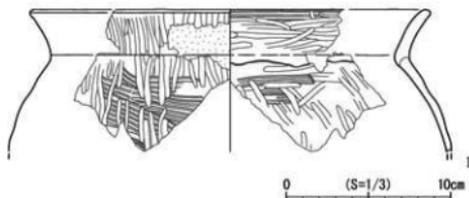
今回の調査では、調査区西側において南北方向へ延びる小溝状遺構をVI層上面で10条検出した。以下にその概要を掲載する。

遺構名	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	遺構名	長さ (m)	幅 (cm)	深さ (cm)
SD1	1.3	13～33	5	SD6	1.75	20～32	10
SD2	1.3	10～12	3.5	SD7	1.6	23～40	6
SD3	(0.35)	12	5	SD8	1.1	30	5
SD4	(1.0)	15～40	6	SD9	0.9	20～40	3
SD5	(1.5)	30～40	5	SD10	0.9	20	4

() の数値は検出長を表す

小溝状遺構の堆積土は褐灰色シルトを主体とし、VI層由来の土を斑状に少量含む。なお当初 SD1・3 と SD2・4 は連続する2条の溝と考えていた。よって、それらを切る新しい溝状遺構が北西-南東方向に伸びていることを想定し、遺構の掘り込み確認のため深掘りをおこなったが、遺構は確認されなかった。同様に、小溝状遺構精査終了後、SD1・2の東隣に遺構を想定し、トレンチを設定し掘り下げたが、遺構は確認されなかった。

遺物は、SD5から土師器片が1点出土した。ほかに、基本層V・VI層や盛土、攪乱部分から少量の土師器片が出土し、IV層中出土の土師器を1点図化した(第78図)。



図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口徑	口径	器高				
1	C-1	VI層	非ロクロ土師器	甕	(24.0)	—	(8.7)	ハケメ→ヘラミガキ	ハケメ →ヘラミガキ ヘラナダ	電卓で口縁部破片 骨針 (9)	38-2

第78図 第82次調査区出土遺物

5. まとめ

今回の調査地点は、南小泉遺跡のほぼ中央部に位置し、遠見塚小学校の南西隣にある。周辺の調査では、堅穴住居跡などが多数検出されているが、今回の調査では南北に伸びる小溝状遺構を10条検出したが、遺物が出土していないため、遺構の時期は不明である。

また、小溝状遺構が検出されたVI層の上層には、耕作土と考えられるI b層が堆積している。このことから本遺構が、上層の耕作に伴い形成された可能性もある。

引用・参考文献

- 仙台市教育委員会 1983 『南小泉遺跡 —青葉女子学園移転新営工事地内調査報告—』
仙台市文化財調査報告書第55集
- 仙台市教育委員会 2017 「南小泉遺跡第80次」『杏形遺跡他 —発掘調査報告書—』
仙台市文化財調査報告書第458集



1. 調査区南壁土層断面（北東から）

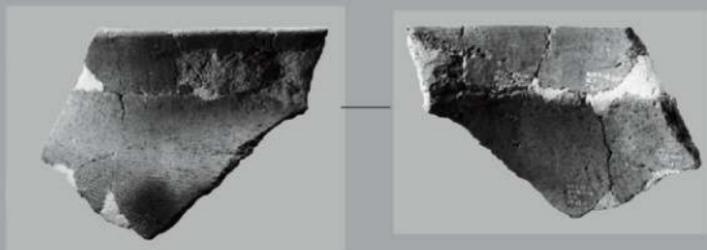


2. 調査区西壁土層断面（北東から）

写真図版 37 南小泉遺跡第 82 次調査（1）



1. 調査区全景遺構完掘状況（北から）



2. 出土遺物 (S=1/2)

第4章 太白区の調査

第1節 郡山遺跡

I. 遺跡の概要

郡山遺跡は、仙台市太白区郡山二～六丁目に所在する。北を広瀬川、南を名取川に挟まれ、その両河川の合流点から北西約2kmに位置する。遺跡の範囲は東西約800m、南北約900mで、面積は約60haに及んでいる。その一部は、平成18年に「仙台郡山官衙遺跡群 郡山遺跡 郡山廃寺跡」として国史跡に指定されている。

郡山遺跡は、昭和54年(1979)に初めて発掘調査が行われ、昭和55年(1980)から継続的な調査が行われてきた。官衙は「I期官衙」と「II期官衙」の2時期がある。I期官衙は7世紀中頃から後半にかけて機能し、陸奥国の拠点となる柵跡と考えられる。そのI期官衙を取り壊し、建物や堀などの施設の基準を真北方向に変えて設けられたのが、II期官衙である。II期官衙は7世紀末から8世紀初頭にかけて機能し、多賀城建設までの陸奥国府跡と考えられている。

郡山遺跡の周辺には、西側に長町駅東遺跡と西台畑遺跡が位置しており、6世紀末葉から8世紀初頭の竪穴住居跡が600軒以上発見されている。また、南西約1.5kmには大型掘立柱建物跡が方形区画の溝とその内部に規則性をもって配置されていることが確認された大野田官衙遺跡があり、建物の規模や出土遺物などから、郡山II期官衙との関係性が考えられている。

II. 第270次調査

1. 調査要項

遺跡名	郡山遺跡(宮城県遺跡登録番号01003)		
調査地点	仙台市太白区郡山3丁目109-1		
調査期間	平成29年4月20日(木)～5月1日(月)		
調査対象面積	108.23㎡		
調査面積	84.7㎡		
調査原因	共同住宅建築工事		
調査主体	仙台市教育委員会		
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係、 整備活用係		
担当職員	調査調整係 主事	三浦 一樹	
	専門員	渡部 弘美	
	整備活用係 主事	五十嵐 愛	
		文化財教諭	三浦 昂也



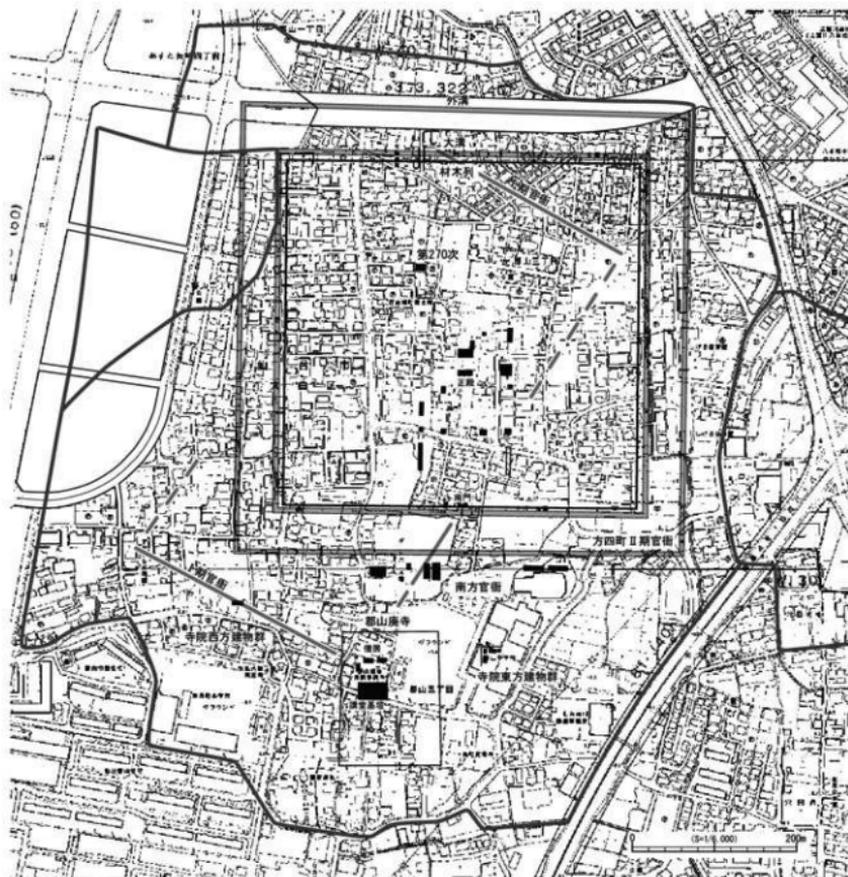
番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	郡山遺跡	官衙跡、 寺院跡	自然堤防	縄文、弥生、 古墳、古代
2	西台畑遺跡	集落跡、 栗植帯	自然堤防	縄文、弥生、 古墳、古代
3	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生、古墳、 古代
4	北目城跡	城跡跡、 集落跡、 水田跡	自然堤防	縄文、弥生、 古墳、古代、 近世
5	矢束遺跡	敷布地	自然堤防	古墳、古代

第79図 郡山遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成29年2月13日付で申請者より提出された「理蔵文化財の取扱いについて(協議)」(平成29年2月27日付H28教生文第103-108号で回答)に基づき、平成29年4月20日(木)～5月1日(月)に実施した。

対象地内に南北7.7m×東西11m、面積84.7㎡の調査区を設定した。排土置き場などを考慮し、調査区を東西に二分し調査を進めた。



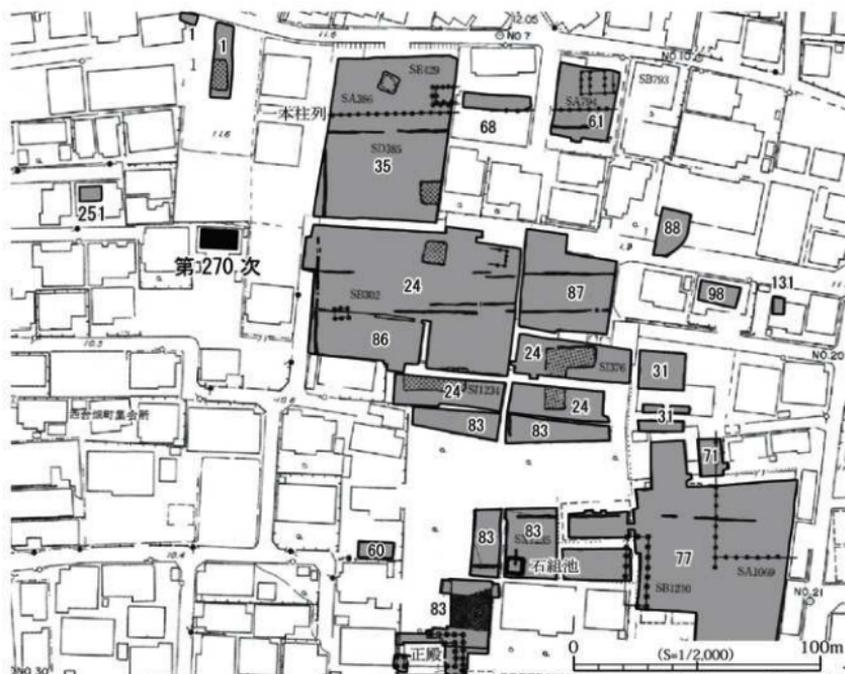
第80図 郡山遺跡調査地点位置図(1)

調査区東側の南北7.7m×東西6.6mの範囲を、重機を用いて盛土および基本層Ⅰ・Ⅱ層を除去し、基本層Ⅲ層上面(GL-1.7～1.8m)で遺構確認作業を行った。しかし、遺構は検出されなかったため、北壁に沿って幅0.4m、深さ0.5mのトレンチを入れ、下層の遺構確認を行ったものの遺構は検出されなかった。よって、写真記録や平面・断面図の作成を行ったのち、重機による埋戻しを行い東側の調査を終了した。

その後、調査区西側の南北7.7m×東西6.3mの範囲を、東側調査区と同様に掘削を行い遺構確認作業を行ったが、遺構は検出されなかった。しかし、L字形を呈する長方形の落ち込みを2か所確認したため、精査を行った。その後、東側調査区と同様にトレンチを北壁にそって入れ、遺構確認を行ったが遺構は検出されなかった。よって、写真記録や平面・断面図の作製を行った。

遺構平面図はS=1/40で作製し、断面図は調査区の北壁、東壁、西壁、南壁の一部でS=1/20で作成した。記録写真はデジタルカメラにより撮影した。

5月1日に西側調査区の埋め戻しを、重機を用いて行い、調査を終了した。



第81図 郡山遺跡調査地点位置図(2)

3. 基本層序

対象地内の盛土は約0.65～1.6mであり、調査区東側に向かうにつれ薄くなる。今回の調査で確認した基本層は大別で3層、細別で16層である。遺構検出面はⅢ層上面(標高9.1～9.2m)で、遺構検出面であるⅢ層上面までの深度は約1.6mである。

I層 黒褐色を主体とするシルトで、明褐色のシルトブロックを含む宅地化以前の畑地耕土と考えられる。層厚は約4～60cmである。なお、本層は西側調査区では削平を受けており確認されなかった。本層はさらにa～e層の5層に細分される。

Ⅱ層 暗褐色～褐灰色の粘質シルトで、一部グライ化している。酸化鉄を斑状に含む。部分的に炭殻が出土した。水田耕土と考えられる。層厚は約10～25cmである。本層はさらにa～f層の6層に細分される。

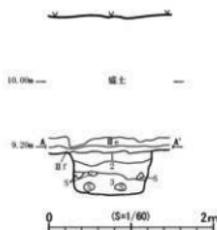
Ⅲ層 褐色～褐灰色の砂質シルトを主体とする遺構検出面と考えられる層である。酸化鉄を帯状に多量に含む。層厚は不明である。本層はさらにa～e層の5層に細分される。

4. 発見遺構と出土遺物

西側調査区において、L字形を呈する長方形の落ち込みを2か所確認した。しかし、今回の遺構検出面であるⅢ層が、周囲の過年度調査区の遺構確認面の標高よりも1m程度低いことから、後世の擾乱と判断した。



第82図 第270次調査区配置図



層位	色調	土質	備考・混入物
II e	10YR4/1 褐灰色	シルト	酸化鉄を少量含む。
II f	7.5YR4/2 灰褐色	シルト	酸化鉄を少量含む。炭化物を微量に含む。
1	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	明黄褐色砂質シルトを底状にやや多く含む。20～30cm程度の炭を少量含む。酸化鉄を微量に含む。
2	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	炭を底状に非常に多く含む。明黄褐色砂質シルトを底状に少量含む。酸化鉄を微量に含む。礫を少量含む。
3	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	炭を底状に、2層よりも多く含む。10～15cmの礫を多量に含む。明黄褐色砂質シルトを底状に微量に含む。酸化鉄を微量に含む。

第84図 郡山遺跡第270次調査区断面図(2)

遺物はII層下部～III層上部、攪乱から少量の土師器・須恵器片が出土した。

5. まとめ

今回の調査地点は郡山遺跡の1期官衙の中核部から北西側にあり、第24次調査の西側、第86次調査の北西側に位置する。第24次調査では多数の掘立柱建物跡や堅穴住居跡など、第86次調査では鍛冶工房跡などが検出されているが、今回の調査では遺構は確認されなかった。また、遺物もごく少量であった。近隣の住民の方によれば50～60年前に周辺で土取りが行われており、また今回のIII層上面の標高が、周辺の調査区の遺構確認面から1m程度低いことも考慮すると、本来の遺構検出面は削平されたと考えられる。

引用・参考文献

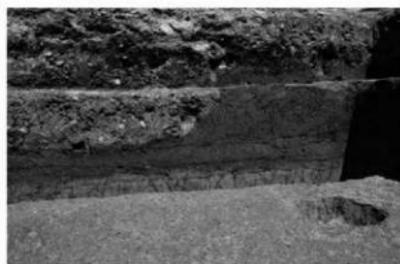
- 仙台市教育委員会 1983 『郡山遺跡Ⅲ』 仙台市文化財調査報告書第46集
 仙台市教育委員会 1991 『郡山遺跡XⅠ』 仙台市文化財調査報告書第146集
 仙台市教育委員会 2005 『郡山遺跡発掘調査報告書 一総括編一』 仙台市文化財調査報告書第283集
 仙台市教育委員会 2015 『郡山遺跡35』 仙台市文化財調査報告書第438集



1. 調査区東側遺構検出状況（南から）



2. 調査区東側北壁土層断面1（南東から）



3. 調査区東側北壁土層断面2（南西から）



4. 調査区東側東壁土層断面（西から）



5. 調査区西側完掘状況（南東から）



6. 調査区西側北壁土層断面（南東から）



7. 調査区西側土層西壁断面（東から）



8. 調査区西側南壁土層断面（北西から）

第2節 富沢遺跡

I. 遺跡の概要

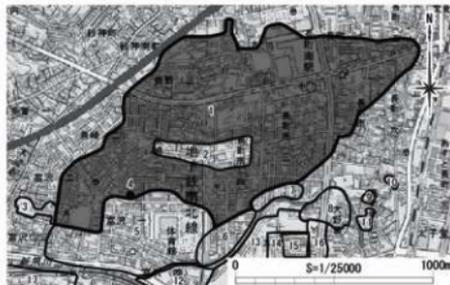
富沢遺跡は、仙台市の南東部、太白区の富沢・長町南・泉崎・鹿野等に位置し、水田跡を中心とする総面積約90haに及ぶ広大な複合遺跡である。遺跡の南には名取川、北東には広瀬川が流れ、その両岸には自然堤防が発達している。青葉山丘陵と高館丘陵の間から平野部に流れ込む名取川の downstream 西半部は扇状地性の沖積平野で、左岸は郡山低地、右岸は名取低地と呼ばれる。富沢遺跡は、郡山低地の中央西寄り、広瀬川の自然堤防、名取川の支流で青葉山丘陵の太白山付近から流れる荒川の自然堤防に囲まれた後背湿地に立地する。

発掘調査は、現在までに149回を数える調査が継続的に実施されており、弥生時代から近世に至る水田跡が重層的に検出されている。また、1987年～1988年に実施された第30次調査では、旧石器時代の遺構と遺物が確認され、さらに樹木や植物化石、動物のフン、昆虫化石等が出土し、当時の自然環境を知るうえでの貴重な資料となっている。第30次調査範囲の一部は仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）において保存公開されている。

II. 第150次調査

1. 調査要項

遺跡名	富沢遺跡 (宮城県登録遺跡番号:01369)
調査地点	仙台市太白区長町南3-35-1、 35-10
調査期間	平成29年10月17日(火)～ 10月19日(木)
調査対象面積	227.46㎡
調査面積	51㎡
調査原因	診療所併用住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部 文化財課調査調整係
担当職員	係長 平岡 亮輔 主事 三浦 一樹



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器～中世
2	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、 後背湿地	縄文～古墳、平安、近世
3	富沢清水遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
4	教塚古墳	円墳	後背湿地	古墳
5	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、 後背湿地	縄文～中世
6	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～中世
7	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
8	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代～近世
9	長町南遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
10	長町六丁目遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
11	新田遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
12	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～奈良
13	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世
14	大野田官衙遺跡	官衙跡	自然堤防	古代
15	袋南遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳～平安
16	大野田遺跡	祭壇、集落跡	自然堤防	縄文～古代
17	富沢船跡	船跡	自然堤防	中世

第85図 富沢遺跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成29年9月22日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて(協議)」(平成29年9月26日付H29教生文第103-042号で回答)に基づき実施した。対象地周辺は発掘調査事例が少ないものの、古代条里制に関わる大畔畔が想定される地点であった。

建築範囲内に東西13.1m×南北3.9mの調査区を設定し、重機により盛土およびⅠ～Ⅲ層を除去した。その後、調査区北壁に沿って幅80cmの側溝を設け、Ⅷ層までの掘り下げを行い、断面観察をおこなったが、いずれの層においても大畔畔は認められなかった。



第 86 図 富沢遺跡第 150 次調査区位置図

平面図は $S=1/50$ 、断面図は $S=1/20$ で作製し、写真記録はデジタルカメラにておこなった。記録作成後、現場を申請者側に受け渡し、調査を終了した。

3. 基本層序

今回の調査では、盛土（0.7～0.8 m）の下に基本層を8層確認した。

I層：黄灰色粘土。酸化鉄を斑状に多く含む。層厚は約10～15cmである。

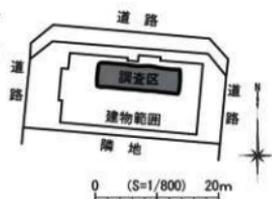
下面には起伏がある。現代水田耕作土である。

II層：黄灰色粘質シルト。酸化鉄を帯状に、I層よりも多く含む。層厚は約4～10cmである。下面に起伏があることから、水田耕作土の可能性はある。

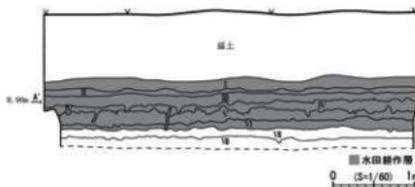
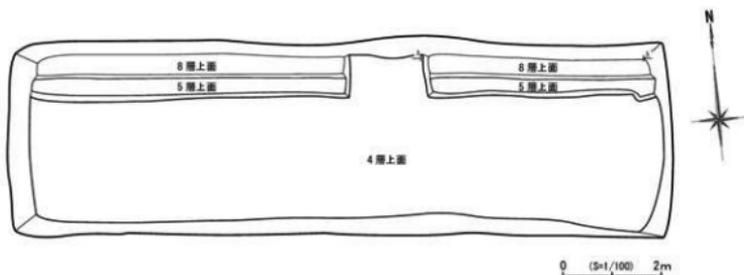
III層：褐灰色粘土。マンガン粒を上部に多く含む。また、酸化鉄を粒状にII層より少なく含む。炭化粒をごくわずかに含む。層厚は約10～20cmである。下面は起伏が激しく、直下層を巻き上げているため、水田耕作土と推定される。

IV層：黄灰色粘土。マンガン粒を多く含むがIII層よりは少ない。また、酸化鉄を斑状および粒状に多く含むが、II層よりは少ない。層厚は約3～18cmである。下面は起伏が激しいことから、水田耕作土と推定される。

V層：黒褐色粘土。マンガン粒を多く含む。また、酸化鉄を斑状および粒状に少量含む。灰白色粘土を斑状に少量



第 87 図 富沢遺跡第 150 次調査区配置図



層位	色調	土質	備考・混入物
I	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	酸化鉄を斑状に多量に含む。旧水田耕作土(現代)。
II	2.5Y5/1 黄灰色	粘質シルト	酸化鉄を帯状に、I層よりも多量に含む。酸化鉄集積層。
III	10YR5/1 褐灰色	粘土	マンガン鉄を上部に多量に含む。酸化鉄を粒状に多量に含む(1層<2層<3層)。炭化粒をごくわずかに含む。
IV	2.5Y5/1 黄灰色	粘土	酸化鉄を斑状および粒状に多量に含む(2層よりは少ない)。マンガン粒を、2層よりは少なく含む。
V	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	マンガン粒を多量に含む。酸化鉄を斑状・粒状に少量含む。灰白色粘土を斑状に少量含む。
VI	10YR6/1 褐灰色	粘土	酸化鉄を斑状に、一部ブロック状に少量含む。マンガン粒を少量含む。
VII	10YR3/1 黒褐色	粘土	2層をブロック状にわずかに含む。酸化鉄を粒状に少量含む。斑状に少量含む。マンガン粒を少量含む。
VIII	2.5Y7/2 灰黄色	砂	マンガン粒を多量に含む。酸化鉄を斑状に多量に含む。黄灰色粘土をブロック状にわずかに含む。

第88図 富沢遺跡第150次調査区平・断面図

含む。層厚は約5～20cmである。下面にやや緩やかながら起伏があることから、水田耕作土の可能性はある。

VI層: 褐灰色粘土。酸化鉄を斑状およびブロック状に少量含む。また、マンガン粒を少量含む。層厚は約4～15cmである。下面にやや緩やかながら起伏があることから、水田耕作土の可能性はある。

VII層: 黒褐色粘土。酸化鉄を斑状および粒状に少量含む。また、マンガン粒を少量含む。VII層をブロック状にごくわずかに含む。層厚は約10～15cmである。

VIII層: 灰黄色砂。マンガン粒および酸化鉄を斑状に多量に含む。また黄灰色粘土をブロック状にごくわずかに含む。層厚は不明である。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査で確認された基本層I～VI層は、その層相から水田耕作土あるいはその可能性があると考えたが、畦畔は確認できなかった。遺物はVII層中から弥生中期頃と考えられる土器片が3点出土した。無節Rの燃糸文が施された後、磨きを加えられる。土器内面も磨きが認められる。

5. まとめ

今回の調査地点は富沢遺跡の南東側に位置し、袋東遺跡に隣接する。これまで北東側において第65調査、西側において第72次調査がおこなわれている。古代条里制に関わる大畦畔が想定される地点であったが今回の調査では畦畔は検出されなかった。遺物は弥生土器片がVII層より3点出土した。



1. 調査区北壁土層断面（西側・南から）



2. 調査区北壁土層断面（西側・南から）



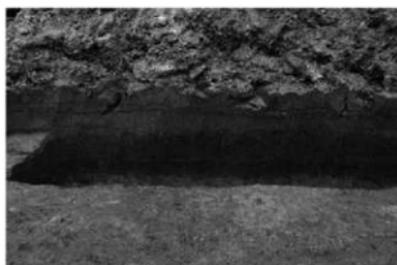
4. 調査区北壁土層断面（西側・南から）



6. 調査区北壁土層断面（東側・南から）



3. 4層上面水田耕作土検出状況（西から）



5. 調査区北壁土層断面（東側・南から）



7. 調査区北壁土層断面（東側・南から）

写真図版 40 富沢遺跡第150次調査

第3節 下ノ内遺跡

I. 遺跡の概要

下ノ内遺跡は、仙台市街の南部、郡山低地西側の太白区富沢4丁目に所在する。遺跡は地下鉄南北線の高架から、河川改修工事によって付け替えられた新築川と旧築川の分岐地点までで、東西約390m、南北約260mの範囲の標高約12mの自然堤防上に立地する。

下ノ内遺跡は昭和56年(1981年)に地下鉄および付帯する市道の建設工事に伴い初めて発掘調査が行われ、その後富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う道路建設や、共同住宅建設などに伴いこれまでに8次の調査が行われている。発掘調査の結果、縄文時代中期末から後期前葉の竪穴住居跡や土器埋設遺構、土坑、遺物包含層などが検出されている。検出された竪穴住居跡は、直径約4～6mの円形を呈し、中央からは土器埋設部と石組炉で構成される複式炉が検出されている。弥生時代は土坑が検出されている。出土した遺物やその様相から天王山式の時期の竪穴と考えられている。古墳時代から古代にかけては竪穴住居跡と掘立柱建物跡、掘立柱列、溝跡、小溝状遺構群などが検出されている。遺構の年代は4世紀から10世紀代まで確認されており、各遺構からは土師器を中心に須恵器、鉄製品などが出土している。中世から近世にかけては、幅3mを超える大型の溝跡のほか土坑、掘立柱建物跡などが検出されており、溝跡に囲まれた屋敷跡であると考えられている。各遺構からは瀬戸、唐津、および在地産の陶器、青磁や初期伊万里などの磁器、瓦質土器の播鉢、茶臼などの石製品が出土している。

下ノ内遺跡の周囲では、富沢駅周辺土地区画整理事業が行われており、事業に先だって1995(平成7)年から2013(平成25)年にかけて継続的に発掘調査が行われている。下ノ内遺跡は区画整理事業地の西側にあたる。また地下鉄南北線建設に伴い、当遺跡およびその北側を中心に発掘調査が多数行われている。それ以外にも下ノ内遺跡の周囲では各種開発工事などに伴い数多くの発掘調査が行われている。

下ノ内遺跡の東隣の伊古田遺跡<5>からは、縄文時代の土偶などが多数出土し、古墳時代前期から平安時代にかけての竪穴住居跡等や中世の方形竪穴遺構などが検出されている。六反田遺跡<4>からは縄文時代中期中葉～後期初頭の竪穴住居跡と土坑群、掘立柱建物跡、遺物包含層などが検出され、縄文土器や石器などが多数出土している。また古墳時代から古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが検出されており、土師器や須恵器、円面硯、墨書土器、銅製品などが出土している。また古墳の周溝と、古墳に隣接する形で6世紀中頃の墳丘



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～中世
2	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
3	富沢遺跡	包含地・水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世
4	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代・近世
5	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古墳～古代
6	伊古田B遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	古墳～古代
7	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古墳～古代
8	大野田官街遺跡	集落跡・官街跡	自然堤防	縄文～中世
9	元袋遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	弥生・古代～近世
10	大野田遺跡	祭祀・集落跡	自然堤防	縄文～古代
11	王ノ壇遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文～中世
12	皿屋敷遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	古代～中世
13	泉崎浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～古代・近世
14	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安
15	山口遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世
16	下ノ内浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文～中世
17	富沢館跡	城館跡	自然堤防	縄文・中世
18	殿治屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	平安

第89図 下ノ内遺跡・大野田古墳群の位置と周辺の遺跡

と周溝を持たない木棺墓が検出されており、棺内からは銅鏡と管玉、ガラス小玉等が、壁面の掘り込みからは土師器壺の口縁部に、土師器甕が入れ子状に収められた状態で出土している。大野田古墳群<2>では数多くの古墳が発見されているが、いずれも埴輪を伴う高塚古墳であると考えられている。前方後円墳である鳥居塚古墳以外はすべて円墳で、隣接する王ノ塚遺跡や六反田遺跡にもまたがっており、総数は44基を数える。墳丘と主体部が残存していた春日社古墳では墳頂の主体部から革盾と鉄製の鎌、矛などが出土した。いずれの古墳も5世紀中頃から6世紀初頭にかけて造営されたものと考えられている。伊古田B遺跡<6>からは915年に十和田火山の噴火に伴い降灰した十和田A火山灰に覆われた水田跡や、古代の堅穴住居跡、土坑などが検出され、土師器などが出土している。袋前遺跡<7>からは古墳時代の堅穴住居跡と古代の掘立柱建物跡、溝跡、小溝状遺構群などが検出されている。袋前遺跡の東端部分に重なりつつ六反田遺跡から大野田古墳群にまで跨り、建物群を方形に取り囲む形で一連の溝跡が配置されていることが土地区画整理事業に伴う発掘調査で確認されている。溝跡の規模は幅約3m以上で、東辺で南北約262m、西辺が約249m、北辺が約194m、南辺が約195mで、この区画溝の範囲内に6棟の大型の掘立柱建物や柱柱の掘立柱建物が規則性をもって配置されていることが確認されている。時期は8世紀前葉に比定され、北東約1.5kmに位置する国指定史跡である郡山遺跡と関連する官衙遺跡と考えられることから、この範囲は大野田官衙遺跡<8>として2009(平成21)年に新たに登録された。元袋遺跡<9>からは古代の堅穴住居跡のほか近世の堀跡と溝跡、掘立柱建物跡などが検出され、15世紀から19世紀までの陶器や磁器、漆器碗や杭、部材などの木製品や石臼や硯等の石製品、刀などの鉄製品が出土している。堀跡で区画された建物群は屋敷跡の一部であるとされる。大野田遺跡<10>からは縄文時代後期前葉の時期を中心に配石遺構、埋設土器遺構などが多数検出されており、縄文土器のほか大型の土偶などが多数出土している。また古墳時代から古代の堅穴住居跡も検出されており、墨書土器などが出土している。王ノ塚遺跡<11>と皿屋敷遺跡<12>からは古代の堅穴住居跡のほか、中世の方形の区画溝で囲われた屋敷跡と、王ノ塚古墳を利用した園庭跡、屋敷跡とも接続する道路遺構などが検出



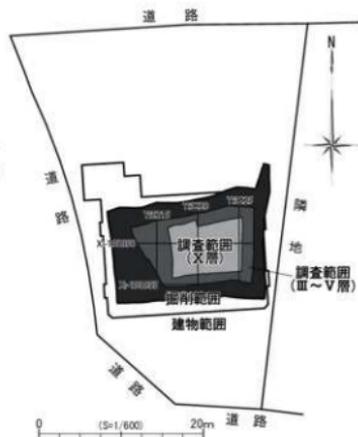
第90図 下ノ内遺跡第9次調査区位置図

されており、陶磁器や石製品などが出土している。富沢遺跡<3>では旧石器時代の針葉樹を中心とした湿地林が、焚火跡と考えられる炭化物の集中部や石器、種子などの植物遺体とともに発見され、旧石器時代の環境を復元する観点からも注目を集め高い評価を得ている。また弥生時代から古墳時代、近現代に至るまで連続と水田耕作が行われていたことが判明している。山口遺跡<15>では縄文時代早期末葉の土器が出土しているほか、弥生時代の水田跡も検出されている。下ノ内浦遺跡<16>では縄文時代早期中葉の住居跡の可能性のある堅穴状遺構や後期の配石遺構や土器埋設遺構などが検出されている。また弥生時代の堅穴遺構と墓と考えられる土坑が検出されており、石包丁と大型蛤刃石斧が出土している。富沢館跡<17>には最近まで土塁が残存しており、土地区画整理事業に伴い発掘調査が行われ、土塁を巡る堀跡や門跡と考えられる建物跡等が検出された。鍛冶屋敷前遺跡<18>からは縄文時代の炉跡や土坑などが検出されており、後・晩期の土器と剥片石器などが出土している。また古代の堅穴住居跡も検出されており、土師器や須恵器とともに大量の鉄滓が出土している。

II. 第9次調査

1. 調査要項

遺 跡 名	下ノ内遺跡 (宮城県遺跡登録番号01425)
調 査 地 点	仙台市太白区富沢4丁目74街区1・2・3画地
調 査 期 間	29年4月11日(火)～平成29年8月1日(火)
調 査 対 象 面 積	308.27㎡
調 査 面 積	226.56㎡
調 査 原 因	共同住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市文化財課調査調整係
担 当 職 員	主事 及川謙作 妹尾一樹



第91図 下ノ内遺跡第9次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は平成28年10月7日付で申請者より提出された共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の取扱いについて(協議)」(平成28年10月19日付H28教生文第103-063号で通知)に基づき実施した。対象地は下ノ内遺跡の北側で、1981～4年にかけて調査が行われた第1次調査の第1区の北東側と一部重複しており、第IV区の西側にあたる。

調査に先立ち事業者と平成29年4月10日付で契約を締結し、本発掘調査は4月11日から行った。対象地内に東西19.5m、東西12.5mの調査区を設定したが、排土置き場と通路の関係から、東側の掘削は西側の調査終了後に行った。重機により盛土へ基本層Ⅱ層(富沢駅周辺土地区画整理事業地内の共通基本層)を掘削した後、基本層Ⅲ層上面(GL-1.5m)で遺構の検出作業を行った。その結果、小溝状遺構1条、溝跡2条、井戸跡1基、土坑1基、ピット32基、畦畔状の高まりを1条検出した。また基本層および各遺構から土師器、須恵器などが出土した。

その後、基本層をⅣb・Ⅴ層上面まで人力で掘り下げて、遺構の検出作業を行い、溝跡2条、小溝状遺構54条、ピット84基が検出され、土師器などが出土した。またⅤ層の遺構を完掘後、調査区北側のⅥ層上で炭化物が面的に広がっていることが確認されたことから、基本層Ⅴ層を人力で掘り下げSX11性格不明遺構の精査を行った。

その後人力と重機を用いて基本層Ⅵ～Ⅸ層を掘削し、縄文時代の遺構面の検出に動めた。結果的には縄文時代の調査範囲の大部分はSR13河川堆積層に覆われていることが確認され、縄文時代の遺物包含層である基本層Ⅹ層は

調査区の南西隅部分でのみ検出された。X層からは縄文時代中期末から後期の土器や剥片石器などが多数出土した。8月1日に本発掘調査を終了した。

遺構の精査前に調査区配置図を $S = 1/100$ で、遺構平面図と調査区西・東・南壁、各遺構断面図を $S = 1/10$ もしくは $S = 1/20$ で作製し、記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。また調査に先立ちトータルステーションを用いて公共座標（3級基準点 基24）から座標とレベルを移動した。

3. 基本層序

調査区内の盛土厚は約 150 cm であり、その下に基本層を大別で 12 層確認した。層の大部分は周囲で行われた富沢駅周辺土地区画整理事業地内と共通の基本層である。現地表面から遺構検出面であるⅢ層上面までの深さは 1.7 m で、Ⅴ層上面までの深さは 2.25 m である。

- I a 層 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト。ほぼ均質。
- I b 層 2.5Y3/2 黒褐色シルト。グライ化 炭化粒を少量含む 酸化鉄粒下層との境に堆積。
- II a 層 10YR4/2 にぶい黄褐色シルト。炭化粒、酸化鉄ブロックを少量含む。
- II b 層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。腐食した植物を比較的多く含む。II a 層に伴う畦畔。
- III 層 10YR5/6 黄褐色シルト。酸化鉄ブロック斑状に含む。
- IV a 層 10YR4/6 褐色シルト。ほぼ均質。
- IV b 層 10YR4/2 灰黄褐色シルト。炭化物少量。
- V 層 10YR4/4 褐色シルト。酸化鉄ブロック、炭化粒を少量含む。
- VI 層 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト。10YR8/2 灰白色ブロックを斑状に含む。炭化粒を少量含む。
- VII 層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト。炭化物を斑状に含む。礫を少量含む。
- VIII 層 10YR5/6 黄褐色砂質シルト。10YR8/2 灰白色ブロックを斑状に含む 礫を少量含む。
- IX 層 10YR6/8 明黄褐色砂質シルト。10YR8/2 灰白色ブロックを斑状に含む。
- X a 層 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。礫を少量含む。
- X b 層 10YR2/3 黒褐色粘土質シルト。炭化粒少量含む。縄文土器や礫石などが多数混入する遺物包含層。
- XI 層 10YR4/4 褐色砂質シルト。ほぼ均質。
- XII 層 10YR5/4 にぶい黄褐色砂。円礫を多量に含む。

4. 発見遺構と出土遺物

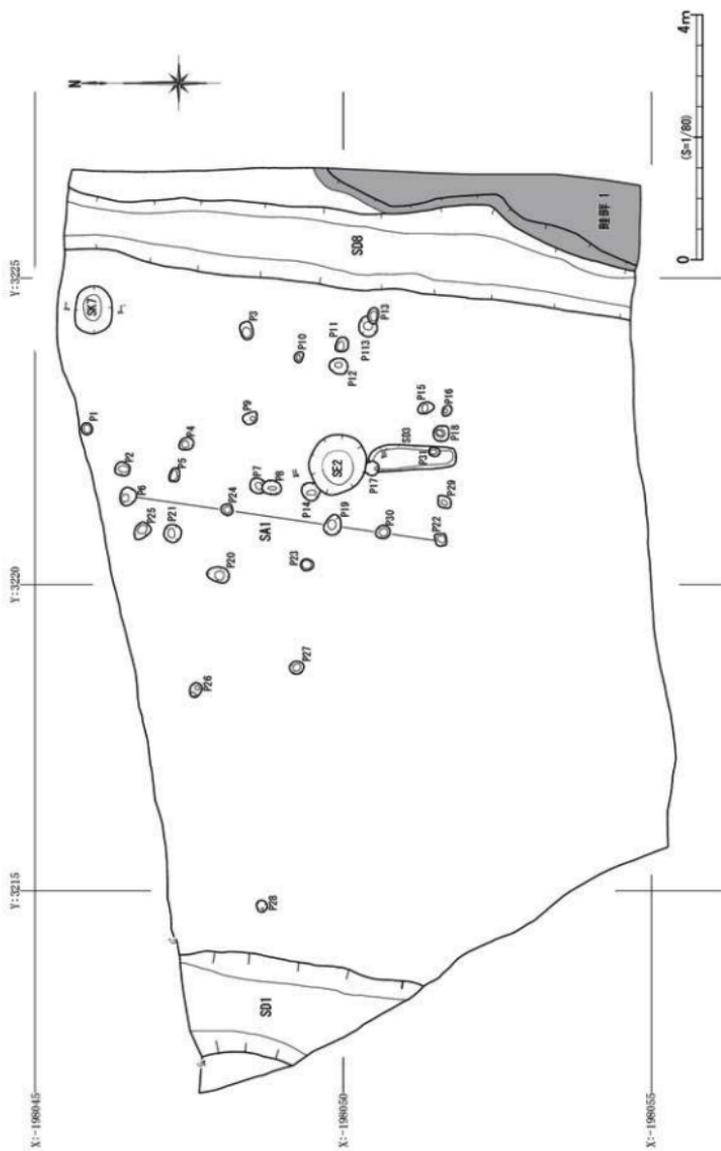
(1) Ⅲ層上面

今回の調査では、Ⅲ層上面で溝跡 3 条、井戸跡 1 基、土坑 1 基、ビット 32 基、掘立柱列 1 条、畦畔状の高まりを 1 条検出した。

SD1 溝跡

調査区の西部で検出された。他の遺構との重複はない。方位は $N-10^{\circ}-E$ の南北方向である。検出長は約 4.0 m、横幅は 1.6 ~ 1.8 m で調査区外にさらに延びる。遺構検出面からの深さは約 25 ~ 30 cm で北側から南側に向かって緩やかに傾斜する。断面形状は浅い皿形を呈する。堆積土は明黄褐色の砂や黄褐色砂質シルト等を中心 4 層に細分され、2 時期にわたり使用されていたものと考えられる。遺物は出土していない。

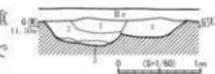
検出された位置や方位から第 1 次調査で発見された SD1・9 溝跡と同一の溝跡であると考えられる。



第9図 下ノ内遺跡第9次調査区Ⅲ層上面遺構配置図

SD3 溝跡

調査区の東部で検出された。P31と重複しこれよりも古い。また北端部分でSE2 井戸跡と隣接している。方位はN-2°-Wの南北方向である。規模は全長約



層位	色調	土質	備考・遺人物
1	10YR6/6 明黄褐色	砂質土	炭化粒少量
2	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト	炭化粒少量
3	10YR6/4 に近い黄褐色	砂質シルト	酸化鉄粒下層に堆積
4	10YR4/4 褐色	粘土	炭化粒少量

第94図 SD1 溝跡土層断面図

1.4 m、横幅は40 cm、遺構検出面からの深さは約10 cmである。断面形状は浅い皿型を呈する。堆積土は暗褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

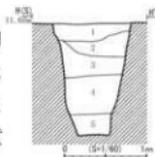
SD8 溝跡・畦畔状遺構 1

調査区の東部で検出された。SD8 溝跡の規模は、検出長約9.3 m、横幅0.8～1.3 mで調査区外に延びる。遺構検出面からの深さは約25 cmで、断面形状はやや開いたU字型を呈する。方位はN-7°-Eの南北方向である。堆積土はグライ化した暗灰黄色シルトと暗オリーブ褐色の粘土の2層に分けられる。東側に隣接する畦畔状遺構1と同時期の遺構であると考えられる。他の遺構との重複はない。遺物は土師器の小片が出土している。検出された位置や方位から第1次調査で発見されたSD4 溝跡と同一の溝跡であると考えられる。

畦畔状遺構1の規模は、検出長約5.5 m、幅約1.4 m、高さ約50 cmで調査区外に伸びる。方位はN-14°-Eの南北方向である。南側はSD8 溝跡に接する。構築土は基本層II b層で腐食した植物を比較的多く含む。畦畔状遺構は基本層II a層に伴う擬似畦畔Bであり、SD8 溝跡も基本層II層の面の遺構であった可能性が高い。遺物は出土していない。

SE2 井戸跡

調査区の東部で検出された。平面形は円形を呈する。P14、17と重複し、これよりも新しい。規模は直径約0.9～1.0 mで、深さ約1.35 m、堆積土は暗褐色の粘土質シルトブロックを中心に5層に分けられ、地山ブロックを斑状に含む。遺物は出土していない。

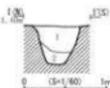


層位	色調	土質	備考・遺人物
1	10YR3/4 緑褐色	粘土質シルト	地山ブロック少量
2	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に多量に含む 炭化物少量
3	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に含む
4	10YR3/3 暗褐色	粘土	地山ブロック少量
5	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	炭化物少量

第95図 SE2 井戸跡土層断面図

SK7 土坑

調査区の北東部で検出された。平面形は楕円形を呈する。他の遺構との重複はない。規模は直径約0.7～0.8 mで、深さ約0.5 m、堆積土はにぶい黄褐色と灰黄褐色の粘土質シルトブロック、シルトの2層に分けられ、酸化鉄粒とマンガン粒を含む。遺物は出土していない。



層位	色調	土質	備考・遺人物
1	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土質シルト	マンガン粒や多量
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄粒少量

第96図 SK7 土坑土層断面図

ビット・SA1 掘立柱列

調査区中央部から東部を中心に32基のビットが検出された。一部のビットはSE2 井戸跡とSD3 溝跡と重複し、SE2 井戸跡よりも古く、SD3 溝跡よりも新しい。遺構の規模は直径約12～36 cm、深さ約15～45 cm、堆積土は暗赤褐色の粘土ブロックで、地山ブロック(III層由来)を斑状に含むものが多い。柱痕跡は確認されていない。遺物は出土していない。SE2 井戸跡付近を中心に集中する傾向が見受けられ、P6、24、19、30、22でSA1 掘立柱列を

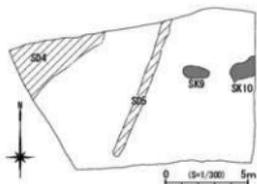
構成する。柱間寸法は0.8～1.7mで、方位はN-8°-Eの南北方向で調査区外にさらに延びるものと考えられる。

(2) V層上面

V層上面からは溝跡2条、土坑3基、ピット114基、小溝状遺構群67条を検出したが、一部の遺構に関しては基本層IV層から掘り込まれている。

SD4 溝跡

調査区の北西部で検出された。基本層IV a層から掘り込まれており、SM43、P74と重複し、これらよりも新しい。方位はE-33°-Nの東西方向だが調査区の北壁付近でやや北側に屈曲する。検出長は約6.1m、横幅は3.0m以上で調査区外にさらに延びる。遺構検出面からの深さは約1.0mである。断面形状は逆台形を呈するものと考えられる。堆積土は黄褐色とにぶい黄褐色、暗褐色の砂質シルトおよびシルトで7層に細分される。遺物は土師器片などが出土している。

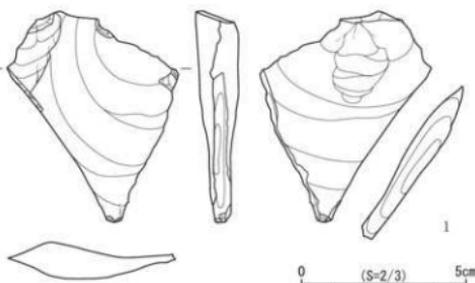


第97図 SD4・5、SK9・10配置図

検出された位置や方位から第1次調査で発見されたSD20溝跡と同一の溝跡であると考えられる。

SD5 溝跡

調査区の中央部で検出された。基本層IV a層から掘り込まれており、SM4、26、33、34、45、47、48、P34、35、59、78、97、98、103～106と重複し、P34、35、59よりも古く、他の遺構より新しい。方位はN-21°-Eの南北方向である。検出長は約9.0m、横幅は0.5～0.6mで調査区外にさらに延びる。遺構検出面からの深さは約45cmで北側から南側に向かって緩やかに傾斜する。断面形状はやや開いたU字形を呈する。堆積土は褐色とにぶい黄褐色の粘土で3層に細分される。遺物は薄片石器が出土している（第98図1）。



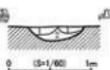
第98図 SD5 溝跡出土遺物

調査区	遺構番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
			全長	幅	厚さ			
1	K-13	薄片石器	6.5	5.2	1.3	25.5	図版1	49-1

検出された位置や方位から第1次調査で発見されたSD15溝跡と同一連続する溝跡であると考えられる。

SK9 土坑

調査区の東部で検出された。基本層IV b層から掘り込まれている。SM47・54・60・P114と重複し、これらの遺構より古い。平面形状



層位	色調	土質	備考・埋入物
1	10YR2/3 黒褐色	粘土	炭化灰少量
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	埴山ブロック (V層) 主体 炭化灰少量

第99図 SK9土坑土層断面図

はやや歪な楕円形を呈する。遺構の規模は長径約160cm、短径約77cm、遺構検出面からの深さは約20cmで、断面形状はやや開いた皿形を呈する。堆積土は黒褐色とにぶい黄褐色の粘土で2層に細分される。遺物は出土していない。

SK10 土抗

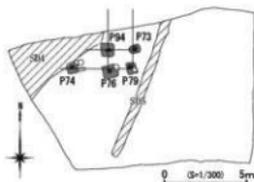
調査区の東部で検出された。基本層IV b層から掘り込まれている。平面形状はやや歪な楕円形を呈する。遺構の規模は長径約162cm、短径約98cm、遺構検出面からの深さは約15cmで、調査区外にさらに広がる。断面形状はやや開いた皿形を呈する。堆積土は黒褐色とにぶい黄褐色の粘土で2層に分けられる。遺物は出土していない。

ピット、掘立柱列・建物跡

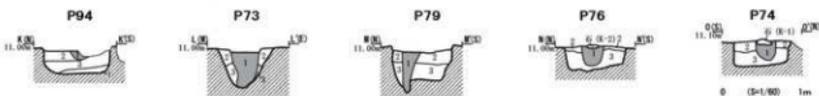
調査区全体から114基のピットが検出された。一部のピットと小溝状遺構群、溝跡は複雑に重複している。配置状況および他の遺構との切り合い関係から3列の掘立柱列と3棟の掘立柱建物跡の存在が確認された。

SB2 掘立柱建物跡

調査区の北西側で検出された。P94・73・74・76・79で構成され、北側にさらに広がるものと考えられる。SB5 掘立柱建物跡とSA3・4 掘立柱列、SD4 溝跡とSM43 (III-3群)と重複し、これらの遺構よりも古い。またP74の上面西側はSD4 溝跡により削平されている。主軸方向はN-0°-Eでほぼ真北を向く東西棟であると考えられる。柱穴の配置状況からP94が身舎の側柱で、その他は底部分で、二面以上の庇が付随するものと考えられる。規模は東西の庇が3間以上(総長4.2m以上、柱間寸法1.2~2.3m)で、南北の庇が2間以上(総長2.5m以上、柱間寸法1.2m)である。身舎から庇柱までの距離は1.2~1.5mである。柱穴掘方の平面形状は隅丸方形を呈し、規模は55~90cm、深さは30~46cmである。すべての柱穴から柱痕跡が検出されている。柱痕跡の規模は16~30cmである。P74と76の柱痕跡上に平らな石が据えられていた(第108図1、2)。



第100図 SB2 掘立柱建物跡配置図

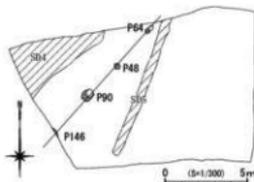


層位	色調	土質	備考・遺入物	層位	色調	土質	備考・遺入物	
P94 (K-C)	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	柱痕跡	P73 (L-L')	1	10YR3/2 黒褐色	粘土
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	腐方埋土		2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土
	3	10YR4/4 褐色	粘土	炭化穀少量		3	10YR3/3 暗褐色	粘土
	4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	炭化穀少量 酸化鉄配下層との境に埋蔵				
P79 (K-B)	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	柱痕跡	P76 (K-B)	1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	埋土		2	10YR3/3 暗褐色	粘土
	3	10YR2/3 黒褐色	粘土	腐方埋土		3	10YR3/4 暗褐色	粘土
P74 (D-C)	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	柱痕跡				
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	腐方埋土				
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	埋土				

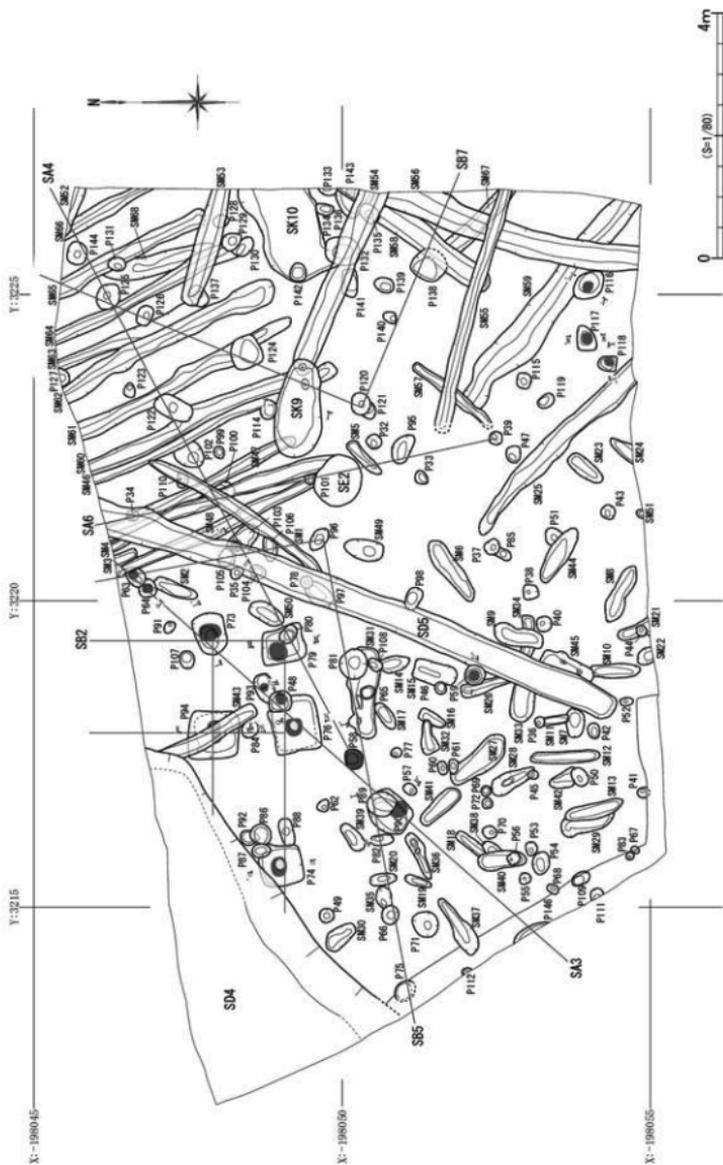
第101図 SB2 掘立柱建物跡断面図

SA3 掘立柱列

調査区の北西側で検出された。北からP64・48・90・146で構成される。SB2・5 掘立柱建物跡と重複し、SB2 より新しく、SB5 よりも古い。方位はN-41°-Eの北東-南西方向で、調査区の北側にさらに延びる。柱痕跡はP146以外で検出された。柱間寸法は2.7~3.0mである。柱穴掘方の平面形状は隅丸方形を呈し、規模は30~75cm、深さは20~46cmである。柱痕跡の規模は16~30cmである。遺物は出土していない。



第102図 SA3 掘立柱列配置図



第103図 下ノ内遺跡第9次調査区V層上面遺構配置図

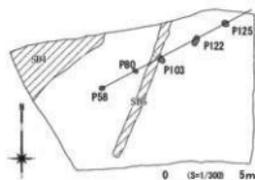


層位	色調	土質	備考・遺入物	層位	色調	土質	備考・遺入物	
P64 (P-F)	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	柱痕跡	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	柱痕跡
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	灰方埋土	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	柱痕跡
P48 (B-R)	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	柱痕跡	3	10YR4/3 に近い黄褐色	粘土	柱痕跡
	2	10YR3/3 暗褐色	粘土	灰方埋土	1	10YR2/3 黒褐色	粘土	柱痕跡
				2	10YR3/4 暗褐色	粘土	灰方埋土	
				3	10YR3/4 暗褐色	粘土	灰方埋土	
				4	10YR3/3 暗褐色	粘土	灰方埋土	

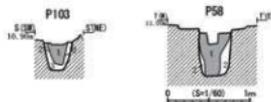
第104図 SA3掘立柱列・SB6掘立柱建物跡断面図

SA4掘立柱列

調査区の北側で検出された。北東からP125・122・103・80・58で構成される。SB2・5掘立柱建物跡、SM1(Ⅱ群)と重複し、SB1より新しく、SB4、SM1よりも古い。方位はE-28°-Nの北東-南西方向で、調査区外にさらに延びる。柱痕跡はP58・103で検出された。柱間寸法は1.7～2.3mとばらつきがある。柱穴掘方の平面形状は円形もしくは長楕円形を呈し規模は30～58cm、深さは23～54cmである。柱痕跡の規模は18～38cmである。遺物は出土していない。



第105図 SA4掘立柱列配置図



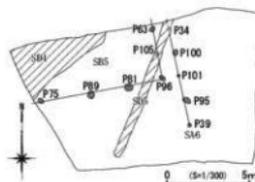
層位	色調	土質	柱痕跡	備考・遺入物
P103 (S-S)	1	10YR6/6 明黄褐色	シルト	炭化粒少量
	2	10YR4/4 褐色	粘土	灰白色シルトブロック底状に含む
	3	10YR4/3 に近い黄褐色	灰方埋土	地山ブロック(V層)主体
P58 (B-R)	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	柱痕跡
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	灰方埋土

第106図 SA4掘立柱列断面図

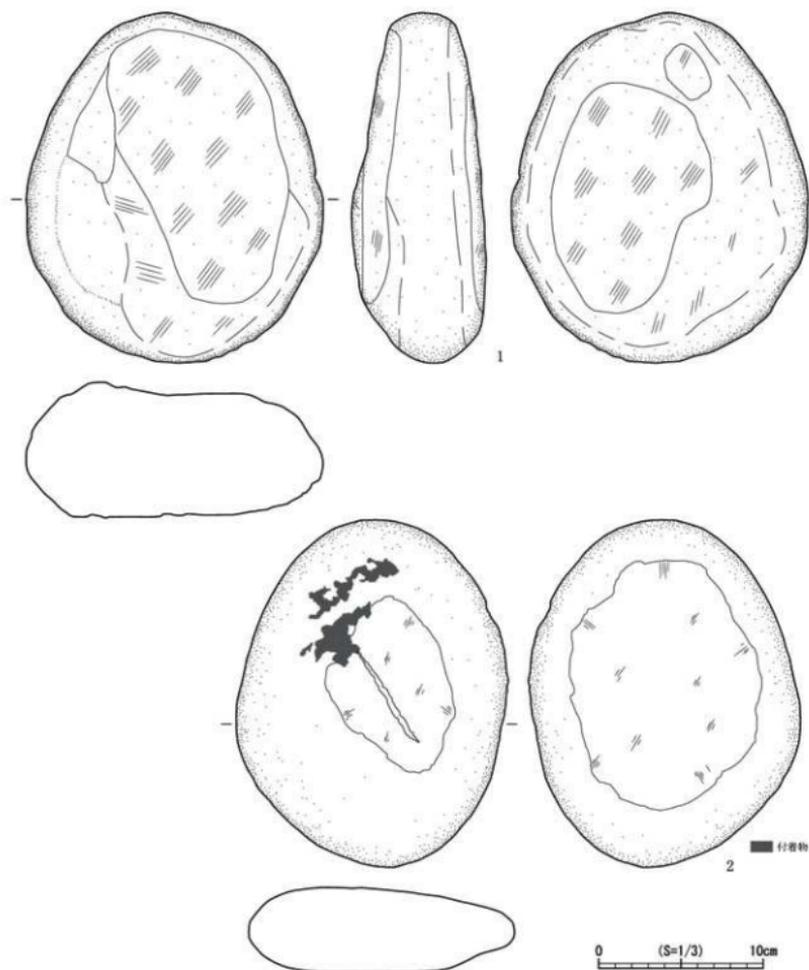
SB5掘立柱建物跡

調査区の北西側で検出された。P63・105・96・81・89・75で構成され、柱建物跡とSA3・4掘立柱列、SD5溝跡、SM48(Ⅲ-3群)と重複し、SB2とSA3・4よりも新しく、SD5とSM48よりも古い。主軸方向はN-11°-Wの東西棟である。規模は梁行4間以上(総長7.8m以上、柱間寸法2.1～3.0m)、桁行2間以上(総長3.3m以上、柱間寸法1.5m)の側柱建物である。柱穴掘方の平面形状は円形、もしくは楕円形を呈し、規模は25～40cm、深さは30～46cmである。柱痕跡はP63から検出されている。柱痕跡の規模は14cmである。遺物は出土していない。桁行きの柱穴は隣接するSA6掘立柱列の柱穴と約1.0mの距離でほぼ平行していることから、同時期の施設であった可能性がある。

北側と西側にさらに広がる。SB2掘立



第107図 SB5掘立柱建物跡・SA6掘立柱列配置図



図版番号	登録番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
			全長	幅	厚さ			
1	K-1	磨石	21.5	18.9	8.2	3510	磨面2面 柱痕跡内出土	48-2
2	K-2	磨石	21.3	16.5	5.2	2300	磨面2面(両面に黒い変色あり) 溝状のキズあり(使用痕か) 柱痕跡内出土 片面に付着物あり(詳細不明)	48-3

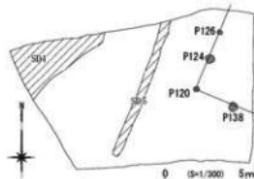
第108図 SB2 掘立柱建物跡出土遺物

SA6 掘立柱列

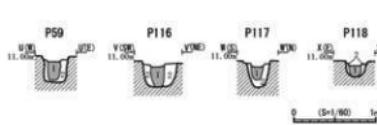
調査区の北側で検出された。北からP34・100・101・95・39で構成される。SD5溝跡とSM1(II群)、SM4(III-1群)、SM47(III-2群)と重複し、これらの遺構よりも古い。方位はN・12°・Wの北西-南東方向で、調査区の北側にさらに延びる。検出長は6.0m以上で、柱間寸法は1.5mである。柱穴掘方の平面形状は円形もしくは長楕円形を呈し、規模は20~50cm、深さは24~36cmである。柱痕跡は検出されていない。また遺物も出土していない。

SB7 掘立柱建物跡

調査区の北東側で検出された。P126・124・120・138で構成され、北側と東側にさらに広がる。SM58(Ⅱ群)・61(Ⅲ-2群)・63(Ⅲ-3群)とP121と重複し、これらの遺構よりも新しい。主軸方向はN-22°-Wの南北棟であると考えられる。規模は梁行3間以上(総長5.3m以上、柱間寸法1.8~2.1m)、桁行2間以上(総長3.7m以上、柱間寸法2.4m)の側柱建物である。柱穴掘方の平面形状は円形、もしくは楕円形を呈し、規模は25~60cm、深さは27~42cmである。柱痕跡は検出されていない。また遺物は出土していない。



第109図 SB7 掘立柱建物跡配置図



第110図 P59・116~118 土層断面図

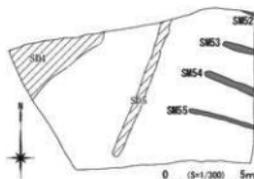
遺構名	層位	色調	土質	柱痕跡	備考・混入物
P59 (U-F)	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	柱痕跡	ほぼ均質
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	掘方埋土	地山ブロック(V層)主体 炭化灰少量
P116 (X-F)	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	柱痕跡	ほぼ均質
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	掘方埋土	地山ブロック面状に含む
P117 (B-F)	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	柱痕跡	ほぼ均質
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	掘方埋土	地山ブロック面状に含む
P118 (X-F)	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	柱痕跡	ほぼ均質
	2	10YR3/4 暗褐色	粘土	掘方埋土	地山ブロック面状に含む

小溝状遺構群

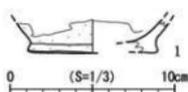
畑耕作の痕跡と考えられる遺構群であり、方向と重複関係から7群に大別され、細別すると10群になる。調査区全域で67条を検出した。Ⅶ群→Ⅵ群→Ⅴ群、およびⅣ群→Ⅲ群→Ⅱ群→Ⅰ群の変遷が考えられる。

Ⅰ群

調査区の東側で検出された。東西方向の小溝状遺構群で、SM52~54の4条で構成されている。Ⅱ群とⅢ群、SK9土坑、P128・132・133・135・136・137・141と重複し、これらよりも新しい。方位はE-14~20°-Sで、検出長は0.85~4.10m、幅は18~46cm、深さは8~14cmで、断面形状はやや開いたU字形を呈する。小溝の同士の間隔は2.1~2.3mである。遺物はSM53とSM54から土師器の小型甕(第112図・C-2)の底部部分が出土している。この資料は基本層第Ⅳb層から出土した破片と接合する。



第111図 小溝状遺構Ⅰ群



図面番号	登録番号	遺構名	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	C-2	SM54-1	赤ロクロ土師器	小型甕?	-	(径.0)	-	ツメツ、割罫	ナダ?	底部Ⅳb層出土破片と接合	49-1

第112図 小溝状遺構群Ⅰ群出土遺物

Ⅱ群

調査区の東側で検出された。南北方向の小溝状遺構群で、SM1・5・6・23・24・56~58の8条で構成されている。重複関係からSM56のみ新しい小溝であると考えられる。またⅠ・Ⅲ・Ⅳ群、SD5溝跡、P100・103・106・110・133・135・138・143と重複し、SD5溝跡とⅠ群よりも古く、その他の遺構よりも新しい。方位はN-16~54°-Eで、検出長は0.11~4.22m、幅は16~53cm、深さは5~20cmで、断面形状はやや開いたU字形を呈する。小溝の同士の間隔は0.4~1.8mである。遺物は出土していない。

Ⅲ群

調査区北側で検出された。方位は南北方向である。重複関係から3群に細分されⅢ-3群→Ⅲ-2群→Ⅲ-1群の変遷が考えられる。

Ⅲ-1群 調査区の北側中央部から東部にかけて検出された。SM4・60・62・65の4条で構成されている。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-2・Ⅲ-3群、SD5溝跡、P100・122・131と重複し、SD5溝跡とⅠ・Ⅱ群、P122よりも古く、その他の遺構よりも新しい。方位はN-21°27′-Wで、検出長は2.65～4.31m、幅は16～42cm、深さは8～14cmで、断面形状はやや開いたU字形を呈する。小溝の同士の間隔は1.2～1.5mである。遺物は出土していない。

Ⅲ-2群 調査区北側で検出された。SM47・61・64・66の4条で構成されている。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-1・Ⅲ-3群、SD5溝跡、P100・124・125・129・130と重複し、SD5溝跡とⅠ・Ⅱ・Ⅲ-1群、P100よりも古く、その他の遺構よりも新しい。方位はN-21°27′-Wで、検出長は2.65～4.31m、幅は16～42cm、深さは8～14cmで、断面形状はやや開いたU字形を呈する。小溝の同士の間隔は1.2～1.5mである。遺物は出土していない。

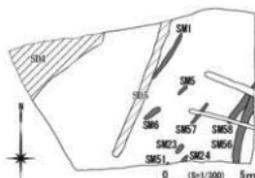
Ⅲ-3群 調査区北側で検出された。SM3・43・46・48・63・68の6条で構成されている。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-1・Ⅲ-2群、SD5溝跡、P63・94・101・114・126・131と重複し、SD5溝跡とⅠ・Ⅱ・Ⅲ-1、Ⅲ-2群、P94・101・114・126・131よりも古く、P63よりも新しい。方位はN-9°24′-Wで、検出長は1.72～3.48m、幅は20～33cm、深さは8～14cmで、断面形状はやや開いたU字形を呈する。小溝の同士の間隔は0.2～3.0mである。遺物は出土していない。

Ⅳ群

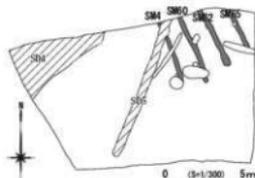
調査区南側で検出された。方位は北西-南東方向である。検出長の違いと位置関係から2群に細分される。

Ⅳ-1群 調査区の南側中央部から東部にかけて検出された。SM25・59・67の3条で構成されている。Ⅰ・Ⅱ群、P116と重複し、いずれの遺構よりも新しい。方位はW-38°43′-Nで、検出長は1.20～4.30m、幅は30～50cm、深さは15～17cmで、断面形状はやや開いたU字形を呈する。小溝の同士の間隔は1.7mである。遺物は出土していない。

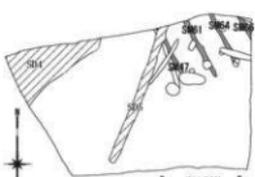
Ⅳ-2群 調査区の南側中央部から西部にかけて検出された。SM8・27・28・30・41・44の6条で構成されている。P45・51・61と重複し、P45・61よりも古くP51よりも新しい。方位はN-33°61′-Wで、検出長は0.58～1.10m、幅は20～40cm、深さは10～27cmで、断面形状はやや開いたU字形を呈する。小溝同士の間隔は不揃いで規則性は見出しにくい。遺物は出土していない。



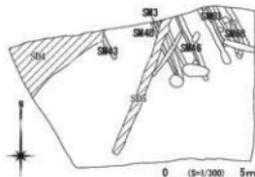
第113図 小溝状遺構Ⅱ群



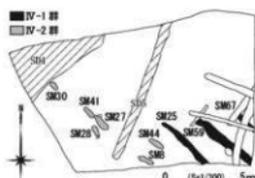
第114図 小溝状遺構Ⅲ-1群



第115図 小溝状遺構Ⅲ-2群



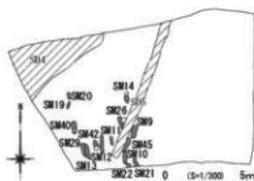
第116図 小溝状遺構Ⅲ-3群



第117図 小溝状遺構Ⅳ群

V群

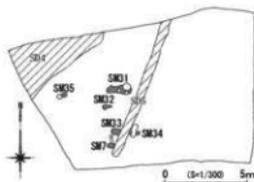
調査区南西部で検出された。方位はほぼ真北方向である。SM9～14・19～22・26・29・40・42・45の15条で構成されている。SD5溝跡とVI・VII群、P36・44・50・56・59・108と重複し、SD5溝跡とピットよりも古く、VI・VII群よりも新しい。方位はN-14°-E～N-15°-Wで、検出長は0.28～1.18m、幅は14～28cm、深さは5～20cmで、断面形状はやや開いたU字形を呈する。小溝同士の間隔は不揃いで規則性は見出しにくい。同一にした群の中でも重複関係があることから、さらに細分される可能性がある。遺物は出土していない。



第118図 小溝状遺構V群

VI群

調査区南西部で検出された。方位はほぼ真東方向である。SM7・31～35の6条で構成されている。SD5溝跡とV・VII群、P65・81・108と重複し、SD5溝跡とV群・ピットよりも古く、VII群よりも新しい。方位はE-°-N～E-4°-Sで、検出長は0.28～1.18m、幅は14～28cm、深さは5～20cmで、断面形状はやや開いたU字形を呈する。配置の規則性は弱く小溝同士の間隔は不揃いで統一性はない。遺物は出土していない。



第119図 小溝状遺構VI群

VII群

調査区西部で検出された。方位は北東-南西方向である。SM2・15～18・36～39・49・50の11条で構成されている。SD5溝跡とV・VI群、P46・64と重複し、いずれの遺構よりも古い。方位はN-22～64°-Eで、検出長は0.30～1.00m、幅は16～36cm、深さは8～27cmで、断面形状はやや開いたU字形を呈する。配置の規則性は弱く小溝同士の間隔は不揃いで統一性はない。遺物は出土していない。



第120図 小溝状遺構VII群

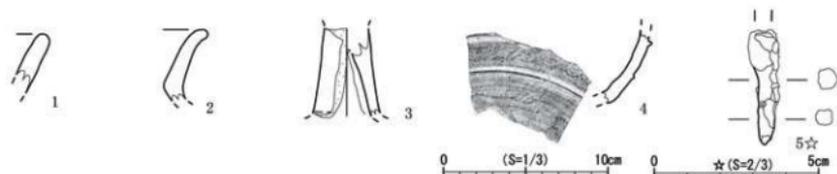
その他の出土遺物（基本層Ⅲ～V層）

基本層Ⅳ～V層上面を中心に土師器および須恵器片が出土している。また一部の遺物は小溝状遺構群から出土したものと接合している。須恵器（第121図4、E-1）は高坏の底部から体部にかけての破片で、ヘラ書き波状線が巡るもので、古墳時代中期、5世紀代のものであると考えられる。土師器（第121図1・2・3、C-1・3・4）は小型の甕と、高坏の破片で、いずれも非クロコ成形のものである。

(3) VI層以下の遺構と遺物

SX11 性格不明遺構

V層上面の調査区北側の遺構群の堆積土を掘削した際に、遺構の掘り方の壁面から炭化物層が検出されたことから、V層上面の遺構発掘後、基本層をVI層まで段下げて検出した。西側がSD4溝跡と重複して削平されている。遺構の規模は長軸が6.17m、短軸が1.22～1.26mを測り、主軸はW-6°-Nの東西方向である。断面形は浅い箱形を呈し、掘り方の深さは33cmである。遺構の堆積土を段下げしたところ、炭化材と炭化物の広がりが、長さ5.40m、幅約0.77～1.24mの範囲で確認された。その下層、掘り方の中央部からは長径3.27m、幅0.82mの炭化物



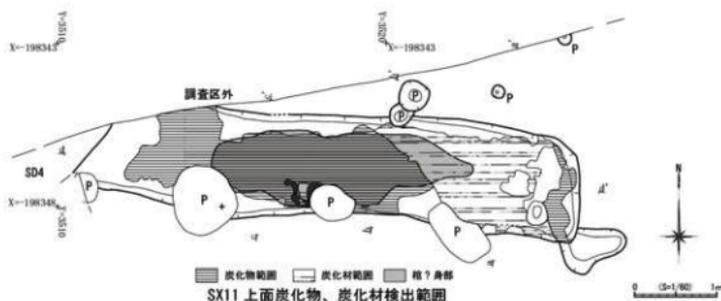
図録番号	登録番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	口径	高さ				
1	C-1	Ⅲ～Ⅳ層	非ロクロ土器部	小型甕?	-	-	(3.6)	ヨコナダ?	ヨコナダ	口縁部	49-2
2	C-3	Ⅲ～Ⅳ層	非ロクロ土器部	甕	-	-	(4.3)	ヨコナダ	ヨコナダ	口縁部 骨針(少)	49-3
3	C-4	Ⅲ～Ⅳも層上面	非ロクロ土器部	高杯	-	-	(5.5)	マメツ	マメツ	胴部 粉質?	49-4
4	E-1	Ⅲ～Ⅴ層上面	須恵器	高杯	-	-	(4.6)	陸線文、波状文、 ロクロナダ、ヘラケズリ	ロクロナダ、自然釉	5c代? 杯部	49-5

図録番号	登録番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
			全長	幅	厚さ			
5	N-1	鉄釘	(3.5)	(1.0)	(0.7)	4.2	一部欠損	49-6
-	N-2						写表のみ	49-7
-	N-3						写表のみ	49-8

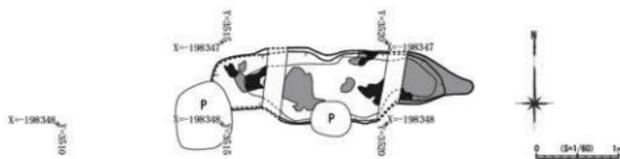
第121図 基本層Ⅲ～Ⅴ層上面出土遺物

層が検出された。炭化物層の断面形状は浅いU字形を呈し、深さは約18cmである。層の東西の端部も緩やかに立ち上がる。

遺構の検出状況や炭化物層の断面形状から割竹形木棺の可能性も考えられたため、炭化物層や、炭化物層が窪んだ部分の堆積土、周囲の掘り方層も含めてすべてフルイにかけて微細遺物等が混入していないかを精査したが、遺物は一切出土しなかった。



SX11 上面炭化物、炭化材検出範囲

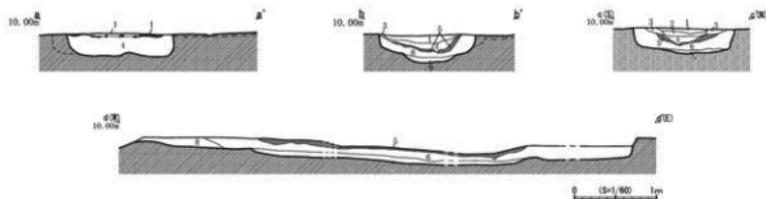


SX11 底面焼土、炭化粒検出範囲

第122図 SX11 性格不明遺構平面図

SR13 河川跡

基本層IX層の下層から検出された。遺物包含層であるX層よりも新しい。下層調査区の大部分を覆う形で検出さ



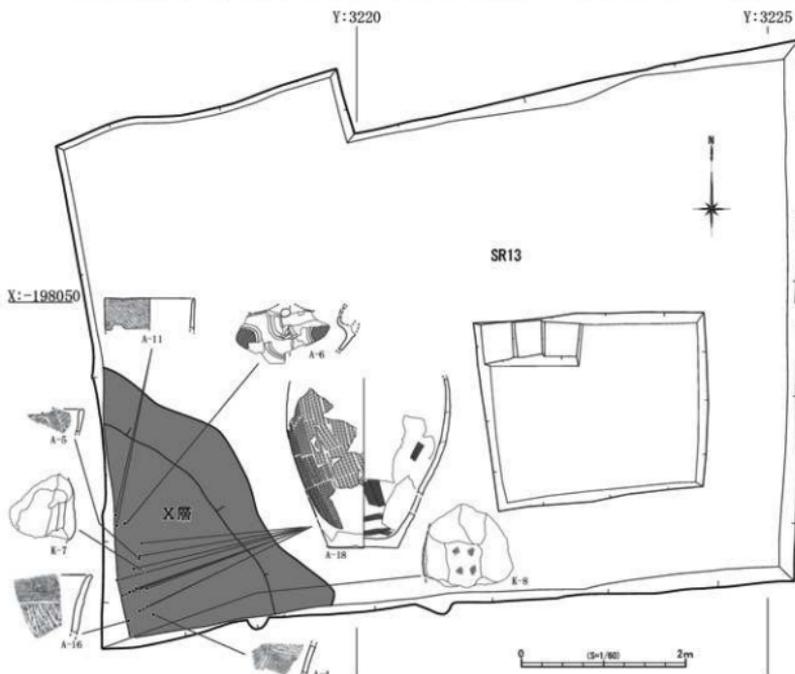
層位	色調	土質	備考・混入物	層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物少量	6	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒混状を含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化粒、焼土粒少量	7	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒少量
3	10YR2/3 黒褐色	粘土	炭化物少量、焼土粒少量	8	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化粒少量
4	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化粒混状を含む、焼土粒少量 箱内部に混入した?	9	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物少量
5	10YR2/1 黒色	粘土	炭化層 棺身部か?				

第123図 SX11 性格不明遺構断面図

れ、調査区外にも広がる。堆積土は明黄褐色、黄褐色、褐色などの砂、砂質シルト、砂質土、粘土質シルトおよび粘土で16層に分けられ、上層は粗い砂などで構成され、下層に粒子の細かい粘土などが堆積する傾向がある。遺物は縄文土器などが出土している。

遺物包含層 (X層)

SR13 河川跡と隣接し、一部は覆われるような形で検出された。検出された規模は東西約2.6m、南北約3.2m



第124図 SR13・X層(遺物包含層)平面図

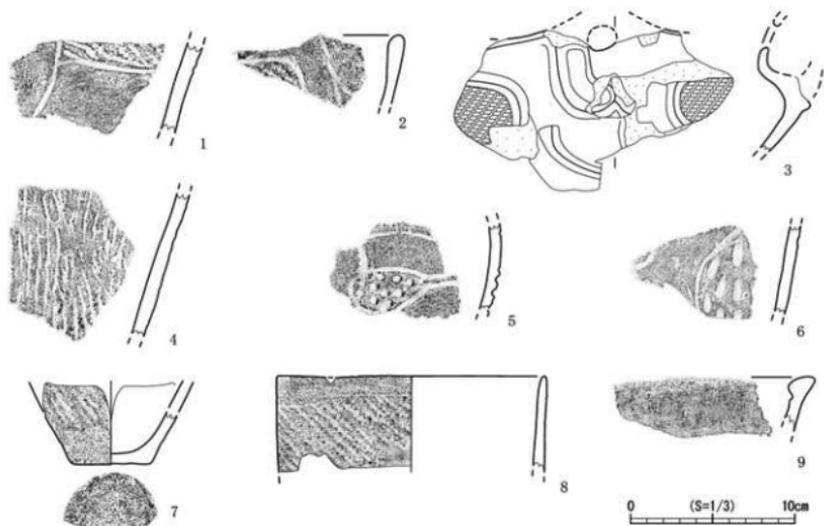
で調査区の南と西側に広がる。層の厚さは15～40cmである。層は上面に堆積したSR13河川跡の法面の傾斜と並行するような形で落ち込んでおり、さらに下層にも広がるものと考えられる。a・bの2層に分けられ、そのうち下層のb層を中心に多量の縄文土器と石皿などの石製品が出土した。

縄文土器は深鉢が中心だが、客体的に小型の機種も加わる。また外面は燃糸文が施されているものが主体的で、さらに沈線文も施されたものも加わる。その中でもA-16～19(第126図1～4)は燃り糸文が全体に施されており、また色調なども類似していることから、同一の個体である可能性がある。またそれ以外にも隆線文が施された鉢(第125図3、A-6)や、刺突文が施された深鉢(第125図5・6、A-8・9)が客体的に加わる。石器や石製品は、黒曜石の剥片(第127図1・2、K-10・11)のほか、多孔質の溶岩を利用した石皿(第126図5・6、K-7・8)など、大型のものも出土している。

出土した縄文土器の様相や他の調査区との関係などから遺物包含層の時期は縄文時代中期末葉頃と考えられる。

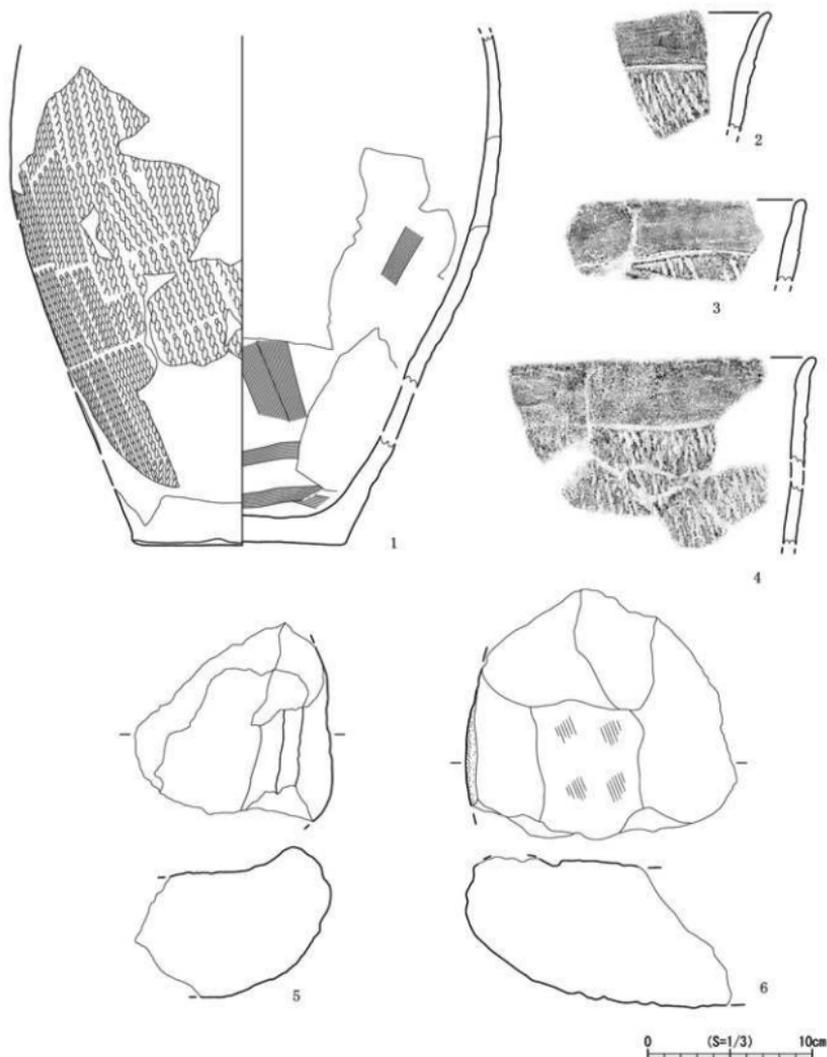
その他の出土遺物(基本層Ⅶ～Ⅸ層)

基本層Ⅶ～Ⅸ層からは縄文土器と石器が出土している。Ⅶ層からはゆるい波状突起の口縁で、燃り糸文が施された晩期の壺(第128図1、A-1)が出土している。またⅨ層からは体部に絡状体圧痕文が施された後期の深鉢(第



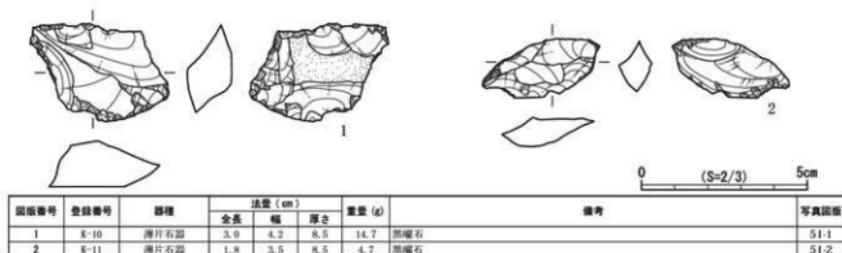
調査番号	登録番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)		外面調整	内面調整	備考	写真図版	
					口径	底径					
1	A-4	X層	縄文土器	深鉢	-	(5.5)	沈線文 R L?	ミガキ	体部片 中期末か	49-9	
2	A-5	X層	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	沈線 縄文LRか	ナゲ(ヘララ) ミガキ	口縁部片 突起が取れたか?又は意状口縁になる	49-10	
3	A-6	X層	縄文土器	鉢	-	(9.9)	縄文紅, 隆線文	ミガキ	大木10式 丸窓 アーチ状把手付くか意状口縁 縄文時代中期	49-11	
4	A-7	X層	縄文土器	深鉢	-	(8.7)	燃り糸文	ミガキ	骨針(少) 体部片	49-12	
5	A-8	X層	縄文土器	深鉢	-	(5.2)	沈線文 刺突文	ミガキ	中期(大木10式か) 細砂(多)	49-13	
6	A-9	X層	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	沈線文 刺突文	ミガキ	中期末 体部片	49-14	
7	A-10	X層	縄文土器	鉢	-	(4.8)	縄文(LRか)	ミガキ	外面被熱赤変 内面スス 底部付着	49-15	
8	A-11	X層	縄文土器	小型深鉢	16.2	-	(5.9)	縄文 沈線文	ミガキ	口縁部約1/4残	49-16
9	A-12	X層	縄文土器	深鉢小鉢	-	-	(3.3)	ミガキ	ミガキ	口縁部片	49-17

第125図 X層(遺物包含層)出土遺物(1)



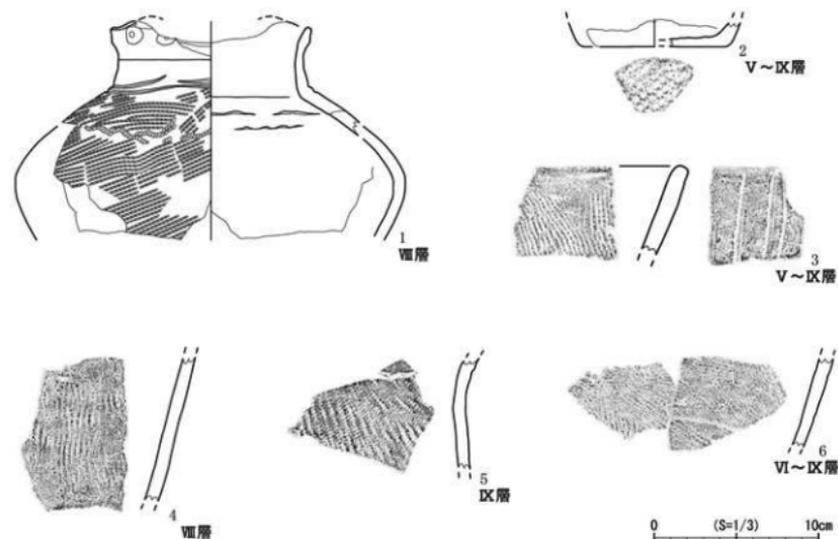
図版番号	登録番号	遺構層	種別	図種	法量 (cm)			外面調査	内面調査	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	A-18	X b層	陶文土器	深鉢	-	13.0	(31.6)	し摺り糸文	ナダ	全体の約 1/3 残存 体部～底部	50-1
2	A-16	X b層	陶文土器	深鉢	-	-	(7.3)	摺り糸文 沈線文	ミガキ	口縁部片 A-16～A-19 同一個体	50-2
3	A-19	X b層	陶文土器	深鉢	-	-	(5.0)	摺り糸文 沈線文	ミガキ	口縁部片 A-16～A-19 同一個体	50-3
4	A-17	X b層	陶文土器	深鉢	-	-	(11.0)	摺り糸文 沈線文	ミガキ	口縁部片 A-16～A-19 同一個体	50-4
図版番号	登録番号	図種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版			
		全長	幅	厚さ							
5	K-7	石皿?	(12.2)	(12.0)	(9.2)	(1070.0)	磨岩? 多孔質 K-8と同一個体? 石皿の一部か	50-5			
6	K-8	石皿	(15.3)	(16.5)	(8.5)	(1990.0)	磨岩? 多孔質 K-7と同一個体?	50-6			

第126図 X層(遺物包含層)出土物(2)



第127図 X層（遺物包含層）出土遺物（3）

128図5、A-14）が出土している。またそれ以外にもV～IX層一括で外面に撚り糸文が、内面に竹管による条線文が格子目状に施された深鉢（第128図3、A-3）などが出土している。時期は後期前葉であると考えられる。

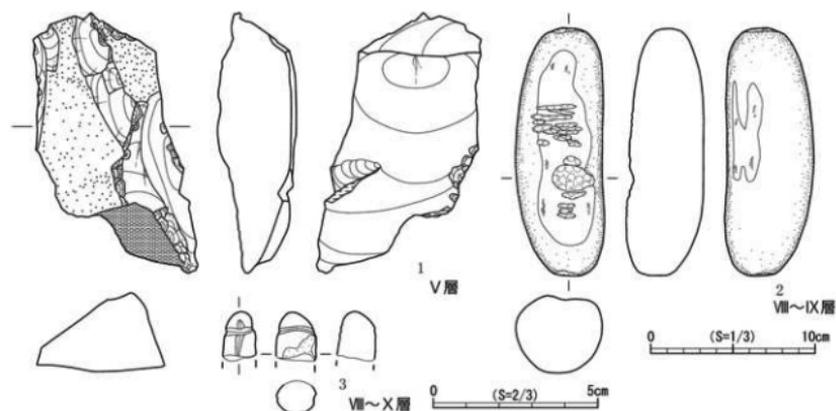


第128図 V～IX層出土遺物（1）

図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	A-1	VII層	縄文土器	盃	(11.8)	-	(13.4)	撚り糸文R 縦線文L 沈線	-	晩期の盃 ゆるい底伏口縁 突起あり (2割付) 砂粒目立つ	51-3
2	A-2	V～X層	縄文土器	深鉢(小型)	-	(6.8)	1.7	マメツ	指ナデ	底部網代模(マメツ) 骨針(少)	51-4
3	A-3	V～X層	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	(5.4)	撚り糸文R縦線文 糸線文(竹管による)	口縁部片	口縁部片(底部に近い下底)	51-5
4	A-13	VII層	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	(6.8)	撚り糸文 マメツ	ヘラナデ(一部ミガキ)	体部片(口縁部に近い下底)	51-6
5	A-14	IX層	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	(6.8)	縄文、筋状体正底文	ミガキ	体部片(口縁部に近い破片) 晩期か	51-7
6	A-15	IV～IX層	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	(5.4)	糸線文	ヘラナデ、ミガキ	体部片 骨針(少)	51-8

5. まとめ

今回の調査区は第1次調査区と第6次調査区の北側に、第8次調査区の東側に位置する。今回の調査区からは基本層III、V、X層の各層を中心に遺構および遺物が検出された。これは周囲の調査区で遺構、遺物が検出された層



調査番号	登録番号	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
			全長	幅	厚さ			
1	K-3	割片石器	8.0	5.0	2.4	69.2	底紋部	51-9
2	K-6	磁石・磨石	15.2	5.4	4.7	570.0	両先端に敲打痕あり 磨面2面	51-10
3	P-1	土鏃?	(3.0)	(2.4)	(2.0)	15.4	沈線(敲打け用?) 骨針(少)	51-11

第129図 V～IX層出土遺物(2)

位とはほぼ一致する。

III層

溝跡3条、井戸跡1基、土坑1基、ピット32基、掘立柱列1条、畦畔状の高まりを1条検出した。このうちSD1、8溝跡は、検出された位置や方位から第1次調査で発見されたSD1・4・9溝跡と同一の溝跡であると考えられる。両溝跡とも方位がN7～10°-Eと類似しており、第6次調査区にも延びることが確認されている。両溝跡間は12.6mである。またSA1掘立柱列も方位がN8°-Eで、両溝跡と平行することから、一連の遺構であると

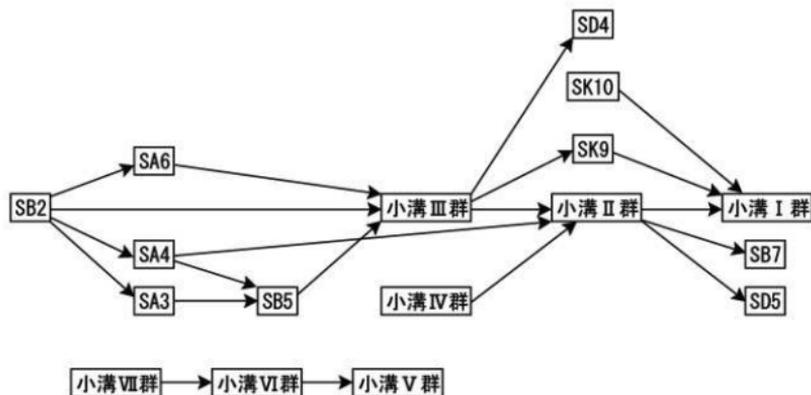


第130図 下ノ内遺跡第9次調査区・周辺調査区の遺構(III層)

考えられる。遺物が出土していないため詳細な時期は不明だが、検出層位と、第1次調査区で一連の遺構から中世の輸入陶磁が出土していることから、中世以降であると考えられる。

V層

溝跡2条、土坑3基、ピット114基（掘立柱建物跡3棟、掘立柱列3条）、小溝状遺構群67条（7群に大別）を検出した。これらの遺構の変遷図は第131図のとおりである。



※並列して表記した遺構は必ずしも同時期を示すものではない

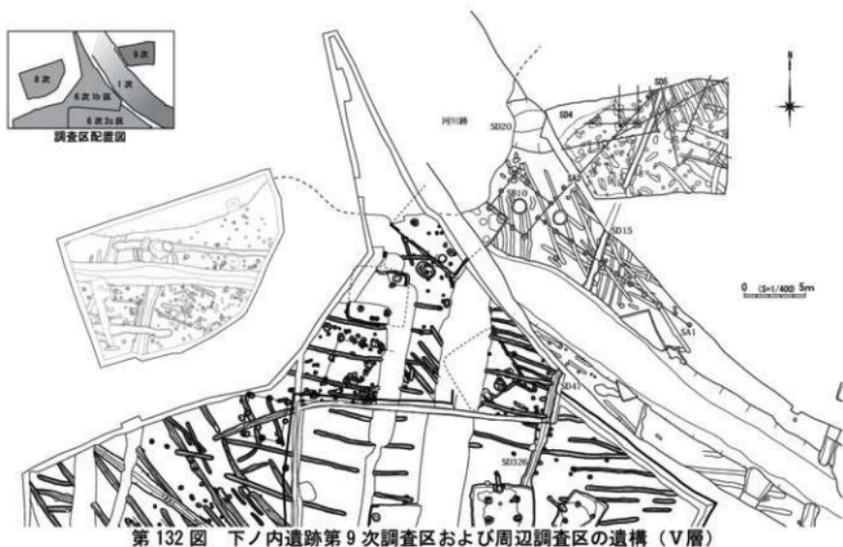
第131図 V層上面検出遺構変遷模式図

このうちSD4溝跡は1次調査のSD20溝跡と、同一の溝である。1次調査の際に検出された規模は、幅が約4m、深さは約90cmの大型の溝である。またSD5溝跡は途中で途切れるものの第1次調査のSD15溝跡、第6次1b区のSD47溝跡、2c区のSD326溝跡の延長線上に位置し遺構の規模もほぼ同一であることから、これらの溝は一連の遺構であると考えられる。

第1次調査の際に見つかったSB10掘立柱建物跡は、梁行3.7m、桁行3.2mの東西3間×南北2間の規模である。また南東側梁柱に接続するかたちでSA1掘立柱列が検出されている。今回の調査で見つかったSA3掘立柱列は、柱間寸法が2.7～3.0mだが、その延長線上にSB10掘立柱建物跡の北側柱列の東端があたり、その間にも柱痕跡を伴う柱穴が存在することから、SB10掘立柱建物跡にまで接続する柱列と考えられる。第1次調査区のSB10掘立柱建物跡とSA1掘立柱列、そして今回の第9次調査で見つかったSA3掘立柱列が一連の建物群を構成する可能性がある。

X層

遺物包含層と、それよりも新しい河川跡（SR13）が検出された。今回の調査における縄文時代の調査範囲の大部分はSR13河川跡に覆われており、縄文時代頃の河川跡が蛇行する様相が確認された。また河川跡よりも古い遺物包含層（X層）からは縄文時代中期末葉の土器が一定量出土した。これは周囲の他の調査区でも検出されている遺物包含層と層位的にも時期的にも同一のものであると考えられる。今回の調査区は縄文時代の遺物包含層および遺構群の北東側に位置し、遺構が集中する範囲の周縁部分にあたるものと考えられる。またSR13河川跡の落ち込みに平行するような形で遺物包含層が検出されたことから、遺物包含層（X層）はSR13河川跡が埋没した際に形



第132図 下ノ内遺跡第9次調査区および周辺調査区の遺構（V層）



第133図 下ノ内遺跡第9次調査区・周辺調査区の遺構（X・XII層）

成されたか、落ち込む地形の上に遺物包含層が形成された後に河川跡が堆積したものと考えられる。

引用・参考文献

- 仙台市教育委員会 1990 『下ノ内遺跡 —仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ—』
仙台市文化財調査報告第136集（第1次）
- 仙台市教育委員会 1992 『富沢・泉崎浦・山口遺跡（4）—富沢遺跡第70～75・77・79次、発掘調査報告書—
下ノ内遺跡 —第5次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告第163集
- 仙台市教育委員会 1992 『王ノ壇遺跡 —都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡—発掘調査報告書Ⅰ』
仙台市文化財調査報告第249集
- 仙台市教育委員会 2003 『国分寺東遺跡他 発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告第266集（第7次）
- 仙台市教育委員会 2004 『元袋遺跡 —都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡—発掘調査報告書Ⅱ』
仙台市文化財調査報告第272集
- 仙台市教育委員会 2008 『下ノ内遺跡 —第8次発掘調査報告書—』仙台市文化財調査報告第320集
- 仙台市教育委員会 2011 『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか、—仙台市富沢駅周辺土地地区画整理事業
関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ—』仙台市文化財調査報告第390集（第6次1～5区）
- 仙台市教育委員会 2013 『伊古田遺跡・大野田古墳群・下ノ内遺跡 —仙台市富沢駅周辺土地地区画整理事業関係
遺跡発掘調査報告書Ⅲ—』仙台市文化財調査報告第413集（第6次6・7区）
- 仙台市教育委員会 2014 『大野田遺跡 第1次調査—都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡—発掘調査報告書Ⅲ』
仙台市文化財調査報告第424集
- 仙台市教育委員会 2017 『元袋遺跡・六反田遺跡・伊古田遺跡ほか、—仙台市富沢駅周辺土地地区画整理事業関係
遺跡発掘調査報告書Ⅵ—』仙台市文化財調査報告第456集



1. III層上面遺構検出状況（拡張前・南から）



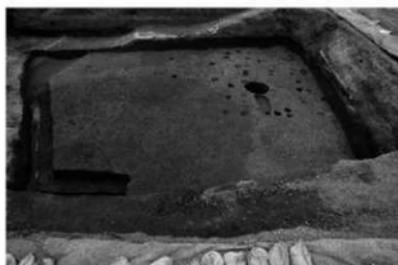
2. SD1 溝跡完掘状況（南から）



3. SD1 溝跡土層断面（南から）



4. SE2 井戸跡土層断面（東から）



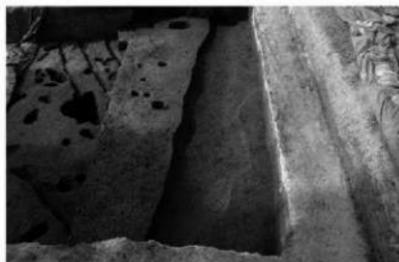
5. III層上面遺構完掘状況（南から）



1. 拡張区Ⅲ層上面遺構検出状況（南から）



2. SK7 土坑土層断面（西から）



3. 拡張区Ⅲ層上面遺構完掘状況（南から）



4. Ⅲ層上面作業状況（北東から）



5. V層上面遺構検出状況（南から）



1. 調査区西壁・SD2 溝跡土層断面（北から）



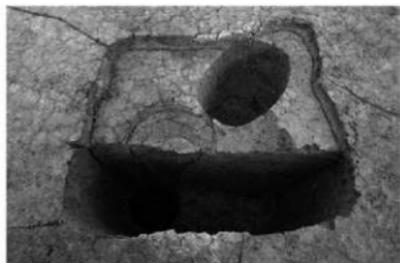
2. SK9 土坑土層断面（東から）



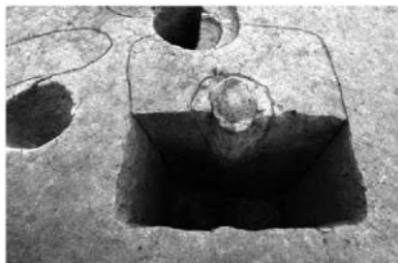
3. SB1 (P94) 土層断面（西から）



4. SB1 (P73) 土層断面（南東から）



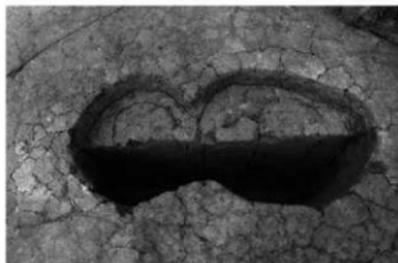
5. SB1 (P79) 土層断面（西から）



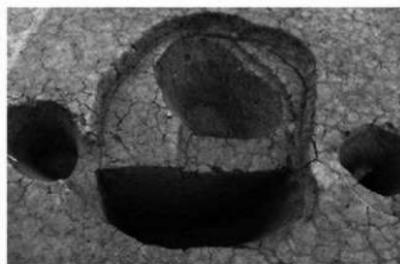
6. SB1 (P76) 土層断面（西から）



7. SB1 (P74) 土層断面（南東から）



8. SA2 (P64)・SA4 (P63) 土層断面（南東から）



1. SA2 (P90) 土層断面 (南西から)



2. P103 (SA3) 土層断面 (南東から)



3. V層上面遺構完掘出土状況 (南から)



4. SA2 掘立柱列 (西から)



5. 調査区南壁土層断面 (盛土～V層・北から)



1. SX11 炭化材検出状況（西から）



2. SX11 土層断面（東から）



3. SX11 土層断面（東から）



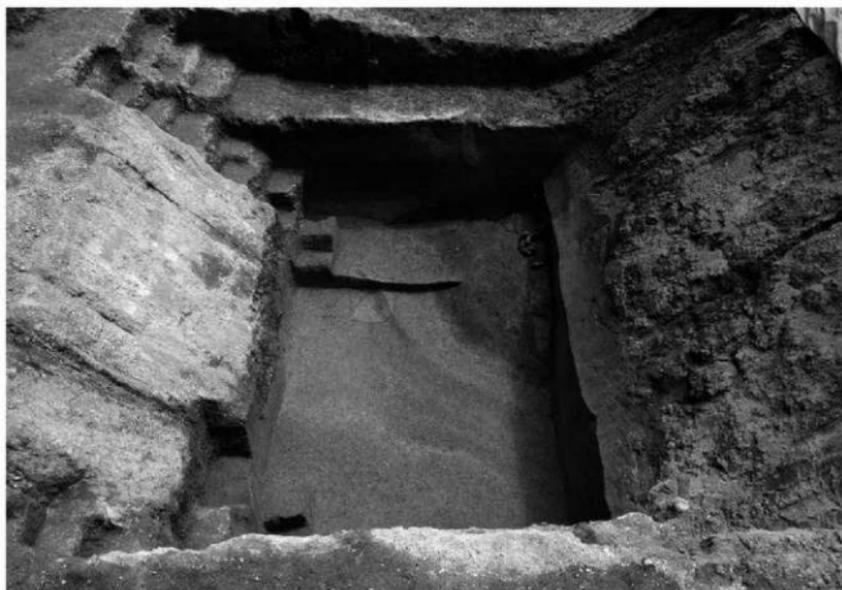
4. SX11 土層断面（東から）



5. SX11 底部検出状況（西から）



6. 縄文縄文土器（A-1）出土状況（南から）



1. 深掘り調査区西側・X層遺物包含層検出状況（北から）

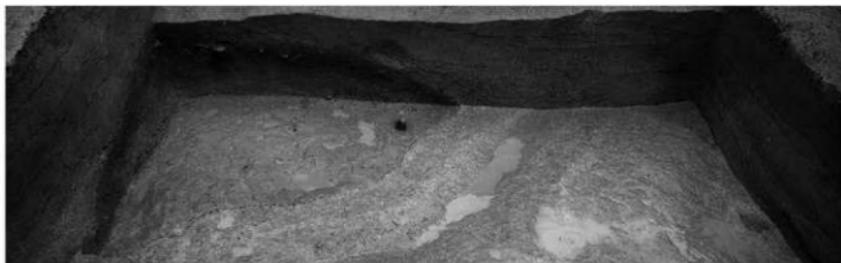


2. 深掘り調査区西側・遺物包含層（X層）検出状況（北東から）

写真図版 46 下ノ内遺跡第9次調査(6)



1. X層遺物包含層検出状況（南から）



2. 深掘り調査区西側・西壁土層断面（東から）



3. 深掘り調査区西側・南壁土層断面（北から）

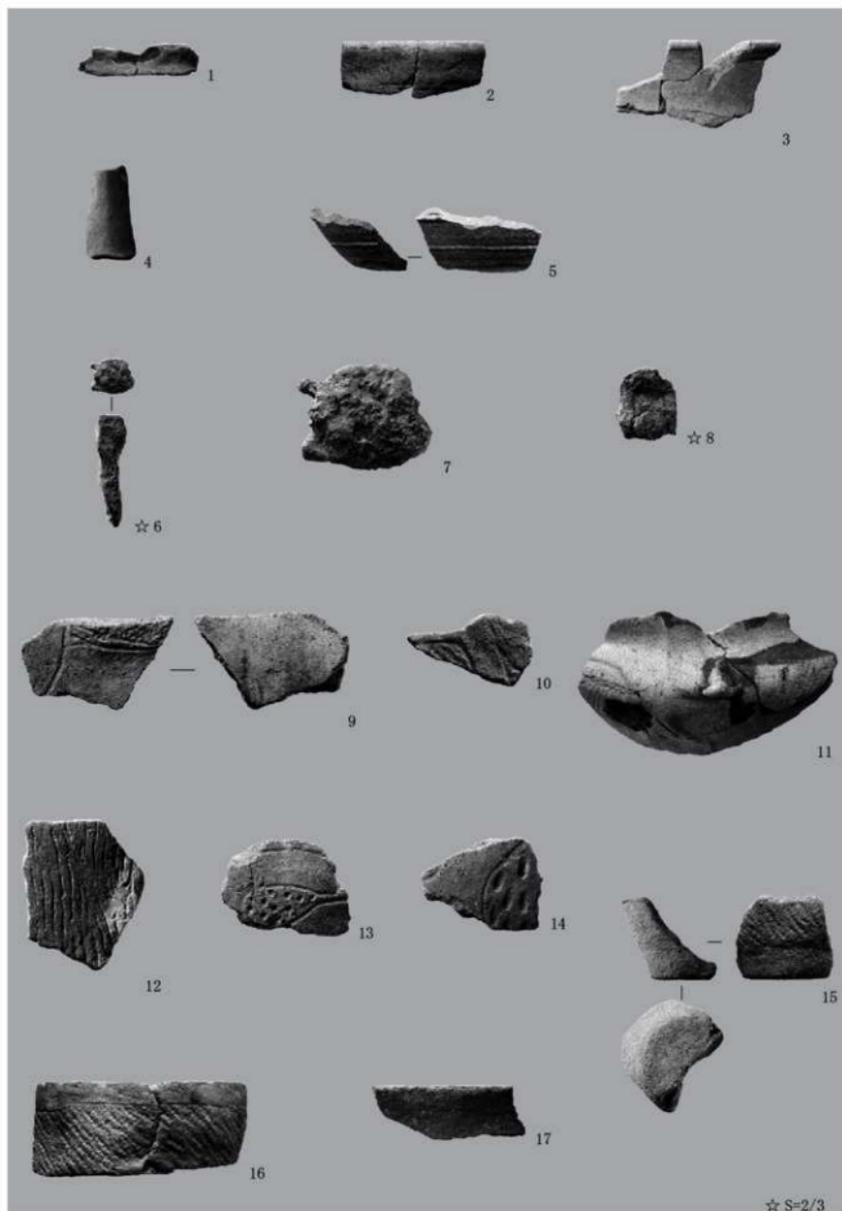


4. 深掘り調査区東側・南壁土層断面（北から）

写真図版 47 下ノ内遺跡第9次調査(7)



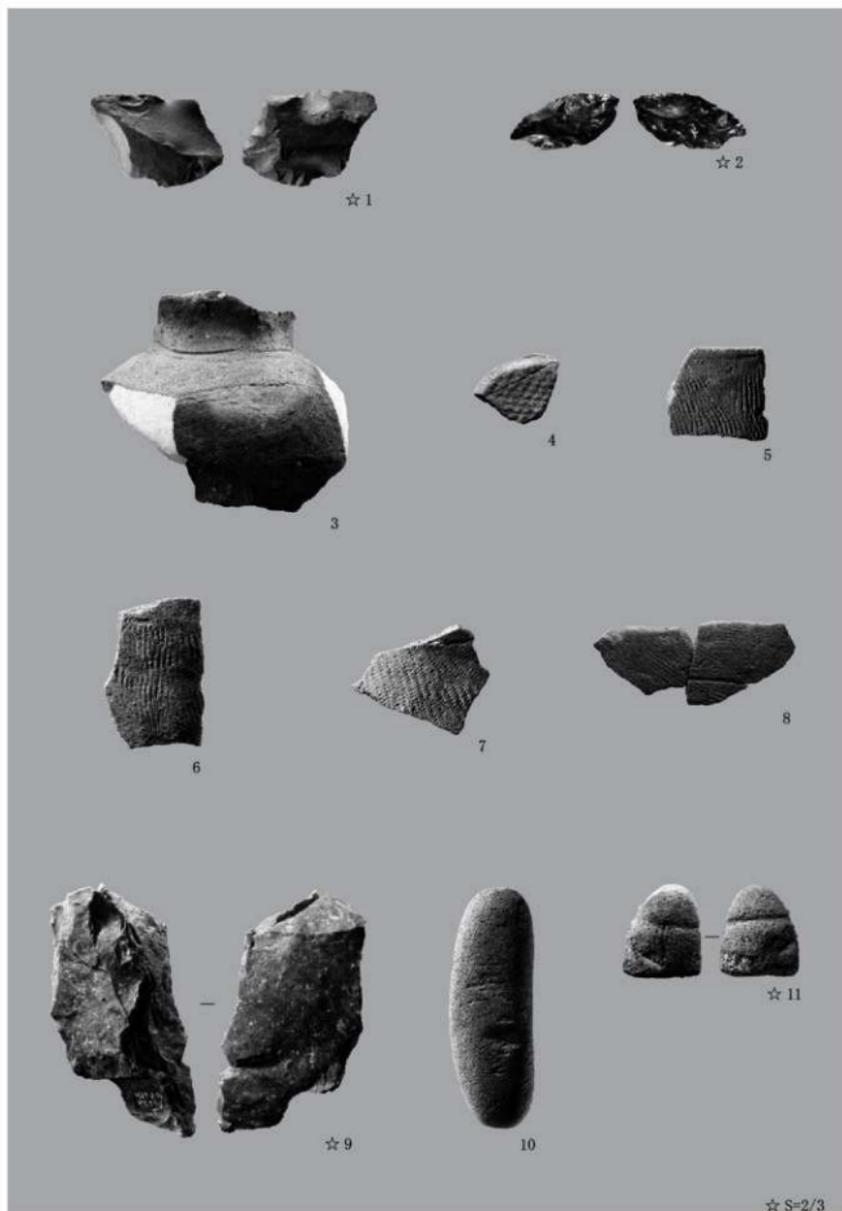
写真図版 48 下ノ内遺跡第9次調査出土遺物 (1)



写真図版 49 下ノ内遺跡第9次調査出土遺物 (2)



写真図版 50 下ノ内遺跡第9次調査出土遺物(3)



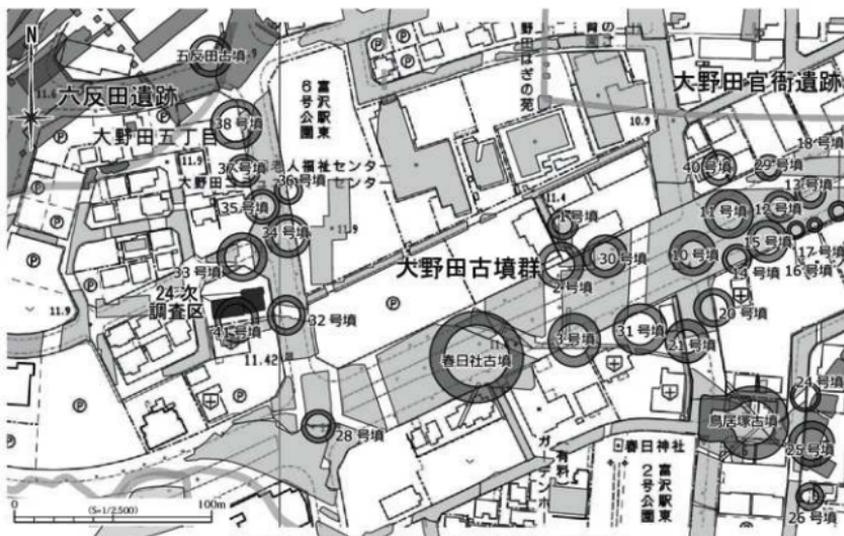
写真図版 51 下ノ内遺跡第9次調査出土遺物 (4)

第4節 大野田古墳群

I. 遺跡の概要

大野田古墳群は、仙台市太白区大野田に所在し、地下鉄富沢駅の東側に位置している。遺跡は、名取川下流域左岸の自然堤防上の微高地に立地し、その範囲は東西約600m、南北約400mにおよび、標高は10～12mである。大野田古墳群は、個人住宅建築、共同住宅建築工事、市関連施設建築工事に伴う調査のほか、平成6年度以降は「富沢駅周辺土地両側区画整理事業」に伴う発掘調査が行われ、その後も各種事業に伴う発掘調査が断続的に行われている。古墳群は当遺跡だけではなく、北側の六反田遺跡と東側の王ノ塚遺跡にかけて分布している。これまでに確認されている古墳は、春日社古墳、五反田古墳、王ノ塚古墳、鳥居塚古墳、1号～41号墳の計45基で、このうち鳥居塚古墳のみが前方後円墳、その他は円墳である。また、この他に墳丘を伴わないと考えられる石棺墓1基と木棺墓5基が確認されている。平成22年に調査された六反田遺跡7F-1区の木棺墓は比較的良好な遺存状態であり、棺内から人骨・銅鏡・管玉・ガラス玉、墓壇の掘り方壁面の掘り込みからは土師器壺と坏が埋納された状態で発見されている。

古墳以外にも遺跡からは、古墳時代前・中期の堅穴住居跡が確認されている。また奈良時代になると当遺跡と北側に隣接する六反田遺跡、袋前遺跡に重複して大野田官衙遺跡が造られる。平安時代以降は小規模な集落も認められるが、大部分は畑として利用されている。(436集から引用)



第134図 大野田古墳群第24次調査区位置図

II. 第24次調査

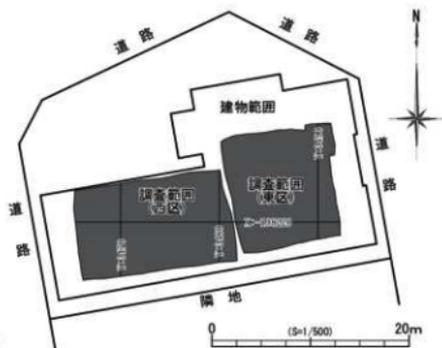
1. 調査要項

遺跡名 大野田古墳群(宮城県遺跡登録番号 01361)

調査地点 仙台市太白区大野田五丁目38-1、38-17

調査期間 平成28年11月16日(水)～平成29年1月18日(水)

調査対象面積 428.20 m²
 調査面積 267.0 m²
 調査原因 共同住宅建築工事
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市文化財課調査調整係
 担当職員 文化財教諭 吉田真太郎 及川基



第135図 大野田古墳群第24次調査区配置図

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成28年9月30日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて(協議)」(平成28年10月14日付H28教生文第103-062号で回答)に基づき、平成28年11月16日～平成29年1月18日に実施した。

今回の申請地は、平成26年度に行われた大野田古墳群第22次調査の調査区の北側にあたる。第22次調査の結果から、申請建物の範囲内に大野田古墳群第41号墳の北部が検出されることが考えられたため、本発掘調査を実施した。

建築範囲の西半分に東西15m×南北9mの調査区(調査区西区)、東半分に東西11m×南北12mの調査区(東区)を設定して調査を行った。なお、調査は西区から行い、西区を埋め戻した後に調査区を折り返して東区の調査を行った。

調査は重機を用いて、盛土と耕作土である基本I～IV層を除去し、基本層V層上面で遺構検出作業を行った。その結果大野田古墳群の41号墳の北側が検出された。遺構の精査前に調査区配置図をS=1/100で、各遺構の精査後に調査区の平面図と調査区断面図・遺構断面図をS=1/20で作製した。写真はデジタルカメラを用いて撮影した。調査は平成29年1月18日に調査区を埋め戻して終了した。

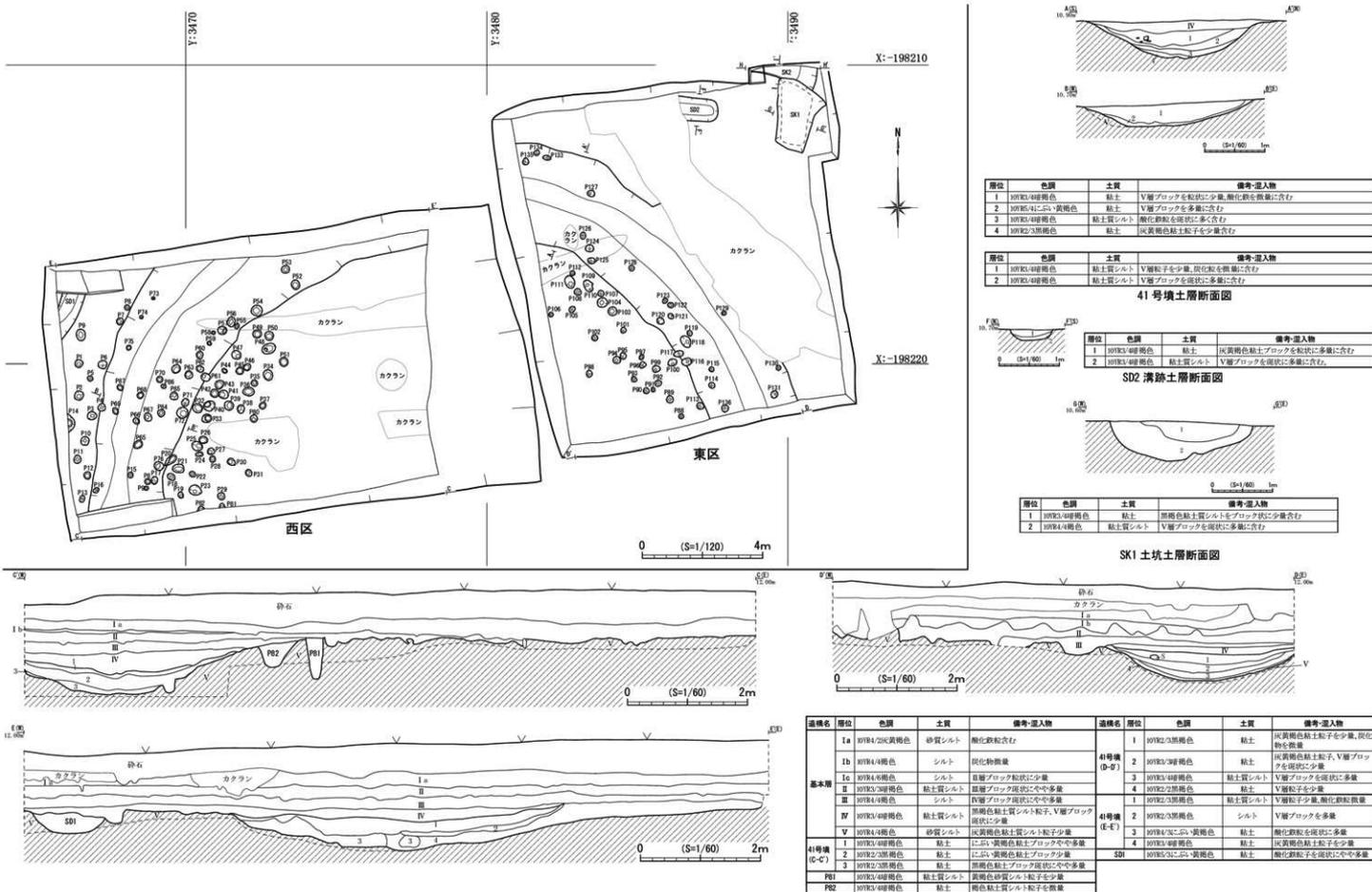
3. 基本層序

調査区内の盛土厚は約50cmで、富沢駅周辺土地区画整理事業に伴うものである。その直下に基本層を5層確認した。当該調査区の周辺では、平成6年度以降、富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査などが断続的に行われており、これらの調査では、共通した基本層序が用いられている。今回の調査でも、これまでの調査成果に基づいて、基本層の分層を行っている。

- I層 調査区全域に分布する。旧表土で2層に細分される。層厚は約0.5mである。
- II層 黒褐色(10YR2/3)を呈する粘土で、基本層III層を粒状に含む。層厚は約0.2mである。
- III層 褐色(10YR4/4)を呈する粘土で、基本層IV層を斑状に含む。層厚は約0.1mである。
- IV層 黒褐色(10YR2/3)を呈する粘土質シルトで、にぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する粘土質シルトを粒状に含む。層厚は約0.1mである。
- V層 にぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する砂質シルトで、調査区全域に分布する。今回の調査における遺構検出面である。層厚は0.4m以上である。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、V層上面で41号墳、溝跡2条、土坑2基、ピット136基を検出した。遺物は、41号墳周溝堆



第136図 大野田古墳群第24次調査区平・断面図

積土から埴輪が、基本層及びピット堆積土から土師器が出土している。

(1) 41号墳

今回の調査では古墳北部を検出した。周溝の一部が攪乱によって壊されている。周溝の外縁径が約24mの円墳であると推測される。墳丘は、後世の水田耕作によって上部を失っている。周溝の上端幅は3～3.5m、検出面から底面までの深さは西部で約0.7m、東部で約0.6mである。断面形は大きく開く皿状を呈しているが、墳丘側の立ち上がりは緩やかで、外側の立ち上がりの傾斜がやや急である。周溝の堆積土は4層に細分され、上部に基本層Ⅰ～Ⅳ層が堆積している。

遺物は周溝内の底部に近い層から埴輪が多数出土している。大部分が円筒埴輪だが、朝顔形埴輪と部位不明ながら器材埴輪と推測される破片も出土しており、これらのうち22点を図化した(第138～145図)。また図化はしなかったものの須恵器の小片なども出土している。

円筒埴輪は凸帯が2条のものが主体で、断面形状は逆台形を呈する。また凸帯直下にやや歪な円形の透かしが穿たれている。

(2) 溝跡

SD1 溝跡

調査区西区の北西角で検出した。部分的な検出に留まっているため全体の状況は明らかではないが、上端幅約0.7m、下端幅約0.3m、深さ約0.3mで、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は酸化鉄を斑状にやや多く含むにぶい黄褐色粘土の単層である。

SD2 溝跡

調査区東区の北部で検出した。部分的な検出に留まっているため全体の状況は明らかではないが、上端幅約0.8m、下端幅約0.4m、深さ約0.2mで、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色の粘土と粘土質シルトで2層に細分される。

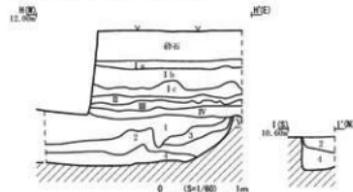
(3) 土坑

SK1 土坑

調査区東区の東壁際で検出した。南北約2.1m、東西約1～1.5mの不定形で、深さ約0.35mである。堆積土は2層である。遺物が出土していないため、年代および遺構の性格は不明である。SK2と重複し、それよりも新しい。

SK2 土坑

調査区東区の北東角で検出した。部分的な検出にとどまっているため全体の状況は明らかではないが、検出面からの深さは約0.6mで堆積土は4層である。底面から刀子と思われる鉄製品(N-1・第145図6)が出土した。SK1と重複し、それよりも古い。



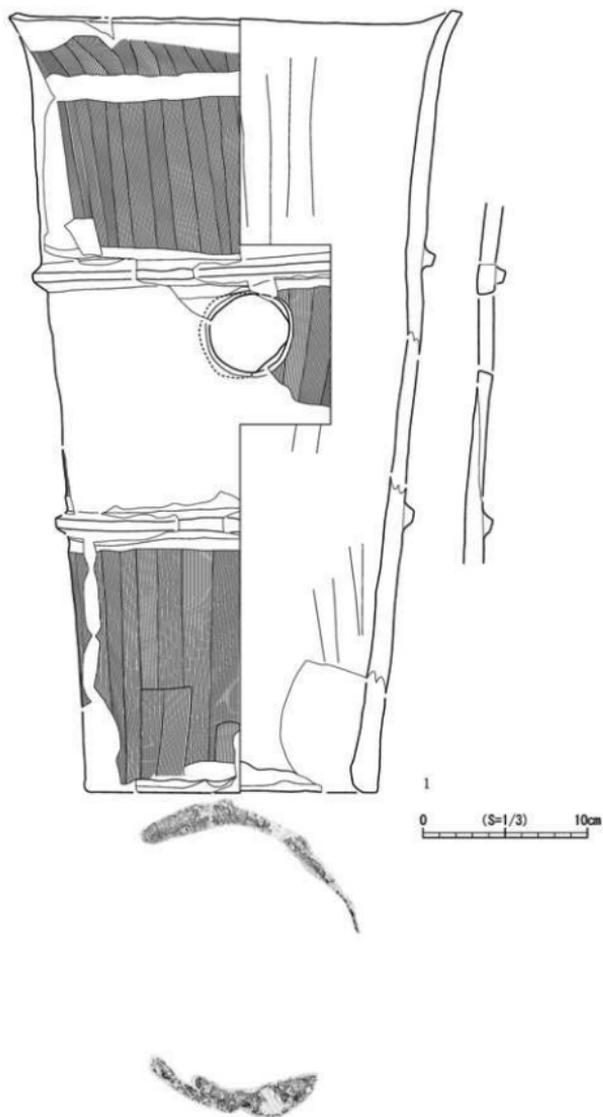
SK2(H-F, I-I)

層位	色調	土質	遺物・遺人物
1	07R2-2黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土粒子少量、酸化鉄少量
2	07R2-3暗褐色	粘土	灰黄褐色粘土粒子少量、V層ブロックを斑状に少量
3	07R2-4暗褐色	粘土質シルト	V層ブロックを斑状に多量
4	07R2-2黒褐色	粘土	V層粘土少量

第137図 SK2土坑土層断面図

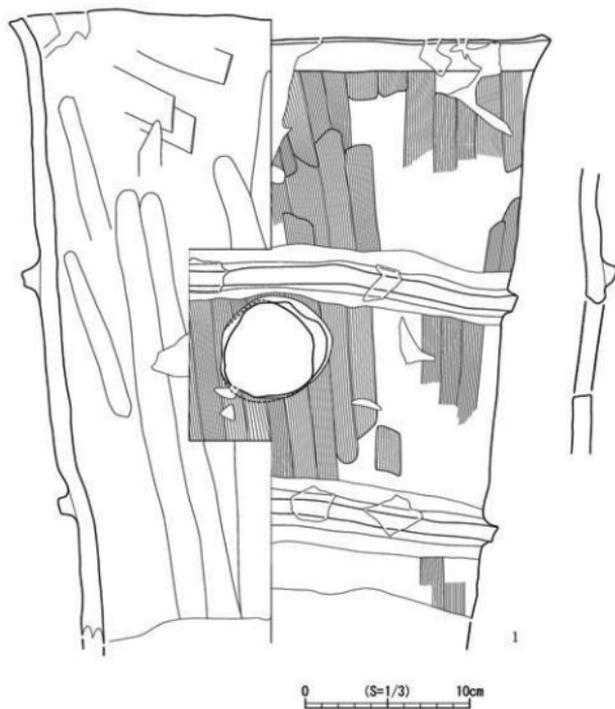
(4) ピット

136基を検出した。平面形は円形もしくは楕円形を呈する。規模や深さにはばらつきが認められ、建物跡を示すような有意な配置状況は確認できなかった。



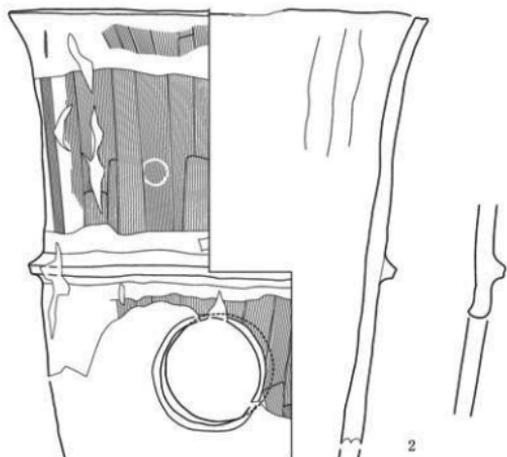
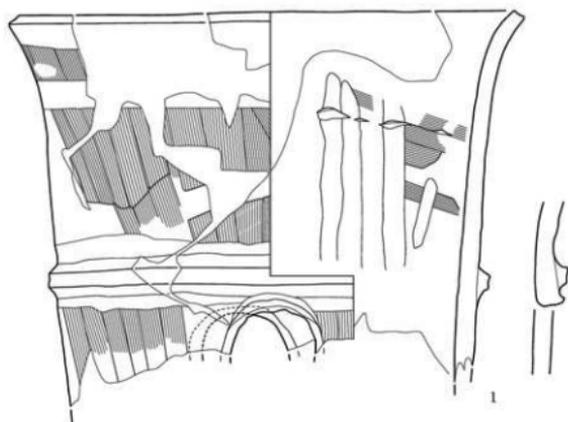
図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	S-1	4層	埴輪	円筒埴輪	26.4	(19.2)	47.9	タテハケ (装) 口縁部: コ コナダ 凸部: ナヅ	ナヅ	第2段 (中段) に円形のスカシ孔2孔 スカシ孔の径: 前4.8cm, 後5.2cm タテハケ (装): 幅1cmに10~15本	06-1

第138図 41号墳出土遺物 (1)



図版 番号	登録 番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)		外面調整	内面調整	備考	写真 図版
					口径	底径				
1	S-2	2層	埴輪	円筒埴輪	32.8	— (38.6)	タテハケ 口縁部：ヨ コナデ	斜め方向のヘラナデ→縦方 向のナデ 口縁部：ヘラナ デ→ヨコナデ	上から3段目に円形のスコシ孔2孔。内面に 複数の瘤み上浮版。砂粒多く含む。タテハケ (中)；幅1cmに6～10本	57-1

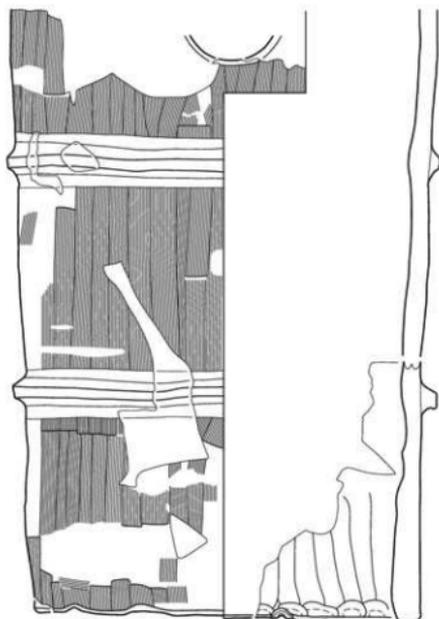
第139図 41号墳出土遺物(2)



0 (S=1/3) 10cm

図版 番号	登録 番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 図版
					口径	底径	器高				
1	S-3	4層	塚輪	円筒塚輪	30.9	—	(24.0)	タテハケ 凸部・口縁部；ヨコナデ	削みのハケメーナデ 口縁部；ヨコナデ	上から2段目に円形のスカシ孔2孔 スカシ孔の推定直径約 6.2cm 内面に粘土鍍み上げ痕あり 1cmに6～15本	タテハケ (表～中)：幅 57-2
2	S-4	3層 上面	塚輪	円筒塚輪	25.3	—	(26.6)	タテハケ (中) 口縁部；ヨコナデ	ナデ	上から2段目に円形のスカシ孔確認 1cmに6～10本 粘土・砂配含む	タテハケ (中)：幅1 58-1

第140図 41号墳出土遺物 (3)



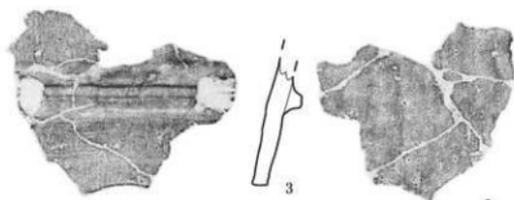
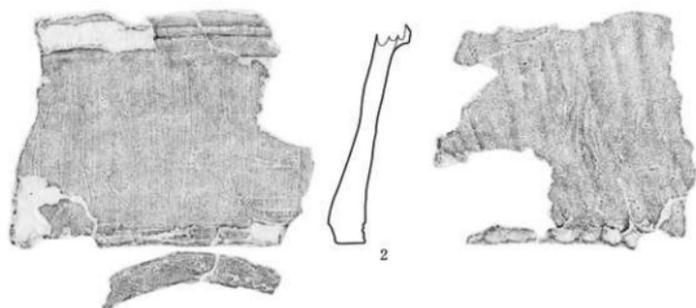
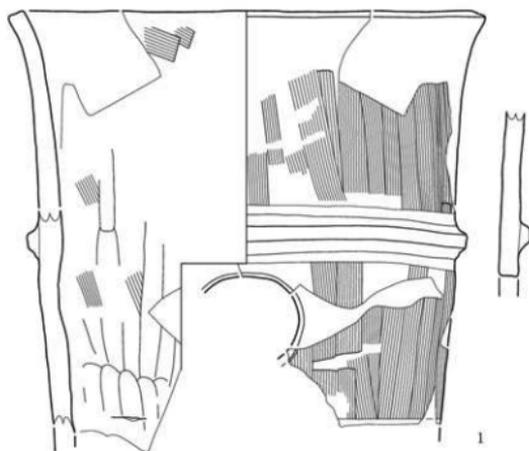
1



0 (S=1/3) 10cm

図版 番号	登録 番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)		外面調整	内面調整	備考	写真 記録
					口径	底径				
1	S-5	3層 上面	埴輪	円筒埴輪	—	23.4 (37.4)	タテハケ (肌) 凸帯: ココ ナゲ 最下段に焼熟痕	縦方向ナゲ	下から3段目にスカシ孔。4段の埴輪 タテハケ (肌) 幅1cmに10~15本 粘土・砂配合む	S9-2

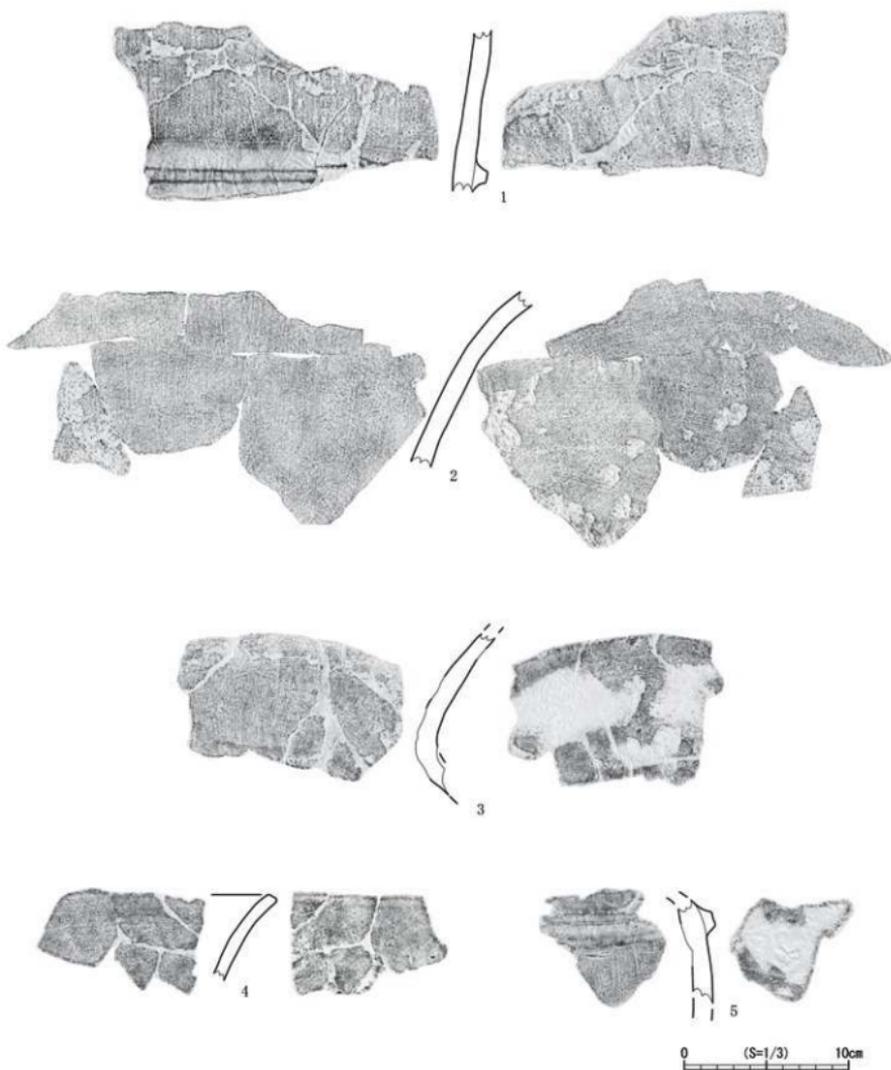
第141図 41号墳出土遺物(4)



0 (S=1/3) 10cm

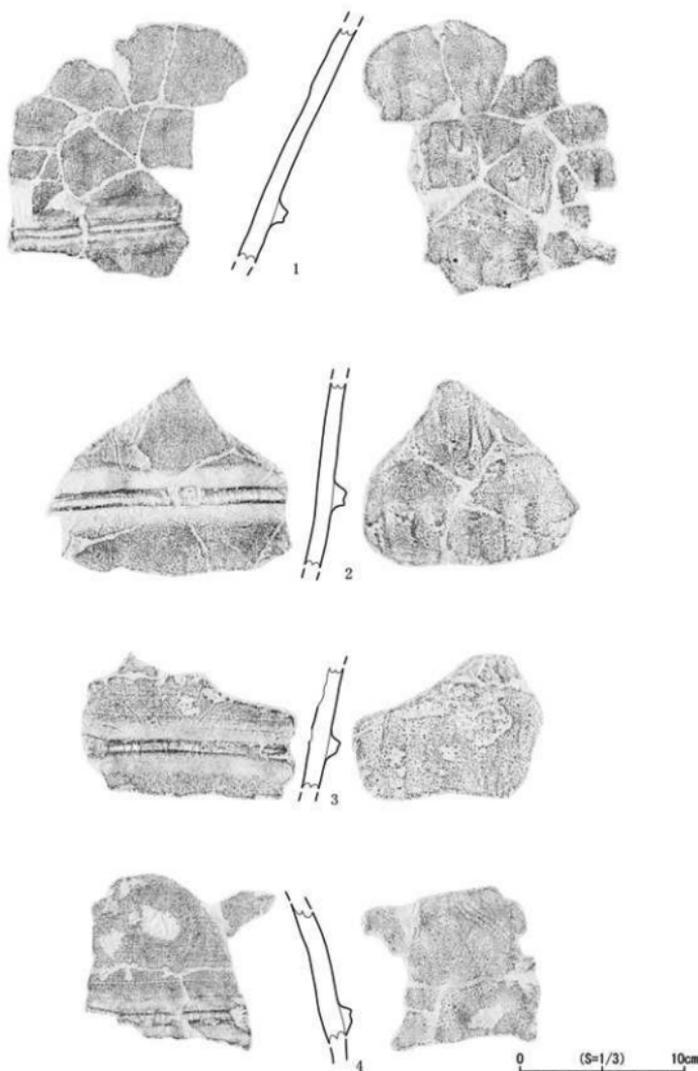
図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	S-6	4層上面	埴輪	円筒埴輪	(29.0)	—	(27.0)	タテハケ 口縁部; タテハケ→ヨコナデ	ナデ 口縁部;ヨコ ハケ→ヨコナデ	中段にスカシ孔。凸帯上下端が凹縁上に低い。砂粒含む	59-1
2	S-7	2層	埴輪	円筒埴輪	—	—	(13.4)	タテハケ (狭) 凸帯:ナデ	ナデ	2段以上(最下段とその上)	59-2
3	S-8	堆積土	埴輪	円筒埴輪	—	—	(8.0)	凸部:ナデ 下部:タテハケ	ナデ		59-3

第142図 41号墳出土遺物(5)



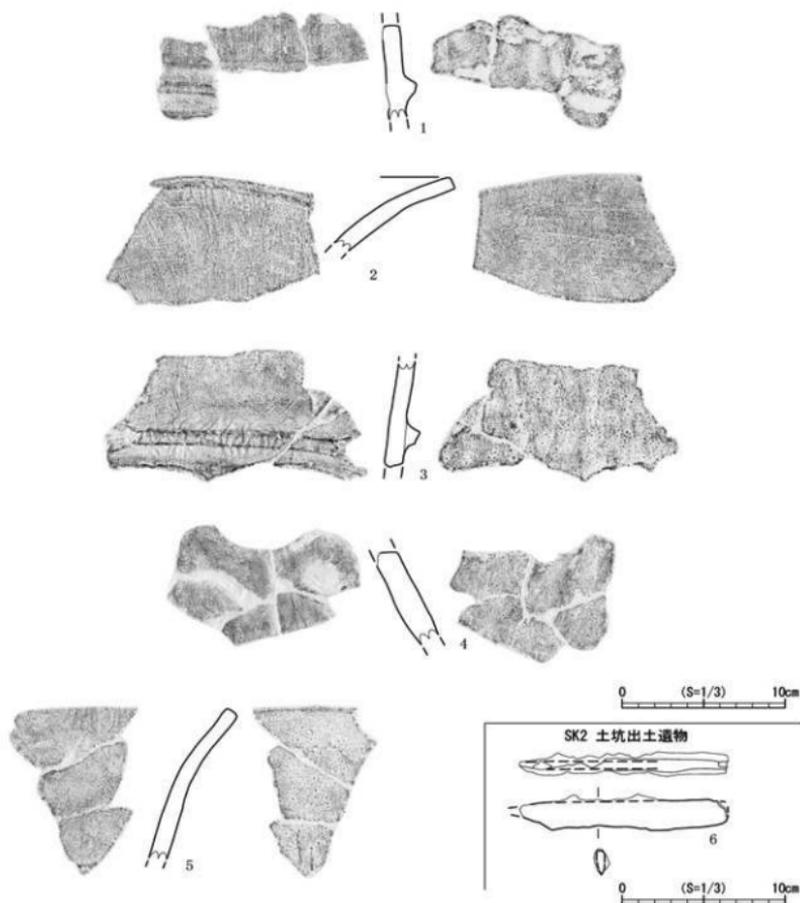
図面 番号	登録 番号	遺構層	種別	器種	法量 (cm)		外面調整	内面調整	備考	写真 図面
					口径	底径				
1	S-9	堆積土	埴輪	円筒埴輪	—	(9.9)	タテハケ 凸部:ヨコナデ	ナデ	2段以上 砂粒含む	59-4
2	S-10	2層上面	埴輪	朝顔形埴輪	—	(10.8)	タテハケ (脱)	ヨコハケ 斜めハケ (脱)	破片8割組合 砂粒多く含む タテ・斜めハケ:幅1cmに10~15本	60-1
3	S-11	2層上面	埴輪	朝顔形埴輪	—	(9.9)	タテハケ (脱)	ヨコハケ 斜めハケ (脱)		60-2
4	S-12	周溝 ベルト	埴輪	朝顔形埴輪	—	(5.3)	タテハケ (脱) 口縁部:ヨコナデ	ヨコナデ (脱)	口縁部片 タテハケ・ヨコハケ:幅1cmに10~15 本 砂粒含む	60-3
5	S-13	墳丘部	埴輪	朝顔形埴輪	—	(6.3)	タテハケ (脱) 凸部:ナデ	ヨコナデ (脱) ナデ	断面分 2段以上 タテハケ・ヨコハケ:幅1cmに 10~15本 砂粒多く含む	60-4

第143図 41号墳出土遺物(6)



図版番号	登録番号	遺構種	種別	器種	法量 (cm)		外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径				
1	S-14	2層	埴輪	朝顔形埴輪	—	(15.5)	タテハケ(鉄) 凸帯:ナゲ	ナゲ		60-5
2	S-15	—	埴輪	円筒埴輪	—	(11.3)	タテハケ(鉄) 凸帯:ナゲ	ナゲ	2段以上 3段にスカシ孔の一部あり 胎土・砂粒多く含む	60-6
3	S-16	堆積土	埴輪	円筒埴輪	—	(7.3)	上段:ヨコハケ(鉄・中) 凸帯:ナゲ 下段:タテハケ(鉄)	ナゲ	2段以上 上段上部にスカシ孔1孔 胎土・砂粒多く含む。タテハケ(鉄・中): 1cmに10~15本・6~10本	61-1
4	S-17	—	埴輪	朝顔形埴輪	—	(8.6)	上段:ヨコハケ(鉄・中) 凸帯:ナゲ	ナゲ	肩の部分 2段以上 砂粒多く含む	61-2

第144図 41号墳出土遺物(7)



図版番号	登録番号	遺構層	種類	器種	法量 (cm)			外面調整	内面調整	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	S-18	—	埴輪	朝顔形埴輪	—	(6.4)	—	上段: タテハケ (狭) 凸部: ナデ	ナデ	上段上部にスカン孔1孔	61-3
2	S-20	—	埴輪	朝顔形埴輪	—	(4.9)	—	タテハケ (中) 口縁部: ヨコナデ	ヨコハケ (中) 口縁部: ヨコナデ	口縁部底片・砂粒含む: タテハケ・ヨコハケ: 幅1cmに6~10本	61-4
3	S-21	—	埴輪	円筒形埴輪	—	(7.0)	—	ハケメ (狭) → ナデ	ナデ	2段以上 下段上部にスカン孔なし確認 胎土・砂粒多く含む タテハケ (狭): 幅1cmに6~10本	61-5
4	S-22	埴積土	埴輪	形象埴輪	—	(6.1)	—	—	—	—	61-6
5	S-23	埴積土	埴輪	朝顔形埴輪	—	(10.0)	—	タテハケ (中) 口縁部: ヨコナデ	口縁部: ヨコナデ	—	61-7
—	S-19	埴積土	埴輪	不明	—	—	—	—	—	薄手。穿孔 (φ 1.0cm) 写真掲載のみ	61-10
—	S-24	埴積土	埴輪	円筒形埴輪	—	—	—	—	—	写真掲載のみ	61-11
—	E-1		須恵器	瓶?	—	—	—	—	—	写真掲載のみ	61-8
—	E-2		須恵器	甕	—	—	—	—	—	平行叩き	61-9
図版番号	登録番号	出土遺構	層位	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考	写真図版
						全長	幅	厚さ			
6	N-1	SK2	底面	鉄製品	刀子	(12.8)	1.5	0.9	—	断面厚さ1.4cm 断面図は削れている箇所で見損じ、全面に鉄さびが付着している。先端と基部が一部折損している。	61-12

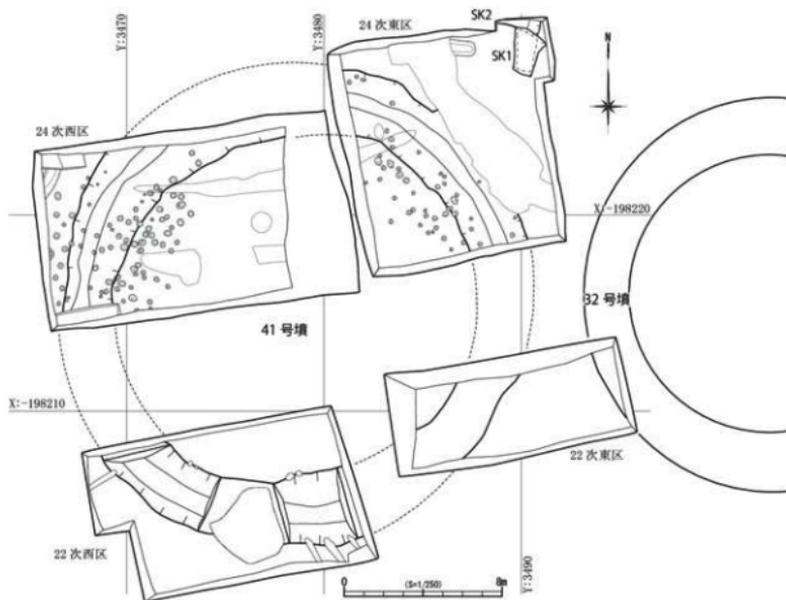
第145図 41号墳出土遺物(8)・SK2出土遺物

5. まとめ

今回の調査地点は大野田古墳群の北西部に位置する。調査地点の南側では、平成26年度に第22次調査が行われ、41号墳の墳丘部、周溝部、周溝堆積土内から円筒埴輪などが確認されている。今回の調査では、地表下約1.0mの基本層V層をやや掘り下げた面で、41号墳の墳丘部、周溝部、小溝状遺構2条、土坑2基、ピット136基を検出した。41号墳は、周溝の外縁径が今回の調査で古墳の北側の周溝が検出されたことから、約23.8～24.7mの円墳であることが判明し、古墳群の中でも比較的規模の大きな古墳であることが判明した。墳丘部分には、古墳構築土、およびそれ以前の旧表土が検出された。

古墳の周溝を中心に須恵器や埴輪などが出土したが、埴輪の大部分は円筒埴輪で、2条凸帯3段構成のものが主体であるが、1点だけ3条凸帯のものが出土している(S-5)。また朝顔形埴輪も少数ながらも出土した。その他の埴輪としては、種類は不明ながら器材埴輪と推測されるものも出土している。

その他の遺構については、SK1、2土坑が調査区の北東側、古墳から約6mの位置から検出された。SK2からは刀子が出土しているが、部分的な検出であり、遺物も刀子以外に出土しなかったことから、遺構の全体の状況や年代については不明である。



第146図 大野田古墳群41号墳全体図

引用・参考文献

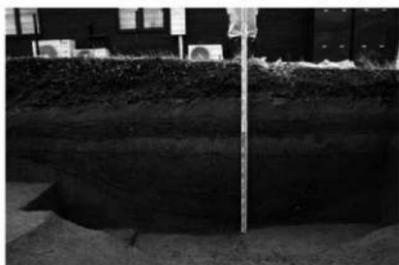
- 仙台市教育委員会 2011 『下ノ内遺跡・春日社古墳・大野田官衙遺跡ほか 一仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ-』 仙台市文化財調査報告第390集(第5次)
- 仙台市教育委員会 2015 『山の寺廃寺ほか 発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告第436集(第22次)



1. 西区41号墳遺物出土状況（北西から）



2. 東区41号墳遺構完掘状況（東から）



1. 西区調査区南壁土層断面（北から）



2. 東区倒錯南壁土層断面（北から）



3. 西区遺構検出状況（北から）



4. 東区遺構検出検出状況（東から）



5. 西区41号墳埴輪出土状況（北西から）



6. 東区41号墳埴輪出土状況（東から）



7. 西区41号墳周溝土層断面（南東から）



8. 東区41号墳周溝土層断面（南東から）



1. 西区41号墳埴輪 (S-2) 出土状況 (西から)



2. 西区41号墳埴輪 (S-5) 出土状況 (西から)



3. 西区41号墳埴輪 (S-4) 出土状況 (西から)



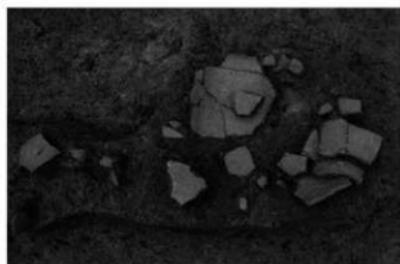
4. 西区41号墳埴輪 (S-11) 出土状況 (西から)



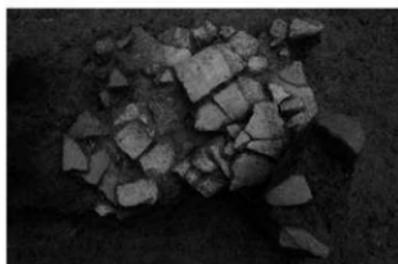
5. 西区41号墳埴輪 (S-7) 出土状況 (西から)



6. 西区41号墳埴輪 (S-6) 出土状況 (東から)



7. 東区41号墳埴輪 (S-3) 出土状況 (東から)



8. 東区41号墳埴輪 (S-1) 出土状況 (東から)



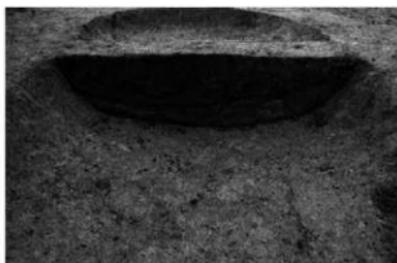
1. 西区 SD1 溝跡完掘状況（南から）



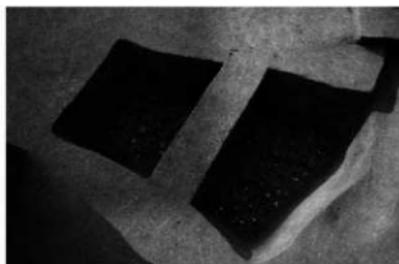
2. 西区 SD1 溝跡土層断面（南から）



3. 西区 SD2 溝跡完掘状況（西から）



4. 西区 SD2 溝跡土層断面（西から）



5. 東区 SK1 土坑完掘状況（東から）



6. 東区 SK1 土坑土層断面（南から）



7. 東区 SK2 土坑完掘・遺物出土状況（東から）



8. SK2 土坑遺物（刀子・N-1）出土状況（南から）



写真図版 56 大野田古墳群第 24 次調査出土遺物 (1)



1

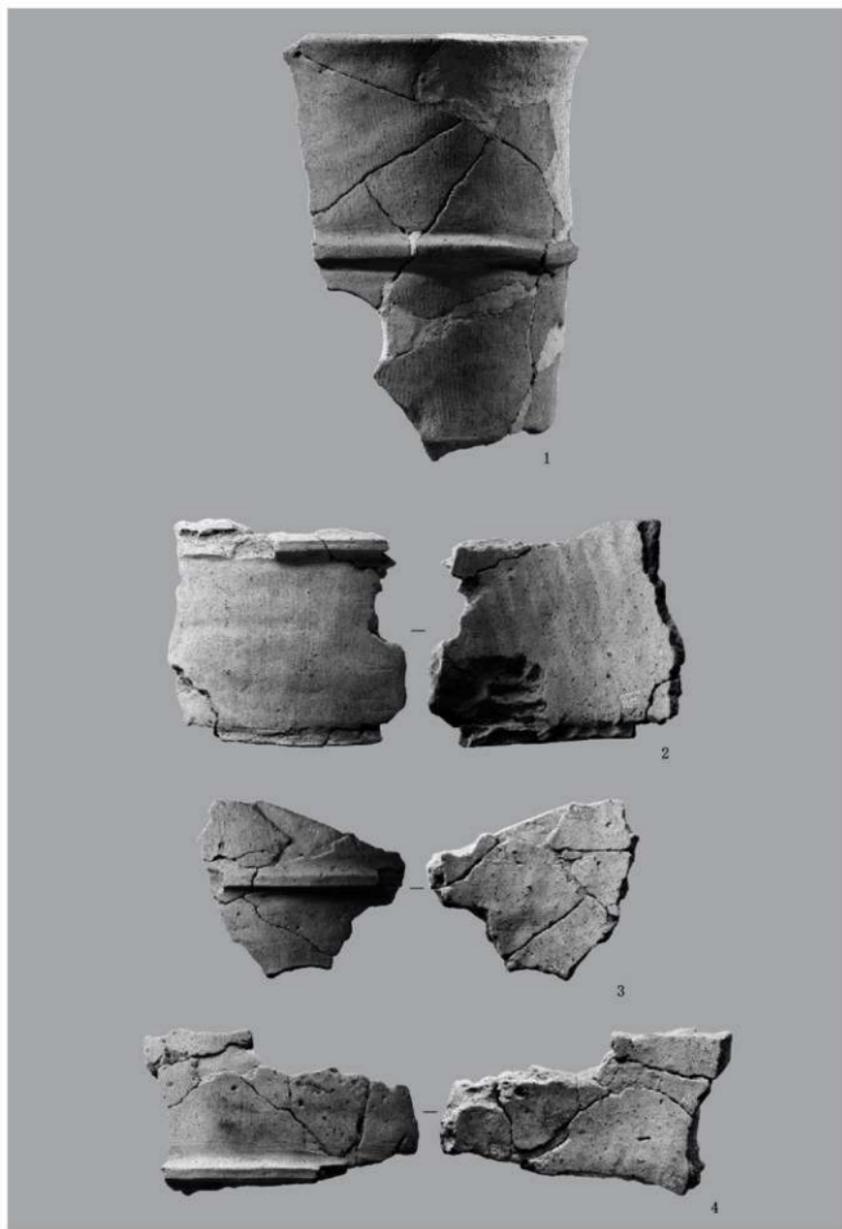


2

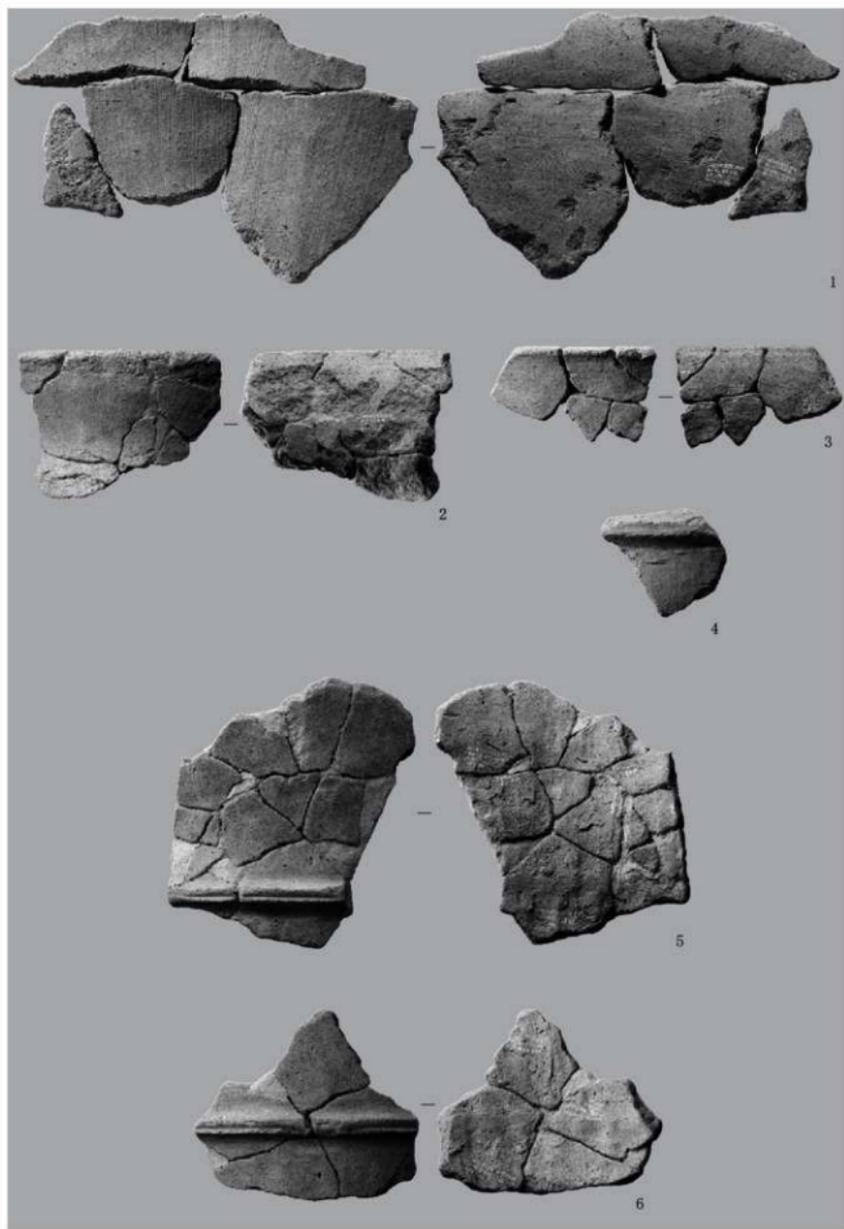
写真図版 57 大野田古墳群第 24 次調査出土遺物 (2)



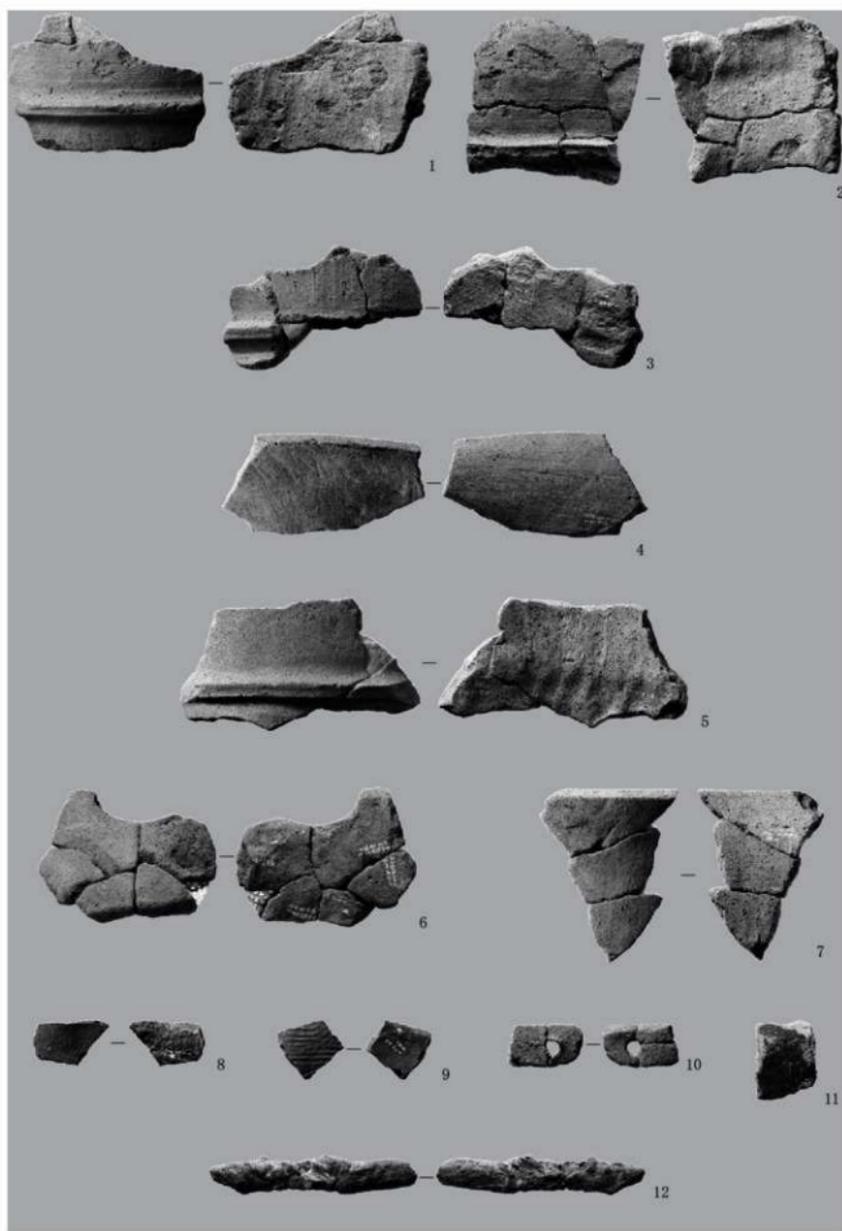
写真図版 58 大野田古墳群第 24 次調査出土遺物 (3)



写真図版 59 大野田古墳群第 24 次調査出土遺物 (4)



写真図版 60 大野田古墳群第 24 次調査出土遺物 (5)



写真図版 61 大野田古墳群第 24 次出土遺物 (6)

第5章 総括

1. 洞ノ口遺跡第23次調査

調査地点は洞ノ口遺跡の南部に位置する。今回の調査では竪穴住居跡2軒、土坑12基、ビット56基、性格不明遺構1基が検出された。検出された土坑のうち3基は断面形状などから井戸跡の可能性が考えられる。出土遺物と遺構の新旧関係などから、Ⅰ期：竪穴住居跡（9世紀後半から10世紀前半）→Ⅱ期：性格不明遺構・ビット群（13～14世紀代）→Ⅲ期：SK4・6・11（14世紀以降）と概ね3時期の遺構の変遷があったことが確認された。

2. 今市遺跡第2次調査

調査地点は今市遺跡の西部に位置する。今回の調査ではⅠ区で溝跡5条と井戸跡1基が、Ⅱ区で溝跡7条が検出された。このうち同一の溝跡は3条ある。このうちSD5（SD10）は第1次調査で確認された屋敷地を区画する溝と同じ方向で規模も類似していることから、屋敷地を区画する溝跡の可能性が考えられる。出土した遺物から溝跡は13世紀後半から16世紀の時期の遺構であると考えられる。

3. 荒井館跡第3次調査

調査地点は荒井館跡の北側部分に当たる。今回の調査で井戸跡、溝跡、掘立柱建物跡を構成するビット群などが検出された。一部の溝跡と掘立柱建物跡の方位に共通性が見られることから、これらの遺構群は一連の遺構群を形成する可能性がある。遺物は調査区内の各遺構から須恵器、陶器、古代瓦、磨石等の石製品が出土した。一部の磨石はビットの底面に据えられており、礎盤石として使用されていたものと考えられる。

4. 荒井広瀬遺構第2次調査

調査地点は荒井広瀬遺跡の南部に位置する。今回の調査では自然流路跡1条を検出した。自然流路跡は本調査区の北側で行われた第1次調査で確認された自然流路跡と同一のものであると考えられる。自然流路跡の堆積土中からは古墳時代前期と中期の土師器と曲柄又鎌などの木製品が出土している。また灰白色火山灰とはほぼ同時期の液状化現象の痕跡と、弥生時代中期中葉の津波堆積物と考えられる砂層が確認されている。

5. 南小泉遺跡第82次調査

調査地点は南小泉遺跡のほぼ中央部に位置し、遠見塚小学校の南西隣にある。今回の調査では南北に伸びる小溝状遺構を10条検出した。SD5や基本層中から土師器など出土した。小溝状遺構が検出されたⅥ層の上層には、耕作土と考えられるⅠb層が堆積していることから、本遺構が上層の耕作に伴い形成された可能性がある。

6. 郡山遺跡第270次調査

調査地点は、郡山遺跡の方四町Ⅱ期官衙の中央北側にあり、第24次調査の西側、第86次調査の北西側に位置する。第24次調査では多数の掘立柱建物跡や竪穴住居跡など、第86次調査では鍛冶工房跡などが検出されていたが、今回の調査では遺構は確認されなかった。遺構検出面である基本層Ⅲ層の標高が、周辺の調査区よりも1m程度低いことを考慮すると、遺構面は後世に削平を受けていたものと考えられる。

7. 富沢遺跡第150次調査

調査地点は富沢遺跡の南西部に位置する。古代条里制に関わる大畦畔が想定される地点であったが今回の調査では水田耕作層は検出されたものの、畦畔は検出されなかった。遺物はⅦ層より弥生土器片が3点出土した。

8. 下ノ内遺跡第9次調査

調査地点は下ノ内遺跡の北側部分に当たる。今回の調査では3層の遺構検出面を調査した。Ⅲ層上面からは溝跡と井戸跡、掘立柱列などが検出された。溝跡はこれまでの調査で検出されていたものの延長部分にあたり、位置関係などから溝跡と井戸跡、掘立柱列は一連の遺構群を形成する可能性がある。

Ⅴ層上面からは溝跡、掘立柱建物跡、掘立柱列、土坑、小溝状遺構群などが検出された。掘立柱列の一部は過去の調査で検出された掘立柱建物跡と接続する可能性がある。遺物は基本層および各遺構から土師器、須恵器などが出土している。

縄文時代の遺物包含層であるⅩ層は深掘り調査区の南西側でのみ検出された。Ⅹ層に接する形で河川跡が存在することが確認され、Ⅹ層はこの河川跡に沿う形で落ち込んでいることが確認された。よって今回の縄文時代の深掘り調査区の大部分は河川跡に覆われていることが判明した。遺物はⅩ層から縄文時代中期末葉の土器群と石皿などの石器類が、またそれよりも上層のⅦ～Ⅸ層などから縄文時代後期の土器が出土している。

9. 大野田古墳群第24次調査

調査地点は遺跡の西部にあたる。今回の調査区からは大野田古墳群41号墳の周溝の北半部分と、土坑、ピットなどが検出された。周溝の堆積土からは円筒埴輪や朝顔形埴輪、須恵器などが出土した。今回の調査により、41号墳の周溝のほぼ全容が明らかになり、直径約23.8～24.1mの規模の古墳であることが判明した。また調査区の北西部で検出された土坑からは、刀子状の鉄製品が出土し、古墳時代の遺構の可能性もあるが、他に遺物も出土していないことから、全容については不明である。

報告書抄録

ふりがな	どうのくちいせきほか						
書名	洞ノ口遺跡ほか						
題名	発掘調査報告書						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第468集						
編者	及川 謙作 庄子裕美 小林 航 及川 基 三浦一樹 佐藤 洋 斎野裕彦						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-0011 仙台市青葉区上杉一丁目5-12 仙台市役所 上杉分庁舎10階 TEL: 022-214-8894						
発行年月日	平成30年3月30日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町 遺跡 村 番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
	要約						
洞ノ口遺跡 (第23次)	仙台市宮城野区 岩切字洞ノ口	4100 01372	38° 18' 6"	140° 57' 11"	2017.3.15 ~ 2017.4.19	72 m ²	記録保存 (店舗新築)
	集落跡、城館跡、屋敷跡、 水田跡	古墳～近世	溝跡、竪穴住居跡、土坑、 ピット、性格不明遺構		土師器、須恵器、瓦、陶器、 石製品、金属製品、古銭、 土製品		
9世紀代の竪穴住居跡と、中世の土坑、溝跡等が検出された。遺構からは土師器、須恵器、土製品、陶器、古銭等の金属製品が出土した。							
今市遺跡 (第2次)	仙台市宮城野区 岩切字三所下	4100 01222	38° 18' 11"	140° 56' 39"	2017.9.4 ~ 2017.10.3	114 m ²	記録保存 (共同住宅新築)
	集落跡、包含地	古代、中世	溝跡、井戸跡		弥生土器、土師器、須恵器、 瓦、土師質土器、陶器、磁器、 石製品、金属製品、古銭、 木製品		
溝跡と井戸跡が検出された。遺構の時期はいずれも中世で、陶器、磁器、土師質土器、石製品、木製品、古銭等が多数出土した。特に古銭は銚銭の状態のものも含め合計59枚出土した。							
荒井館跡 (第3次)	仙台市若林区 荒井字矢取	4100 01232	38° 14' 37"	140° 56' 46"	2017.7.19 ~ 2017.7.27	84 m ²	記録保存 (事務所新築)
	城館跡	中世	溝跡、土坑、井戸跡、 ピット、掘立柱建物跡		須恵器、瓦、陶器、石製品、 金属製品		
溝跡と井戸跡、ピット群などが検出された。一部の遺構の方に規則性が窺え、一連の遺構になる可能性がある。							
荒井広通遺跡 (第2次)	仙台市若林区 荒井字遠藤	4100 01570	38° 14' 13"	140° 56' 53"	2016.12.12 ~ 2017.1.26	93 m ²	記録保存 (事務所新築)
	河川跡	弥生・古墳	河川跡		弥生土器、土師器、石製品、 木製品		
河川跡が検出された。堆積土からは土師器が多数出土した。時期は古墳時代中期の南小泉式のものを中心である。また農具や打込まれた状態の杭等の木製品も多数出土した。							
南小泉遺跡 第82次	仙台市若林区 遠見塚1丁目	4100 01021	38° 14' 16"	140° 54' 42"	2018.9.7 ~ 2018.9.14	56 m ²	記録保存 (研修センター新築)
	集落跡・屋敷跡	縄文～近世	小溝状遺構		土師器		
小溝状遺構が検出された。調査区内からは古墳時代中期の土師器が出土した。							
郡山遺跡 第270次	仙台市太白区 郡山3丁目	4100 01003	38° 13' 27"	140° 53' 32"	2017.4.20 ~ 2017.5.1	84.7 m ²	記録保存 (共同住宅新築)
	官衙跡、寺院跡、含有地	縄文～古代	土師器		方四町目期官衙の北東部分を調査したが、遺構検出は土取により削平されているのが確認された。		
富沢遺跡 (第150次)	仙台市太白区 長町南3丁目	4100 01369	38° 13' 13"	140° 52' 32"	2017.10.17 ~ 2017.10.19	51 m ²	記録保存 (診療所併用 住宅新築)
	包含地・水田跡	後期旧石器 ～近世	水田耕作土		弥生土器		
時期は不明だが、水田耕作土が重層的に検出された。最下層から弥生土器が出土した。							
下ノ内遺跡 (第9次)	仙台市太白区 富沢4丁目	4100 01425	38° 12' 57"	140° 52' 13"	2017.4.11 ~ 2017.8.1	226.56 m ²	記録保存 (共同住宅新築)
	集落跡	縄文～中世	溝跡、土坑、井戸跡、掘立 柱列、掘立柱建物跡、 遺物包含層、河川跡		縄文土器、土師器、須恵器、 石製品、金属製品		
縄文時代の遺物包含層と河川跡、古代の小溝状遺構、溝跡、土坑、掘立柱建物跡、掘立柱列、中近世の溝跡と掘立柱列などが検出された。遺物包含層からは縄文時代中期末集壇の遺物が出土した。							
大野田古墳群 (第24次)	仙台市太白区 大野田5丁目	4100 01361	38° 12' 52"	140° 52' 23"	2016.11.16 ~ 2017.1.18	267.0 m ²	記録保存 (共同住宅新築)
	四墳	古墳	古墳、土坑、ピット、溝跡		埴輪、土師器、須恵器		
41号墳の北側部分の周溝が検出された。堆積土からは円筒埴輪を中心に、朝顔形埴輪や須恵器なども出土した。また古墳の直径が約24mであることが判明した。							

仙台市文化財調査報告書第468集

洞ノ口遺跡 ほか

発掘調査報告書

2018年3月

発行 **仙台市教育委員会**
仙台市青葉区上杉1丁目5-12
仙台市役所上杉分庁舎10階
文化財課 TEL. 022 (214) 8894

印刷 **株式会社 仙台紙工印刷**
仙台市宮城野区霞台三丁目1-14
TEL. 022 (231) 224549
